

### **第Ⅲ部 2012-2013年度における各教員の活動**



# 01 言語学

教授 **熊本 裕**

KUMAMOTO, Hiroshi

Personal web site : <http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/~hkum>

## 1. 略歴

- 1974年3月 東京大学文学部言語学専修課程卒業 (文学士)
- 1974年4月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程入学
- 1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了 (文学修士)
- 1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程入学辞退
- 1976年4月 東京大学文学部助手 (言語学研究室)
- 1976年8月 東京大学文学部助手 休職 (海外研究のため) ~1979年8月 (休職期限につき退職)
- 1976年9月 米国ペンシルヴェニア大学大学院東洋学科博士課程入学
- 1982年12月 米国ペンシルヴェニア大学大学院東洋学科博士課程修了 (哲学博士)
- 1983年4月 四天王寺国際仏教大学文学部助教授 ~1989年3月
- 1989年4月 東京大学文学部助教授 (言語学)
- 1994年6月 東京大学文学部教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (言語学)

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

イラン言語学、特に中央アジア出土の中期イラン語であるコータン・サカ語文献の解明。

### b 研究課題

中央アジアの遺跡 (いわゆるシルクロード) から発掘されて、20世紀に初めて解読された言語の一つであるコータン・サカ語の研究に従事し、過去十数年、世界各地の博物館や研究所に保存された写本を調査し、そのうちのいくつかは初めて解読し出版した。90年代は主としてペレストロイカ以降ようやく外部に開放されたロシア所蔵の写本を対象に、現地の研究者と共同研究を行った。現段階では、現存するコータン・サカ語文献の全体像がようやく明らかになったといえる。すなわち、今の段階で欠けている、この言語の総合的な文法と辞書のための作業の土台が、ようやく整いつつある。この作業と平行して、かつて断続的に出版した、パリのフランス国立図書館所蔵のコータン・サカ語文書 (Paul Pelliot 蒐集) の研究を改訂して、Saka Documents Text Volume II として準備中である。

### c 主要業績

#### (1) 論文

- “Sino-Hvatanica Petersburgensia, Part 2”, *Iranian Languages and Texts from Iran and Turan: Ronald E. Emmerick Memorial Volume*, edited by Maria Macuch, Mauro Maggi and Werner Sundermann, pp.147-159, Wiesbaden: Harrassowitz, 2008.12
- “The Injunctive in Khotanese”, *East and West. Papers in Indo-European Studies*, ed. By Kazuhiko Yoshida and Brent Vine, pp.133-149, Bremen: Hempen, 2009.5
- “Paul Pelliot and the Deśanā-parivarta of the Suvarṇabhāsa-sūtra”, *Bulletin of the Asia Institute* 19, pp.79-84, 2009.12
- “A St. Petersburg Bilingual Document and Problems of the Chronology of Khotan”, *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 3, pp.79-84, 2009.12
- “The Khotanese in Dunhuang”, *The Silk Road: Key Papers (2 Vols)*, Vol. II, edited by Valerie HANSEN, pp.604-620, Leiden: Brill, 2012 (<http://www.brill.nl/silk-road-key-papers-2-vols>)

## 3. 主な社会活動

#### (1) 学会

日本言語学会評議員

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員

教授 林 徹 HAYASI, Tooru

1. 略歴

1977年3月 東京大学文学部言語学科卒業（文学士）  
1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（言語学専攻）修了（文学修士）  
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（言語学専攻）単位取得退学  
1984年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手  
1989年7月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授  
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 併任  
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、チュルク語学

b 研究課題

(1) ユーラシア周辺部チュルク諸語の記述研究

中国新疆ウイグル自治区南部のエイヌ語、中国甘粛省のサリグ・ヨグル語、そして、ドイツ・ベルリン市でトルコ系移民の話すトルコ語を主な対象とし、現地調査によって収集したデータによりながら、小規模な言語共同体が周囲の言語から導入した要素によって新たな用法を生み出す過程を明らかにする。

(2) トルコ語の指示詞に関する研究

トルコ語の3系列の指示詞が使われる語用論的条件を解明するため、共通の課題を与えられた話者による会話の音声と映像を、指示詞の用法と非言語的行動（ジェスチャーや視線の変化など）の関係に注目しつつ、分析する。

c 主要業績

(1) 著書

単著、林徹、『トルコ語文法ハンドブック』、白水社、2013.3

(2) 論文

Tooru Hayasi, 「Foreign and indigenous properties in the vocabulary of Eynu, a secret language spoken in the south of Taklamakan」, 『Lars Johanson and Martine Robbeets (eds.) Morphology between copies and cognates. Leiden: Brill.』, 423-437 頁、2012.5

林徹・安達真弓・神庭真理子, 「レゴ組み立て課題を通して見る日本語の指示詞コトソ」, 『東京大学言語学論集』, 34, 275-289 頁、2013.9

Tooru Hayasi, 「Temporal characteristics of the Turkish demonstrative su」, 『Nurettin Demir, Birsal Karakoç, and Astrid Menz (eds.) Turcology and linguistics: Éva Ágnes Csató Festschrift. Ankara: Hacettepe Üniversitesi』, 209-218 頁、2014.3

(3) 学会発表

国際、Tooru Hayasi, 「How different is Turkish spoken in Berlin from its 'standard' variety of Istanbul?: an analysis of a questionnaire survey on linguistic judgment of adolescents living in the two cities」, Second International Symposium of Tokyo Academic Forum on Immigrant Languages, University of Tokyo, Komaba, Tokyo, 2012.2.10

国際、Tooru Hayasi, Carol W. Pfaff, and Meral Dollnick, 「Continuity and contact-induced change in varieties of Turkish in Berlin Turkish: grammatical judgments and production of demonstrative pronouns of Turkish/German bilinguals」、Sociolinguistic Symposium 19、Freie Universitaet Berlin、2012.8.23

国際、Tooru Hayasi, and A. Sumru Ozsoy, 「Su or bu/o: Turkish nominal demonstratives with concrete referents」、16th International Conference on Turkish Linguistics、Middle East Technical University, Ankara、2012.9.18

国際、Carol W. Pfaff, Isil Erduyan, and Tooru Hayasi, 「Development in Turkish Varieties and Identities in North Western Europe」、Second International Conference on Heritage/Community Languages、National Heritage Language Resource Center, UCLA、2014.3.7

(4) 会議主催(チェア他)

国際、「16th International Conference on Turkish Linguistics」、チェア、Middle East Technical University, Ankara、2012.9.18～2012.9.21

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、林徹、分担者(部局内に代表者あり)、「挑戦的萌芽研究「構造化されたエリシテーションの開発と意味研究への応用」」、2012～2014

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本大学文理学部、「言語学」、2012.4～2012.9

(2) 学会

国内、日本言語学会、学会誌編集委員長、2012.4～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、研修専門委員会委員、2012.4～2014.3

教育機関、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、共同研究専門委員会委員、2012.4～2014.3

教授 **西村 義樹** NISHIMURA, Yoshiki

### 1. 略歴

1984年3月 東京大学文学部英語英文学専修課程卒業  
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程入学  
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了  
1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程進学  
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程退学  
1989年4月 実践女子大学文学部英文学科専任講師  
1992年4月 東京大学教養学部助教授  
1993年4月 東京大学大学院総合文化研究科専攻助教授  
2004年4月 東京大学人文社会系研究科助教授 併任  
2004年9月 東京大学人文社会系研究科助教授  
2007年4月 東京大学人文社会系研究科准教授  
2012年4月 東京大学人文社会系研究科教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

言語学、意味論、認知文法

## b 研究課題

文法の意味的基盤

認知文法の観点からさまざまな文法現象の意味的な基盤を明らかにすることを目標として研究を進めてきた。これまでに分析の対象にしてきた主な現象は、日英語の使役構文、項構造の交替、文法関係などである。近年は認知言語学の分野でその遍在性、重要性が新たに注目されている換喩 (metonymy) の本質を解明し、それに基づいて従来別々に扱われてきた多くの文法現象を統一的に把握し直すことを目指している。

## c 主要業績

### (1) 著書

野矢茂樹氏との共著『言語学の教室—哲学者と学ぶ認知言語学』、中央公論新社、2013. 6

### (2) 学会発表

国内、西村義樹、「語彙、文法、好まれる言い回し：認知文法の視点」、日本エドワード・サピア協会第27回研究発表会、2012. 10. 27

国内、西村義樹、「「英語学者」が認知言語学を研究するわけ」、日本フランス語学会シンポジウム「認知言語学の功罪」、国際基督教大学、2013. 6. 1

国内、西村義樹、「日英語のヴォイス現象:認知文法の視点」、日本英語学会第31回大会シンポジウム「ヴォイスの対照研究はどこまで進んだのか、そしてどこに向かうのか—研究史の再評価と今後の展望にむけて—」、2013. 11.10

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

東京言語研究所理論言語学講座講師 2012.4～、  
学習院大学非常勤講師 2012.4～

### (2) 学会

日本言語学会、評議員 2012.4～、夏期講座委員 2012.4～、編集委員 2012.4～

教授 **木村 英樹** KIMURA, Hideki

11 中国語中国文学 参照

准教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato

## 1. 略歴

平成4年3月 京都大学文学部文学科卒業 (文学士)  
平成4年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻入学  
平成6年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻修了 (文学修士)  
平成6年4月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程梵語学梵文学専攻進学  
平成12年3月 京都大学大学院文学研究科梵語学梵文学専攻博士後期課程中途退学  
平成8年9月 ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程入学  
平成12年12月 ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程卒業 (Ph.D)  
平成12年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 COE 非常勤研究員 (平成13年3月まで)  
平成13年4月 白鷗大学経営学部専任講師 (平成17年3月まで)  
平成17年4月 白鷗大学経営学部助教授 (平成19年3月まで)  
平成19年4月 白鷗大学教育学部准教授 (平成22年3月まで)  
平成22年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (現在に至る)

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

歴史言語学、音韻論、インド・アリア語、ドラヴィダ語

### b 研究課題

インド・アリア語、とくにサンスクリットの音韻論と、ドラヴィダ語族言語のフィールドワーク

### c 主要業績

#### (1) 著書

単著、Masato Kobayashi、『Texts and Grammar of Malto』、Kotoba Books、2012.3

編著、HAYASI Tooru, KOBAYASHI Masato, NISHIMURA Yoshiki、『Tokyo University Linguistic Papers 33: Festschrift for Professor Hiroshi Kumamoto』、Linguistics Department, University of Tokyo、2013.3

その他、Masato Kobayashi、『"Information Structure and the Particles vai and eva in Vedic Prose", in Klein, Jared and Kazuhiko Yoshida (eds.), Indic across the Millennia, 77-92』、Ute Hempen Verlag, Bremen、2013.4

#### (2) 論文

Masato Kobayashi、『The Stative Passive Construction in Kurux』、『Tokyo University Linguistic Papers 33 (Festschrift for Professor Hiroshi Kumamoto)』、33、117-131 頁、2013.3

#### (3) 書評

Lipp, Reiner、『Die indogermanischen und einzelsprachlichen Palatale im Indoiranischen』、Carl Winter、Masato Kobayashi、『Indo-Iranian Journal』、55.3、287-296 頁、2012

#### (4) 学会発表

国内、小林正人、『マルト語の副動詞における冗長な活用の発生』、日本言語学会 第144回大会、東京外国語大学、2012.6.16

#### (5) 受賞

国内、小林正人、Masato Kobayashi、第31回新村出賞、31st Izuru Shinmura Award、『Texts and Grammar of Malto (マルト語のテキストと文法)』、新村出記念財団、Izuru Shinmura Memorial Foundation、2012.11.23

## 3. 主な社会活動

### (1) 学会

日本言語学会 大会運営委員 2008年～2010年、常任委員 2012～

### (2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員 2013～

日本学術振興会審査委員 2013～

## 02 考古学

教授 **大貫 静夫**

ONUKI, Shizuo

### 1. 略歴

- 1971年3月 千葉県立千葉高等学校卒業
- 1971年4月 東京大学文科3類入学
- 1975年3月 東京大学文学部考古学専修課程卒業
- 1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程修士課程修了
- 1984年6月 東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程博士課程退学
- 1984年7月 東京大学文学助手（東京大学遺跡調査室）
- 1986年5月 東京大学文学部附属北海文化研究常呂実習施設に配置換え
- 1994年4月 東京大学文学部助教授（考古学）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（考古学）
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（考古学）

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

東北アジア考古学

#### b 研究課題

- (1) 日本列島を含む環日本海の定着的食料採集社会の成り立ち、およびその変容過程の考古学的研究
- (2) 中国中原地域の初期国家形成過程についての研究

#### c 主要業績

##### (1) 論文

大貫静夫、「朝鮮半島」、『講座日本の考古学3』、648-669頁、2013.6  
大貫静夫、「二里頭遺跡の出現」『中華文明の考古学』56-67頁、2014.3

##### (2) 学会発表

国際、大貫静夫、「アムール川下流域新石器時代研究の新たな成果」、第11回環東海考古学研究会学術発表会、韓国、木浦市、2012.1.28  
国内、大貫静夫・I. シェフコムド・福田正宏他、「東部極東平底土器の形成過程について—2011年度コンドン1遺跡の調査から—」、第13回北アジア調査研究報告会、2012.2.12  
国内、佐藤宏之・I. Shevkomud・大貫静夫他、「アムール下流域コンドン1遺跡の調査」、日本考古学協会第78回総会、2012.5.27  
国内、大貫静夫、「夏商周考古学と炭素14年代」、日本中国考古学会関東部会月例会、東京大学、2014.1.30

##### (3) 会議主催(チェア他)

国内、「第13回北アジア調査研究報告会」、実行委員、東京大学、2012.2.11～2012.2.12

##### (4) 共同研究・受託研究

共同研究、大貫静夫、サハリン国立大学、「サハリン・北海道間における先史時代文化交流の解明」、2013～

##### (5) 研究報告書

大貫静夫監修『環日本海北回廊の考古学的研究（I）』東京大学常呂実習施設研究報告11、2014.3.31

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

委嘱教授、北京大学、「東北亜考古学」、2013.10～2013.12  
特別講演、中国社会科学院考古研究所、「夏商周考古と炭十四測定」、2014.1.7

#### (2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

その他、高梨学術奨励基金、理事、2013.4～

(3) 職歴

University of East Anglia、Research Associate、2013.9.2

北京大学、客員教授、2014.1.9

教授 **佐藤 宏之** SATOU, Hiroyuki

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部考古学専修課程卒業
- 1982年4月 財団法人東京都埋蔵文化財センター調査員
- 1988年4月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程入学
- 1991年3月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
- 1991年4月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程入学
- 1994年3月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程修了、博士(文学)取得
- 1994年4月 財団法人東京都埋蔵文化財センター副主任調査研究員
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 1997年5月 東京大学文学部付属北海文化研究常呂実習施設助教授
- 1999年4月 東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授
- 2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
(新領域創成科学研究科助教授併任、2004年3月まで)
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

先史考古学、民族考古学、人類環境史

b 研究課題

- (1) 日本列島および東アジアの旧石器時代における石器技術論、行動論、遺跡形成論、石材論的研究。
- (2) 生業・居住形態等に関する民族考古学的研究。
- (3) 民俗知の環境論的研究。

c 主要業績

(1) 論文

- 佐藤宏之、「縄文人は定住していたか? -民族考古学からみた狩猟採集民の定住行動」、『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態論的総合研究』、47-55 頁、2012.3
- Akira Iwase and Hiroyuki Sato et al、「The timing of megafauna extinction in the late Late Pleistocene on the Japanese Archipelago」、『Quaternary International』、255、114-124 頁、2012.3
- 佐藤宏之・役重みゆき、「北海道の後期旧石器時代における黒曜石産地の開発と黒曜石の流通」、『旧石器研究』、9、1-25 頁、2013.5
- Hiroyuki Sato 「Original characteristics of modern human behavior on Japanese early Early Upper Paleolithic: edge-ground axe, circular settlement and trap pit hunting」、『Proceedings of the 16th International Symposium: SUYANGGAE and Her Neighbours in Nihewan』160-172 頁、海洋出版社、北京、2013.6
- 佐藤宏之、「関東地方における石器石材の時期別動向と地域性」『石器石材と旧石器社会』147-157 頁、中・四国旧石器文化談話会、岡山、2013.11
- 佐藤宏之、「日本列島の成立と狩猟採集の社会」『岩波講座 日本歴史 第1巻 原始・古代 1』岩波書店、29-62 頁、2013.11

- 佐藤宏之、「石刃鎌石器群の多様性と共通性」大貫静夫・福田正宏編『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明』119-124 頁、東京大学大学院人文社会系研究科、2014.2
- Miyuki Yakushige and Hiroyuki Sato、「Obsidian exploitation and circulation in Late Pleistocene Hokkaido」、  
『Lithic Raw Material Exploitation and Circulation in Prehistory: a comparative perspective in diverse palaeoenvironment』、Études et Recherches Archéologiques de l'Université de Liège, Belgium、138 号、159-177 頁、2014.2
- 佐藤宏之・出穂雅実他、「北見市紅葉山遺跡から出土した黒曜石石器の原産地推定: EPMA によるガラスの化学組成と岩石組織」『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(II)』東京大学常呂実習施設研究報告第 12 集、84-96 頁、2014.3
- 佐藤宏之・ファーガソン他、「北海道における黒曜石産地化学組成グループの多面的手法による特性評価」『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(II)』東京大学常呂実習施設研究報告第 12 集、103-122 頁、2014.3
- 佐藤宏之・出穂雅実他、「ロシア沿海地方ハサン地区グヴォズデヴォ 5 遺跡の発掘調査」『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(II)』東京大学常呂実習施設研究報告第 12 集、172-185 頁、2014.3
- 佐藤宏之・ファーガソン他、「北海道勇払郡厚真町上幌内モイ遺跡旧石器地点出土黒曜石遺物の蛍光 X 線分析および放射化分析」『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(II)』東京大学常呂実習施設研究報告第 12 集、57-74 頁、2014.3
- 佐藤宏之・出穂雅実他、「北海道勇払郡厚真町上幌内モイ遺跡の札滑型細石刃核を伴う石器群における石器石材の調達とリダクション戦略」『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(II)』東京大学常呂実習施設研究報告第 12 集、157-164 頁、2014.3
- 佐藤宏之・ブービット他、「吉井沢遺跡における地考古学的調査研究」『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(III)』東京大学常呂実習施設研究報告第 13 集、195-201 頁、2014.3
- 佐藤宏之、「黒曜石研究の現状と課題: 産地同定研究法の標準化を展望して」『法政考古学』40 集、17-23 頁、2014.3
- 森先一貴・佐藤宏之、「アムール下流域における前期新石器社会の石器技術と行動」『環日本海北回廊の考古学的研究(I): ヤミフタ遺跡発掘調査報告書』東京大学常呂実習施設研究報告第 11 集、88-99 頁、2014.3

## (2) 学会発表

- 国内、大貫静夫・佐藤宏之他、「東部極東平底土器の形成過程について」、第 13 回北アジア調査研究報告会、東京大学、2012.2.12
- 国内、佐藤宏之・夏木大吾他、「北海道北見市吉井沢遺跡の第 6 次発掘調査報告」、第 13 回北アジア調査研究報告会、東京大学、2012.2.12
- 国内、森先一貴・佐藤宏之他、「アムール下流域コンドン 1 遺跡の調査—更新世・完新世移行期の石器群—」、日本考古学協会第 78 回総会、立正大学、2012.5.27
- 国際、Hiroyuki Sato、「Recent advances of Paleolithic archaeology in Japan」、The 5th World Conference of the Society for East Asian Archaeology、九州大学、2012.6.6
- 国内、佐藤宏之、「環日本海北部地域に於ける後期旧石器時代の環境変動と生業適応」、石器文化研究会総会、明治大学博物館、2012.6.9
- 国際、Hiroyuki Sato, Masami Izuho, Satoru Yamada、「Intrasite variability of Oshorokko microblade industry in Yoshiizawa site in Hokkaido, northern Japan」、The 5th Annual Meeting of the Asian Paleolithic Association、クラスノヤルスク大学、ロシア、2012.7.8
- 国際、Hiroyuki Sato, Miyuki Yakushige、「Obsidian exploitation and circulation in Late Pleistocene Hokkaido」、International works on the Japanese Obsidian: Nagano Workshop in 2011 Symposium "Lithic Raw Material Exploitation and Circulation in Prehistory"、明治大学、2012.10.28
- 国内、佐藤宏之、「黒竜江省赫哲の民族考古学的調査」、第 14 回北アジア調査研究報告会、石川県立博物館、2013.2.10
- 国際、佐藤宏之、「赫哲の居住と生業」、国際シンポジウム「ロシア極東森林地帯における文化の環境適応」、ロシア連邦立極東大学、2013.3.6
- 国際、Hiroyuki Sato、「Paleolithic of Siberia and its surrounding regions」、International Symposium "Paleolithic Iran"、筑波大学文京校舎、2013.4.21

国際、Hiroyuki Sato, Kazuki Morisaki, 「Lithic technological and human behavioral diversity before and during Late Glacial」、International Symposium "Commemoration of the 90th Anniversary of the Discovery of Shuidonggou"、中国銀川市、2013.6.27

国際、Miyuki Yakushige and Hiroyuki Sato, 「Shirataki obsidian exploitation and circulation in prehistoric northern Japan」、International Symposium "Stories Written in Stones"、ルーマニア、ヤシ市、2013.8.23

国際、Kyouhei Sano, Hiroyuki Sato et al, 「Geological and geochemical study in Shirataki obsidian lava complex, northern Hokkaido, Japan」、International Symposium "Stories Written in Stones"、2013.8.23

国内、佐藤宏之、「稜柱系細石刃石器群の生成プロセスの展望: 荒川台型細石刃石器群を中心として」、公開シンポジウム「日本列島における細石刃石器群の起源」、浅間縄文ミュージアム、2013.9.14

国内、佐藤宏之、「日本列島にきた人たち—考古学的観点から—」、日本人類学会公開講演会、つくば市国際会議場、2013.11.4

国内、佐藤宏之、「関東地方における石器石材利用の時期別動向と地域性」、第30回中・四国旧石器談話会30周年記念シンポジウム「石器石材と旧石器社会」、岡山大学、2013.11.17

国際、Hiroyuki Sato, 「Recent advances of the Japanese Paleolithic archaeology」、International Workshop in Sakhalin 2013 "Study on adaptive strategy and interaction scenarios of the human communication in the island world of the prehistoric North-East Asia"、Sakhalin State University、2013.12

国内、佐藤宏之・山田哲他、「北海道北見市吉井沢遺跡2013年度発掘調査」、第27回東北日本の旧石器文化を語る会、北海道大学、2014.2

国内、佐藤宏之・山田哲他、「北海道北見市吉井沢遺跡の発掘調査」、第15回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2014.3

国内、佐藤宏之・夏木大吾他、「2013年度スラブナヤ5遺跡発掘調査報告」、第15回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2014.3

国内、佐藤宏之・福田正宏他、「北海道湧別市川遺跡の発掘調査」第15回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2014.3

### (3) 研究報告書

黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容、「平成21-25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤(A)研究成果中間報告書」、東京大学常呂実習施設研究報告第10集、2012.10

黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(II)、「平成21-25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤(A)研究成果報告書」、東京大学常呂実習施設研究報告第12集、2014.3

黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(III): 吉井沢遺跡の研究、「平成21-25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤(A)研究成果報告書」、東京大学常呂実習施設研究報告第13集、2014.3

### (4) 会議主催(チェア他)

国際、International Symposium "Stories Written in Stones"、セッション・オーガナイザー・チェア、ルーマニア、ヤシ市、2013.8.23

## 3. 主な社会活動

### (1) 行政

自治体、神奈川県文化財保護審議会、立案、委員、2012.4~2014.3

自治体、東京都文化財保護審議会、立案、委員、2012.4~2014.3

自治体、常呂遺跡跡整備専門委員会(北見市)、立案、委員、2012.4~2014.3

自治体、岩宿文化賞選考委員会(群馬県みどり市)、選考、委員、2013.5~10

## 1. 略歴

1974年3月	群馬県立前橋高等学校卒業
1974年4月	静岡大学人文学部人文学科入学
1978年3月	静岡大学人文学部人文学科卒業
1978年4月	静岡大学人文学部人文学科研究生
1979年3月	静岡大学人文学部人文学科研究生修了
1979年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻博士課程入学
1986年3月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻単位取得退学
1986年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生
1987年12月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生修了
1988年1月	国立歴史民俗博物館考古研究部助手
1996年4月	国立歴史民俗博物館考古研究部助教授
2004年4月	駒澤大学文学部歴史学科助教授
2006年12月	博士(文学)取得(筑波大学)
2007年4月	駒澤大学文学部歴史学科教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

日本考古学

### b 研究課題

- (1) 縄文時代から弥生時代への移行問題の研究
- (2) 縄文・弥生時代の葬墓制の研究
- (3) 縄文・弥生時代の通過儀礼の研究

### c 主要業績

#### (1) 著書

- 単著、設楽博己、『Shitara Collection 前橋の縄文後・晩期の遺跡から—設楽コレクション—土からのメッセージ』、設楽コレクション図録製作委員会、2012.3
- 単著、設楽博己『遺跡から調べよう①旧石器・縄文時代』128頁、童心社、2013.7
- 単著、設楽博己『遺跡から調べよう②弥生時代』128頁、童心社、2013.7
- 共著、加藤健吉・仁藤敦史・設楽博己『なぜ、列島に「日本」という国ができたのか、こうして“クニ”が生まれた さかのぼり日本史10 飛鳥〜縄文』、NHK出版、2013.8

#### (2) 論文

- 設楽博己、「コラム 色の考古学」、『日本史色彩事典』、吉川弘文館、414〜416頁、2012.5
- 設楽博己、「保美貝塚における「盤状」集骨墓の検出状況」、『一般社団法人日本考古学協会第78回総会研究発表要旨』、一般社団法人日本考古学協会、124〜125頁、2012.5
- 設楽博己、「辟邪の造形」、『佐久考古通信』、NO110、2〜3頁、2012.6
- 設楽博己「絵画から解く先史の思考」『季刊考古学』第122号、36〜39頁、雄山閣、2013.2
- 設楽博己「東日本の弥生時代社会」『柳田康雄先生古稀記念論文集 弥生時代政治社会構造論』275〜289頁、雄山閣、2013.2
- 設楽博己「弥生時代の人物デザイン」『考古学研究会東京例会シンポジウム(第31回例会)人物デザインの考古学—土偶・顔壺・埴輪—』15〜17頁、考古学研究会東京例会、2013.3
- 設楽博己「東奈良銅鐸の文様をめぐって」『高槻市立今城塚古代歴史館平成25年春季特別展 三島弥生文化の黎明—安満遺跡の探求—』62〜67頁、高槻市立今城塚古代歴史館、2013.3
- 設楽博己「日本列島にはいつから人が住み始めたのか」「縄文人はどのような暮らしをしていたのか」「弥生時代はいつ始まったのか」「豪族統治はどのようにしておこなわれたか」『高等学校日本史B』10〜16・22〜23頁、清水書院、2013.3

- 設楽博己・西本豊弘・田中耕作「新潟県新発田市村尻遺跡出土の穿孔人指骨と骨角器」『新潟県考古学談話会会報』第35号、29～38頁（うち、はじめに・7. 穿孔人指骨について・おわりに29・33～37頁）、新潟県考古学談話会、2013.3
- 設楽博己「日本における国家形成期の僻邪思想と中華思想一方相氏と黥面の絵画から」『一般社団法人日本考古学協会第79回総会研究発表要旨』104～105頁、一般社団法人日本考古学協会、2013.5
- 設楽博己「柳田國男とミネルヴァ論争」『みずほ別冊 弥生研究の群像—七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念—』31～37頁、大和弥生文化の会、2013.5
- 設楽博己「群馬県前橋市西新井遺跡の土製耳飾り」『日本先史学考古学論集—市原壽文先生傘壽記念—』101～129頁、六一書房、2013.6
- 設楽博己「縄文時代・弥生時代・古墳時代とはどのような時代だったのか?」『清流』第20巻第9号、62～63頁、清流出版株式会社、2013.9
- 設楽博己「弥生時代 国際社会への参入」『なぜ、列島に「日本」という国ができたのか こうして“クニ”が生まれた さかのぼり日本史10 飛鳥～縄文』、133～185頁、NHK出版、2013.8
- 設楽博己「『三国志』の時代 イレズミからみえてくる邪馬台国」『海でつながる倭と中国—邪馬台国の周辺世界』234～269頁、新泉社、2013.9
- 設楽博己・吉川昌伸「東日本における農耕文化成立の研究—愛知県一宮市馬見塚遺跡 H 地点の発掘調査—」『論集馬見塚』85～105頁（設楽：85・98・104・105頁）、考古学フォーラム、2013.11
- 設楽博己「縄文時代から弥生時代へ」『原始・古代1』岩波講座日本歴史第1巻、63～99頁、岩波書店、2013.11
- 設楽博己「コラム 先史時代の人々は骨をどのように扱ったか—再葬と祖先祭祀—」『O.li.v.e.—骨代謝と生活習慣病の連関—』3～4、248～249頁、株式会社メディカルレビュー社、2013.11
- 設楽博己「農耕文化複合と弥生文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』185、449～469頁、2014.2
- 設楽博己・高瀬克範「西関東地方における穀物栽培の開始」『国立歴史民俗博物館研究報告』185、511～530頁、2014.2
- 設楽博己「第一編 原始の大仁」『大仁町史 通史編— 原始・古代 中世・近世』21～87頁、伊豆の国市観光・文化振興課、2014.3
- 設楽博己「日本列島における方相氏の起源をめぐって」『中華文明の考古学』342～353頁、同成社、2014.3
- 設楽博己「科研基盤A「植物・土器・人骨の分析を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究」のスタート」『Seeds Contact』第1号、9～10頁、設楽科研事務局、2014.3
- 設楽博己「銅鐸文様の起源」『東京大学考古学研究室研究紀要』28、109～130頁、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室、2014.3

### (3) 予稿・会議録

- 国内会議、設楽博己、「縄文人と動物たち」、東京大学文学部公開講座、東京大学本郷キャンパス法文2号館1番大教室、2012.5.12
- 国内会議、設楽博己、「古代におけるイレズミの習俗」、「春季特別展 三国志の時代—2・3世紀の東アジア—」研究講座、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館講堂、2012.5.20
- 国内会議、設楽博己、「保美貝塚における盤状集骨の調査」、一般社団法人日本考古学協会第78回総会研究発表セッション4「考古学と人類学のコラボレーションによる遺跡研究の試み—愛知県保美貝塚を事例として—」、立正大学3号館3階335教室、2012.5.27
- 国内会議、設楽博己、「土偶と耳飾りからわかること」、上野原縄文の森開園10周年記念特別企画展 縄文人の匠の技～土器・土偶・耳飾りからのメッセージ～講演会、縄文の森展示館1階多目的ルーム、2012.11.3
- 国内会議、設楽博己「弥生時代の人物デザイン」『身体としての土器』國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館 國學院大學 AMC 棟常磐松ホール、2013.3.16
- 国内会議、設楽博己「銅鐸文様の起源—東奈良銅鐸をめぐって—」『今城塚古代歴史館春季特別展三島弥生文化の黎明—安瀟遺跡の探求—特別講演と対談』今城塚古代歴史館映像研修室、2013.3.23
- 国内会議、設楽博己「日本における国家形成期の僻邪思想と中華思想一方相氏と黥面の絵画から」『一般社団法人日本考古学協会第79回総会』駒澤大学記念講堂、2013.5.25
- 国内会議、設楽博己「絵画からみた原始・古代人の精神世界」『市川市立博物館 国際博物館の日記念講演』市川市生涯学習センターグリーンスタジオ、2013.6.2
- 国内会議、設楽博己「丑野毅先生とレプリカ法」『丑野毅先生退官記念講演』東京大学総合研究博物館、2013.6.15

国内会議、設楽博己「最近の弥生文化研究に思うこと」『平成 25 年度栃木県考古学会講演会』栃木県立博物館講堂、2013.8.10

国内会議、設楽博己「東日本への弥生文化の波及」『新潟県立歴史博物館講演会』新潟県立歴史博物館、2013.9.1

国内会議、設楽博己「邪馬台国はどこか？—イレズミから考える私の仮説—」『平成 25 年度茨高教研歴史部講演会並びに研究協議会』茨城県立歴史館、2013.11.22

国内会議、設楽博己「馬見塚遺跡 H 地点の発掘調査—農耕のはじまりを求めて—」『一宮市博物館講演』一宮市妙興寺公民館、2013.11.3

国内会議、設楽博己「弥生文化とはなにか」科学研究費補助金基盤研究 (B) 完新世の気候変動と縄文文化の変化 公開シンポジウム V 『縄紋／弥生の画期—2.8ka イベントをめぐる考古学現象—』基調講演、東北芸術工科大学東アジア民族文化アーカイブセンター、2013.12.7

国内会議、設楽博己「弥生都市論と漢文化の影響をめぐって」『明治大学博物館友の会弥生文化研究会講演会』明治大学博物館、2013.12.18

国内会議、設楽博己「縄文人と私たち」東大文学部 集英社 公開講座『ことばを読む ひとを知る』東京大学法文 2 号館、2013.12.21

#### (4) マスコミ

設楽博己「線刻画は魔除けの役人、方相氏か 北九州・城野遺跡 見えてくる中国の影響」『西日本新聞』9 面、2013.11.5

#### (5) 教科書

荒野泰典・伊藤純郎・加藤友康・設楽博己・千葉功・村井章介『高等学校日本史 B』305 頁、清水書院、2013.3.26

#### (6) 共同研究・受託研究

共同研究、山田康弘、国立歴史民俗博物館、「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」、2012～

共同研究、設楽博己、国立歴史民俗博物館、「柳田國男収集考古資料の研究」、2012～2014

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学外組織委員・役員

独立行政法人、国立歴史民俗博物館総合展示第 1 室リニューアル委員会、委員会委員、2012.4～

教育機関、神奈川県文化財保護審議会、文化財保護審議会委員、2012.4～

教育機関、静岡県文化財保護審議会委員、委員会委員、2012.4～

教育機関、佐賀県教育委員会東名遺跡重要性検討会、委員、2012.7～

教育機関、文化庁文化審議会専門委員（文化財分科会）、委員、2013.3～

教育機関、群馬県文化財保護審議会、委員、2012.7～

教育機関、静岡県出土文化財価格評価員、委員、2004.4～

教育機関、静岡市文化財保護審議会、委員、2013.4～

教育機関、佐倉市文化財審議会、委員、2011.4～

教育機関、史跡井野長割遺跡整備検討委員会、委員、2006.2～

教育機関、松戸市史上巻改訂事業原始・古代部会、委員、2011.4～

教育機関、大仁町史編纂委員会、委員、2008.4～

教育機関、佐賀市教育委員会東名遺跡重要性検討会、委員、2012.4～

教育機関、群馬県教育委員会金井東裏遺跡出土甲着装人骨等調査検討委員会、委員、2013.4～

教育機関、群馬県教育委員会群馬県古墳総合調査指導委員会、委員、2013.4～

教育機関、福島県立博物館収集展示委員会、委員、2013.4～

#### (2) 職歴

国立歴史民俗博物館客員教授 2012.4～2014.3

## 03 美術史学

教授 佐藤 康宏 SATO, Yasuhiro

### 1. 略歴

1978年3月	東京大学文学部美術史学専修課程卒業
1978年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美術史学専攻）入学
1980年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美術史学専攻）修了
1980年4月	東京国立博物館学芸部資料課に勤務（文部技官）
1981年4月	文化庁文化財保護部美術工芸課に出向
1989年10月	同上 絵画部門文化財調査官
1994年10月	東京大学文学部に出向（助教授）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美術史学）
2000年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（美術史学）

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

日本美術史を専攻する。主たる分野は江戸時代の絵画・版画の歴史。

#### b 研究課題

室町時代末期から江戸時代初期にかけての風俗画、江戸中期の若冲・蕭白と浮世絵、中後期の南画を主な研究領域としている。近年は平安・鎌倉時代の絵巻や近代の洋画も論文の主題にするなど、論及の対象は拡大し、日本美術史全体を概観するようになった。本来は記号論、社会史、精神分析などの観点を日本絵画の解釈に生かすとともに、作品と文献史料の双方で絵画史研究のための基礎資料を整備することに努めている。

#### c 主要業績

##### (1) 著書

共著、辻惟雄・佐藤康宏監修、『岩佐又兵衛全集』、藝華書院、2013.4  
共著、大倉集古館編、板倉聖哲監修、『描かれた都—開封・杭州・京都・江戸』、東京大学出版会、2013.10  
単著、佐藤康宏、『改訂版 日本美術史』、放送大学教育振興会、2014.3

##### (2) 論文

佐藤康宏、「横断する龍—曾我蕭白「雲龍図」」、『美術史論叢』、28号、1-26頁、2012.3  
佐藤康宏、「雅中の俗—又兵衛・大雅・容斎」、群馬県立近代美術館『江戸の風雅』、6-16頁、2012.9

##### (3) 書評

Matthew Philip McKelway, *Capitalscapes: Folding Screens and Political Imagination in Late Medieval Kyoto*, University of Hawai'i Press、『美術史論叢』、28号、45-49頁、2012.3

##### (4) 解説

佐藤康宏、「浦上玉堂筆 火伏金生図」、『國華』、1406号、36-37頁、2012.12  
佐藤康宏、「渡邊崋山筆 鸕鷀捉魚図」、『國華』、1409号、48-49頁、2013.3  
佐藤康宏、「與謝蕪村筆 四季山水図」、『國華』、1419号、31-32頁、2014.1

##### (5) 学会発表

国際、SATO Yasuhiro, "Ito Jakuchu: An Artist in the Market", *The Artist in Edo: A Symposium*, National Gallery of Art, Freer Gallery of Art, Washington, U.S.A., 2012.4.14  
国際、SATO Yasuhiro, "Cleaving the Tradition of Narrative Painting: *Azusayumi* by Iwasa Matabei", *Moving Signs and Shifting Discourses: Text and Image Relations in East Asian Art*, ベルリン自由大学、2013.6.27  
国際、SATO Yasuhiro, "Reading in the Mountains: Representation of Seclusion in the Landscapes by Urakami Gyokudo", *Image of Reading-Reading Images*, チューリッヒ大学、2014.3.13

##### (6) 啓蒙

佐藤康宏、「日本美術史不案内 36 私のギャップターム」、『UP』、474号、28-29頁、2012.4

- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 37 東大教師が新入生にすすめる日本美術史以外の本 その三」、『UP』、475 号、36-37 頁、2012.5
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 38 研究と興行の対決」、『UP』、476 号、50-51 頁、2012.6
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 39 縛り絵・責め絵」、『UP』、477 号、28-29 頁、2012.7
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 40 漢文のノート」、『UP』、478 号、24-25 頁、2012.8
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 41 雅なる大坂」、『UP』、479 号、40-41 頁、2012.9
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 42 黒の中の黒の中の黒」、『UP』、480 号、28-29 頁、2012.10
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 43 電車の中で読める本は限られている」、『UP』、481 号、14-15 頁、2012.11
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 44 分かれる理由」、『UP』、482 号、14-15 頁、2012.12
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 45 女子高校生の声の届かぬ場所」、『UP』、483 号、28-29 頁、2013.1
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 46 幻の染の幻」、『UP』、484 号、40-41 頁、2013.2
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 47 マニエリスト S の冒険」、『UP』、485 号、14-15 頁、2013.3
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 48 祝辞」、『UP』、486 号、30-31 頁、2013.4
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 49 東大教師が新入生にすすめる日本美術史以外の本 その四」、『UP』、487 号、14-15 頁、2013.5
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 50 カッコウかホトトギスカ」、『UP』、488 号、42-43 頁、2013.6
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 51 千の太陽よりも明るく」、『UP』、489 号、8-9 頁、2013.7
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 52 家族の肖像」、『UP』、490 号、34-35 頁、2013.8
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 53 この講堂にテキストはありますか」、『UP』、491 号、8-9 頁、2013.9
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 54 実践英作文」、『UP』、492 号、18-19 頁、2013.10
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 55 地獄変」、『UP』、493 号、38-39 頁、2013.11
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 56 恥ずかしい学問」、『UP』、494 号、22-23 頁、2013.12
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 57 影の価格」、『UP』、495 号、26-27 頁、2014.1
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 58 大河ドラマ考」、『UP』、496 号、26-27 頁、2014.2
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 59 宗達の風神雷神図」、『UP』、497 号、10-11 頁、2014.3

#### (7) 会議主催(チェア他)

- 国際、「ワシントンの若冲、アメリカの日本美術史」、チェア、東京大学、2012.9.14
- 国内、「美術史学会東支部大会」、チェア、五島美術館、2012.12.16

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

- 委嘱教授、放送大学、「日本美術史 (08)」、2012.4~2014.3
- 非常勤講師、多摩美術大学生涯学習センター、「岩佐又兵衛と浮世絵」、2012.5
- 非常勤講師、江東区豊洲文化センター、「きれいはいきたない きたないはきれい——曾我蕭白」、2012.6
- 特別講演、三重県立美術館、「蕭白は笑う」、2012.6
- 特別講演、群馬県立近代美術館、「風雅の真景」、2012.9
- 非常勤講師、朝日カルチャーセンター・横浜、「洛中洛外図案内」、2013.10
- 特別講演、東京国立博物館、「舟木本洛中洛外図——浮世絵は京都で生まれた」、2013.11

#### (2) 行政

- 文化庁、文化審議会専門委員(文化財分科会)、2012.3~2014.3
- 練馬区、練馬区立美術館運営協議会委員、2012.4~2014.3
- 文化庁、文化財買取評議会委員、2013.8

#### (3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 國華編輯委員会、編輯委員、2012.4~2014.3
- 國華賞選衡委員会、選衡委員、2012.4~2014.3
- 鹿島美術財団、推薦委嘱者、2012.4~2014.3
- 倫雅美術奨励基金、倫雅美術奨励賞候補者推薦委員、2012.4~2014.3

**1. 略歴**

- 1986年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業（文学士）  
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（文学修士）  
1997年2月 フライブルク大学哲学部 Ph.D  
1997年4月 電気通信大学電気通信学部助教授（～1999年3月）  
1999年4月 東京学芸大学教育学部助教授（～2006年3月）  
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
2007年4月 同上准教授  
2011年3月 同上教授

**2. 主な研究活動****a 専門分野**

西洋美術史

**b 研究課題**

デューラーを中心とした中近世ドイツ美術、聖遺物と美術との相関性、イメージ（像）の生動性、比較宗教美術史

**c 主要業績****(1) 著書**

分担翻訳、小佐野重利ほか、『ミラノ・アンブロジーアーナ図書館・絵画館所蔵レオナルド・ダ・ヴィンチ展—天才の肖像』、2013.4

**(2) 論文**

秋山聰、「初期近世ドイツ美術における検閲をめぐるノート」、『西洋美術研究』、16号、2012

秋山聰、「西洋中近世における像を用いた儀礼をめぐるノート」、『美術史論叢』、28、74-86頁、2012.3

Akira Akiyama、「Similarities between Buddhist and Christian Cult Images: On Statue Dressing and Relic Insertion」、『Synergies in Visual Culture/Bildkulturen im Dialog』、pp.71-81、2013

秋山聰、「西洋中近世のキリスト教儀礼における像と人との共演をめぐる—比較美術史的観点から」、『死生学・応用倫理研究』、19、pp.210-232、2014.3

**(3) 学会発表**

国際、Akira Akiyama/Martina Stoye、「Introduction for the Section 03: On Religions and their Objectifications as seen from Intercultural Perspectives」、CIHA Conference 2012 in Nuremberg: The Challenge of the Object/Die Herausforderung des Objektes, Nuremberg, Germanisches Nationalmuseum, 2012.7.16

国際、Akira Akiyama、「The Sacred Footprint, Examined from Comparative Perspectives」、SEN On lines and non-lines、2013.9.20

国際、Akira Akiyama、「Hikaku shūkyō bijutsushigaku no kokoromi」(“An Attempt of the Study of Comparative Religious Art History”)」、Treasure, Ritual and Repositories in the East and in the West, Seminarraum Villa Schönberg, Kunsthistorisches Institut Uni Zurich、2013.11.24

国際、Akira Akiyama、「Vortrag: Invitation to Comparative Religious Art History: Mainly on Relic Insertion and Rituals Involving Statues」、Vortrag、Kunsthistorischen Institut der Universität Freiburg、Miséricorde Kinosaal 2029、2013.11.26

**(4) 啓蒙**

秋山聰、「芸術家の神話学」、『フェーマス』、連載 2012.4～2014.3

秋山聰、「アルノルト・ベックリオンとフィレンツェ」、『地中海学会月報』、349、2012.4

**(5) 会議主催(チェア他)**

国際、「CIHA 33th Conference」、チェア、Section 3: On Religions and their Objectifications as seen from Intercultural Perspectives、Germanisches Nationalmuseum Nuremberg、2012.7.16～2012.7.17

国際、「CIHA Naruto Colloquium: Between East and West. Reproductions in Art」、実行委員、徳島県、鳴門市、大塚国際美術館、2013.1.15～2013.1.18

国際、「SEN: On lines and Non-lines」、Tokyo, University of Tokyo, in collaboration with KHI Florenz/GDSU, 実行委員、東京大学、2013.9-19～21

(6) 研究テーマ

日本学術振興会科学研究費補助金、秋山聰、研究代表者、「美術と宝物の相関性についての比較美術史学的研究」、2011～2013

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、青山学院大学、「芸術史特講 (2)」、2012.4～

非常勤講師、学習院大学文学部、「西洋美術史研究」、2012.4～2013.3

特別講演、東京造形大学、「聖遺物・聖画像と美術」、2012.5、2013.5

講演、ブリヂストン美術館地中海学会秋季連続講演会、「アルノルト・ベックリオンとフィレンツェ」、2012.11.09

(2) 学会

国内、美術史学会、常任委員、2013.5～、編集委員 (東支部編集事務局担当)、2013.5～

国内、国際美術史学会日本委員会、事務局長、2013.4～

国内、地中海学会、常任委員、2012.4～

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

雑誌『西洋美術研究』、編集委員、2012.4～

Iconografica, Advisory Comitee Member, 2012.4～

Art in Translation, Advisory Comitee Member, 2012.4～

鹿島美術財団、推薦委員、2012.4～

准教授 **高岸 輝**

TAKAGISHI, Akira

1. 略歴

1990年4月	東京藝術大学美術学部芸術学科入学
1994年3月	東京藝術大学美術学部芸術学科卒業
1994年4月	東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程入学
1996年3月	東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程修了
1996年4月	東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程入学
2000年3月	東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程修了、博士 (美術) の学位取得
2000年4月	日本学術振興会特別研究員 (PD) (2003年3月まで)
2004年4月	財団法人大和文華館学芸部部員 (2005年9月まで)
2005年10月	東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻助教授 (2007年3月まで)
2007年4月	同 准教授
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史。主として中世絵画史を専攻。

b 研究課題

室町時代に成立したやまと絵の流派である土佐派の研究。古代から近世にかけての絵巻に関する研究。

c 主要業績

(1) 著書

共著、高岸輝ほか、『論集・東洋日本美術史と現場—見つめる・守る・伝える』、竹林舎、2012.5

- 共著、高岸輝ほか、『お伽草子—この国は物語にあふれている—展図録』、サントリー美術館、2012.9
- 共著、高岸輝ほか、『別冊太陽 やまと絵—日本絵画の原点』、平凡社、2012.10
- 共著、高岸輝ほか、『アメリカに渡った物語絵 絵巻・屏風・絵本』、ペリかん社、2013.3
- 共著、Akira Takagishi et al., *Japanese Visual Culture: Performance, Media, and Text*, National Institute of Japanese Literature, 2013.3
- 共著、高岸輝ほか、『図像解釈学—権力と他者』、竹林舎、2013.4
- 共著、高岸輝ほか、『近世やまと絵再考—日・米・欧それぞれの視点から』、ブリュッケ、2013.10
- 共著、Akira Takagishi et al., *Archaism and Antiquarianism in Korean and Japanese Art*, The Center for the Art of East Asia, University of Chicago, 2013.11
- 共著、高岸輝ほか、『絵が物語る日本 ニューヨーク スペンサーコレクションを訪ねて』、三弥井書店、2014.3

## (2) 論文

- 高岸輝、「十六世紀やまと絵様式の転換」、『文学』、13巻5号、144～152頁、2012.9
- 高岸輝、「土佐光信と室町絵巻」、『文化交流研究』、26号、11～18頁、2013.3
- 高岸輝、「中世後期絵巻の様式展開」、『美術史論叢』、29号、51～60頁、2013.3

## (3) 書評

- 佐藤守弘、『トボグラフィの日本近代』、『日本歴史』、764号、169頁、2012.1
- タイモン・スクリーチ、『阿蘭陀が通る』、『日本歴史』、766号、137頁、2012.3
- 白幡洋三郎・錦仁・原田信男編著、『都市歴史博覧』、『日本歴史』、768号、137頁、2012.5
- 鹿島茂、『蕩尽王、パリをゆく』、『日本歴史』、770号、137頁、2012.7
- 加須屋誠、『生老病死の図像学』、『日本歴史』、772号、137頁、2012.9
- 大久保純一、『カラー版 北斎』、『日本歴史』、774号、135頁、2012.11
- 中村俊春編、『絵画と私的世界の表象』、『美術フォーラム21』、26号、135～137頁、2012.11
- 木下直之、『股間若衆』、『日本歴史』、777号、134頁、2013.2
- 金子啓明、『仏像のかたちと心』、『日本歴史』、778号、137頁、2013.3
- 篠原資明、『空海と日本思想』、『日本歴史』、780号、135頁、2013.5
- 山本勉著、『仏像—日本仏像史講義』、『日本歴史』、782号、138頁、2013.7
- 安村敏信、『江戸絵画の非常識』、『日本歴史』、784号、135頁、2013.9
- 大久保純一、『浮世絵出版論』、『日本歴史』、786号、136頁、2013.11
- 根立研介、『ほとけを造った人びと』、『日本歴史』、788号、166頁、2014.1
- 辻惟雄、『辻惟雄集1「かざり」の日本美術』、『日本歴史』、790号、137頁、2014.3

## (4) 解説

- 高岸輝、「歴史ミュージアム 室町の政治を視覚的に伝える」、『週刊 新発見! 日本の歴史』、24号、30～32頁、2013.12

## (5) 学会発表

- 国内、高岸輝、「中世絵巻の様式展開」、美術史学会、五島美術館、2012.12.16
- 国内、高岸輝、「中世絵巻から近世絵巻への展開」、シンポジウム「近世初期の絵と物語」、立教大学日本学研究所、2013.1.7
- 国際、Akira Takagishi, "From Painting to Print to Painting: The Yuzunenbutsu engi Handscrolls and the Muromachi Shoguns", CIHA Colloquium, *Between East and West: Reproductions in Art*, The Otsuka Museum of Art, 2013.1.16
- 国際、Akira Takagishi, "The Amewakahiko Narrative Handscroll in the Museum of Asian Art, Berlin and the Tosa School of the Muromachi Period", International Symposium *Moving Art: East Asian Objects and Their Journeys*, University of Zurich, 2013.3.8
- 国際、Akira Takagishi, "The Relationship and Collections of Imperial Court and Shogunate in the Muromachi Period", *Treasure, Ritual and Repositories in the East and the West*, University of Zurich, 2013.11.24
- 国際、Akira Takagishi, "Japanese Moving Arts through the Centuries: From Flying Buddha Images to Steamship Cargo", Öffentliches Seminar, University of Fribourg, 2013.11.25

## (6) 総説・総合報告

- 高岸輝、小嶋菜温子、高橋亨、「世界の源氏物語絵—いまなぜ光があてられたか—」、『アナホリッシュ国文学』、4号、4～48頁、2013.9

(7) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、挑戦的萌芽研究、高岸輝、研究代表者、「絵巻学の創成に向けた理論的基盤の構築」、2012～

**3. 主な社会活動**

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立教大学大学院文学研究科、「日本文学研究」、2012.4～2013.3

非常勤講師、名古屋大学文学部、「日本中世絵巻の研究」、2012.8

特別講演、サントリー美術館、「戦国時代のお伽草子絵巻流行と土佐光信」、2012.10.20

(2) 学会

国内、美術史学会、専門委員、2012.5～2013.5

国内、美術史学会、常任委員、2013.5～

## 04 哲学

教授 高山 守

TAKAYAMA, Mamoru

### 1. 略歴

- 1973年3月 東京大学文学部卒業
- 1977年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
- 1982年4月 南山大学文学部助教授
- 1988年4月 東京大学教養学部助教授
- 1990年4月 東京大学文学部助教授
- 1994年4月 東京大学文学部教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授、現在に至る
- 2001年3月 京都大学博士（文学）

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

ドイツ近代哲学

#### b 研究課題

概要

- 1) 因果必然性を理由必然性に解消することにおいて、必然性、偶然性、および、人間の自由というものの関係性を確定し、それぞれのあり方を明確化する。
- 2) とりわけ、人間が自由であるということの内実を浮き彫りにし、その自由論を家族論へと展開する。人間のもっとも基本的な自由のあり方を、家族というあり方のうちに見いだそうと試みる。家族なるものの崩壊が、人間の自由というものの、ひいては、人間のもっとも重要なあり方の崩壊につながりうるのではないか。

(以上、二つの課題遂行の基盤は、いずれもヘーゲル哲学である。)

#### c 主要業績

##### (1) 著書(単著)

高山守、『自由論の構築 自分自身を生きるために』、東京大学出版会、総ページ数 206 頁、2013.7

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

東京芸術大学 (2012 年度)

#### (2) 学会

日本哲学会、哲学会、日本ヘーゲル学会、日本シェリング協会、日本フィヒテ協会

#### (3) 行政

動物実験委員会委員、学生懲戒委員会委員

## 1. 略歴

- 1981年3月 東京大学文学部第一類哲学専修課程卒業  
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了  
1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程単位取得満期退学  
1988年4月 東京理科大学工学部非常勤講師（～1991年3月）  
1991年4月 東洋大学文学部専任講師  
1994年4月 東洋大学文学部助教授  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
1997年11月 東京大学より博士（文学）の学位を取得  
2002年7月 英国オックスフォード大学客員研究員（～2003年7月）  
2007年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）  
2011年1月 英国オックスフォード大学 Honorary Fellow（現在に至る）

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

因果論、人格概念の研究、確率の哲学、死刑論、意思決定理論、動物倫理、自由と責任、音楽化された認識論、イギリス経験論

### b 研究課題

原因概念と責任概念の連携をめぐる認識論における規範性の役割の研究など

### c 主要業績

#### (1) 著書

共著、一ノ瀬正樹・伊東乾・影浦峯・児玉龍彦・島藺進・中川恵一、『低線量被曝のモラル』、河出書房新社、2012.2  
単著、一ノ瀬正樹、『放射能問題に立ち向かう哲学』、筑摩書房、2013.1

#### (2) 論文

一ノ瀬正樹、「日本における低線量被曝論争の構図」、『東アジアの死生学 IV』、東京大学グローバル COE「死生学の展開と組織化」、38-58 頁、2012.3

一ノ瀬正樹、「期待効用の概念をめぐる覚え書き 一原発事故と低線量被曝問題に寄せて」、『論集』第 30 号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、1-33 頁、2012.3

一ノ瀬正樹、「放射能問題をめぐる不確実性と予防原則 一災害時における生と死を考える一」、『「しぶとい都市」の作り方 一脆弱性と強靱性の都市システム一』、東京大学グローバル COE プログラム「都市空間の持続再生学の展開」都市の脆弱性研究グループ、157-160 頁、2012.11

Masaki Ichinose, "Uncertainty and the Precautionary Principle concerning Problems about Radiation Exposure: A Thought on Life and Death in a Disaster", *Vulnerability and Toughness in Urban Systems*, The "Urban Vulnerability" Study Group, Center for Sustainable Urban Regeneration, The University of Tokyo, 161 頁、2012.11

一ノ瀬正樹、「放射能問題の被害性 一哲学は復興に向けて何を語るか一」、『国際哲科学研究別冊 1『ポスト福島』の哲学』、東洋大学国際哲学研究センター編、19-47 頁、2013.3

一ノ瀬正樹、「「音楽化された認識論」の展開 一リフレイン、そしてヴァリエーションへ一」、『論集』第 31 号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、1-17 頁、2013.3

Masaki Ichinose, "Hybrid Nature of Causation", 『Ethics for the Future of Life: Proceedings of the 2012 Uehiro-carnegie-Oxford Ethics Conference, the Oxford Uehiro Center for Practical Ethics, University of Oxford』、60-80 頁、2013.6

一ノ瀬正樹、「「ない」ことの因果」、『思想』第 1073 号「思想の言葉」、岩波書店、2-6 頁、2013.9

一ノ瀬正樹「被害・リスク・予防、そして合理性」（『情報とリスク 一ポスト 3.11 の哲学一』、哲学雑誌第 128 巻 800 号、哲学会、有斐閣、2013 年 10 月、pp.75-105.）

Masaki Ichinose, "Noi perspective asupra dezbaterii legate de pedeapsa cu moartea" (In *Filosofia Japoneza Azi*, ed by S. Majima and E-M. Socaciu, editiura universitatii din bucuresti, 2013, pp.197-226, in Rumanian.)

一ノ瀬正樹「死刑論再考 一自由・責任・不確実性一」（『哲学研究論集』第7号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、2013年12月、pp.1-37.）

Masaki Ichinose, "Beebee on Hume's inductive scepticism" (*Journal of International Philosophy No.3*, International Research Center for Philosophy, Toyo University, March 2014.)

Masaki Ichinose, "Strawson on Locke's Theory of Personal Identity" (*Philosophical Studies Vol.32*. The Department of Philosophy, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, March 2014, pp.1-9.)

### (3) 学会発表

国際、Masaki Ichinose, "Probabilistic Causality Revisited", *Tokyo Forum for Analytic Philosophy: Inaugural Talk*, The University of Tokyo, 2012.4.12

国際、Masaki Ichinose, "The Hybrid Nature of Causation: In View of Some Ethical Issues", *Uehiro Carnegie Oxford Conference 2012 Life: Its Nature, Value and Meaning*, International House of Japan, Tokyo, 2012.5.18

国内、一ノ瀬正樹、「放射能問題をめぐる不確実性と予防原則 一災害時における生と死を考える一」、東京大学GCOEプログラム「都市空間の持続再生学の展開」連続シンポジウム「「しぶとさ」のマネジメント 一頑健な都市システムに挑む一」、東京大学工学部、2012.6.7

国内、一ノ瀬正樹、「p-自由とf自由 一自由と決定論の対比構図が見逃してきたこと一」、科学基礎論学会2012年度講演会シンポジウム「自由意志の現在」、首都大学東京、2012.6.16

国内、一ノ瀬正樹、「放射能問題の被害性 一哲学は復興に向けて何を語れるか一」、「ポスト福島哲学」、東洋大学国際哲学研究センター、東洋大学、2012.7.4

国際、Masaki Ichinose, "Two Kinds of Doubts about the Kripkenstein's Rule-Following Paradox", *International Conference: Kripke, Logic and Philosophy*, Peking University, Beijing, China, 2012.9.2

国際、Masaki Ichinose, "Causality and Normativity", *First Conference on Contemporary Philosophy in East Asia*, Academia Sinica, Taipei, Taiwan, 2012.9.7

国際、Masaki Ichinose, "Descriptivity, Normativity, and Probability", *International Philosophy Conference on Probability and Vagueness*, The University of Tokyo, 2013.3.20

国内、一ノ瀬正樹、「バークリの「能動/受動」が懐胎する積極的ゆらぎ 一『三対話』に発する数学観を手がかりに一」、日本イギリス哲学会第37回研究大会・シンポジウムI「バークリ『三対話』刊行300年」、東北大学、2013.3.25

国内、一ノ瀬正樹、「生と死、そして道徳のディレンマについて考える」（福島高校講演会、2013年7月12日、福島県立福島高校）

国際、Masaki Ichinose, "Beebee on Hume's inductive scepticism" (*WEB International Conference: Dialogue concerning Philosophical Methods of Empiricist and Rationalist*, International Research Center for Philosophy Toyo University, 12 October 2013)

国内、一ノ瀬正樹、「「犬と暮らす」ということ 一ハチ公をめぐる哲学断章一」（シンポジウム「東大ハチ公物語」、東京大学弥生講堂・一条ホール、2014年3月8日）

国内、一ノ瀬正樹、「あからさまな混乱がなぜ続くのか 一3.11の被害性について一」（3.11メモリアル・シンポジウム「生命をめぐる科学と倫理」・「問われる大学知」、東京大学福武ホール、2014年3月9日）

国内、一ノ瀬正樹、「予防原則と借金モデル 一「前門の虎、後門の狼」に立ち向かう一」（問われる大学知「哲学熟議 in 東京大学」、東京大学工学部、2014年3月11日）

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、東北大学、集中講義「自由、責任、そして因果」、2012.12.

## 1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部第1類哲学専修課程卒業
1986年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専門課程修士課程修了
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程退学
1988年4月	東京大学文学部助手
1992年4月	立命館大学文学部助教授
2001年4月	立命館大学文学部教授
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2009年9月	東京大学より博士（文学）の学位を取得
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

ドイツ現代哲学、ケアの哲学

### b 研究課題

ドイツ現代哲学のなかでも、とりわけフッサール、デヒルタイ、ハイデガー等によって展開された現象学・解釈学に関する歴史的・体系的研究を行っている。これまで積み重ねてきたフッサール研究については、1冊の書物にまとめたものを、2009年11月に公にした。また以上の文献的研究と並行して、現象学的哲学の今後の展開の可能性のひとつとして、「看護」を中心とする「ケア」の営みを現象学の視点から基礎づけ解明する試みも行っている。

### c 主要業績

#### (1) 論文

榊原哲也、「「生きる意味」を支えるもの——「自殺に傾く人」へのケアについての現象学的一考察——」、『論集』、第30号、34-47頁、2012.3

Tetsuya Sakakibara, “The Intentionality of Caring”, Alessandro Salice (ed.), *Intentionality: Historical and Systematic Perspectives*, Philosophia Verlag, pp. 369-394, 2012.12

Tetsuya Sakakibara, “Phenomenological Research of Nursing and Its Method”, *Schutzian Research*, Vol. 4, pp. 113-150, 2012.12

Tetsuya Sakakibara, „Ich und Du bei Nishida und Heidegger“, *Berliner Schelling Studien*, Heft 11, S. 119-140, 2013.

榊原哲也、「ケアの志向性—フッサールからのアプローチ—」、『論集』（東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室）、第31号、18-37頁、2013.3

Tetsuya Sakakibara, „Genesis und Abbau – eine Gedankenlinie von Husserl zum frühen Heidegger“, *Heidegger-Jahrbuch* Bd. 7, S. 229-245, 2013.8

Tetsuya Sakakibara, „Die Intentionalität der Pflegehandlung“, *Phänomenologische Forschungen, Jahrgang 2013, Soziale Erfahrung*, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 2013, S. 249-265.

#### (2) 学会発表

国際、Tetsuya Sakakibara, “The Intentionality of Caring”, The 5th Biennial Meeting of the Phenomenology for East-Asian Circle (PEACE), Peking University, Beijing, China., 2012.9.23

国内、榊原哲也、「ケアの志向性—フッサールからのアプローチ—」、第39回臨床実践の現象学研究会、大阪大学豊中キャンパス、2012.10.6

国内、西村ユミ・榊原哲也、「看護実践の構造—フッサールの志向性概念との対話—」、第45回臨床実践の現象学研究会、首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス、2013.6.1

国際、Tetsuya Sakakibara, “Phenomenology of Caring from an East-Asian Perspective”, XXIII World Congress of Philosophy “Philosophy as Inquiry and Way of Life”, University of Athens, School of Philosophy, University Campus – Zografos, Athens, Greece, 2013.8.5

国際、Tetsuya Sakakibara, „Die Intentionalität der Pflegehandlung“, Internationale Tagung des Husserl-Archivs  
Köln in Zusammenarbeit mit der Deutschen Gesellschaft für phänomenologische Forschung, Universität zu  
Köln, Germany, 2013.9.27

(3) 予稿・会議録

国内会議、榊原哲也、「不安・抑うつ」の臨床哲学—現象学の視点から」、第4回日本不安障害学会学術大会、早稲田  
大学国際会議場、2012.2.5

『第4回日本不安障害学会学術大会抄録集』、59頁、2012.2

(4) 会議主催(チェア他)

国内、実存思想協会2013年春の研究会、チェア、シンポジウム「フッサールとハイデガーの根本問題—事実性をめ  
ぐって—」、大阪大学豊中キャンパス、2013.3.22

国内、哲学会第52回研究発表大会、モデレーター、ワークショップ「フッサールを読み直す——『イデーニ I』刊  
行100年」、東京大学本郷キャンパス、2013.10.26

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、日本赤十字社医療センター、「患者を個として見るとはどういうことか—地域と個に根ざした包括的ケア  
への現象学からのアプローチ」、2013.3

非常勤講師、東京慈恵会教務主任養成講習会、「哲学」、2013.6～2013.7

非常勤講師、朝日カルチャーセンター・横浜、「ケアのための現象学入門」、2013.12

非常勤講師、首都大学東京大学院人間健康科学研究科、「看護哲学II」、2013.10～2014.3

(2) 学会

哲学会、理事長、2012.4～2014.3

日本哲学会、会計監査、2013.6～2014.3

実存思想協会、事務局長・幹事長、2012.4～2013.9

日本現象学会、委員、2012.4～2014.3

准教授 **鈴木 泉**

SUZUKI, Izumi

### 1. 略歴

1986年3月	東京大学文学部哲学専修課程学士・文学士
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士・文学修士
1990年10月	東京大学教養学部助手（～1993年3月）
1993年4月	神戸大学文学部助教授（～2006年3月）
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

哲学、特に西欧近世哲学と現代フランス哲学

#### b 研究課題

<内在性の哲学>の体系化の作業として次の三つが現在の研究課題である。

1/西洋形而上学の形成史の探求とそれを背景とした<存在の一義性>の哲学の系譜学の作業。

2/現代フランスにおける差異哲学の検討。

3/非人間主義 (inhumanisme) の哲学の展開。

### c 主要業績

#### (1) 論文

鈴木 泉、「大地の動揺可能性と身体の基礎的構造—問いの素描」、『哲學』、第 63 号、25-44 頁、2012.4

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、新潟大学、「スピノザライブニッツ問題」、2013.9.24～27

#### (2) 学会

日本哲学会、評議員、理事、2013.5～

日仏哲学会、理事、2008.9～

スピノザ協会、理事、2006.4～

日本ライブニッツ協会、理事、2009.4～

## 05 倫理学

教授 関根 清三 SEKINE, Seizo

### 1. 略歴

- 1974年3月 東京大学文学部倫理学科卒業（文学士）
- 1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程修了（文学修士）
- 1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
- 1979年4月 日本学術振興会奨励研究員（所属：東京大学倫理学科）～1980年3月
- 1980年8月 ドイツ学術交流会（DAAD）・ドイツ福音教会（DW）奨学生としてミュンヘン大学福音神学部旧約学科に留学（1985年2月に博士号審査合格）～1985年3月
- 1981年10月 ミュンヘン大学学術助手～1985年3月
- 1985年4月 北海道大学文学部助教授（宗教学）～1988年3月
- 1988年4月 東京大学文学部助教授（倫理学）～1994年6月
- 1989年6月 ミュンヘン大学より Dr. Theol. [神学博士] の学位を取得
- 1994年6月 東京大学文学部 [1995年4月より大学院人文社会系研究科] 教授（倫理学）～現在
- 1996年3月 東京大学より博士（文学）の学位を取得
- 1997年6月 大学入試センター研究開発部教授を併任～1998年3月
- 2000年4月 放送大学客員教授を併任～2004年3月
- 2004年3月 ウィーン大学およびエッセン大学で客員教授～同7月

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

西洋倫理思想史・旧約聖書学

#### b 研究課題

ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教倫理思想の研究

#### c 主要業績

##### (1) 著書

編著、関根清三、『アブラハムのイサク 献供物語：アケダー・アンソロジー』、日本キリスト教団出版局、2012  
単著、Seizo Sekine、『*Philosophical Interpretations of the Old Testament* (Beiheft zur Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft Bd.458, de Gruyter,2014), 255+xii S., de Gruyter, 2014

##### (2) 論文

関根清三、「生の贈与と死にまつわる罪責：ヘブライズムの場合」、『倫理学年報』、第59集、pp.35-45、2012  
関根清三、「貢献心は本能か」、『一般財団法人 ホモコントリビューエンス研究所 Website』、www.homo-contribuents.org/jp/kyodokenkyu/pdf/thesis\_taki\_017.pdf、2012  
関根清三、「終わり・黙示・メシア：終末論の諸態と批判的展望」、『旧約聖書を学ぶ人のために』、pp.1030-1125、2012  
関根清三、「アケダーの真髄を尋ねて－旧約学と哲学の協働－」、『旧約学雑誌』、第10号、89-131頁、2013

##### (3) 書評

『雅歌』ニューセンチュリー聖書注解、ジョン・G.スネイス、竹内裕、『本のひろば』、599号、pp.14-15、2012.6

##### (4) 学会発表

国内、関根清三、「アケダーの真髄を尋ねて－旧約学と哲学の協働－」、日本旧約学会、東京大学文学部、2012.11.3  
国際、SEKINE, Seizo、「Philosophical Inquiries into Religions」、XXIII World Congress of Philosophy, Athens, Greece、2013.8.5

##### (5) 総説・総合報告

関根清三、「東日本大地震の問い掛けたもの 哲学・倫理学の視点から」、『東京都立西高等学校同窓会会報』、46号、pp.16-17、2012.5

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

「命についての考え方 キリスト教を基点として」(2011.12.17、東京大学エグゼクティブ・プログラム講義)

「命についての考え方 キリスト教を基点として」(2012.7.14、アスペン・エグゼクティブ・セミナー懇話)

「イサク献供の謎」(2012.11.18、キリスト教講演会、大森いずみ教会)

「2人の先生と3つまたは4つの道徳」(2012.12.17、光村図書出版)

「アスペン・セミナーの狙いについて」(2014.3.9、第13回ワークショップ)

「哲学的に宗教を問う」(2014.3.15、青山学院大学「哲学と宗教の対話」研究会)

#### (2) 学会

日本倫理学会、評議員、1995～

日本基督教学会、理事、2005～

日本旧約学会、会長、2010～14

#### (3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

和辻哲郎文化賞選考委員、2003年～

日本アスペン研究所理事、2013年～

教授 **菅野 覚明**

KANNO, Kakumyo

### 1. 略歴

- 1979年3月 東京大学文学部倫理学科卒業
- 1981年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(倫理学)
- 1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学(～1985年3月)
- 1986年4月 東京大学文学部助手(～1991年3月)
- 1991年4月 東京大学文学部助教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2005年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(～2013年3月)
- 2013年4月 皇學館大学教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

倫理学原理論・日本倫理思想史

#### b 研究課題

日本思想の倫理学的考察

#### c 主要業績

##### (1) 著書

単著、『吉本隆明—詩人の叡智』、講談社、2013.2

##### (2) 解説

「差異を窮める」、一般雑誌、『本』、37巻5号、2012.5

「園芸術の極意」、一般雑誌、月刊『武道』、547号、2012.5

「修行者の寿命」、一般雑誌、『本』、37巻7号、2012.7

「坐れば何がわかるのか」、一般雑誌、『本』、37巻9号、2012.9

(3) 啓蒙

「教育勅語に学ぶ」、一般雑誌、月刊『武道』、546号、547号、2012.4、2012.5

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

陸上自衛隊幹部学校非常勤講師

海上自衛隊幹部学校非常勤講師

海上自衛隊幹部候補生学校非常勤講師

関東管区警察学校外部講師（非常勤）

警察大学校外部講師（非常勤）

(2) 学会

日本神道史学会、2002～

鈴屋学会、1991～

教授

**熊野 純彦**

KUMANO, Sumihiko

### 1. 略歴

1981年 3月 東京大学文学部第1類（文化学類・倫理学専修）卒業（文学士）  
1983年 3月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程終了（文学修士）  
1983年 4月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程進学  
1986年 3月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学  
1986年 4月 跡見学園女子大学文学部非常勤講師 ～1989年 3月  
1987年 4月 日本学術振興会特別研究員 ～1989年 3月  
1989年 4月 専修大学文学部非常勤講師 ～1990年 3月  
1990年 4月 北海道大学文学部哲学科倫理学講座助教授  
1995年 4月 北海道大学文学部人文科学科倫理学講座助教授（学部改組による）  
1996年 10月 東北大学文学部哲学科倫理学講座助教授  
1997年 4月 東北大学文学部人文社会科学科哲学講座助教授（学部改組による）  
2000年 4月 東北大学大学院文学研究科哲学講座助教授（大学院重点化による）  
2000年 10月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
2007年 10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

### 2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論、近現代西欧倫理思想

b 研究課題

倫理学的諸概念の哲学的考察

c 主要業績

(1) 著書

編著、熊野純彦、『西洋哲学史 IV』、講談社、2012

共著、熊野純彦、『西洋哲学史 III』、講談社、2012

単著、熊野純彦、『マルクス 資本論の思考』、せりか書房、2013

## (2) 論文

- 熊野純彦、「マルクスをどう読むか」、『立命館哲学』、23、1-38 頁、2012  
熊野純彦、「未来への懐旧、異郷への郷愁」、『フランス哲学・思想研究』、17、21-30 頁、2012  
熊野純彦、「模倣と反復」、『季刊 日本思想史』、80、128-152 頁、2012  
熊野純彦、「研究ノート 哲学的テキストの翻訳によせて」、『れにくさ』、5-2、72-82 頁、2014

## (3) 解説

- 熊野純彦、「人文学の現状と未来・私見」、『人文学と制度』、171-180 頁、2013  
熊野純彦、「解説にかえて——中野敏男という意志」、『マックス・ウェーバーと現代・増補版』、341-357 頁、2013  
熊野純彦、「デュナミスという存在の次元」、『アリストテレス全集』、2、1-4 頁、2013  
熊野純彦、「いく度かのすれ違いの果てに——ハイデガーとの出会いについて」、『図書』、2014、10-13 頁、2014  
熊野純彦、「精神のエネルギー——思考のつむぐ夢」、『ベルクソン全集』付録、月報 5、6-9 頁、2014

## (4) 啓蒙

- 熊野純彦、「時間と永遠——時のあいだを生きること、時の流れを超えて考えること」、『学園通信』、101、3-15 頁、2012  
熊野純彦、「大人とは、遙かにおい思いをいただく存在である」、『子どもの難問』、17-19 頁、2013  
熊野純彦、「じぶんらしさはときに無責任で、不自由なもの」、『子どもの難問』、116-118 頁、2013

## (5) 翻訳

- 個人訳、I. Kant、「Kritik der reinen Vernunft」、『純粋理性批判』、作品社、2012  
個人訳、I. Kant、「Kritik der praktischen Vernunft」、『実践理性批判』、作品社、2013  
個人訳、M. ハイデガー、「Sein und Zeit」、『存在と時間』、岩波書店、2013

教授 **頼住 光子** YORIZUMI, Mitsuko

## 1. 略歴

- |         |   |
|---------|---|
| 1984年3月 | お茶の水女子大学文教育学部哲学科 卒業（倫理学専攻）                                  |
| 1984年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（倫理学専門課程）                               |
| 1986年3月 | 同 修了  |
| 1986年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学（倫理学専門課程）                               |
| 1991年3月 | 同 単位取得退学  |
| 1991年4月 | 山口大学人文学部日本思想史学講座専任講師  |
| 1994年3月 | 東京大学大学院人文科学研究科において博士号（文学）を取得                                |
| 1995年7月 | 山口大学人文学部日本思想史学 助教授  |
| 1996年4月 | お茶の水女子大学文教育学部哲学科助教授（倫理学専攻）                                  |
| 2007年4月 | お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授（比較社会文化学専攻思想文化学コース）<br>（改組に伴う配置換え） |
| 2011年1月 | 同 教授  |
| 2013年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科教授   |

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

倫理学原理論・日本倫理思想史・比較思想

### b 研究課題

日本思想の倫理学的考察

### c 主要業績

#### (1) 論文

Mitsuko YORIZUMI, “Tradition of Japanese Zen Meditation”, “Buddhist Meditation: Texts, Tradition and Practice”, 2012

頼住光子, 「道元と西洋哲学 — 「エアアイグニス」と性起の間」, 『大法輪』2月号, 2012.2

Mitsuko YORIZUMI, “A Study on a Buddhist Idea of Food Consumption”, 『比較日本学教育研究センター研究年報』第8号, 2012.3

頼住光子, 「日本仏教における中世と近世 — 「修行」から「修養」へ—」, 『人文科学研究』第9巻, 2013.3

頼住光子, 「武士の思想に関する一考察 — 仏教との関係を手がかりとして—」, 『倫理学紀要』第21輯, 東京大学文学部倫理学研究室, 2014.3

#### (2) 書評

辻口雄一郎, 『正法眼蔵の思想的研究』, 『比較思想研究第39号』, 2013.3

#### (3) 解説

頼住光子, 「解説 井筒俊彦と禅仏教の思想」, 井筒俊彦『禅仏教の哲学にむけて』(ぶねうま舎), 184-191頁, 2014.1

#### (4) 学会発表

国内, 頼住光子, 「仏教と倫理—盤珪をてがかりとして」, 比較思想学会研究例会, 2012.2.24

国内, 頼住光子, 「「ただ念仏して」で本当にいいのか? 道元と親鸞の「仏性」観をめぐる比較思想研究をふまえて」, 無住住忌, 2012.12.25

#### (5) 啓蒙

頼住光子, 「瑩山」, 『古寺をめぐる心の法話 總持寺江川辰三』, 2012.4

頼住光子, 「道元をかえた老典座との出会い」, 『別冊太陽 日本の心 197 道元』, 2012.7

頼住光子, 「道元の生死観」, 『別冊太陽 日本のこころ 197 道元』, 2012.7

頼住光子, 「『正法眼蔵』は何を語っているのか」, 『人間会議』冬号 2012年 特集: 禅を日常に生かす, 2012.12

#### (6) 予稿・会議録

国内会議, 頼住光子, シンポジウム「和辻哲郎と比較思想」趣旨説明, 2012.6.23

#### (7) 会議主催(チェア他)

国内, 「比較思想学会第39回大会」, 主催, 2012.6.23

国内, 「比較思想学会シンポジウム」, チェア, 和辻哲郎と比較思想, 2012.6.23

国内, 「日本倫理学会第63回大会」, その他, 主題別討議『仏教思想の倫理的可能性』, 2012.10.13

国内, 「比較思想学会第40回大会」, チェア, 比較思想の新たな射程 第二セッション, 2013.6.15~2013.6.16

#### (8) マスコミ

「道元に学ぶ生き方」上, 『東京新聞』・『中日新聞』他, 2013.2.2

「道元に学ぶ生き方」下, 『東京新聞』・『中日新聞』他, 2013.2.9

#### (9) 教科書

『仏教と儒教—日本人の心を形成してきたもの—』第7章近世・近代の仏教, 第8章仏教と日本文化, (放送教材と印刷教材), 頼住光子, 執筆, 放送大学教育振興会, 2013

#### (10) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金, 頼住光子, 研究代表者, 「大乘仏教思想史における道元思想の意義の解明」, 2013~

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

非常勤講師, 法政大学文学部, 「日本思想史1、2」, 2012.4~2013.3

非常勤講師, 朝日カルチャーセンター, 「親鸞『教行信証』を読む」, 2012.4~2013.9

特別講演, 埼玉県道徳長期研修報告会, 「道元の思想」, 2013.1~

非常勤講師, 朝日カルチャーセンター新宿校, 「道元『正法眼蔵』を読む」, 2013.4~2014.3

非常勤講師, 九州大学, 「日本仏教の思想」, 2013.7~

特別講演, 第693回『仏教文化講座』, 「道元に学ぶ」, 2013.8~

特別講演, 浄土宗長野教区第71回教学普通講習会, 「『選択本願念仏集』の思想構造の探求」, 2013.8~

特別講演, 曹洞宗北信越管区教化センター布教師研修会, 「道元の出発点としての無常」, 2013.10~

特別講演, 曹洞宗北信越管区教化センター布教師研修会, 「道元における仏性」, 2013.10~

非常勤講師、九州大学、『教行信証』の思想」、2013.12～

特別講演、日本哲学史フォーラム、「道元の思想—「現成公案」巻読解をてがかりとして—」、2013.12～

特別講演、埼玉県道徳長期研修報告会、「良寛の詩と思想」、2014.1～

(2) 学会

国内、日本倫理学会、評議員、2011～

国内、比較思想学会、理事、企画運営委員（総務委員）、編集委員 2012～

国内、日本仏教総合研究学会評議員、2005～

国内、地球システム・倫理学会理事、2006～

国内、実存思想協会、評議員、編集委員、2013～

## 06 宗教学宗教学史学

教授 島蘭 進 SHIMAZONO, Susumu

### 1. 略歴

- 1972年3月 東京大学文学部宗教学宗教学史学科（文学士）  
1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（宗教学宗教学史学）  
1974年4月 東京大学博士課程単位取得退学（同上）  
1974年4月 日本学術振興会奨励研究員  
1977年4月 筑波大学哲学思想学系研究員（文部技官）  
1981年4月 東京外国語大学外国語学部日本語学科助手（のち専任講師、助教授に昇進）  
1984年8月 カリフォルニア大学バークレイ校留学（フルブライト奨学金）～85年7月  
1987年4月 東京大学文学部宗教学宗教学史学科助教授  
1994年1月 東京大学文学部宗教学宗教学史学科教授  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授  
1996年3月 シカゴ大学宗教学部客員教授 ～96年5月  
1997年11月 フランス社会科学高等研究員招聘教授 ～97年12月  
2000年6月 テュービンゲン大学日本文化研究所客員教授 ～00年7月  
2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター創生部門（死生学）教授（兼任）  
2006年2月 カイロ大学文学部客員教授 ～06年4月  
2011年3月 ベネチア・カフォスカリ大学客員教授  
2013年3月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 定年退職

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野 b 研究課題

- (1) 死生学の諸問題について考察している。①死生観、死生学という概念・学知の歴史、②日本人の死生観と宗教の関わり、③生命倫理と人間の尊厳をめぐる諸問題、④死生学の方法論的・理論的枠組み、など。21世紀COEプログラム「死生学の構築」の拠点リーダーとして、新たに興隆しつつある死生学の基礎づくりが重要な仕事になってきている。
- (2) 近代日本の宗教の歴史を総体としてとらえ、現代日本人の生活や思考において、宗教がどのような位置を占めているかを明らかにしようとしている。明治維新以降、また第二次世界大戦後の日本の宗教史を理解する鍵概念として「国家神道」があるが、この概念の意味するものを正確にとらえることを目標としている。
- (3) 現代世界の中で宗教はどのように多様な形をとって広がっているかを調査研究を踏まえて研究し、現代人の精神状況について考察してきている。発展途上地域でのファンダメンタリズムを含めた救済宗教的な復興運動の強力な展開、先進国での従来の「宗教」という語に収まらないようなスピリチュアルなものへの関心の拡充などを統合的に理解することを目指している。
- (4) 一九世紀から二〇世紀のはじめに確立してくる有力な宗教理論の意義について検討し、新たな宗教理論の可能性について考察する。これに関わって、(1)(2)のどちらの問題にも関わるが、そもそも「宗教」という概念がどのような背景をもったものであり、どれほど適切なものであるかを検討するという課題についても研究を進めている。

#### c 主要業績

##### (1) 著書

- 島蘭進、『日本人の死生観を読む』、朝日新聞出版、2012  
島蘭進、『現代宗教とスピリチュアリティ』、弘文堂、2012  
島蘭進、『つくられた放射線「安全」論』、河出書房新社、2013  
島蘭進、『日本仏教の社会倫理』、岩波書店、2013  
島蘭進、『倫理良書を読む』、弘文堂、2014

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学会

日本宗教学会、日本印度学仏教学会、日本生命倫理学会、日本文化人類学会、日本社会学会、日本スピリチュアルケア学会、地球システム倫理学会、日本人体科学会、「宗教と社会」学会、宗教倫理学会などに所属している。

#### (2) 日本学術会議会員

哲学委員会に所属し、2012年初めから第1部の「福島原発災害後の科学と社会とあり方を問う分科会」のまとめ役を務めている。

#### (3) その他

日本宗教学会常務理事、日本生命倫理学会理事、日本スピリチュアルケア学会副理事長、地球システム倫理学会理事、日本人体科学会監事、宗教者災害支援連絡会代表、国際宗教研究所所長、原子力市民委員会委員などを務めている。

教授 鶴岡 賀雄

TSURUOKA, Yoshio

### 1. 略歴

1976年3月	東京大学文学部宗教学・宗教史学科卒業
1979年3月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専門課程修士課程修了
1980年10月	パリ第IV大学歴史学部留学（フランス政府給費留学生）～1981年9月
1982年3月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専門課程博士課程単位取得退学
1982年4月	日本学術振興会奨励研究員（～1983年3月）
1984年4月	東京大学文学部助手
1985年4月	工学院大学工学部専任講師
1987年4月	工学院大学工学部助教授
1996年4月	工学院大学工学部教授
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2001年10月	東京大学より博士（文学）の学位取得
2002年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

宗教学、西洋宗教思想

#### b 研究課題

- (1) 近世西欧（とくにスペインとフランス）における神秘思想の研究を一貫して続けている。中世後期から現代にいたる西欧の宗教思想の展開を、広い視点で見通す研究を目指している。
- (2) 上の研究課題の鍵語である「神秘主義」という概念、およびその実質的内容について、近現代（19世紀末～20世紀の西欧と日本）における歴史的形成過程およびその意義についての研究を進めている。
- (3) これら宗教思想史的研究の成果に基づいて、現代世界における「宗教」なるものの存在意義についての考察を進めている。

#### c 主要業績

##### (1) 著書

共編著、『世界宗教百科事典』、丸善、2012.12

##### (2) 論文

鶴岡賀雄、「アビラのテレジアの「神秘経験」における主体性の諸位相」、『東西宗教研究』、12、68-113頁、2013

鶴岡賀雄、「スピリチュアル・ケアとしてのターミナル・ケア——「宗教史」からの観点」、『死生学年報 2013 生と死とその後』、149-165 頁、2013.3

鶴岡賀雄、「アビラのテレジアの「身心変容」の諸相——「内感」とその行方」、『身心変容技法研究』、2、20-28 頁、2013.3

鶴岡賀雄、「現代（宗教）思想の条件——ミシェル・ド・セルトーの試みに即して」、『共生学』、8 号、78-96 頁、2014.2

鶴岡賀雄、「「神秘主義」の再定義の可能性」、『月本昭男先生退職記念献呈論文集』、第一巻、84-99 頁、2014.3

(3) 学会発表

国内、鶴岡賀雄、「アビラのテレジアの「神秘経験」における主体性の諸位相」、東西宗教交流学会学術大会、花園大学、2012.9.4

国内、鶴岡賀雄、「宗教研究における制度と知」、日本宗教学会第 72 回学術大会、國學院大學、2013.9.8

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、鶴岡賀雄、Tsuruoka Yoshio、分担者(代表者は東大外)、「身心変容技法の比較宗教学——心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」、2012～

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、早稲田大学文化構想学部、現代人間論系演習、2013.4～2013.9

非常勤講師、慶應義塾大学大学院文学研究科・文学部、哲学・倫理学特殊講義、2013.4～2014.3

(2) 学会

国内、日本宗教学会・常務理事、東西宗教交流学会・理事、新プラトン主義協会・理事、宗教哲学会・理事、等

教授 市川 裕

ICHIKAWA, Hiroshi

### 1. 略歴

1976 年 3 月 東京大学法学部卒業（法学士）  
1978 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（宗教学・宗教史学）  
1982 年 7 月 ヘブライ大学（エルサレム）人文学部タルムード学科特別生等（1985.7.）  
1986 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学  
1986 年 5 月 筑波大学哲学・思想系文部技官（～1990.8.）同講師（～1991.3.）  
1991 年 4 月 東京大学文学部助教授  
2004 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授 現在に至る  
1998 年 10 月～11 月 ボストン大学人文学部客員研究員

### 2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史学・ユダヤ教

b 研究課題

継続して以下の 3 つの主要な課題に取り組み、成果は講義、講演、論文において主として反映させているが、1 番と 3 番に関係する課題が幸いにも 2013 年より科学研究費の課題として採択された。

(1) 宗教的想像力の比較宗教学の構想：聖書とタルムードの宗教を基盤とするユダヤ教の宗教思想の特徴を、自由の精神の意義に重点を置いて宗教と法の基礎理論を構築し、これをモデルにして、他の古典的宗教との比較考察を行う。

- (2) イエス時代のユダヤ人社会に関する宗教史的研究：「旧約時代・中間時代・新約時代」という歴史分割をせずに、ヘレニズム・ローマの影響下における古代地中海世界の宗教として、ユダヤ宗教文化の特徴を把握する試みを行う。
- (3) 宗教学の観点から近現代を見直す作業：近代に遭遇したユダヤ教の葛藤と変容を研究の出発点として、近代の人間観、世界観を形成した啓蒙主義とロマン主義の今日的意義を考察し、現代世界の喫緊の課題の淵源とその解決のための枠組みを提示し、もって日本の近代の理念を再検討する。

### c 主要業績

#### (1) 論文

- 市川裕、「I. 世界の宗教潮流 5. ユダヤ教」、『宗教の事典』山折哲雄監修、朝倉書店、129-55 頁、2012.10
- 市川裕、『『超越のことば』—自我滅却の哲学のゆくえ』『井筒俊彦とイスラーム—回想と書評』、坂本勉・松原秀一編、慶應義塾大学出版会、415-24 頁、2012.10
- 市川裕、「ユダヤ教正統主義から考える現代の国家・宗教関係」、『東京大学宗教学年報』、XXX (特別号)、89-101 頁、2013.3

#### (2) 編集、監修

- 『宗教の事典』山折哲雄監修、共編、朝倉書店、2012.10
- 『Pen Books ユダヤとは何か。—聖地エルサレムへ—』市川裕監修、阪急コミュニケーションズ、2012.12
- 『世界宗教百科事典』、「第I部 宗教篇 2. ユダヤ教」編集担当、丸善出版、23-43 頁、2012.12
- 『世界の宗教といかに向き合うか 月本昭男先生退職記念献呈論文集第1巻』市川裕編、聖公会出版、2014.3
- BBC『サイモン・シャーマのユダヤ人の物語』全5巻、日本語字幕版監修、丸善、2014.3

#### (3) 書評、新刊紹介

- 鶴見太郎著、『ロシア・シオニズムの想像力—ユダヤ人・帝国・パレスチナ—』、東京大学出版会、『ユダヤ・イスラエル研究 第26号』、日本ユダヤ学会、96-100 頁、2012.10
- F.G.ヒュッテンマイスター、H.ブレードホルン著『古代のシナゴグ』山野貴彦訳、2012.6 教文館、『本の広場』、2012.10
- ジョンサン・マゴネット著、小林洋一訳、『ラビの聖書解釈—ユダヤ教とキリスト教の対話—』、新教出版社 2012、『ユダヤ・イスラエル研究 第27号』、日本ユダヤ学会、2013.10

#### (4) 講演・学会発表

- 「一九世紀東欧ユダヤ教の危機とハラハー的伝統の革新」、パネル『伝統の危機とユダヤ教—築きあげたものが壊れるとき—』、日本宗教学会第71回学術大会、於皇学館大学、2012.9.9 (要旨は『宗教研究375』学術大会紀要号に掲載)
- 招待講演、慶應義塾大学言語文化研究所公開講座「井筒俊彦とユダヤ思想—哲学者マイモニデスをめぐって—」、慶應義塾大学三田キャンパス、2013.10.12
- 招待講演、平成25年度 味の素の文化フォーラム「宗教と食」、「ユダヤ教」、於味の素グループ高輪研究センター、2013.6.15

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、立教大学大学院キリスト教学研究科、「聖書学演習(旧約)」、2012.4~2013.3, 2013.10~2014.3
- 非常勤講師、東京芸術大学音楽学部、「宗教学」、2012.7~2012.9, 2013.7~2013.9
- 非常勤講師、慶應義塾大学文学部、「哲学倫理学特殊II」、2012.4~2013.3
- 非常勤講師、東京女子大学、「キリスト教と諸宗教B」、2013.4~2013.9

#### (2) 学会関係

- 日本宗教学会(理事)、日本ユダヤ学会(理事長)、日本聖書学研究所(役員)、日本オリエント学会、日本法哲学会、京都ユダヤ思想学会

## 1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部 I 類宗教学宗教学史学専門課程卒業  
1982年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻修士課程入学  
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻修士課程修了  
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻博士課程進学  
1987年9月 ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程（カナダ・ヴァンクーバー）入学  
1990年8月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻博士課程退学  
1990年8月 筑波大学地域研究研究科文部技官、哲学思想学系準研究員就任  
1993年4月 筑波大学地域研究研究科（哲学思想学系）助手昇進  
1994年5月 ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程修了  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系大学院宗教学宗教学史学研究室助教教授転任

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

中国古代宗教研究、祖先崇拜研究、死生観研究

死者儀礼・祖先崇拜といわれる宗教現象を比較文化的視点から考察することを主たる目的とし、そのための基盤となる研究対象を中国古代に設定する。この問題関心は三層に分けることができ、まず、(A) 古代中国の死ならびに死者（祖先）に対する観念と儀礼の背後にある宗教的宇宙観と救済論を明らかにし、(B) それを通して死ならびに死者にかかわる宗教現象の普遍的構造とメカニズムを理論化し、(C) 更にそこから凡そ人間にとって死と死者が有する意味について、現代における状況を視野に含めて、考えることを目指している。

### b 研究課題

具体的な研究課題は以下のように区分できる。

まず中国古代における祖先崇拜の研究（上記(A)）にかかわる分野として

- (1) 中国の殷周春秋時代の宗教現象を出土文字資料（甲骨・金文）を用いて分析し、その意味を考える。
- (2) 戦国・秦・漢時代の出土文字資料（簡牘・帛書・鎮墓文・画像石）を用いて、殷周時代の祖先崇拜が戦国時代以降の死生観と他界観に変化していく様態を明らかにする。
- (3) 殷周～隋唐時代における祖先崇拜・死者儀礼・他界観を全体的な宗教的宇宙観の中に位置づけることにより、“死者であること（死者性）”の基本的な在り方と変化を把握する。
- (4) 儒家を中心とする諸典籍を資料として用い、殷周時代の祖先崇拜に内在していた世界観が「孝」として思想的に昇華され、それが中国の基本的価値観・人間観の一つとなったことを考察する。

祖先崇拜の比較研究（上記(B)）の分野として

- (5) 中国古代の祖先崇拜と「孝」思想の分析によって得られた洞察を出発点として、祖先崇拜という宗教現象を比較文化的視点から検討する視座を用意する。
- (6) 世界中の諸文化に現れる祖先崇拜を具体的に検討することによって、祖先崇拜の本質的意味と可変性を明らかにする比較研究を行う。

死生観と死者性に関する研究（上記(C)）として

- (7) 諸宗教の死に関する儀礼や考えが表明している人間観や価値観は何であるのかを抽象化し、比較研究を行った上で、
- (8) それを現代における死の状況や生命倫理と対照させ、現代の状況を客観的・批判的に捉える視座を用意する。

この内、(1) (2) (4) (5) は従来からの問題関心であるが、2001年度発刊の著書の中で系統的に見解を述べることができ、かなりの成果を挙げえた。(3)はその問題関心から派生してきた課題であり、現在最も中心的な活動になっている。また、この期間の研究の進展に伴い、上記(7) (8) という研究課題が次第に関心の中心を占めるようになってきている。

### c 主要業績

#### (1) 論文

池澤優、「儀礼」犠牲饋食の祖先祭祀」、市川裕編『世界の宗教といかに向き合うか 月本昭男先生退職記念献呈論文集』第一巻、聖公会出版、2014年3月19日、180～203頁

池澤優、「中国出土資料と宗教研究—公蠶と禹の治水神話を中心に—」、中国社会科学院歴史研究所・財団法人東方学会編『中国新出土資料の展開』、汲古書院、2013.8

(2) 学会発表

国内、池澤優、「生命倫理と伝統的文化—中国における知情同意に関する論争を題材に—」、日本生命倫理学会第二五回年次大会大会長講演、2013.11.30

(3) 会議主催(チェア他)

国内、「日本生命倫理学会第二五回年次大会」、東京大学、2013.11.30～2013.12.1

国内、「日本生命倫理学会第二五回年次大会シンポジウム「日本人の生命観と生命倫理」、チェア、東京大学、2013.11.30

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

國學院大學非常勤講師、2004.4～

(2) 学会

日本宗教学会、理事。中國出土資料學會、理事。東方学会、評議員。

(3) 行政

東京大学医学部倫理委員会委員、東京大学医学部附属病院臨床試験審査委員会委員、東京大学医学部附属病院法的脳死判定委員会委員。

准教授 藤原 聖子

FUJIWARA, Satoko

### 1. 略歴

1986年3月	東京大学文学部宗教学宗教史学専門課程 卒業
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 入学
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 修了
1988年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程 進学
1991年9月	シカゴ大学大学院ディヴィニティ・スクール宗教史専攻留学(至1994年6月)
1995年12月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程単位取得退学
1996年1月	日本学術振興会特別研究員(至1998年12月)
2001年4月	大正大学文学部国際文化学科助教授
2006年4月	大正大学文学部表現文化学科教授
2010年4月	大正大学文学部人文学科教授
2011年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

宗教学(理論研究・比較研究)、宗教と教育の関係、アメリカの宗教

宗教学の基礎でありながら、20世紀後半以降、方法として成立し難くなった「比較」に注目し、その観点から、理論研究を行うとともに、ケーススタディとして宗教と教育の関係やアメリカの諸宗教を分析している。

#### b 研究課題

宗教比較の方法、宗教史の記述について、学界ならびに一般社会に見られる問題とその背景・原因を洗い出し、具体的対案を提示することを課題とする。個々の課題設定は以下の通りである。

(1) 比較理論の検討として、①欧米宗教学の変遷、②宗教分類概念の問題をとりあげる。

- ① 「比較宗教学 comparative religion」から出発した欧米の宗教学とその基礎前提が、その後通時的・実証的研究を重視することによってどのように変化したか、また、1970年代前後には共時的研究である構造主義をどのように受容したかを調べる。人文的宗教学と社会科学的宗教学の制度的位置関係についても、その歴史的変遷過程を明らかにし、その中での国際学会の役割を批判的に検討する。
- ② 「世界宗教」「民族宗教」の対概念をはじめ、宗教学で伝統的に用いられてきた宗教分類概念の妥当性を、昨今の批判理論に照らして検討する。特にマックス・ウェーバーの宗教社会学（「世界宗教の経済倫理」）の受容が、日本とアメリカの宗教学でどのように異なるかに焦点を当て、何がその違いをもたしたのか、それが今日の両国の学界・社会におけるマクロな宗教比較言説をどう規定しているかを調べる。
- (2) 近現代社会の公教育において宗教がどう扱われてきたかに関する歴史的研究を行う。  
ある国の公教育では宗教が排除される、他の国では宗教が取り込まれるという現象を、単に「宗教教育の有無」や「政教分離の有無」として見るのではなく、排除・吸収どちらの場合でもその前提として公権力により「宗教」が定義されているということに注目し、各国の教育制度と法令・教科書の中にその表れを探る。一般概念としての「宗教」のみならず、キリスト教、仏教といった各宗教に関する記述と、教育方法・思想や当該国の宗教・社会情勢の関係を調べる。対象国はイギリスとアメリカを中心とし、共同研究による10カ国比較の成果も取り入れる。
- (3) (2)の研究成果を踏まえ、国内の公教育における宗教の描き方・教え方に関する問題点を指摘し、改善のための具体的方策を示す。対象は中等教育から高等教育、社会人教育を含む。

### c 主要業績

#### (1) 著書

編著、山中弘・藤原聖子、『世界は宗教とこうしてつきあっている—社会人の宗教リテラシー入門—』、弘文堂、(編集の他、1-101+i-vii 頁を執筆)、2013.12

#### (2) 論文

藤原聖子、「「コギト」の構造主義?—ジョナサン・Z・スミスと北米宗教学—」、『東京大学宗教学年報』29、1-16 頁、2012.3

藤原聖子、「カナダ」、『海外の宗教事情に関する調査報告書』、46-68 頁、2012.3

藤原聖子、「大震災は〈神義論〉を引き起こしたか」、『現代宗教 2012』、49-67 頁、2012.7

藤原聖子、「アメリカにおける人文系宗教学の制度的位置—「神話と儀礼」としての「宗教」概念の由来—」、『東京大学宗教学年報』30 特別号、103-124 頁、2013.3

Satoko Fujiwara, "Reconsidering the concept of theodicy in the context of the post-2011 Japanese earthquake and tsunami," *Religion*, 43/4, pp.499-518, 2013.4

藤原聖子、「岐路に立つ国際宗教学会—学会誌の分析から—」『世界の宗教といかに向き合うか (月本昭男先生退職記念献呈論文集 第1巻)』、301-316 頁、2014.3

#### (3) 書評

「高橋典史・塚田徳高・岡本亮輔編『宗教と社会のフロンティア』」、『宗教研究』376、223-238 頁、2013.6

"Inken Prohl and John Nelson eds., *Handbook of Contemporary Japanese Religions*," *Religious Studies in Japan*, Vol.2, pp.53-58, 2014.1

#### (4) 学会発表

国際、Satoko Fujiwara, "'Geertz vs. Asad' in RE textbooks: A Comparison between Warwick's Ethnographical Textbooks and Indonesian Textbooks," European Association for the Study of Religion, Stockholm, Sweden, 2012.8.25

国際、Satoko Fujiwara, "Why RE in Japan?," RE 21 Conference, University College Cork, Ireland, 2013.8.29

国内、藤原聖子、「国際学会誌の「宗教学」なるもの」、日本宗教学会、國學院大學、2013.9.8

#### (5) 教科書

『高校倫理』、矢内光一編、執筆、実教出版、2013

#### (6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 C、藤原聖子、研究代表者、「ポスト多文化主義における公教育と宗教の関係」、2012~2014

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、大正大学、「宗教学特論」、2011.9~

- (2) 学会  
 国際、International Association for the History of Religions、executive committee、2010.8～  
 国内、日本宗教学会、理事、2011.4～
- (3) 日本学術会議  
 連携会員、2011.10～
- (4) 学術雑誌編集委員  
 Journal of Religion in Japan (2012～)、Religion and Education (2011～)、Numen (2010～)  
 British Journal of Religious Education (2006～)、Teaching Theology and Religion (2006～)
- (5) その他  
 文化庁宗務課「宗教法人制度の運用等に関する調査研究協力者会議」への協力、2013

准教授 **西村 明** NISHIMURA, Akira

## 1. 略歴

- 1997年3月 東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教史学専修課程 卒業
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程 入学
- 1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程 修了
- 1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程 進学
- 2001年4月 日本学術振興会特別研究員 DC2 (東京大学、至2003年3月)
- 2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程  
単位取得退学
- 2003年4月 日本学術振興会特別研究員 PD (九州大学、至2004年3月)
- 2004年4月 鹿児島大学法文学部人文学科助教授
- 2007年4月 鹿児島大学法文学部人文学科准教授
- 2012年9月 ハワイ大学マノア校歴史学科客員研究員・米国国務省東西センター太平洋諸島開発プログラム  
客員研究員 (フルブライト奨学金研究員プログラム、至2013年2月)
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

宗教史学・宗教人類学・宗教民俗学、慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化

主な研究活動は大きく以下の3つのテーマ群についてである。

(A)戦争や災害による犠牲者に対する態度、(B)現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性、(C)島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触

### b 研究課題

具体的な研究課題は以下のとおりである。

#### (1) 「(A) 戦争や災害による犠牲者に対する態度」に関わる研究

遺骨収集・戦地慰霊において、遺族や戦友といった戦死者を取り巻く直接的関係者ばかりではなく、宗教者・旅行者・行政といった第三者がどのように関与するかをめぐる問題と、次世代へどのように継承されようとしているかをめぐる問題について調査・考察を行っている。その際、日本人による遺骨収集や戦地慰霊の状況と米豪や太平洋諸島の状況との国際比較、次世代継承に関する宗教体験の伝承や宗教組織の継承などとの比較、戦地慰霊に関する聖地巡礼との比較を行っている。

(2) 「(B)近現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性」に関わる研究

九州をおもなフィールドとして、近現代の地域社会のなかで人びとがどのような信仰実践や宗教的行為を行ったかについて、そうした実践を支える日常生活とともに調査・考察している。とりわけ、民俗社会を基盤とした地域が、戦争や公害、自然災害などの歴史的経験からのレジリエンス（回復力）をどのように発揮しているかということについて、博士論文で取り上げた長崎の原爆慰霊を視野に入れながら考察しようとしている。

(3) 「(C) 島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触」に関わる研究

奄美群島とマイクロネシア地域を主な対象としながら、大航海時代以降のヨーロッパ人のグローバルな移動に端を発する人的な交流の活発化のなかで宗教的接触状況が地域の宗教性のあり方にどのような影響を及ぼしているのかについて比較宗教的な理解を目指している。

**c 主要業績**

(1) 著書

編著、村上興匡・西村明編著、『慰霊の系譜—死者を記憶する共同体—』、森話社、2013.11

共著、鹿児島大学鹿児島環境学研究会編、『鹿児島環境学特別編—地域を照らす交響学—』、南方新社、2013.12

(2) 論文

Akira Nishimura, "The Engagment of Religious Groups in Postwar Battlefield Pilgrimages," *Bulletin of the Nanzan Institute for Religion and Culture*, No.37, pp.42-51, 2013.7

(3) 学会発表

国内、西村明、「隔たりへの感受性—遺骨収集・戦地慰霊への宗教学的アプローチ—」、第32回文化交流茶話会、東京大学文学部第三会議室、2013.6.6

国内、西村明、「トラウマ、ドキュメント、モニュメント—戦地慰霊に向かう元兵士の事例から—」、京都大学人文科学研究所共同研究班「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究」、京都大学人文科学研究所、2013.6.17

国内、西村明、「戦地慰霊をめぐる超宗派的動向—『中外日報』の記事を中心に—」、日本宗教学会第72回学術大会、國學院大學、2013.9.8

国内、西村明、「近代宗教制度報告—戦前期日本の場合—」、国立民族学博物館共同研究「宗教人類学の再創造—滲出する宗教性と現代世界」、国立民族学博物館、2014.3.1

(4) マスコミ

「識者評論」、『高知新聞』ほか、共同通信、2013.8.11

「戦地慰霊と「中外日報」— 等閑視されてきた戦後宗教交流史—」、『中外日報』（論・談）、2013.10.22

「東奔西想1」、『デーリー東北』ほか、共同通信、2014.1.24

「東奔西想2」、『山陽新聞』ほか、共同通信、2014.2.24

「東奔西想3」、『信濃毎日』ほか、共同通信、2014.3.25

(5) 受賞

国内、鹿児島環境学研究会、南日本出版文化賞受賞、南日本新聞、2012.6

**3. 主な社会活動**

(1) 学会

国内、日本宗教学会、評議員、2013.9～

国内、日本宗教学会『宗教研究』編集委員、2013.9～

国内、「宗教と社会」学会、常任委員、2013.6～2015.6

国内、西日本宗教学会、運営委員、2010.7～

国内、西日本宗教学会『西日本宗教研究誌』編集委員、2010.7～

国内、戦争社会学研究会、運営委員、2013.3～

(2) 行政

福岡市史編集委員会民俗専門部会専門委員、2005.7～

鹿児島県「屋久島CO2フリーの島づくりに関する研究会」委員、2013～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

一般財団法人メディポリス医療研究財団シーピーシー治験病院、治験審査委員、2008.4～

国立民族学博物館、共同研究員、2013.10～2017.3

## 07 美学芸術学

教授 渡辺 裕

WATANABE, Hiroshi

### 1. 略歴

- 1972年3月 千葉県立千葉高校卒業
- 1977年3月 東京大学文学部第1類（美学芸術学専修課程）卒業
- 1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美学芸術学）修了
- 1983年7月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（美学芸術学）単位取得退学
- 1983年7月 東京大学文学部助手（美学芸術学）
- 1986年4月 玉川大学文学部専任講師（芸術学科）
- 1991年4月 玉川大学文学部助教授
- 1992年4月 大阪大学文学部助教授（音楽学）
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美学芸術学）
- 2001年7月 博士（文学）学位取得（東京大学）
- 2002年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

聴覚文化論、音楽社会史

#### b 研究課題

1. 音の文化の伝承、受容、流用にかかわるプロセスとメカニズムの歴史研究による解明。これまで、音楽を「文化」として捉えるという観点から、西洋芸術音楽の「近代化」とテクノロジー、西洋芸術音楽における演奏伝統の形成とその伝承メカニズム、日本近代の音楽文化におけるメディアや言説といったテーマでの研究を進めてきたが、最近では「音楽」という枠をこえて、「音楽」以外の音も含めた様々な音が形作る「音の文化」の研究を軸に、「感性文化」という観点から、人々の形作ってきた歴史を描き直す試みを行っている。
2. 「聴覚文化」という観点からの日本戦後史の再検討。上記の問題意識をふまえた一種の応用問題として、現在は「1968年」を中心とした日本戦後史を「感性文化」の変化の歴史として捉え直す研究に取り組んでいる。「1968年」は近年、戦後史の転換点となった年として注目されているが、この前後の時期は、政治的な意味での転換点にとどまらず、人々の感性のあり方や志向が大きく変化した時期でもあったのではないだろうか。そのような問題意識をふまえつつ、同時代のドキュメンタリー音源、ドキュメンタリー映像やそれに関わる様々な言説などを主要な題材として、その変化についての分析を進めている。
3. 場所の表象、記憶の生成・変容のメカニズムやそれに関わる多様な文化的コンテクストの相互作用の解明および芸術作品や感性的体験がその過程で果たす役割の考察。作品体験と現実の都市の表象とを媒介する場としての文学散歩、映画のロケ地巡りといった営みの考察、廃墟趣味や路上観察の見直し等の試みを起点に、主に写真や映像による表象の分析を通して、様々な立場や観点がぶつかり合い、また離合集散しつつ変容してゆく場としての文化のありようを捉えることを目指している。

#### c 主要業績

##### (1) 著書

『サウンドとメディアの文化資源学—境界線上の音楽』、春秋社、2013.10、pp.552

##### (2) 論文

“Takarazuka and Japanese Modernity”, in: Hugh de Ferranti and Alison Tokita (eds.), *Music, Modernity and Locality in Prewar Japan: Osaka and Beyond* (SOAS Musicology Series), Surrey: Ashgate Publishing, 2013.9, pp.193-209

##### (3) 学会発表・講演記録等

『オフィシャル』と『アンオフィシャル』とのほざまで—近代日本の音楽文化と音楽教育の死角（第43回日本音楽教育学会大会報告）、『音楽教育学』第42巻第2号、2012.12、pp.15-21

「宝塚と民俗芸能—『日本民俗舞踊シリーズ』をめぐって」（第64回舞踊学会大会報告）、『舞踊学』第36号、2013.12、pp.54-61

(4) 書評・解説

吉見俊哉著『声の資本主義—電話・ラジオ・蓄音機の社会史』（河出文庫版）、同書巻末解説、2012.5、pp.341-345  
根岸一美著『ヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団』（大阪大学出版会）、書評、『美学』第242号、2013.6、pp.179-182

(5) その他の寄稿

「ラジオの文化と『非公式』な担い手たち」、『アステイオン』第76号、2012.5、pp.148-151  
「タイタニック号の音楽—史実とフィクションのはざままで」、『アステイオン』第77号、2012.11、pp.154-157  
「耳で聴いたオリンピック—1964年・聴覚文化の変容」、『アステイオン』第78号、2013.5、pp.206-209  
「日本橋の上に架かる高速道路は『景観破壊』か?」、『アステイオン』第79号、2013.11、pp.108-111  
「『価値』の生み出される現場—『サウンドとメディアの文化資源学—境界線上の音楽』の刊行によせて」、『春秋』2013年11月号、pp.7-10

(6) 学会発表・講演等

「『オフィシャル』と『アンオフィシャル』とのはざままで—近代日本の音楽文化と音楽教育の死角」、第43回日本音楽教育学会大会、基調講演（大会実行委員会企画シンポジウム「音楽教育と音楽文化の〈100年〉、そして〈これから〉」）、東京音楽大学、2012年10月7日  
「宝塚と民俗芸能—『日本民俗舞踊シリーズ』をめぐって」、第64回舞踊学会大会（大会テーマ：宝塚—ピアノで踊る日本舞踊）、基調講演、東京大学、2012年12月1日

(7) 受章

紫綬褒章、2013年5月

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

大学訪問授業「音楽は誰のもの?—文化としての著作権」、桐光学園高等学校、2013年11月9日

(2) 学会

日本音楽学会、会長、2013年4月～  
美学会、委員、2012年4月～  
文化資源学会、理事、2012年4月～2014年6月～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

サントリー文化財団、サントリー学芸賞選考委員、2012年4月～  
企業メセナ協議会、助成認定審査委員、2012年4月～

## 1. 略歴

- 1977年3月 東京教育大学附属高等学校卒業  
1977年4月 東京大学教養学部文科3類入学  
1981年3月 東京大学文学部第一類(美学芸術学専修課程)卒業  
1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)修士課程入学  
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)修士課程修了  
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)博士課程進学  
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)博士課程単位取得退学  
(その間 1987年10月～1988年9月 DAAD(ドイツ学術交流会)奨学生としてハンブルク大学に留学)  
1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士(文学)取得  
1988年10月 神戸大学助教授,文学部(哲学科芸術学専攻課程)  
(その間 1990年10月～1991年8月 ハンブルク大学で研究)  
1993年10月～ 神戸大学大学院文化学(博士課程)兼任  
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科(美学芸術学専門課程)助教授  
2007年4月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)教授  
(その間 2008年10月～2009年9月 ドイツ連邦政府の招聘によりドイツにて研究)

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究、「感性の学」としての美学の歴史的再構成、18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究、および間文化的視点からの美学理論の構築

### b 研究課題

第一に、2001年に公刊した『芸術の逆説—近代美学の成立』以来の研究の一環として、美学・芸術学の基本概念の研究に従事している。その一端は2009年に公刊した『西洋美学史』(東京大学出版会)において示した。この書物は、学説史研究の持ちうる現代的な意味を問う試みでもあり、この研究をその後も継続して行っている。

第二に、「感性の学」としての美学を歴史的に再構成し、現代の美学を刷新する作業に携わっている。これは数年後に『西洋美学史』第二巻として結実するはずのものである。

第三に、昨今の「間文化性」への関心の増大に応じつつ、19世紀末から20世紀前半における日本の西洋美学の受容を「間文化性」の問題として扱う可能性を探る作業を継続している。

### c 主要業績

#### (1) 論文

小田部胤久、「レーヴィットと日本—文化の複層性をめぐる一考察—」、稲賀繁美編『東洋意識—夢想と現実のあいだ』、ミネルヴァ書房、75-100頁、2012

小田部胤久、「ライプニッツからの感性論=美学—微小表象論の射程—」、第62回美学会全国大会「たそがれフォーラム@仙台」発表報告集、2012

Tanehisa Otabe, 'Genius as a Chiasm of the Conscious and Unconscious: A History of Ideas Concerning Kantian Aesthetics', Piero Giordanetti, Riccardo Pozzo, Marco Sgarbi (Eds.), "Kant's Philosophy of the Unconscious", Berlin, De Gruyter, 89-101頁, 2012

Tanehisa Otabe, „Die Kunst des alten Japan im „Weltstrom“. Zur Kulturphilosophie des frühen Tetsuro Watsuji“, Claudia Bickmann (Hg.), „Sinnhorizonte. Weltphilosophien zur Bildbarkeit des Menschen“, 175-190頁, 2012

Tanehisa Otabe, „Der „Grund der Seele“. Über Entstehung und Verlauf eines ästhetischen Diskurses im 18. Jahrhundert“, Proceedings des XXII. Deutschen Kongresses für Philosophie „Welt der Gründe“, Hamburg, Felix Meiner, 763-774頁, 2012

Tanehisa Otabe, „Drei Stufen der Globalisierung im Hinblick auf das Verhältnis zwischen Europa und Japan. Ein Beitrag zur interkulturellen Ästhetik“, Wolfdietrich Schmied-Kowarzik, Helmut Schneider (Hg.), Zwischen den Kulturen, Im Gedenken an Heinz Paetzold, Kassel University Press, 30-43頁, 2012

- 小田部胤久、「ライブニッツからバウムガルテンへ——美的=感性的人間の誕生」、神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編『西洋哲学史IV』、講談社、113-164頁、2012.4
- 小田部胤久、「「無意識」をめぐるヘーゲルとロマン主義——美学（史）の立場から——」、『ヘーゲル哲学研究』、18、46-57頁、2012.12
- 小田部胤久、「美学の生成と無意識——三つの系譜に即して——」、『思想』、2013年4月号、81-96頁、2013
- Otobe, Tanehisa, „Platon und die aesthetische Wende der Aesthetik“, *JTLA*, 37, 2012 頁、2013.3
- 小田部胤久、「肉の軟らかい人々は思考の点で素質に恵まれている——アリストテレスの感性論に寄せて」、『美学芸術学研究』、31、2013.3
- Otobe, Tanehisa, 'Japanese Aesthetics seen from an Inter-Cultural Perspective', "Diversities in Aesthetics: Selected Papers of the 18th Congress of International Aesthetics", 417-428 頁、2013.7

(2) 書評

- 佐藤徹郎・雨宮民雄・佐々木能章・黒崎政男・森一郎、『形而上学の可能性を求めて 山本信の哲学』、『週刊読書人』、2012年12月14日号、4頁、2012.12
- Agnus Nicholls and martin Liebscher (Eds.), 『Thinking the Unconscious. Nineteenth-Century German Thought』、『日本18世紀学会年報』28、2013
- Daniel Heller-Roazen, 『The Inner Touch. Archaeology of a Sensation』、『日本18世紀学会年報』28、2013.6

(3) 学会発表

- 国内、小田部胤久、「ミメーシスとパラダイグマ——美学的一考察——」、日本フランス語フランス文学会2012年度春季大会、東京大学、2012.6.3
- 国際、Tanehisa Otobe, 「On an Aesthetic Consciousness of our Being: Toward a Contextualization of Shusterman's Somaesthetics」、International Congress of Aesthetics、ポーランド、クラクフ、2013.7.24

(4) 会議主催(チェア他)

- 国内、「日本シェリング協会」、チェア、「想像力=構想力」、2013.7.6~2013

(5) 研究テーマ

- 文部科学省科学研究費補助金、小田部胤久、研究代表者、「感性の理論史——美学（史）の再構築のために」、2012~

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 特別講演、日本大学、「感性論としての美学から見た『判断力批判』」、2013.11

(2) 学会

- 国際、国際シェリング協会、委員、2012.4~
- 国内、日本シェリング協会、理事、2012.4~
- 国内、日本18世紀学会、幹事、2012.4~
- 国際、国際18世紀学会、委員、2012.4~
- 国際、Culture and Dialogue、編集委員、2012.4~
- 国際、Allgemeine Zeitschrift fuer Philosophie、編集委員、2012.4~
- 国内、美学会、会長、2013.10~

## 1. 略歴

- 1979年3月 神奈川県立光陵高等学校卒業
- 1980年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
- 1985年3月 東京大学文学部（美学芸術学専修課程）卒業
- 1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）修士課程入学
- 1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）修士課程修了
- 1988年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）博士課程入学
- 1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）博士課程単位取得退学
- 1995年1月 東京大学大学院人文科学研究科において博士（文学）取得
- 1991年9月 広島大学総合科学部講師（地域文化研究）
- 1995年4月 広島大学総合科学部助教授（地域文化研究）
- （その間、1995年7月～1996年4月、文部省在外研究員として、連合王国ロンドン大学、サセックス大学で特別研究員）
- 2002年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授（地域文化研究）
- 2007年4月 東京大学大学院総合文化研究科准教授（地域文化研究）
- 2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（美学芸術学専門課程）
- 2014年2月10日 逝去

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

美学芸術学

### b 研究課題

第一に、観念連合主義や趣味など、近代イギリス経験論美学の歴史研究。その関連で、とりわけピクチャレスクの美学を包括的に扱ってきた。

第二に、イギリス庭園論の歴史研究。特に十八世紀に誕生したイギリス風景式庭園を、その背景の哲学・政治・経済思想などとあわせ、十七世紀および十九世紀から現代にいたる流れを視野に入れ研究した。最近ではコテージ・ガーデンについて、それが十九世紀的産物であることを、詳細に跡付けようとしている。

第三に、以上の歴史的事象の背景にある（広義の）美的イデオロギーの解明。たとえば、近代的イギリス経験論美学の中に残る共和主義的政治性・道徳性を、シヴィック・ヒューマニズムや公共性の視点から記述した。さらにイギリス庭園論や風景論を、いわゆるポスト植民地主義的・ジェンダー論的な観点から相対化した。

第四に、現代美学的関心から、庭園や環境設計、環境美学を、一般的に扱う試みも行っている。特に最近では、日常性の美学の問題を取り上げ、「トランス・エステティック」や世界の審美化の問題を批判的に論じている。またその関連で、ミュージック・ビデオという新しいメディアの可能性に注目し、論じた。

加えて、いまだ緒に就いたばかりだが、十八世紀イギリス美学（庭園論・風景論を含む）にも影響の深い古典主義的なフランス絵画理論の研究を行っている。（以上、『教育・研究年報 11』より）

### c 主要業績

#### (1) 著書

『ももクロの美学——〈わけのわからなさ〉の美学』、廣済堂新書、2014.4

#### (2) 論文

「庭を侵す病——「infection」の映像世界」、『ユリイカ』、2013年5月号

「リチャード・ペイン・ナイト『風景』——解説と翻訳(2)」、『美学芸術学研究』（東京大学・美学芸術学研究室）、31、2013.3

“Instrumentality in the Garden: Aesthetic Reflexions on the Tea-Ceremony Waiting Arbour with the Toilet, katsura Imperial Villa, Kyoto”, in “JTLA” 37, 2013.3

「作庭記 橘俊綱 世界最古の本格的造園理論書」、宇佐見文理・青木孝夫編『芸術理論古典文献アンソロジー』芸術学舎、2014.6（歿後刊）

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

武蔵大学人文学部非常勤講師、2012～

#### (2) 学会

広島芸術学会、2012.4～

東北芸術学会、2012.4～

日本18世紀学会、幹事、2012.4～

美学会、委員、2012.4～

## 08 心理学

教授 **立花 政夫** TACHIBANA, Masao

### 1. 略歴

- 1972年3月 東京大学文学部心理学専修課程卒業（文学士）
- 1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（心理学）修了（文学修士）
- 1975年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（心理学）退学
- 1975年4月 慶応義塾大学大学院医学研究科博士課程（生理学）入学
- 1979年3月 慶応義塾大学大学院医学研究科博士課程修了（医学博士）
- 1979年4月 岡崎国立共同研究機構生理学研究所・助手（生体情報研究系）
- 1979年10月～1981年3月 ハーバード大学医学部（神経生物学）研究員
- 1985年1月～1985年4月 シカゴ大学 Visiting Assistant Professor
- 1985年5月～1985年8月 ノースウェスタン大学 Visiting Associate Professor
- 1988年10月 東京大学文学部助教授（心理学）
- 1994年1月 東京大学文学部教授（心理学）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（心理学）

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

生理心理学

#### b 研究課題

視覚を成立させる神経機構を、細胞レベル・神経回路レベル・行動レベルで神経科学的に研究すること。

#### c 主要業績

##### (1) 論文

Masashi Tanaka and Masao Tachibana, Independent control of reciprocal and lateral inhibition at the axon terminal of retinal bipolar cells, *Journal of Physiology*, 591.16: 3833-3851, 2013.8

##### (2) 学会発表

国内、田中雅史、立花政夫、「キンギョ Mb1 型双極細胞の軸索終末部における局所抑制と側抑制」、視覚科学フォーラム第16回研究会、毛呂山町、埼玉県、2012.8.24

国内、田中雅史、立花政夫、「網膜内層における局所抑制と側抑制による双極細胞の二重制御」、第35回日本神経科学大会、名古屋、2012.9.19

国際、Masashi Tanaka and Masao Tachibana, Independent modulation of bipolar cell outputs by reciprocal and lateral inhibition in the inner retina, The 42nd Annual Society for Neuroscience Meeting, New Orleans, USA, 2012.10.17

国際、Masao Tachibana, Lateral inhibition in the inner retina, Asian Retina Meeting 2012, Hsinchu, Taiwan, 2012.10.27

国際、Masao Tachibana, Retina as an "analogue-to-digital" converter, The 90th Annual Meeting of the Physiological Society of Japan, Tokyo, 2013.3.29

国際、Masao Tachibana, Sophisticated information processing in the retina, Asia-Pacific Conference on Vision 2013, Suzhou, China, 2013.7.7

国内、立花政夫、「網膜はどのような視覚情報をどのように脳に送っているのか?」、視覚科学フォーラム第17回研究会、滋賀県草津市、2013.8.5

国内、立花政夫、松本彰弘、「複数の網膜神経節細胞サブタイプによる非静止画像の協同的な符号化」、日本生理学会、2014.3.16

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

特別講演、Institute of Neuroscience, Chinese Academy of Sciences (Shanghai, China), Sophisticated information processing in the retina, 2013.7

教授 **佐藤 隆夫** SATO, Takao

[http://www.l.u-tokyo.ac.jp/psy/sato\\_ind/index.html](http://www.l.u-tokyo.ac.jp/psy/sato_ind/index.html)

### 1. 略歴

1974年3月 東京大学文学部心理学専攻卒業  
1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程 (心理学)  
1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程 ~1983年3月  
1978年9月 ブラウン大学心理学部大学院 ~1982年10月  
1983年6月 ブラウン大学心理学部大学院 Ph.D. (Experimental Psychology)  
1983年4月 日本学術振興会奨励研究員 (東京大学文学部)  
1984年4月 日本電信電話公社武蔵野電気通信研究所研究専門調査員  
1986年4月 (株)国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 主任研究員  
1987年4月 (株)国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 主幹研究員  
1990年11月 日本電信電話 (株) 基礎研究所主幹研究員  
1995年5月 東京大学文学部助教授  
1996年12月 東京大学文学部教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

知覚心理学

#### b 研究課題

心理物理学的手法や誘発電位 (脳波) を用いた実験, およびモデリングの手法を用いて, 視覚, 聴覚の比較的低次のプロセス, 特に運動視, 両眼立体視のメカニズムの研究を進めている. また, 顔の知覚, 視線の知覚, 指さしの知覚などの比較的高次のプロセスに関わる研究も行っている. さらに, どちらも既に終了したプロジェクトであるがインテリジェント・モデリング・ラボラトリーの大規模設備を使用したバーチャルリアリティに関する研究, 総務省の委託を受けた映像情報の安全性に関わる研究なども行って来た.

#### c 主要業績

##### (1) 論文

Hosokawa, K., Maruya, K., & Sato, T. 「Temporal characteristics of depth perception from motion parallax」. 『Journal of Vision』, 13(1):16, pp. 1-8, 2013

Koizumi, A., Kitagawa, N., Kondo, H.M., Kitamura, M. S., Sato, T., & Kashino, M. 「The Serotonin transporter Gene-Linked Polymorphism Affects Detection of Facial Expressions」. 『Plos One』, DOI:10.1371/journal.pone.0059074, 2013

Wen, W., Ishikawa, T., & Sato, T. (2013) 「Individual differences in the encoding processes of egocentric and allocentric survey knowledge」. 『Cognitive Science』, 37(1), 176-192, 2013

- Kanaya, H., & Sato, T. 「Contribution of nonattentive motion to object tracking」. 『Journal of Vision』, 12(11):28, 1-11, 2012
- Kawashima, T., Sato, T. 「Adaptation in sound localization processing induced by intramural time difference in amplitude envelope at high frequencies」. 『PloS one』, 7(7):e41328, 1-6, 2012
- Kuwahara, M., Sato, T., & Yotsumoto, Y. (2012)「Wriggling motion trajectory illusion」. 『Journal of Vision』, 12(12):4, 1-14
- Sato, H., Motoyoshi, I., & Sato, T. 「The spatial contrast suppression is polarity selective」. 『The Japanese Journal of Psychonomic Science』, 31(1), 83-84, 2012
- Sato, H., Motoyoshi, I., & Sato, T. (2012) Polarity selectivity of spatial interactions in perceived contrast. Journal of Vision, 12(2):2, 1-10
- Seno, T., & Sato, T. (2012)「Vection can be induced without explicit motion signal using backscroll illusion」. 『Japanese Psychological Research』, 54(2), 218-222, 2012
- Shigemasu, H., & Sato, T. 「Effects of the amount of monocular shape information on stereo scaling problem」. 『Japanese Psychological Research』, 54(1), 27-37, 2012

## (2) 予稿・会議録

- 国際, Sato, T. and Hosokawa, K. 「Shape-from-shading perception with temporally modulated shadings」, European Conference on Visual Perception, Bremen, Germany, 2013. 8. 27
- 国際, Sato, T., Fujita, M. and Kanaya, H. 「Apparent motion traversing horizontal and vertical meridians」. 9th Asian-Pacific Conference on Vision, Suzhou, China, 2013.7.6
- Sato, T. and Nakajima, Y. 「Dichoptic positive color after image is limited for the number of colors presented within a display」. European Conference on Visual Perception, Alghero, Italy, 2012. 9.2
- Sato, T. and Hosokawa, K. 「Mona Lisa effect of eyes and face」. 8th Asia-Pacific Conference on Vision, Incheon, Korea, 2012.7.15

## 3. 主な社会活動

### (1) 学会

- 国内、日本心理学会、理事長、2011.6～
- 国内、日本心理諸学会連合、常務理事、2009.4～2009.6
- 国内、日本基礎心理学会、理事長、2006.12～2011.12
- 国内、日本視覚学会、幹事、2008.4～
- 国内、日本バーチャルリアリティー学会、評議員、2006.4～
- 国外、Society for Gestalt Theory and its Applications、編集委員、2006.8～

### (2) 他機関での講義等

- 非常勤講師、駒澤大学、「心理学特論」、2010.4～2010.9

教授 **高野 陽太郎** TAKANO, Yohtarō

## 1. 略歴

- 1981年9月 Cornell 大学心理学部大学院博士課程入学（フルブライト奨学生）
- 1985年6月 Cornell 大学心理学部大学院博士課程修了（Ph.D.）
- 1985年9月 Virginia 大学心理学部専任講師
- 1987年4月 早稲田大学文学部専任講師
- 1990年4月 東京大学文学部助教授
- 2003年4月 東京大学文学部教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

認知心理学（人間が行なっている情報処理の研究）、社会心理学

### b 研究課題

- (1) 鏡像問題：この問題（「鏡に映ると左右が反対に見えるのは何故か？」という問題）は、プラトンの昔から議論されてきたにもかかわらず、未だに定説がない。1998年に、この問題に解答する理論を記した論文をアメリカの学術雑誌に発表した。2000年から2004年にかけて、3つの実験をおこない、その理論の妥当性を立証した。これらの実験の結果は、2007年にイギリスの学術雑誌に発表した。また、日本の物理学者たちとも、シンポジウムで議論を交わし、誌上討論を行なった。2011年から現在まで追加実験を続け、理論の妥当性を示す更なるデータを得ている。現在、鏡像問題に関する単著を執筆中。
- (2) 外国語副作用：不慣れな外国語を使用している最中は、一時的に思考能力が低下する。30年ほど前に、この現象を発見して、理論的な説明をおこない、実験によって立証した。国際基督教大学の森島泰則准教授と協力し、2011年から2013年にかけて科研費による研究プロジェクトを行なった。2013年の電子情報通信学会研究会における招待講演などの機会を通じて、この現象の周知に努めている。
- (3) 日本人論批判：「日本人は集団主義的で、アメリカ人は個人主義的」という日本人論の通説について、実証的な国際比較研究を組織的に調べたところ、実証データはこの通説をまったく支持していないことを発見し、国内外の学術雑誌に論文を掲載した。この論文はかなりの論議を呼び、通説の擁護者と議論を続けてきた。2004年には、カナダの研究者による批判の妥当性を調べるために同調行動の実験をおこない、この批判が事実と合致していないことを確認した。これらの研究の成果をまとめて、2008年には、『「集団主義」という錯覚』と題する単著を出版した。
- (4) 因果的説明における価値のバイアス：20年近く前、本学に赴任してきたばかりの頃に、湾岸戦争直前の世論を利用して、社会的現象の因果的説明は、社会的対象に抱いている価値によって歪められることを実験的に示した。この研究は、病気のために長らく中断していたが、2004年に新しい実験をおこなって、最初に行なった実験の結果に関する別解釈を排除できることを確認した。
- (5) 確率推定：確率推定においては、事前確率を考慮に入れ損なう「基準率無視」という現象がよく知られている。この基準率無視の原因については、多くの研究者説明を試みてきたが、因果関係が推定されることが一因となっていることを一連の実験によって明らかにした。また、この現象が確率の形式での表記法に起因するとするドイツの研究者の著名な説が誤っていることも、実験的に証明した。

### c 主要研究業績

#### (1) 著書

共著、Takano, Y., 『Japanese culture explored through experimental design. In A. Kurylo (Ed.), *Inter/Cultural Communication*.』, Los Angeles: Sage., 2013  
編著、日本認知心理学会、『認知心理学ハンドブック』, 2013.12

#### (2) 論文

Wakebe, T., Sato, T., Watamura, E., & Takano, Y., 「Risk aversion in information seeking.」, 『*Journal of Cognitive Psychology*』 24(2), 125-133 頁, 2012  
Takano, Y., 「Mirror reversal of slanted objects: A psycho-optic explanation」, 『*Philosophical Psychology*』, 1-20 頁, 2013.7

#### (3) 教科書

『認知心理学』, 高野陽太郎、執筆、放送大学教育振興会、2013

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2010.4～2012.3

### (2) 学会

「日本認知心理学会独創賞選考委員会」、委員長、2010～2011

「日本認知心理学会」、常務理事、理事、2010～2012

「日本心理学会」、代議員、2010～2012

日本認知科学会の第28回大会を2011年9月に東京大学で開催し、大会委員長を務めた。

## 1. 略歴

- 1979年3月 東京工業大学工学部情報工学科卒  
1981年3月 東京工業大学大学院総合理工学研究科電子システム専攻修士課程了  
1981年4月 日本電信電話公社(現NTT)入社  
1986年9月~1990年2月 ATR視聴覚機構研究所(出向)  
1990年9月 東京工業大学より工学博士号授与  
1991年11月~1992年12月 東京大学生産技術研究所 客員助教授  
1995年6月~1996年6月 南カリフォルニア大学 客員研究員  
1998年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授  
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授  
2009年12月~2010年3月 カリフォルニア大学パークレイ校 客員研究員

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

統合的認知の心理学

### b 研究課題

統合的認知について、認知心理学的研究を行っている。統合的認知とは、知覚された特徴がどのように記憶や言語や概念と関わりあっているのかを解明しようとする広範囲の研究を指している。特に、視覚的注意やオブジェクト認知の問題を中心に研究している。さらに、感覚融合認知や共感覚に関する研究にも取り組んでおり、研究分野は視覚だけに限らず、扱っている研究課題は多岐に渡っている。

### c 主要業績

#### (1) 論文

- R. Nakashima & K. Yokosawa, 「Sustained attention can create an (illusory) experience of seeing dynamic change」、『Visual Cognition』、20, 3, pp. 265-283, 2012
- M. Asano & K. Yokosawa, 「Synesthetic colors for Japanese late acquired graphemes」、『Consciousness and Cognition』、21, 2, pp. 983-993, 2012
- 横澤、金谷、「顔と音声の感覚融合としての腹話術効果」、『BRAIN and NERVE』、64, 7, 771-777 頁、2012
- 西村、横澤、「空間的刺激反応適合性効果」、『心理学評論』、55, 4, 436-458 頁、2012
- S. Kanaya, Y. Matsushima, & K. Yokosawa, 「Does Seeing Ice Really Feel Cold? Visual-Thermal Interaction under an Illusory Body-Ownership」、『PLOS ONE』、DOI:10.1371/journal.pone.0047293, 2012
- R. Nakashima & K. Yokosawa, 「Visual search in divided areas: Dividers initially interfere with and later facilitate visual search」、『Attention, Perception & Psychophysics』、75, 2, pp. 299-307, 2013
- R. Nakashima, K. Kobayashi, E. Maeda, T. Yoshikawa, & K. Yokosawa, 「Visual search of experts in medical image reading: The effect of training, target prevalence, and expert knowledge」、『Frontiers in Educational Psychology』、DOI: 10.3389/fpsyg.2013.00166, 2013
- M. Asano & K. Yokosawa, 「Determinants of synaesthetic colours for different types of graphemes: Towards a comprehensive model」、『Visual Cognition』、21, 6, pp. 674-678, 2013
- M. Asano & K. Yokosawa, 「Grapheme learning and grapheme-color synesthesia: Toward a comprehensive model of grapheme-color association」、『Frontiers in Human Neuroscience』、7:757. DOI: 10.3389/fnhum.2013.00757, 2013
- E. Maeda, T. Yoshikawa, R. Nakashima, K. Kobayashi, K. Yokosawa, N. Hayashi, Y. Masutani, N. Yoshioka, M. Akahane & K. Ohtomo, 「Experimental system for measurement of radiologists' performance by visual search task」、『SpringerPlus』、2: 607. DOI: 10.1186/10.1186/2193-1801-2-607, 2013
- 横澤、「統合的認知に関する心理学アプローチ」、『ネイチャーインタフェイス』、58, 3-5 頁、2013.8

K. Tamaoka, M. Asano, Y. Miyaoka, & K. Yokosawa, 「Pre- and post-head processing for single- and double-scrambled sentences of a head-final language by the eye tracking method」, 『Journal of Psycholinguistic Research』, 43, 2, pp.167-185, 2014

W. Yamashita, R. Niimi, S. Kanazawa, M. Yamaguchi K., & K. Yokosawa, 「Three-quarter view preference for three-dimensional objects in 8-month-old infants」, 『Journal of Vision』, 14(4), 5. doi:10.1167/14.4.5, pp.1-10, 2014

(2) 書評

山口真美, 柿木隆介, 『顔を科学する 適応と障害の脳科学』, 『基礎心理学研究』, 32, 1, 57-58 頁, 2013

(3) 解説

新美, 横澤, 「反応時間」, 『脳科学辞典』, 2013

横澤, 「共感覚」, 『最新心理学事典』, 2013

(4) 学会発表

国内, 横澤一彦, 「「注意と認知」から「統合的認知」へ」, 日本心理学会第10回注意と認知研究会, 2012.3.19

国内, 横澤一彦, 「統合的認知」, 日本認知科学学会第29回大会, 2012.12.13

国内, 横澤一彦, 「統合的認知に関する心理学アプローチ」, 第14回人間情報学会講演会, 2013.4.17

国内, 横澤一彦, 「十人十色」, 日本認知科学学会サマースクール, 2013.9.4

(5) 啓蒙

横澤一彦, 「リアルに魅かれる理由」, 『フィナンシャル ジャパン』, 2012年6月号, 34-35 頁, 2012.6

(6) マスコミ

「見た目でヒヤリ」, 『朝日新聞』, 2012.11.8

「見た目で温度“錯覚”」, 『電気新聞』, 2012.11.8

「“視覚情報 温度感覚に影響与える”研究成果」, 『NHK ニュース』, 2012.11.8

「視覚が温度感覚に影響」, 『毎日新聞』, 2012.11.9

「“ラバーハンド錯覚”視覚情報が温度感覚に影響」, 『日本テレビニュース』, 2012.11.12

「視覚で温度感覚左右」, 『科学新聞』, 2012.11.16

「視覚が温度感覚に影響」, 『東京大学新聞』, 2012.11.20

「東大最前線、認知科学」, 『東京大学新聞』, 2012.12.11

(7) 受賞

国内, 金谷翔子, 石渡貴大, 横澤一彦, 優秀論文賞, 日本基礎心理学会, 2012.11.4

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演, 日本科学未来館, 「共感覚～あなたは世界をどう感じますか?」, 2013.8～

## 1. 略歴

1991年3月	東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 修了 博士(心理学)取得
1996年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員(COEポスドク)
1997年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員(日本学術振興会特別研究員PD)
1997年9月	米国ハーバード大学心理学部視覚科学研究所 研究員(日本学術振興会特別研究員PD)
1999年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 社員
2000年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 研究主任
2004年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 主任研究員
2005年4月	東京大学大学院総合文化研究科 助教授
2007年4月	東京大学大学院総合文化研究科 准教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

知覚心理学、認知神経科学

### b 研究課題

ノイズ効果低減と適応的キャリブレーションで明朗な視界を構築する視覚系の機能の解明。こころの時間長・同期・クロックを作り出す認知メカニズムの解明。

### c 主要業績

#### (1) 著書

辞書・辞典・事典、藤永保 監修、『最新 心理学事典』、2013.12

#### (2) 論文

Amano, K., Takeda, T., Haji, T., Terao, M., Maruya, K., Murakami, I., Nishida, S. Human neural responses involved in spatial pooling of locally ambiguous motion signals. *Journal of Neurophysiology*, 107, 3493-3508, 2012

Ashida, H., Kuriki, I., Murakami, I., Hisakata, R., Kitaoka, A. Direction-specific fMRI adaptation reveals the visual cortical network underlying the "Rotating Snakes" illusion. *NeuroImage*, 61, 1143-1152, 2012

Kaneko, S., Murakami, I. Flashed stimulation produces strong simultaneous brightness and color contrast. *Journal of Vision*, 12(12:1), 1-18, 2012

Kobayashi, K., Terao, M., Murakami, I. The aftereffect of a spatial offset between Gabor patches depends on carrier orientations. *Journal of Vision*, 12(4:16), 1-15, 2012

Takemura, H., Ashida, H., Amano, K., Kitaoka, A., Murakami, I. Neural correlates of induced motion perception in the human brain. *Journal of Neuroscience*, 32(41), 14344-14354. 2012

Fukiage, T. & Murakami, I., 「Adaptation to a spatial offset occurs independently of the flash-drag effect」, 『*Journal of Vision*』、13(2):7、1-14 頁、2013.2

Hisakata, R., Terao, M. & Murakami, I., 「Illusory position shift induced by motion within a moving envelope during smooth-pursuit eye movements」, 『*Journal of Vision*』、13(12):21、1-12 頁、2013.10

Osugi, T. & Murakami, I., 「Previewing distractors reduces efficiency of visual processing at previewed locations」, 『*Vision Research*』、95、51-60 頁、2014.2

村上郁也、「錯覚と眼球運動と視野安定」、文化交流研究、27、49-55 頁、2014.3

#### (3) 予稿・会議録

国際会議、Hayashi, D., Murakami, I. Collinear facilitation by flankers with invisible orientation. *Vision Sciences Society Annual Meeting*, Naples, Florida, 2012

- 国際会議、Hisakata, R., Murakami, I. The flash-drag effect and the illusory position shift induced by motion on a different depth plane. Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, Florida, 2012
- 国際会議、Kaneko, S., Murakami, I. Effective ranges of shorter durations yielding greater simultaneous contrast of brightness and color. Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, Florida, 2012
- 国際会議、Murai, Y., Murakami, I. The flash-drag effect is observed somewhat before, but never after, the display period of a moving stimulus. Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, Florida, 2012
- 国際会議、Sakai, T., Murakami, I. Global motion persists when local motion signals are canceled between color and luminance. Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, Florida, 2012
- 国際会議、Takemura, H., Ashida, H., Amano, K., Kitaoka, A., Murakami, I. Neural correlates of induced motion revealed by fMRI. Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, Florida, 2012
- 国際会議、Terao, M., Murakami, I., Nishida, S. Motion correspondence based on the perisaccadically compressed space. Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, Florida, 2012
- 国内会議、村井祐基・村上郁也、フラッシュ・ドラッグ効果とフラッシュ・ラグ効果の同時測定. 日本視覚学会、2012.8
- 国内会議、金子沙永・村上郁也、明るさ同時対比・色同時対比と呈示時間の関係. 日本視覚学会、2012.8
- 国内会議、林大輔・村上郁也、方位が見えない刺激による Collinear Facilitation 効果の位相依存性. 日本視覚学会、2012.8
- 国内会議、岡崎由香・Horschig, J.M.・Luther, L.・村上郁也・Jensen, O. Training covert attention by brain computer interface. 日本神経科学学会、2012.9
- 国際会議、Okazaki, Y., Horschig, J.M., Luther, L., Oostenveld, R., Murakami, I., Jensen, O. Training alpha activity using real-time MEG neurofeedback causes short-term plasticity in visual detection performance. Society for Neuroscience Annual Meeting, 42, 97.01, 2012
- 国内会議、林大輔・村上郁也、「主観的には見えないフランカーによる Collinear Facilitation 効果」、日本視覚学会、東京、2013.1.23
- 国内会議、久方瑠美・村上郁也、「単眼性処理段階で起こる運動による位置ずれ」、日本視覚学会、東京、2013.1.24
- 国内会議、村井祐基・村上郁也、「仮現運動刺激と標的刺激の方位近接性に依存しないモーション・マスキング」、日本視覚学会、東京、2013.1.24
- 国内会議、大杉尚之・村上郁也、「視覚的印付けが雑音内の信号検出に及ぼす影響」、日本視覚学会、東京、2013.1.24
- 国内会議、酒井俊樹・村上郁也、「局所的な運動が相殺された状態における大域運動の知覚」、日本視覚学会、東京、2013.1.24
- 国際会議、Masuda, Y., Terao, M., Haji, T., Amano, K., Horiguchi, H., Ogawa, S., Nakadomari, S., Murakami, I., Matsumoto, K., Tsuneoka, H., & Wandell, B.A.、「Population receptive field estimates in V1 lesion projection zone of patients with macular degeneration onset at different ages」、2013.5.8
- 国際会議、Hayashi, D., & Murakami, I.、「Collinear facilitation by invisible flankers」、Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, Florida, 2013.5.10
- 国際会議、Hisakata, R., & Murakami, I.、「Motion-induced position shift in stereoscopic and dichoptic viewing」、Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, Florida, 2013.5.11
- 国際会議、Murai, Y., & Murakami, I.、「Orientation dependency of motion masking relative to the direction of apparent motion」、Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, Florida, 2013.5.12
- 国際会議、Osugi, T., & Murakami, I.、「Previewing distractors reduce efficiency of visual processing at previewed locations」、Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, Florida, 2013.5.14
- 国内会議、村上郁也、「周辺視の心理物理学～現象・メカニズム・機能」、日本視覚学会、東京、2013.5.18
- 国内会議、増田洋一郎・敷島敬悟・寺尾将彦・天野薫・村上郁也・土師知己・小川俊平・堀口浩史・吉嶺松洋・仲泊聡・中野匡・常岡寛、「両側中心暗点を有するレーベル遺伝性視神経症における視覚野反応」、日本視覚学会、東京、2013.5.19
- 国内会議、石橋和也・岡崎由香・村上郁也、「長距離周辺刺激によるコントラスト知覚変調の時間特性」、日本視覚学会、札幌、2013.7.25
- 国内会議、林大輔・村上郁也、「方位が見えないフランカーによる Collinear Facilitation 効果の単眼性」、日本視覚学会、札幌、2013.7.26

国内会議、増田洋一郎・寺尾将彦・土師知己・林孝彰・堀口浩史・小川俊平・吉嶺松洋・村上郁也・仲泊聡・常岡寛、  
「黄斑変性患者の脳機能」、日本臨床視覚電気生理学学会、大阪、2013.10.4  
国際会議、Ishibashi, K., Okazaki, Y., & Murakami, I., 「Timing of far-surround modulation of perceived contrast  
in human vision」、Society for Neuroscience Annual Meeting, San Diego, 2013.11.13  
国内会議、大杉尚之・村上郁也、「視覚的印付けへの背景変化の影響」、日本視覚学会、東京、2014.1.22  
国内会議、石橋和也・江上直也・藤本千里・村上郁也、「前庭動眼反射による超高速等輝度運動の可視性の変化」、日  
本視覚学会、東京、2014.1.24

(4) 総説・総合報告

林大輔, 村上郁也. 刺激の持つ方位と主観的な見えが Collinear Facilitation 効果に及ぼす影響. VISION, 24, 103-106, 2012

Terao, M., Murakami, I., Nishida, S. Does peri-saccadic spatial compression affect computation of motion correspondence? 基礎心理学研究, 31(1), 85-86, 2012

村上郁也、「脳の中の現在」、『BRAIN and NERVE』、2013.8

久方瑠美・村上郁也 (2012). あいまいな物体位置の知覚に影響する運動情報. 心理学評論, 55(3), 385-395

村上郁也 (2012). 能動的視覚観察事態の解き明かす逆方向モデリング・順方向モデリングの計算方略: 一川・政倉論文へのコメント. 心理学評論, 55(3), 376-380

村上郁也 (2012). 視覚の目的. Clinical Neuroscience, 30(8), 866-869

(5) プレスリリース

村上郁也、「止まっている図形が動いて見える錯覚を感じているときの脳活動を解明」、東京大学 2012.10.10

(6) アウトリーチ

東京都立西高校にて、生徒さん約 330 名を対象に、「認知科学への招待」という題目で錯覚の不思議に関する講演、2013.12.18

東京大学 本郷キャンパスにて、兵庫県立姫路東高校の生徒さんを対象に、錯覚の不思議に関する模擬講義、2013.9.30

東京大学 本郷キャンパスにて、三重県高田高校の生徒さんを対象に、錯覚の不思議に関する模擬講義、2013.7.25

東京大学 本郷キャンパスにて、国学院久我山高校の生徒さんを対象に、錯覚の不思議に関する模擬講義、2013.6.7

東京大学 駒場キャンパスにて、「高校生のための金曜特別講座」として、トーク「錯覚体験が教えてくれる脳のメカニズム」、2012.4.27

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京女子大学、「知覚心理学」、2012.9~2013.3

(2) 学会

国内、日本視覚学会、幹事、2012.4~2014.3

国内、日本心理学会、代議員、2012.4~2014.3

国内、日本基礎心理学会、常任編集委員、2012.4~2014.3

(3) 行政

国内、日本学会会議、連携会員、2012.4~2014.3

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

国内、包括型脳科学研究推進支援ネットワーク、実行委員会委員、2012.4~2014.3

国際、International Congress of Psychology (ICP) 組織委員、2012.4~2014.3

## 09a 日本語日本文学（国語学）

教授 月本 雅幸

TSUKIMOTO, Masayuki

### 1. 略歴

- 1977年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
- 1980年3月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
- 1981年3月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
- 1981年4月 茨城大学人文学部専任講師（～1985年3月）
- 1985年4月 白百合女子大学文学部専任講師（～1987年3月）
- 1987年4月 白百合女子大学文学部助教授（～1992年3月）
- 1992年4月 東京大学文学部助教授（～1995年3月）
- 1995年3月 ドイツ連邦共和国ルール大学ボッフム交換助教授（～1996年1月）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2006年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

日本語史

#### b 研究課題

漢文に日本語としての読みを記入した訓点資料の研究を課題としている。関心の中心は平安時代から鎌倉時代にかけての訓点にあり、学界未紹介の資料を公表し、また既に知られている資料も含め、その資料的性格を再検討して言語の特質や年代性を吟味することにより、国語史料としての訓点資料の新たな利用の方法を模索している。

#### c 主要業績

##### (1) 論文

「解題」(『キリシタン版日葡辞書カラー影印版』、勉誠出版、pp.7-12、2013.1)

「高山寺蔵本大毘盧遮那成佛経疏卷第十五康和点訳文稿（九）」(『平成二十四年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』、pp.88-91、2013.3)

「西大寺本金光明最勝王経古点研究史」(『国宝西大寺本金光明最勝王経』、勉誠出版、pp.193-198、2013.9)

「聖教調査拾遺二題」、『むらさき』第50輯、pp.79-82、2013.12

「高山寺蔵本大毘盧遮那成佛経疏卷第十五康和点訳文稿（十）」(『平成二十五年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』、pp.81-84、2014.3)

##### (2) 解説

「新日本語学者列伝 築島裕」、『日本語学』32巻13号、pp.86-93、2013.12

『歴史的仮名遣い—その特徴と成立—』を読む(築島裕『歴史的仮名遣い—その特徴と成立—』解説)、吉川弘文館、pp.201-209、2014.2

##### (3) 学会発表

「日本における学僧の漢文と訓点の学習について」、Accessing the Cosmopolitan Code in the Sinographic Cosmopolis, Evidence from *mokkan* to the 20<sup>th</sup> century、早稲田大学、2013.6.17

「日本における漢文の受容と訓読について」、ポーランド日本研究協会大会、Mangha Museum (Kracow)、2013.11.17

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学会

国内、日本語学会、理事、2012.4～2014.3

国内、訓点語学会、副会長、2012.4～2014.3

#### (2) 行政

文化審議会専門委員（文化財分科会）、2012.4～2014.3

(3) 学外組織

国立国語研究所運営会議委員、2012.4～2014.3

教授 **井島 正博** IJIMA, Masahiro

**1. 略歴**

1982年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業  
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了  
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科研究生  
1985年10月 防衛大学校人文科学研究室助手  
1989年4月 山梨大学教育学部専任講師  
1991年4月 山梨大学教育学部助教授  
1992年4月 成蹊大学文学部日本文学科助教授  
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本語・日本文学）  
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（日本語・日本文学）  
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本語・日本文学）

**2. 主な研究活動**

**a 専門分野**

日本語学 日本語文法・日本語文法学史および言語理論

**b 研究課題**

現代語・古典語の日本語文法あるいは日本語文法学史および言語理論の研究をテーマとしている。なかでも現代語日本語文法に関する研究を一貫して続けており、これまでに、格構造（受身文、使役文、可能文、授受動詞構文）、テンス・アスペクト構造、言語行為構造（推量文、疑問文）、談話構造、中でも情報構造・視点構造（テンス、授受動詞構文）・期待構造（否定文、数量詞、限定表現、条件文）など、日本語文法をできる限りグローバルにとらえられる枠組を求めて考察を進めてきた。

さらに現代語の成果を古典語に適用して、古典語文法に新たな方向からアプローチをするとともに、従来の文法研究を歴史的にとらえることによって、各時代の文法理論を相対化することも試みている。言語理論に関しては、コミュニケーション行為構造の分析に力点を置きつつ、近年の有力な言語理論の批判的検討を通して、理論的全体像を模索している。

**c 主要業績**

(1) 論文

井島正博、「文末ノダ文の構造と機能」、『国語と国文学』、第89巻第11号、pp101-113、2012.11

井島正博、「当為表現の構造と機能」、『日本語学論集』、第9号、pp133-173、2013.3

井島正博、「人称表現としてのノダ文」、『学芸国語国文学』、第45号、pp7-20、2013.3

井島正博、「数量詞と否定文」、『成蹊人文研究』、第21号、pp1-27、2013.3

井島正博、「副詞句と否定文」、『成蹊大学一般研究報告』、第47巻、pp1-26、2013.11

井島正博、「上代・中古語の推量表現の表現原理」、『日本語複文構文の研究』、pp249-278、2014.1

井島正博、「条件節におけるノダ文の構造と機能」、『日本語学論集』、第10号、pp88-110、2014.3

(2) 書評

仁田義雄、『仁田義雄日本語文法著作選第1～4巻』、『日本語の研究』、8巻2号、pp58-63、2012.4

(3) 学会発表

国内、井島正博、「問題提起 動詞基本形をめぐる問題」、日本語文法学会第14回大会、早稲田大学、2013.11.30

(4) 教科書

『詳説古典文法』、井島正博編著、筑摩書房、2012

『精選国語総合』、井島正博共編、筑摩書房、2013

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

特別講演、ルーマニア日本語教師会、「日本語のテンスの機能」、2013.9～

特別講演、UTokyo フォーラム (サンパウロ大学)、「近現代日本語文法研究史の概観と課題」、2013.11～

特別講演、UTokyo フォーラム (サンパウロ大学)、「日本語のテンスの機能」、2013.11～

特別講演、韓国日語日文学会 (韓国外国語大学)、「ノダ文の構造と機能」、2013.12～

#### (2) 学会

国内、日本語文法学会、大会委員長、2013.4～

准教授

肥爪 周二

HIZUME, Shuji

### 1. 略歴

- 1989年 3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
- 1991年 3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程修了
- 1993年 3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻博士課程中退
- 1993年 4月 明海大学外国語学部日本語学科専任講師 (～1996年 3月)
- 1996年 4月 茨城大学人文学部人文学科専任講師 (～1997年 9月)
- 1997年 10月 茨城大学人文学部人文学科助教授 (～2003年 3月)
- 2003年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授
- 2007年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授 (～現在に至る)

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

国語学

#### b 研究課題

日本語音韻史・日本漢字音史・日本韻学史を、主な専門領域とする。古代日本における外国語研究の二本の柱、すなわち漢字音韻学 (中国語学)・悉曇学 (梵語学) の学史的な研究を、主要な研究領域とする。先人の残したさまざまな記録を元に、江戸時代以前の日本における、音声観察・音声分類の発達および変遷を解明することを目指す。これらの研究成果と連動させつつ、漢字音の日本化の問題、拗音分布の偏在性についての歴史的解釈、濁音の起源 (連濁現象の起源) についての考察など、音韻史分野にも研究対象を拡張し、着実に成果を上げている。近年の課題としては、国語音・漢字音 (呉音系字音、漢音系字音、唐音系字音)・梵語音を総合する、日本語音節バリエーションの歴史を明らかにすることを目指している。

#### c 主要業績

##### (1) 論文

沼本克明・肥爪周二、「奈良国立博物館蔵『悉曇藏』について」、『訓点語と訓点資料』、2013.3

肥爪周二、「ㄱ 音便について」、『訓点語と訓点資料』、132、16-35 頁、2014.3

##### (2) 書評

小倉肇、『日本語音韻史論考』、『國學院雑誌』、2012.7

高山倫明、『日本語音韻史の研究』、『国語と国文学』、91-2、2014.2

##### (3) 学会発表

国内、肥爪周二、「ㄱ 音便について」、訓点語学会研究発表会、2013.10.20

国内、肥爪周二、「拗音をめぐると二つの物語」、日本語学会秋季大会、2013.10.26

##### (4) 予稿・会議録

国内会議、肥爪周二、「拗音をめぐると二つの物語」、2013.10.26

(5) マスコミ

『古語大鑑』、用例の海の溺れる』、『図書新聞』、2012.4.21

(6) 教科書

『国語史を学ぶ人のために』「第一章・資料論」、肥爪周二、執筆、世界思想社、2013

**3. 主な社会活動**

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、國學院大學、「日本語音韻史」、2012.4～2013.3

非常勤講師、國學院大學、「日本語音韻史」、2013.10～

(2) 学会

国内、訓点語学会、運営委員、2012.4～2014.3

国内、日本語学会、編集委員、2013.4～2013.5

## 09b 日本語日本文学（国文学）

教授 多田 一臣 TADA, Kazuomi

### 1. 略歴

1973年3月	東京大学文学部国語国文学専修課程卒業
1975年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1975年4月	東京大学文学部助手
1980年4月	千葉大学人文学部講師
1981年4月	千葉大学文学部助教授
1994年4月	東京大学文学部助教授
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
1999年1月	博士（文学）（東京大学）
2013年3月	定年により退職（同年6月名誉教授）

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

日本古代文学

#### b 研究課題

日本古代文学のうち、とくにその前期にあたる上代文学を主たる研究対象領域とする。これまで神話・伝説・説話といった伝承性の色濃くあらわれた文学、記紀歌謡に代表される古代歌謡や『万葉集』などの韻文系の文学の研究に従事してきた。歴史的な客観性に基盤を置いた実証を重んじつつも、一方で発生論的視座に立つ表現論的な方法を積極的に取り入れようと考えてきた。2010年、十年以上の歳月を費やした『万葉集』の全注釈である『万葉集全解』全七冊を完成させた。現在は、万葉語彙の語誌的研究、柿本人麻呂の伝記的研究、『古事記』の総合的研究に精力を傾注している。

#### c 主要業績

##### (1) 著書

多田一臣、『古代文学の世界像』（岩波書店、2013年3月）426頁

##### (2) 論文

多田一臣、「母の甜き乳をめぐって」『上代文学』第109号（2012年11月）、上代文学会、17～31頁

多田一臣、「Lesse del waka. Spunti del Libro XVI del Man' yoshu」『La Cultura del Periodo Nara』（Andrea Maurizi 編、2012年）、FRANCOANGELI、135～143頁

##### (3) 小論等

多田一臣、「子午線 大会二日目印象記」『日本文学』第61巻4号（2012年4月）、日本文学協会、34～35頁

多田一臣、「青春の一冊 高木市之助『国文学五十年』」『週刊 東京大学新聞』第2600号（2012年7月17日）（『東大教師 青春の一冊』〈信山社新書〉、東大新聞社編、信山社、2013年3月、42～44頁に再録）

多田一臣、「「あの人。この人。万葉集の字。心を徴す」2013年モリサワカレンダー」（2012年12月）、モリサワ（監修、解説・跋文を執筆）

多田一臣、「益田勝実氏・『文学』・日文協『文学』第14巻3号（2013年5月）、岩波書店、35～38頁

多田一臣、「林家正蔵のこと」『図書』第774号（2013年8月）、岩波書店、16～21頁

##### (4) 書評

多田一臣、「多田元著『古代文芸の基層と諸相』」『國學院雑誌』第113巻5号（2012年5月）、國學院大學、53～57頁

多田一臣、「梶川信行著『万葉集の読み方 天平の宴席歌』」『語文』第147輯（2013年12月）、55～56頁

多田一臣、「浅見和彦著『東国文学史序説』」『国語と国文学』第91巻3号（2014年3月）、70～74頁

(5) 辞書・事典

『WEB版 和歌文学大辞典』(WEB版『和歌文学大辞典』編集委員会編、古典ライブラリー、2013年4月配信)  
(「(大伴宿禰)安麻呂」「天智天皇」「記紀歌謡」を執筆)

(6) 学会発表

多田一臣、「母の甜き乳をめぐって」(上代文学会大会、東海大学、2012年5月12日)

多田一臣、「人文学の活性化のために考えておくべきこと 日本の文学部より」(シンポジウム「文学部の逆襲」、文学研究科(文学部)公開シンポジウム、名古屋大学、2014年3月8日)

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、1999.4～(継続中)

千葉市民大学非常勤講師、1990～(継続中)

聖心女子大学非常勤講師、2011～2014.3

(2) 学会

古代文学会、委員、1977.4～

上代文学会、常任理事・理事、1988～

東京大学国語国文学会、会長、2008.1～2011.1 評議員2011.1～

美夫君志会、理事、2006.4～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

財団法人杉並能楽堂、理事、2006.12～(現在一般社団法人)

日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員、2010.4～2013.3

人間文化研究機構国際日本文化研究センター運営会議委員、2010.4～

文部科学省文化審議会委員(文化功労者選考部会)、2013.9～2014.8

教授 **長島 弘明**

NAGASHIMA, Hiroaki

### 1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部国語国文学専修課程卒業  
1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了  
1979年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学  
1980年4月 実践女子大学文学部専任講師  
1985年4月 名古屋大学文学部専任講師  
1986年12月 名古屋大学文学部助教授  
1993年4月 東京大学文学部助教授(1993年4月～1994年3月、名古屋大学助教授併任)  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(～現在に至る)  
2000年9月 博士(文学)(東京大学)

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

日本近世文学

## b 研究課題

近世中期の上田秋成・建部綾足・与謝蕪村らの文人の文学を、伝記・作品論・思想論等の様々な面から考察する。新しい文学理念を掲げ、それまでになかった文学ジャンル・学問・絵画を生み出した文人の活動を、一人一人の個性・特殊性と、個人を越えた共通性との両面から明らかにすることを研究の目標とする。

## c 主要業績

### (1) 論文

長島弘明、「講演『雨月物語』の多義性について」、『京都語文』、19、2012.11

長島弘明、『『春雨物語』—反・近世小説としての語り—』、『物語の言語—時代を超えて—』（青簡舎）、2013.2

長島弘明、『『雨月物語』の享受』、『東京大学・コロンビア大学合同国際シンポジウム「日本文学に関する研究と教育の国際化」予稿集』（東京大学国文学研究室）、2013.3

長島弘明、『『雨月物語』を映画「雨月物語」から読む』、『国際学術会議「17～19世紀東アジア伝統文化の中の死と死後観」予稿集』（高麗大学校民族文化研究院HK韓国文化研究団）、2013.4

### (2) 解説

長島弘明、『完本 上田秋成研究序説』解説、『完本 上田秋成研究序説』（ペリかん社）、2013.4

### (3) 学会発表

国際、長島弘明、「留学生の日本文学研究の現況、並びに展望—韓国人留学生の日本近世文学研究を中心に—」、国際シンポジウム「外国における日本文学研究と日本文学教育—韓国の場合を中心に—」、於韓国外国語大学校、2012.9.16

国際、長島弘明、『『源氏物語』と『雨月物語』』、立教大学日本学研究所開設10周年記念・国際シンポジウム「日本の現在と未来」、2012.11.4

国内、長島弘明、「上田秋成の異国」、法政大学国際日本学研究所主催シンポジウム「江戸人の考えた日本像—世界の自分の自分たち—」、2013.3.16

国際、長島弘明、『『雨月物語』の享受』、東京大学・コロンビア大学合同国際シンポジウム「日本文学に関する研究と教育の国際化」、於コロンビア大学、2013.3.29

国際、長島弘明、『『雨月物語』を映画「雨月物語」から読む』、国際学術会議「17～19世紀東アジア伝統文化の中の死と死後観」、於高麗大学校、2013.4.13

国内、長島弘明、「上田秋成の墓」、上田秋成忌、於西福寺、2013.6.23

国際、長島弘明、「『総合日本文学』と留学生の現況」、国際シンポジウム「日本文学研究と中国—研究の国際化をめざして—」、於北京日本学研究所センター、2013.7.8

国際、長島弘明、「古典文学の継承と解体と再生—上田秋成作『雨月物語』と溝口健二監督作品・映画「雨月物語」—」、第7回ワルシャワ大学日本祭「平成の日本—日本的伝統からの離反と回帰」基調講演、2013.10.14

国際、長島弘明、「江戸怪談の極北—『雨月物語』「浅茅が宿」を読む—」、ローマ大学招待講演会、2013.10.17

国際、長島弘明、「物語文学のゆくえ—『雨月物語』の世界—」、ソウル大学招待講演会、2013.10.30

国際、長島弘明、「東京大学における日本文学教育」、韓国日本言語文化学会 2013 年度秋季国際学術大会招待講演会「日本文学教育と教授コンテンツ」、於サイバー韓国外国語大学校、2013.11.9

国内、長島弘明、「気質者の信義—『雨月物語』「菊花の約」を読む—」、鶴見大学日本文学会、2013.11.30

### (4) 予稿・会議録

国際会議、長島弘明、「留学生の日本文学研究の現況、並びに展望—韓国人留学生の日本近世文学研究を中心に—」、『国際シンポジウム「外国における日本文学研究と日本文学教育—韓国の場合を中心に—」予稿集』（東京大学国文学研究室）、2012.9

国際会議、長島弘明、「『総合日本文学』と留学生の現況』、『国際シンポジウム「日本文学研究と中国—研究の国際化をめざして—」予稿集』（東京大学国文学研究室）、2013.7.8

国内会議、長島弘明、『『源氏物語』と『雨月物語』』、『立教大学日本学研究所年報』（立教大学日本学研究所）第10・11合併号、2013.7

国際会議、長島弘明、「東京大学における日本文学教育』、『韓国日本言語文化学会 2013 年度秋季国際学術大会招待講演会「日本文学教育と教授コンテンツ」予稿集』、2013.11

### (5) 監修

久保田淳・長島弘明、『名歌名句大事典』、明治書院、2012.5

(6) 総説・総合報告

長島弘明、「シンポジウム「日本近世文学と朝鮮」傍聴記—「近世文学研究共和国」への最初的一步」、『近世文藝』、第96号、2012.7

(7) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、長島弘明、研究代表者、「和学系文人の和文作品についての研究」、2010～2012  
文部科学省科学研究費補助金、長島弘明、研究代表者、「『古状揃』の総合的研究」、2013～

(8) 啓蒙

長島弘明、「雑誌『文学』と私」、『文学』、14巻3号、2013.5

木越治・長島弘明「対談 文学的想像力を駆使して著された不朽の二書 高田衛著『定本上田秋成研究序説』（国書刊行会）、『完本上田秋成年譜考説』（ぺりかん社）刊行によせて」『図書新聞』3112号、2013年6月1日

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2012・2013年度

(2) 学会

東京大学国語国文学会、会長、2011.1～

日本近世文学会、常任委員、2012・2013年度

日本文学協会、委員、2012・2013年度

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議、会員、2011.10～

国文学研究資料館運営会議委員、2012・2013年度

教授 藤原 克己

FUJIWARA, Katsumi

### 1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業  
1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了  
1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学  
1980年4月 岡山大学教養部講師  
1984年4月 岡山大学教養部助教授  
1989年4月 神戸大学文学部助教授  
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
2001年5月 博士(文学) (東京大学)  
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (現在に至る)

### 2. 主な研究活動

a 専門分野

平安朝文学

b 研究課題

新しい日本古典文学研究のあり方を求めて

c 主要業績

(1) 論文

藤原克己、「夕顔巻鑑賞」、『むらさき』、第49輯、76～83頁、2012.12

藤原克己、「古典に対する研究の功罪」、『中国—社会と文化』、第28号、56～71頁、2013.8

藤原克己、「源氏物語講座：「あくがる」再考—野分巻鑑賞のために—」、『むらさき』、第50輯、88～98頁、2013.12

(2) 書評

藤原克己、「諸田龍美著『白居易恋情文学論 長恨歌と中唐の美意識』、勉誠出版、『白居易研究年報』、第13号、523～535頁、2012.12

(3) 学会発表

国際、藤原克己、「古典教育に対する研究の功罪」、中国社会文化学会2012年度大会シンポジウム、東京大学文学部1番大教室、2012.7.8

国際、藤原克己、「源氏物語の深さと美しさ—夕顔の物語を中心に—」、東京大学・コロンビア大学合同国際シンポジウム、コロンビア大学、2013.3.29

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、朝日カルチャーセンター横浜、「源氏物語を読む」、2012.4～2014.3

非常勤講師、朝日カルチャーセンター新宿、「光源氏と紫の上—源氏物語の深さと美しさ」、2012.4～2014.3

非常勤講師、かわさき市民アカデミー、「伊勢物語を読む」、2012.9～2013.1

特別講演、都留文科大学国語国文学会、「『徒然草』の思想—閑居と貧しさについて—」、2013.6

非常勤講師、かわさき市民アカデミー、「『徒然草』にみる兼好の死生観」、2013.11～2013.12

(2) 学会

国内、東方学会、学術委員、2012.4～2014.3

国内、紫式部学会、理事、2012.4～2014.3

国内、和漢比較文学会、理事、2012.4～2014.3

教授 **渡部 泰明** WATANABE, Yasuaki

1. 略歴

1981年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業  
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了  
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学  
1986年4月 東京大学文学部助手  
1988年4月 フェリス女学院大学文学部専任講師  
1991年4月 フェリス女学院大学文学部助教授  
1993年4月 上智大学文学部助教授  
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
1999年4月 博士（文学）（東京大学）  
2006年10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中世文学、和歌文学

b 研究課題

和歌文学については、マクロ的には和歌史を構想し記述すること、ミクロ的には新古今集前後を中心とした中世和歌作品の方法を解明することを課題としている。前者は専門化し、細分化された研究の現状に対して、和歌を長い射程のもとに捉え、この文芸のもつ意義と独自性を総体的に把握することを目指している。後者は、作品を完成したものとして結果論的に捉えるだけではなく、より作者自身の方法に即した、内在的な理解を目標としている。

中世文学については、徒然草や方丈記など、とくに和歌的素養を基盤とした作品について、とくにその文体と方法を解明することを目標としている。

## c 主要業績

### (1) 著書

- 共著、谷知子・渡部泰明ほか、『平安文学をいかに読み直すか』、笠間書院、2012.10  
共著、阿部泰郎・渡部泰明・鈴木健一・松澤克之、『天皇の歴史10 天皇と芸能』、講談社、2012.11  
共著、小峯和明・渡部泰明ほか、『日本文学史 古代・中世編』、ミネルヴァ書房、2013.5  
共著、安藤宏・高田祐彦・渡部泰明、『日本文学の表現機構』、岩波書店、2014.3  
共著、島内裕子・渡部泰明・島内景二、『和歌文学の世界』、放送大学教育振興会、2014.3

### (2) 論文

- 渡部泰明、「徒然草と兼好法師集」、『国語と国文学』、第89巻第5号、112～124頁、2012.5  
渡部泰明、「百人一首選歌の謎」、『ユリイカ』、第44巻第16号、81～90頁、2012.12

### (3) 学会

- 国内、渡部泰明、「和歌の本意」、能楽学会2013年度大会シンポジウム、早稲田大学小野記念講堂、2013.5.26  
国際、渡部泰明、「歌の〈かたち〉——源俊頼の方法——」、東京文化財研究所国際シンポジウム、2014.1.10～12  
国際、渡部泰明、「百人一首と定家」、日本女子大学国文学会国際シンポジウム、2014.3.22

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

- 駒澤大学文学部、非常勤講師  
学習院大学文学部、非常勤講師  
放送大学、客員教授、「和歌の心と情景」(2010～2013)

### (2) 学会

- 和歌文学会、常任委員  
中世文学会、常任委員  
日本文学協会、委員

教授 **安藤 宏**

ANDO, Hiroshi

## 1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業  
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了  
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程中退  
1987年4月 東京大学文学部助手  
1990年4月 上智大学文学部専任講師  
1995年4月 上智大学文学部助教授  
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授  
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

日本近代文学

## b 研究課題

太宰治の文学の自意識過剰の饒舌体と呼ばれる文体に注目するところから出発、そのような文体が育まれてゆく必然性を近代文学史の展開に即して考察して行く中で、書き手の表現意識が「私小説」というわが国独自の表現形式を生み出してゆく機構にあらためて着目するに至った。いわゆる作家論の一環として太宰治の文学の特質を解明して行く方向と、日本近代文学における「自己」表現の歴史の変容を解明して行く方向とを、同時並行的におしすすめて行くことを現在の研究課題としている。

## c 主要業績

### (1) 著書

共著、安藤宏・高田祐彦・渡部泰明、『日本文学の表現機構』、岩波書店、2014.3

### (2) 論文

安藤宏、「片岡鉄兵関連資料から見えてくるもの」、『日本近代文学館年誌 資料探索』、8号、2013.3

安藤宏、「「道化の華」から見えてくる近代小説史」、『日本文学論究』、第七十三冊、36～47頁、2014.3

安藤宏、「近代日本文学」という制度の成立『人文知 3境界と交流』（熊野純彦、佐藤健二編、東京大学出版会、2014年9月刊行予定）

### (3) 解説

安藤宏、「日本近代文学館年誌」第8号紹介「個」を繋ぐネットワーク、『日本近代文学館』、第253号、5頁、2013.12

安藤宏、「資料解題」、『DVD版日本近代文学館所蔵『太宰治 直筆原稿集』全三巻』、第一巻、7～13頁、第二巻、7～22頁、第三巻、7～21頁、2014.2

安藤宏、「太宰治文庫」のデジタル化について、『日本近代文学館』、第258号、2頁、2014.3

### (4) 啓蒙

安藤宏、「我田引水の弁」、『文学』、14巻3号、50～63頁、2013.5

### (5) 予稿・会議録

国際会議、安藤宏、「舞姫」読解の問題点 東京大学・コロンビア大学合同国際シンポジウム「日本文学に関する研究と教育の国際化」基調報告、2013年3月29日、於コロンビア大学

安藤宏、「六月例会所感」、『会報』119 日本近代文学会、36～37頁、2013.9

### (6) 受賞

国内、安藤宏、第21回やまなし文学賞 研究・評論部門、山梨県、2013.3

国内、安藤宏、第35回角川源義賞 研究評論部門、角川文化振興財団、2013.12.5

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

放送大学、早稲田大学、成城大学、上智大学、慶應義塾大学

### (2) 学会

日本近代文学会理事、昭和文学会常任幹事、日本近代文学館理事

## 1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程入学
1986年3月	同 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1990年3月	同 単位取得退学
1990年4月	帝塚山学院大学文学部専任講師
1994年4月	帝塚山学院大学文学部助教授
1995年4月	東京女子大学文理学部助教授
2003年4月	東京女子大学文理学部教授
2007年12月	東京大学大学院人文科学研究科 国語国文学専門課程 博士（文学）学位取得
2009年4月	東京女子大学現代教養学部教授（改組による学部名変更）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

日本上代文学・和歌文学

### b 研究課題

上代（奈良時代以前）日本文学を、韻文中心に研究している。特に『万葉集』の歌人、柿本人麻呂や、大伴家持の作品について、その読み直しを課題としている。『万葉集』の和歌は、中国の先進文明に正面から向き合っ成立した日本という国家における草創期の文芸であり、漢詩文の表現に対して、学びつつ対抗するという両義的な関係を結んでいる。それゆえ、当時伝来していた六朝・初唐の漢詩文との比較・対照を主たる研究方法として、和歌独自の表現を明らかにしつつ、その価値を見出すことを論文執筆の際の、目標としている。更に『万葉集』は、7世紀前半から、8世紀中ごろまでの和歌の歴史を語る書物であると考えられ、歌人たちの積み重ねた作品群がいかなる軌跡を描くか、すなわち『万葉集』の和歌史を明らかにすることを、研究全体の目標とする。

### c 主要業績

#### (1) 著書

共著、久保田淳・佐伯真一・鈴木健一・高田祐彦・鉄野昌弘・山中玲子、『人生をひもとく 日本の古典 からだ』、岩波書店、2013.6

共著、久保田淳・佐伯真一・鈴木健一・高田祐彦・鉄野昌弘・山中玲子、『人生をひもとく 日本の古典 はたらく』、岩波書店、2013.7

共著、久保田淳・佐伯真一・鈴木健一・高田祐彦・鉄野昌弘・山中玲子、『人生をひもとく 日本の古典 つながる』、岩波書店、2013.8

単著、鉄野昌弘、『日本人のこころの言葉 大伴家持』、創元社、2013.8

共著、久保田淳・佐伯真一・鈴木健一・高田祐彦・鉄野昌弘・山中玲子、『人生をひもとく 日本の古典 たたかう』、岩波書店、2013.9

共著、久保田淳・佐伯真一・鈴木健一・高田祐彦・鉄野昌弘・山中玲子、『人生をひもとく 日本の古典 いのる』、岩波書店、2013.10

共著、久保田淳・佐伯真一・鈴木健一・高田祐彦・鉄野昌弘・山中玲子、『人生をひもとく 日本の古典 死ぬ』、岩波書店、2013.11

#### (2) 論文

鉄野昌弘、「防人歌再考～「公」と「私」～」、『萬葉集研究』33集、塙書房、75-128頁、2012.10

鉄野昌弘「編纂者としての大伴家持～「十五巻本」と「二十巻本」～」、『アナホリッシュ国文学』1号、62-70頁、2012.12

鉄野昌弘、「をとこをみなの花にほひ見に 一卷二十家持作歌の方法一」、『萬葉』、215号、1-22頁、2013.9

鉄野昌弘、「『万葉集』巻十六について ―「無心所著歌」を中心に―」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、27、2014.3

鉄野昌弘「家持の歌のかたち ―越中時代へ、越中時代から―」『高岡市萬葉歴史館叢書 26 歌の道 一家持へ、家持から―』2014.3

(3) 学会発表

上代文学会 1 月例会発表「大伴家持の防人関連歌をめぐって」2014.1.11、於昭和女子大学

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

早稲田大学文学学術院（大学院）非常勤講師、2012.4～2013.3

東京女子大学非常勤講師、2013.4～2014.3

(2) 学会

萬葉学会、編輯委員

上代文学会、常任理事

(3) 学外組織

日本古典文学学術賞選考委員会委員

大学評価・学位授与機構、国語・国文学部会専門委員

准教授 **高木 和子** TAKAGI, Kazuko

### 1. 略歴

1988年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1988年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学修士課程入学
1991年3月	同 修了
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学博士課程進学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学 専門分野博士課程単位取得退学
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学 専門分野研究生（～1997年3月）
1998年4月	博士（文学）学位取得（東京大学）
1998年4月	関西学院大学文学部専任講師
2002年4月	関西学院大学文学部助教授（2007年4月より准教授）
2008年4月	関西学院大学文学部教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

平安仮名文学、源氏物語

#### b 研究課題

源氏物語は、平安前期に成立した長編物語・歌物語・和歌の発想を基盤とし、日記文学・漢詩文・史実等を貪婪に吸収して成立したと思われる。そこに到りつくまでの文学史的な動態、及び、源氏物語それ自体の構造や表現の分析を主な研究課題としており、初期の成果は『源氏物語の思考』（風間書房、2002年、第五回紫式部学術賞受賞）にまとめた。また平安時代の人々の思考や発想の形式にも関心を寄せており、和歌の贈答の分析を通じた意思伝達の呼吸などについて、『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』（青簡舎、2008年）に提案した。そのほか、研究成果を一般の人々に分かりやすく伝える仕事として、瀬戸内寂聴訳源氏物語の注釈等の執筆のほか『男読み 源氏物語』（朝日新書、2008年）、『コレクション日本歌人選 和泉式部』（笠間書院、2011年）、『平安文学でわかる恋の法則』（ちくまプリマー新書、2011年）等の一般書も手掛けている。

## c 主要業績

### (1) 論文

高木和子、「源氏物語における儀礼の歌」、小嶋菜温子・長谷川範章編『源氏物語と儀礼』、武蔵野書院、635-650頁、2012年10月

高木和子、「源氏物語における類聚性」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、第27号、57-68頁、2014年3月

### (2) 解説

高木和子、「原文を習ふ」、『週刊 絵巻で楽しむ源氏物語』、朝日新聞出版、毎週刊行全60巻のうちの偶数号、各2頁、2011年11月～2013年2月

### (3) 学会発表

国際、「源氏物語の世界—光源氏の好色とは何か—」2013年11月25日、於ソウル大学

### (4) その他

コラム「随想」『神戸新聞』夕刊、2013年1月～4月、全7回

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

関西学院大学非常勤講師、2013年4月～2014年3月

連続講座、兵庫県芸術文化協会、「源氏物語に親しむ」、2009年4月～2013年2月

### (2) 学会

中古文学会委員、2007年6月～

東京大学国語国文学会評議員、2013年4月～

# 10 日本史学

教授 **村井 章介** MURAI, Shosuke

## 1. 略歴

- 1972年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業（文学士）
- 1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（国史学）
- 1974年4月 東京大学史料編纂所入所
- 1975年4月 東京大学史料編纂所助手（中世史料部）
- 1985年4月 東京大学史料編纂所助教授（中世史料部）
- 1991年4月 東京大学文学部助教授（国史学）
- 1993年3月 博士（文学）取得
- 1993年3月 ボッフム・ルール大学交換教授（1994年1月まで）
- 1994年4月 東京大学文学部教授（日本史学）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本文化研究専攻）
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本文化研究専攻、韓国朝鮮文化研究専攻兼任）
- 2004年8月 北京日本学研究中心センター派遣教授（2005年1月まで）
- 2007年3月 韓国朝鮮文化研究専攻兼任を解かれる
- 2013年3月 東京大学大学院人文社会系研究科定年退職

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

日本中世史

### b 研究課題

9～17世紀の日本列島およびその周辺の政治や文化や社会を、国家領域を超えた<地域>のなかでとらえなおす。その<地域>の担い手となる人間集団の行動、物や情報の動き、あるいは<地域>外集団との相互認識や境界の性格などを解明する。そのほか、政治史を中心とした通史叙述、地域論や対外関係とリンクさせた交通史、中世史料論などにも関心をもつ。

### c 主要業績

#### (1) 著書

- 単著、村井章介、『世界史のなかの戦国日本』、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2012.4
- 共著、荒野泰典・石井正敏・村井章介、『日本の対外関係7近代化する日本』、吉川弘文館、2012.4
- 編著、村井章介、『Intercultural Contact in Medieval Japan (『ACTA ASIATICA』№103)』、東方学会、2012.8
- 単著、村井章介、『さかのぼり日本史6 戦国・なぜ、大航海時代に戦国の世は統一されたのかー富と野望の外交戦略』、NHK出版、2013.2
- 単著、村井章介、『日本中世境界史論』、岩波書店、2013.3
- 単著、村井章介、『増補・中世日本の内と外』、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2013.3

#### (2) 論文

- 村井章介、「日記の人名比定と室町文化研究ー綾小路信俊の亡霊をみたー」、『日本史研究』、596号、2012.4
- 村井章介、「「公界」は一揆か、公権力かー『相良氏法度』第十八条の解釈をめぐってー」、『東京大学日本史学研究室紀要』、別冊・中世政治社会論叢、2013.3

#### (3) 書評

- 柳原敏昭、『中世日本の周縁と東アジア』、吉川弘文館、『歴史（東北史学会）』、119号、2012.10
- 鹿毛敏夫、『アジア戦国大名大友氏の研究』、吉川弘文館、『歴史評論』、751号、2012.11

#### (4) 解説

- 村井章介、「解説」、田中健夫著『倭寇ー海の歴史』（講談社）、講談社学術文庫、2012.1
- 村井章介、「解説」、田中健夫著『増補・倭寇と勘合貿易』（筑摩書房）、ちくま学芸文庫、2012.12

### (5) 学会発表

- 国内、村井章介、「中世鎌倉における禅宗の輸入」、武家の古都鎌倉塾第3回、鎌倉芸術館、鎌倉市、2012.6.23
- 国内、村井章介、「中世史における「アジア」」、中世史サマーセミナー50周年記念シンポジウム「中世史研究の歩み—サマーセミナー50周年によせて」、埼玉県立嵐山史跡の博物館、2012.8.26
- 国内、村井章介、「中世史学の未来像を求めて」、史学会大会第110回大会日本中世史部会シンポジウム「中世史学の未来像を求めて」、東京大学本郷キャンパス、2012.11.11
- 国内、村井章介、「<境界>を考える」、歴史学研究会創立80周年記念シンポジウム「歴史学のアクチュアリティ」、明治大学駿河台校舎リハビリタワー、2012.12.15
- 国内、村井章介、「異文化接触としての戦争」、東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター先端構想部門 第204回文化交流研究懇談会、東京大学文学部、2013.1.10
- 国際、村井章介、「Tributary Relationships and Maritime Exchange in Maritime Asia」、Maritime Perspectives in Eurasian and Indian Ocean World History: Towards a Global History、Indian Ocean World Centre, McGill University, Montreal, Canada、2013.2.18

### (6) 史料

- 村井章介・勘仲記の会、「『勘仲記』弘安十年二月記—翻刻と注釈—」、『鎌倉遺文研究』30号、2012.10

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

- 早稲田大学文学学術院非常勤講師、2010.4～2012.3
- 法政大学大学院人文科学研究科兼任講師、2010.4以前より継続中
- 立正大学大学院文学研究科非常勤講師、2012.4～2013.3
- 関西大学文学部非常勤講師（集中講義）、2012.7
- 別府大学大学院文学研究科非常勤講師（集中講義）、2012.12

### (2) 学会

- 日本歴史学会評議員、2010.4以前より継続中
- 日本古文書学会理事、2010.4以前より継続中
- 東アジア文化交渉史学会評議員、
- 財団法人東方学会第33期学術委員、2011.9～継続中

### (3) 行政

- 日本学術会議連携会員、2008.10～継続中
- 石見銀山学形成事業有識者会議指導者（島根県・大田市）、2011.1～継続中

### (4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

- 財団法人東洋文庫研究員、2010.4以前より継続中

**1. 略歴**

- 1976年 3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業  
1978年 3月 東京大学大学院人文科学研究科（国史学）修士課程修了（文学修士）  
1978年 12月 東京大学大学院人文科学研究科（国史学）博士課程中退  
1979年 1月 奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員  
1985年 4月 文化庁文化財保護部（記念物課）  
1987年 7月 文化庁文化財調査官  
1989年 4月 聖心女子大学文学部助教授  
1992年 4月 東京大学文学部助教授（国史学）  
1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本史学）  
1996年 7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本史学）  
1997年 7月 博士（文学）取得（東京大学）

**2. 主な研究活動****a 専門分野**

日本古代史

**b 研究課題**

古代都市、出土文字資料（木簡学）、古代国家財政、文化財学。

**c 主要業績****(1) 著書**

- 共著、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉、『古代氏文集』、山川出版社、2012.4  
編著、須田勉・佐藤信編、『国分寺の創建 組織・技術論』、吉川弘文館、2013.1  
編著、松江市史編集委員会、『松江市史 史料編3 古代・中世 I』、松江市、2013.3

**(2) 論文**

- 佐藤信、「古代鞠智城と東アジア」、『古代山城鞠智城を考える II』熊本県教育委員会、84～96 頁、2012.8  
佐藤信、「国分寺の造営と在地社会」、須田勉・佐藤信編『国分寺の創建 組織・技術論』吉川弘文館、2013.1  
佐藤信、「和田山 23 号墳出土の須恵器刻書銘について」、『能美古墳群—総括編—』（第IV章第 4 節）石川県能美市教育委員会、279-300 頁、2013.3  
佐藤信、「出土文字資料から見た出雲国府」、『史跡出雲国府跡 9 総括編』（風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22）、島根県埋蔵文化財調査センター、292-299 頁、2013.10  
佐藤信、「鞠智城の歴史的位置」、『鞠智城跡 II —論考編 1—』熊本県教育委員会、3-16 頁、2014.3  
佐藤信、「風土記研究の最前線」、『しまねの古代文化』島根県古代文化センター、21 号、71-88 頁、2014.3  
佐藤信、「美作国建国と律令国家」、『岡山の自然と文化』岡山県郷土文化財団、33 号、2014.3

**(3) 学会発表**

- 国内、佐藤信、「前九年合戦と安倍氏の実像」、第 10 回安倍氏の柵シンポジウム「前九年合戦の中の安倍氏の柵」、岩手県金ヶ崎町中央生涯教育センター、2013.2.16  
国内、佐藤信、「大隅国建国と律令国家」、大隅国建国 1300 年記念シンポジウム「大隅国建国がもたらしたもの」、鹿児島県霧島市国分シビックセンター、2013.5.11  
国内、佐藤信、「日本古代史のなかの武蔵国分寺」、2013 年度国分寺市本多公民館歴史講座、東京都国分寺市本多公民館、2013.7.18  
国内、佐藤信、「出土文字資料からみた出雲国府」、島根県平成 25 年度第 2 回埋蔵文化財専門研修講演、島根県埋蔵文化財調査センター、2013.8.2  
国内、佐藤信、「郡家の構造と機能」、第 24 回出雲古代史研究会大会、島根県埋蔵文化財調査センター、2013.8.2  
国内、佐藤信、「東大寺横江荘遺跡をめぐって」、東大寺要録研究会（第 6 回研究会）、東大寺総合文化センター、2013.9.21  
国内、佐藤信、「道鏡と下野国」、道鏡講演会（道鏡を守る会主催）、栃木県宇都宮市宇都宮コンサーレ、2013.10.6  
国内、佐藤信、「出雲国府の実像」、平成 25 年度松江市史講座（第 47 講）、島根県松江市総合文化センター、2013.10.19

国内、佐藤信、「出雲国府と奈良の都」、松江市大庭公民館郷土学習講座、島根県松江市大庭公民館、2013.10.26  
国内、佐藤信、「風土記研究の最前線」、風土記フェスタ公開シンポジウム「風土記研究の最前線」、松江テルサホール（島根県松江市）、2013.10.27  
国内、佐藤信、「美作国建国と律令国家」、第3回おかやま文化フォーラム「美作国建国と律令国家」、岡山県津山市津山文化センター、2013.11.9

#### (4) 受賞

国内、須田勉・佐藤信、第1回住田古瓦・考古学研究奨励賞、須田勉・佐藤信編『国分寺の創建 組織・技術論』吉川弘文館、公益財団法人交通研究協会、2013.3

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

放送大学、「日本古代中世史」、2012.4～2014.3

非常勤講師、國學院大學大学院文学研究科、「古代寺院史料の研究・出土文字資料の研究」、2012.4～2013.3、2013.10～2014.3

非常勤講師、法政大学大学院人文科学研究科、「古代国司関係史料の研究」、2012.4～2013.3、2013.10～2014.3

#### (2) 学会

国内、史学研究会、評議員、2012～2013

国内、木簡学会、委員、2012.4～2014.3

国内、日本歴史学会、評議員、2012.4～2014.3

国内、条里制・古代都市研究会、評議員、2012.4～2014.3

#### (3) 行政

文化庁、教育政策、文化審議会文化財分科会第三専門調査会専門委員、2012～

文化庁、教育政策、文化審議会文化財分科会世界文化遺産特別委員会委員、2012～

文化庁、教育政策、古墳壁画の保存活用に関する検討会委員、2012～

宮内庁、その他、陵墓管理委員、2012～

文化庁、教育政策、水中遺跡調査検討委員会委員、2013.4～

#### (4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、文京区、文化財保護審議会委員、2012～

教育機関、松江市、松江市史編集委員、2012～

教育機関、葛飾区、葛飾区史編集委員会委員長、2012～

その他、日本公園緑地協会、研究顧問、2012～

その他、横浜市ふるさと歴史財団、評議員、2012～

その他、群馬県埋蔵文化財調査事業団、特別顧問、2012～

教育機関、岩手県二戸市教育委員会、史跡九戸城跡整備指導委員会委員、2012～

教育機関、岩手県教育委員会、平泉遺跡群調査整備指導委員会委員、2012～

教育機関、岩手県矢巾町教育委員会、史跡徳丹城跡調査指導委員会委員、2012～

教育機関、陸前高田市教育委員会、陸前高田市文化財等保存活用計画策定委員会、2012～

教育機関、宮城県教育委員会、多賀城跡調査研究委員会委員、2012～

教育機関、山形県天童市教育委員会、史跡西沼田遺跡整備検討委員会委員、2012～2014.3

教育機関、栃木県下野市教育委員会、史跡下野国分寺跡保存整備委員会委員、2012～2014.3

教育機関、栃木県宇都宮市・上三川町教育委員会、史跡上神主・茂原官衙遺跡保存整備委員会委員、2012～

教育機関、群馬県太田市教育委員会、史跡上野国新田郡庁跡調査・整備専門委員会委員、2012～

教育機関、群馬県伊勢崎市教育委員会、三軒屋遺跡調査検討委員会委員、2012～

教育機関、山梨県笛吹市教育委員会、甲斐国分寺跡・国分尼寺跡保存整備専門委員会委員、2012～

教育機関、東京都国分寺市教育委員会、武蔵国分寺跡保存整備委員会委員、2012～

教育機関、東京都府中市教育委員会、史跡武蔵国府跡保存整備活用検討協議会委員、2012～

教育機関、三重県立斎宮歴史博物館、運営専門委員会委員、2012～

教育機関、奈良県立橿原考古学研究所、共同研究員、2012～2013.3

教育機関、島根県古代文化センター、企画運営委員会委員、2012～

教育機関、島根県教育委員会、出雲国府跡発掘調査指導委員会委員、2012～2014.3

教育機関、福岡県教育委員会、大宰府史跡調査研究指導委員会委員、2012～  
教育機関、福岡市教育委員会、こうろ館跡調査研究指導委員会委員、2012～2013.5  
その他、宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進協議会、宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進会議専門家会議委員、2012～  
教育機関、熊本県教育委員会、鞠智城跡保存整備検討委員会委員、2012～  
独立行政法人、国立歴史民俗博物館、運営会議委員、2012.4～  
独立行政法人、国立文化財機構、外部評価委員会委員、2012.4～  
教育機関、群馬県教育委員会、史跡上野国分寺跡千代字佐整備検討委員会委員、2012.4～  
その他、高梨学術奨励基金、選考委員、2013～  
教育機関、高崎市教育委員会、多胡碑周辺遺跡調査検討委員会委員、2013～  
教育機関、埼玉県立史跡の博物館、史跡埼玉古墳群保存整備協議会委員、2013～

教授 **加藤 陽子** (戸籍名は野島陽子) KATO, Yoko

<http://www4.ocn.ne.jp/~aninoji/>

## 1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業 (文学士)  
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (国史学)  
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学 (国史学)  
1989年4月 山梨大学教育学部専任講師 (日本史学)  
1991年4月 山梨大学教育学部助教授 (日本史学)  
1992年12月 文部省在外研究員として、スタンフォード大学東アジアコレクション、ハーバード大学  
ライシャワーセンター研究員  
1994年4月 東京大学文学部助教授 (日本史学)  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (日本史学)  
1997年2月 博士 (文学) 取得  
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (日本史学)

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

日本近代史

### b 研究課題

1930年代の日本の政治と外交

### c 主要業績

#### (1) 著書

共著、加藤陽子、メトロポリタン史学会編『20世紀の戦争』、有志舎、2012.7

共著、加藤陽子、増田弘編著『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』、慶應義塾大学出版会、2012.11

共著、加藤陽子、三宅正樹・庄司潤一郎ほか編『検証 太平洋戦争とその戦略 3 日本と連合国の戦略比較』、中央公論新社、2013.8

共著、加藤陽子「第1次世界大戦中の「戦後」構想—講和準備委員会と幣原喜重郎—」、劉傑・川島真編『対立と共存の歴史認識』東京大学出版会、2013.8

共著、加藤陽子、明石康編『日本の立ち位置を考える』、岩波書店、2013.9

#### (2) 学会発表

国際、YOKO KATO、"Recent Developments in Research on Fascism in Japan"、8th International Convention of Asian Scholars、2013.6

国際、加藤陽子、「軍事史研究から見た日中戦争—興亜院の歴史的立場づけをめぐって」、第二次世界大戦背景下的  
中日戦争 中日戦争国際共同研究第五次会議、中華人民共和国重慶市、2013.9.15

(3) 小論・解説

「回顧と展望／歴史理論」（二〇一二年の歴史学界）、『史学雑誌』第122編第5号、2013.5、pp.6-10

(4) 講演

「近代の戦争と田中正造」、田中正造没後100年記念行事、第41回渡良瀬川鉍毒シンポジウム、2013.8、於佐野市

### 3. 主な社会活動

(1) 学会

史学会編集委員、日本歴史学会評議員

(2) 行政

内閣府、公文書管理委員会委員

公文書管理委員会、不服審査分科会委員

内閣府、国立公文書館の機能・施設の在り方等に関する検討会議

教授 **大津 透**

OTSU, Toru

### 1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業  
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程国史学専門課程修了  
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程国史学専門課程中退  
1987年4月 山梨大学教育学部講師（歴史学）  
1990年9月 山梨大学教育学部助教授（歴史学）  
1994年11月 博士（文学）  
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
2010年7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

日本古代史

#### b 研究課題

古代天皇制、日唐律令制比較研究、摂関期国家の研究

#### c 主要業績

(1) 著書

共著、佐藤弘夫ほか編、『日本思想史講座1』、ペリかん社、2012.4

共著、山中裕編、『御堂関白記全註釈寛弘六年〔改訂版〕』、思文閣出版、2012.9

単著、大津透、『律令制とはなにか』、山川出版社、2013.3

共著、大津透ほか、『岩波講座日本歴史1 原始・古代1』、岩波書店、2013.11

(2) 論文

大津透、「歴史の風 中国からみる古代日本」、『史学雑誌』、121編7号、38-40頁、2012.7

大津透、「古代日本律令制の特質—天聖令の発見・公刊によってみえてきたこと」、『思想』、1067、27-51頁、2013.3

大津透、「藤原道長の歴史的意義」、『むらさき』、50、4-13頁、2013.12

(3) 書評

荒川正晴、『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』、名古屋大学出版会、『史学雑誌』、121編3号、79-86頁、2012.3

義江明子、『古代王権論 神話・歴史感覚・ジェンダー』、『史学雑誌』、121 編 9 号、59-74 頁、2012.9  
鹿内浩胤、『日本古代典籍史料の研究』、『史学雑誌』、121 編 10 号、109-110 頁、2012.10

(4) 解説

大津透、『『史書を読む』解説』、坂本太郎著『史書を読む』、233-240 頁、2013.10

(5) 学会発表

国内、大津透、「古代日本律令制の特質」、法制史学会第 64 回総会、金沢スカイホテル、2012.6.17

国内、大津透、「藤原道長の歴史的意義」、紫式部学会創立 80 周年記念講演会、東京大学、2012.12.1

(6) 会議主催(チェア他)

国内、「第 57 回国際東方学者会議」、チェア、天聖令と律令制比較研究Ⅱ、日本教育会館、2012.5.25

### 3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本歴史学会、理事、2010.7～

国内、史学会、理事、2011.5～

国内、東方学会、理事・評議員、2009.9～2013.3、理事、2013.4～、東方学編集委員、2012.1～

教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun

### 1. 略歴

1986 年 3 月 東京大学文学部国史学科卒業

1992 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻博士課程修了  
(1995 年 3 月 博士(文学)学位取得)

1992 年 4 月 東京大学社会科学研究所助手

1994 年 4 月 東京大学教養学部助教授

1996 年 1-10 月 ドイツ、ボーフム大学 (Ruhr-Universität Bochum) 客員教授

1996 年 4 月 東京大学大学院総合文化研究科助教授 (大学院重点化による)

1999 年 10 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2007 年 4 月 同准教授

2012 年 8 月 同教授

2012 年 8 月-2013 年 3 月 米国、イェール大学 (Yale University) 客員研究員

### 2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

明治期の機械工業が元来の研究課題。新技術の導入が社会をどのように変えて行くのかという問題関心を中心に、史料に即した明治・大正期の再検討を心がけている。

c 主要業績

(1) 著書

共著、横須賀市、『新横須賀市史 別編 軍事』、横須賀市、2012.12

(2) 論文

鈴木淳、「官営工場と民間工場」、『講座明治維新』、8、135～163 頁、2013.12

鈴木淳、「官僚制と軍隊」、『岩波講座日本歴史』、近現代 1、203～240 頁、2014.2

(3) 解説

鈴木淳、『大日本消防協会雑誌』解説、復刻版『大日本消防協会雑誌』別冊、5～37 頁、2013.9

#### (4) 学会発表

国際、鈴木淳、「Comparison of naval factory between Meiji Japan and Qing China」、REVISITING EAST ASIAN ECONOMIC HISTORY FROM A GLOBAL PERSPECTIVE、Yale University、2012.9.28

#### (5) 教科書

『詳説 日本史B』、笹山晴生、佐藤信、五味文彦、高埜利彦、執筆、山川出版社、2013  
『日本史A』、高村直助、高埜利彦、執筆、山川出版社、2013

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

セミナー、Yale University、「The Great Kanto Earthquake of 1923」、2013.2.1

#### (2) 学会

政治経済学・経済史学会、理事・編集委員

日本産業技術史学会、理事

日本歴史学会、評議員、理事（2012年7月まで）

史学会編集委員（2013年6月まで）

#### (3) 行政

群馬県、群馬県世界遺産学術委員会委員

准教授 **牧原 成征**

MAKIHARA, Shigeyuki

### 1. 略歴

1994年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業  
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻修士課程修了  
1999年12月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程単位修得の上退学  
2000年1月 日本学術振興会特別研究員（PD）  
2003年3月 博士（文学）（東京大学）（博人社390号）  
2004年4月 宇都宮大学教育学部助教授（社会科教育講座）  
2007年4月 宇都宮大学教育学部准教授（同）  
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

日本近世史

#### b 研究課題

近世史を専攻し、これまで信州・近江・関東等の村落構造や土地制度を中心に、商人や流通・交通・金融、かわた等の身分とその集団などを検討してきたほか、中世から近世にかけての社会の変容を、土地・身分政策に即して論じてきた。今後はそれらをふまえて、幕府や江戸、藩や城下町についても少しずつ研究を進めたいと考えている。

#### c 主要業績

##### (1) 論文

牧原成征、「商人と流通の近世」、『論集きんせい』、34、2-12頁、2012.5

牧原成征、「かわた村と地域社会—武州下和名と下吉見領」、『東京大学日本史学研究室紀要別冊 吉田伸之先生退職記念 近世社会史論叢』、129-144頁、2013.4

高埜利彦・牧原成征ほか、「2012年の歴史学界—回顧と展望—日本 近世」、『史学雑誌』、122-5、109-111頁、2013.5

牧原成征、「安良城盛昭『幕藩体制社会の成立と構造』」、『日本史研究』、616、31-42頁、2013.12

牧原成征、「兵農分離と石高制」、藤井譲治ほか編『岩波講座日本歴史第10巻近世1』、岩波書店、2014.1

(2) 書評

牧原成征、「白川部達夫著『近世質地請戻し慣行の研究』、『社会経済史学』、79-1、119-121 頁、2013.5

牧原成征、「池上裕子著『日本中近世移行期論』、『歴史評論』、766、87-91 頁、2014.2

(3) 学会発表

牧原成征、「日本の近世化をめぐる—小農社会論の受け止め方を中心に」、歴史学研究会日本近世史・ヨーロッパ中近世史部会合同シンポジウム「近世化」論と日本—「東アジア」の捉え方をめぐる—、東京大学駒場キャンパス、2013.1.12

(4) 啓蒙

牧原成征、「検地・刀狩」、『週刊 新発見！日本の歴史』、4、朝日新聞出版、2013.7

(5) 会議主催(チェア他)

国内、「史学会大会」、チェア・実行委員、日本近世史部会、東京大学文学部、2012.11.10～2012.11.11

国内、「史学会大会」、チェア・実行委員、日本近世史部会、東京大学文学部、2013.11.9～2013.11.10

(6) 共同研究・受託研究

科学研究費補助金「若手研究 (B)」 「中世・近世移行期、北関東における地域社会構造の研究」研究代表者、2009～2012 年度

科学研究費補助金「基盤研究 (C)」 「近世遊廓の構造とその社会的基盤」 (研究代表者・横山百合子) 研究分担者、2013 年度～

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶応大学文学部、「日本史特殊」、2013.4～2014.3

(2) 学会

国内、史学会、史学雑誌編集委員、2012.4～2013.5

国内、歴史学研究会、委員、2012.4～2013.5

准教授 **高橋 典幸** TAKAHASHI, Noriyuki

### 1. 略歴

1993 年 3 月	東京大学文学部国史学専修課程卒業
1995 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
1997 年 7 月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻 (日本史学) 博士課程中退
1997 年 8 月	東京大学史料編纂所助手
2007 年 4 月	東京大学史料編纂所助教
2009 年 1 月	博士 (文学) 学位取得 (東京大学)
2012 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

### 2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

中世武家政権の研究、14 世紀政治社会史の研究

c 主要業績

(1) 編著

単著、高橋典幸、『鎌倉幕府軍制と御家人制』、吉川弘文館、2008.8

編著、高橋典幸編、『朝日百科 新発見！日本の歴史 20 鎌倉 3 対モンゴル戦争は何を変えたか』、朝日新聞出版、2013.11

## (2) 論文

高橋典幸、「鎌倉幕府の成立をめぐる」、『文化交流研究（東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要）』、26、27-31 頁、2013.3

高橋典幸、「南北朝期の城郭戦と交通」、『中世政治社会論叢（東京大学日本史学研究室紀要別冊）』、147-158 頁、2013.3

高橋典幸、「年貢散用状ノート」、悪党研究会編『中世荘園の基層』（岩田書院）、167-184 頁、2013.12

高橋典幸、「鎌倉幕府論」、『岩波講座日本歴史 6 中世 1』（岩波書店）、99-128 頁、2013.12

高橋典幸、「後白河院 暗主の波乱万丈の生涯」、元木泰雄編『保元・平治の乱と平氏の栄華』（清文堂）、153-178 頁、2014.3

## (3) 書評

小川剛生（校訂）、『迎陽記 第一』（史料纂集古記録編）、八木書店、『日本歴史』、777、109-111 頁、2013.2

## (4) 解説

明月記研究会、『明月記』（建仁三年十二月）を読む、『明月記研究』、13、2-62 頁、2012.1

高橋典幸、「地頭論争」、木村茂光（監修）・歴史科学協議会（編）『戦後歴史学用語辞典』（東京堂出版）、2012.7

高橋典幸、「呉座報告批判（2012 年度歴史学研究会大会中世史部会報告批判）」、『歴史学研究』、900、42-43 頁、2012.12

高橋典幸、「【インタビュー】鎌倉幕府とは何か（上）」、『歴史地理教育』、815、18-27 頁、2014.2

高橋典幸、「【インタビュー】鎌倉幕府とは何か（下）」、『歴史地理教育』、816、66-73 頁、2014.3

## (5) 学会発表

国内、高橋典幸、「鎌倉幕府と朝廷」、科研費（B）「文化現象としての『源平盛衰記』（課題番号 22320051、研究代表：松尾葦江）による公開講演会、國學院大学（東京・渋谷）、2012.11.17

国内、高橋典幸、「後白河院、二つの脱出劇」、科研費（B）「文化現象としての『源平盛衰記』（課題番号 22320051、研究代表：松尾葦江）、國學院大学（東京・渋谷）、2013.11.16

## (6) 啓蒙

高橋典幸、「モンゴル襲来前夜の外交戦に注目！」、『週刊朝日百科 新発見！日本の歴史』、20 鎌倉 3 対モンゴル戦争は何を変えたか、4-6 頁、2013.11

高橋典幸、「モンゴル襲来と終焉に向かう鎌倉幕府」、『週刊朝日百科 新発見！日本の歴史』、20 鎌倉 3 対モンゴル戦争は何を変えたか、10-15 頁、2013.11

高橋典幸、「鎌倉幕府の滅亡と武蔵武士」、関幸彦編『武蔵武士団』（吉川弘文館）、80-92 頁、2014.2

高橋典幸、「東国武士の移動と移住」、関幸彦編『武蔵武士団』（吉川弘文館）、146-159 頁、2014.2

## (7) 会議主催(チェア他)

国内、「第 110 回史学会大会」、実行委員、日本史部会（中世史部会）司会、東京大学、2012.11.10～2012.11.11

国内、「第 111 回史学会大会」、実行委員、日本史部会（中世史部会）司会、東京大学、2013.11.9～2013.11.10

## (8) マスコミ

書評 桜井英治著『贈与の歴史学』、『日本経済新聞』、2012.2.26

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、東洋大学（文学部）、「日本史学演習」、2012.4～2014.3

非常勤講師、清泉女子大学（文学部）、「古文書学」、2012.4～2013.3

非常勤講師、慶應義塾大学（法）、「中世日本政治史」、2013.4～2014.3

鎌倉禅研究会、「北条時頼とその時代」、2012.2

直実・蓮生を学ぶ会、「平清盛と平氏軍制」、2012.3

直実・蓮性を学ぶ会、「鎌倉幕府と朝廷」、2012.9

松戸市公民館成人講座、「平清盛の生涯」、2012.6

特別講演、神奈川県立歴史博物館、「鎌倉の中世文書」、2013.10

### (2) 学会

国内、日本古文書学会、運営委員、2012.4～2013.9

国内、日本歴史学会、評議員、2012.7～継続中

国内、古文書学会、理事、評議員、2013.9～継続中

# 1 1 中国語中国文学

教授 戸倉 英美 TOKURA, Hidemi

## 1. 略歴

- 1973年 3月 東京大学文学部中国文学科卒業（文学士）
- 1976年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（中国文学）（文学修士）
- 1981年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（中国文学）
- 1982年 4月 宇都宮大学教養部非常勤講師（～84年3月）
- 1983年 4月 千葉大学教養部非常勤講師（～85年3月、86年4月～90年3月）
- 1986年 10月 東京学芸大学教育学部非常勤講師（～87年9月）
- 1988年 4月 東京都立大学人文学部助教授（～91年3月）
- 1988年 4月 東京大学教養学部非常勤講師（～91年3月）
- 1988年 10月 東京大学文学部非常勤講師（～93年3月）
- 1991年 4月 東京大学教養学部助教授（～93年3月）
- 1993年 4月 東京大学文学部助教授
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2013年 3月 定年により退職、同年6月 名誉教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

中国古典文学

### b 研究課題

- (1) 中国文学史の再検討。古典詩文、古典小説、古典文学理論に対して個別の研究を行い、その成果を総合して、先秦より宋代に至る文学史の再検討を進めている。
- (2) 日本の雅楽・伎楽を資料とする隋唐宋代の文学・演劇・音楽の研究。北京大学中文系教授・葛曉音氏と共同で、97年度より進めている。雅楽・伎楽の源流は中央アジア諸国の音楽や宗教活動にあるが、それらはインドや西アジアの影響を強く受けている。研究が進むにつれ、雅楽・伎楽には、中国で完成するまでに行われた様々な文化交流の跡が封じ込められていることを知り、研究の対象は、アジア諸地域に朝鮮と日本を加えた交流の諸相へと拡大している。

### c 主要業績

- (1) 論文  
「“撥頭”考」（『中華文史論叢』総第一〇九期，2013年1月，330-350頁）（中国語、葛曉音氏と共著）
- (2) 学会発表  
『蘭陵王』新考（平成24年東方学会秋季学術大会において講演。於京都大学芝蘭会館別館、2012年11月10日）
- (3) 研究報告  
「長安の美女は箒に乗って飛ぶ（長安美女騎箒翔）—唐代小説の楽しみ—」（東京大学大学院人文社会系研究科文化交流会において講演、2012年12月13日）  
「<sup>たの</sup>適し<sup>み</sup>を書す—中国文学から学んだこと—」（最終講義。於東京大学、2013年3月9日）
- (4) 書評  
「古詩誕生の謎に挑む：柳川順子『漢代五言詩歌史の研究』」（創文（10）, 5-7, 2013年 創文社）
- (5) 会議主催（チェア他）  
平成24年東方学会秋季学術大会 発表司会（福田素子「落語『もう半分』に見る討債鬼故事の受容」、於京都大学芝蘭会館別館、2012年11月10日）

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学外組織（学協会、省庁を除く）

網膜剥離友の会（任意団体）副会長 2001.6～

教授 **藤井 省三**

FUJII, Shozo

### 1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部中国文学科卒業（文学士）  
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国文学専攻課程修了  
1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（中国文学）～1982年3月  
1979年9月 復旦大学（中国文学系、中国政府国費留学生）～1980年8月  
1982年4月 東京大学文学部助手  
1985年4月 桜美林大学文学部助教授（中国文学）  
1988年4月 東京大学文学部助教授（中国文学）  
1991年9月 東京大学より博士（文学）学位を授与される  
1994年7月 東京大学文学部教授  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 現在に至る

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野                      b 研究課題

概要

概要(1) 魯迅・胡適から莫言・鄭義・高行健・韓寒・郭敬明に至る現代中国文学の研究。

概要(2) 夏目漱石・芥川龍之介から松本清張・村上春樹に至る日中両国文化人の交流、影響関係の研究。

概要(3) 香港・台湾・シンガポール・南洋における文学と地域主義との関わりに関する研究。

概要(4) 中国語圏映画の研究。

#### c 主要業績

##### (1) 著書

共著、藤井省三、『侯孝賢の詩学と時間のプリズム』、あるむ、2012.1

共著、藤井省三、『経典と現実：紀念魯迅誕辰130周年国際学術研討会論文集』、杭州・西泠印社出版社、2012.3

共著、藤井省三、『不凋の花季 李昂国際学術研討会論文集』、台北・聯合文学出版社、2012.4

共著、藤井省三、『村上春樹の読みかた』、平凡社、2012.7

共著、藤井省三、『世界魯迅与魯迅世界——媒介、翻訳与現代性書写』、北京・中国伝媒大学出版社、2014.3、173-184頁

##### (2) 論文

藤井省三、「『レキシントンの幽霊』におけるアジア戦争の記憶——村上春樹“データチメント”時代の終わりをめぐって」、『文学が教育にできること 読むことの秘鑰』、312-329頁、2012.3

藤井省三、「台湾映画『海角七号』におけるメルヘンの論理——西川満の日本引き揚げ後第一作「青衣女鬼」との比較研究」、『中国21』、Vol.36、135-150頁、2012.3

藤井省三、「松本清張の私小説と魯迅「故郷」——「父系の指」から「張込み」への展開をめぐって」、『文学界』、第66巻第6号、238-251頁、2012.6

藤井省三、「新ノーベル文学賞作家 莫言の人と文学」、『文学界』、66巻12号、270-277頁、2012.12

藤井省三、「侯孝賢が台湾百年史映画を創る時：『百年恋歌（最好的時光）』における歴史の記憶」、『侯孝賢の詩学と時間のプリズム』前野みち子・星野幸代ほか編、あるむ、2012.1.31第1刷、35-59頁、2013

藤井省三、「台湾電影『海角七号』中の童話理論——和西川満日本撤退後第一作「青衣女鬼」的比較研究」、『文史台湾学報』第四期、2012年6月、9-23頁、台北・国立台北教育大学台湾文化研究所、燕路訳。

藤井省三、「魯迅戀愛小説における空白の意匠：「愛と死（原題：傷逝）」と森鷗外「舞姫」との比較研究」、『東方学』東京：東方学会、125輯、2013年1月、1-20頁

藤井省三、「文化大革命を“活きる”：余華の小説『活きる』と張芸謀の映画『活きる』」、野崎敏編『文学と映画のあいだ』、東京大学出版会、129-147頁、2013年6月

藤井省三、「松本清張の初期小説《父系之手指》与魯迅作品《故郷》——從貧困者“棄”郷的“私小説”到推理小説的展開」、林敏潔訳、『魯迅研究月刊』2014年第3期、全383期、24-33頁、41頁

### (3) 書評

長堀祐造、『魯迅とトロツキー：中国における『文学と革命』』、平凡社、『東方』、374号、28-31頁、2012.4

王小波著、桜庭ゆみ子、『黄金時代』、勉誠出版、『みすず』、第55巻第1号、3-4頁、2013.1

莫言著、『天堂狂想歌』、原題：『天堂蒜薹之歌』、吉田富夫訳、中央公論新社、共同通信社配信、大分合同新聞（朝刊）2013年5月26日ほか

二〇一三年読書アンケート『みすず』東京：みすず書房第55巻第1号、2013年1・2月、3-4頁

沈從文著、『辺境から訪れる愛の物語』、小島久代訳、勉誠出版、『北海道新聞』2014.2.23

余華著、『血を売る男』（原題：許三觀売血記）、飯塚容訳、『日本経済新聞』『日経』2014.3.2

### (4) 学会発表

国際、藤井省三、「「Lexingtonの幽霊」におけるアジア戦争の記憶——村上春樹“デタッチメント”時代の終わりをめぐって」、南開大学外国語学院日語文学科創立四十周年記念「東アジア文学と文化の交流」国際学術シンポ、天津・南開大学、2012.9.9

国際、藤井省三、「松本清張（Seicho Matsumoto）の初期小説《父系之手指》与魯迅作品《故郷》：從貧困者“棄”郷的“私小説”到推理小説《埋伏》的展開」、国際魯迅研究会与中国伝媒大学文学院連合主催「国際魯迅研究会第一屆学術論壇：北京論壇」、北京・中国伝媒大学文学院、2012.11.10

国際、藤井省三、「村上春樹と中国：『ノルウェイの森』から『1Q84』まで」、第12回桜美林大学・北京大学学術シンポジウム、桜美林大学多目的チャペル（桂冠堂）、2012.12.15

国際、藤井省三、「Natsume Soseki 夏目漱石, Lu Xun 魯迅, and Murakami Haruki 村上春樹：A Genealogy of the Ah Q 阿Q Image in East Asian Literature」、WLinT/東京世界文学会議 World Literature and Japanese Literature in the Era of Globalization、東京大学山上会館、2013.3.3

国際、藤井省三、「魯迅恋愛小説中の留白匠意：《傷逝》与森鷗外《舞姫》的比較研究」、国際魯迅研討会、南京師範大学、2013.3.23

国際、藤井省三、「莫言文学在日本的翻譯与伝播」、跨文化視閥中的当代華語文学国際学術研討会、南京師範大学文学院、2013.6.7

国際、藤井省三、「魯迅恋愛小説における空白の意匠：「愛と死（原題：傷逝）」と森鷗外「舞姫」との比較研究」、日本文化シンポ、四川外語大学、2013.10.18

国際、藤井省三、「村上春樹“超然”時代的終結——以《列克星敦的幽霊》中東亞戦争的記憶為中心」、流轉中的文學——第十屆東亞學者現代中文文學國際學術研討會、香港教育學院 Council Chamber、2013.10.25

### (5) 会議主催(チェア他)

国際「東大中文・台大台文所共催東アジア文化ワークショップ」、主催 東京大学山中寮 東京大学文学部 2012.7.30～2012.8.3

国際、「東アジアにおける魯迅「阿Q」像の系譜」、主催、東京大学山上会館、2012.11.23～2012.11.24

国際、「第4回東京－ソウル現代中国文学ワークショップ」、その他、韓国・ソウル・高麗大学、2012.12.27～2012.12.28

国際、「名古屋シンポジウム「分裂の物語・分裂する物語——漂泊する叙事 1940年代中華圏における文化接触史——」科研費基盤研究(B)「漂泊する叙事 1940年代中華圏における文化接触史」、セッション1「再構築される分裂の記憶」チェア、台湾・財団法人自由思想学術基金会／神戸大学主催、名古屋・愛知大学車道校舎コンベンションホール、2013.8.3～2013.8.4

国際、「日台作家東京会議」、主催、東京大学山上会館、2013.11.15～2013.11.16

国際、「現代東アジア文学史の国際共同研究」ワークショップ、主催、東京大学文学部、2013.12.22～2013.12.23

国内、「日本中国学会秋田大学大会文学・語学部会」チェア、2013.10.5

(6) マスコミ

- 「学生に託した日中文化交流 中国作家・謝冰心の東大講師時代」、『朝日新聞 夕刊』、2012.7.17  
「中国の村上春樹作品翻訳に新動向／『1Q84』機に変化／民主化とも関わり」、『毎日新聞 夕刊』、2012.8.23  
「中国農村の現実描く」、『信濃毎日新聞ほか、共同通信配信』、2012.10.12  
「莫言氏ノーベル賞／農村からの魔術的リアリズム」、『朝日新聞 朝刊』、2012.10.16  
「温泉大好きの知日派／莫言氏のノーベル文学賞受賞に寄せて」、『公明新聞』、2012.10.21  
「中国のポスト『1Q84』」、『文藝春秋』、2012.11  
「海外文学 中国文学」、日本文芸家協会編『文芸年鑑2013』、106-109頁、2013年6月  
「人民共和国の文学における「娼婦」の消失と復権——魯迅、趙樹理から高行健、莫言、韓寒まで」、扶桑社『entaxi』39号、2013-7、34-37頁  
「莫言と村上春樹チルドレン——現代中国文芸界をめぐる」、『善隣』2013年2月号、428号、2-9頁

(7) 翻訳

- 共訳、董啓章、「地図集」、藤井省三、『地図集』、河出書房新社、2012.2  
個人訳、莫言、「在毁灭中反思」、藤井省三、『壊滅の中での省察』、『文藝春秋三月臨時増刊』、東京・文藝春秋、2012.3  
個人訳、董啓章、「未来的考古学」、藤井省三、『未来の考古学—今、香港で書くこと』、『文芸』、第52巻第1号、262-271頁、河出書房新社、2012.3  
個人訳、莫言、「透明的紅蘿蔔」、藤井省三、『透明な人參：莫言珠玉集』、東京：朝日出版社、2013.2

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 特別講演、山東師範大学日語系、「村上春樹と中国」、2012～  
特別講演、台湾大学文學院台湾文学研究所白先勇講座、「現代日本文學與魯迅」、2012.2～2012.3  
特別講演、台湾大学台湾文学研究所、「台日比較文學」、2012.2～2012.3  
セミナー、東京・徳絃社、「白先勇短篇集『台北人』を読む——上海“ノスタルジー”と現代台北」、2012.5  
セミナー、朝日カルチャーセンター新宿校、「香港の中国回帰 15 周年を読む——董啓章『地図集』を中心に」、2012.6  
委嘱教授、朝日カルチャーセンター新宿校、「映画『セデック・バレ』：日本人と台湾先住民をめぐる記憶——『海角七号』との比較研究」、2012.8～  
特別講演、南京大学文學院、「松本清張の初期小説《父系之手指》：与魯迅作品「故郷」——圍繞貧困者“棄”鄉的私小説到推理小説「跟踪」的展開」、2012.9  
特別講演、南京師範大学文學院、「魯迅与日本文学：從夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介到松本清張、大江健三郎、村上春樹」、2012.9  
特別講演、南京師範大学日語系、「魯迅と日本文学、百年の交流：夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介からの影響、太宰治、大江健三郎、松本清張、村上春樹への影響」、2012.9  
特別講演、南京大学文學院、「村上春樹“超然”時代の終結以《列克星敦的幽霊》中東亞戰爭的記憶爲中心」、2012.9  
特別講演、南京師範大学日語系、「日中比較文学研究とは何か：魯迅「故郷」を例として」、2012.9  
特別講演、山東師範大学文學院、「魯迅与日本文学：從夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介到太宰治、森鷗外、大江健三郎、村上春樹」、2012.9  
特別講演、中国伝媒大学文學院、「魯迅与日本文学：從夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介到太宰治、森鷗外、大江健三郎、村上春樹」、2012.11  
セミナー、朝日カルチャーセンター新宿校、「魯迅と松本清張」、2012.11～2013.12  
特別講演、中国・徐州師範大学、「魯迅誕辰 130 周年在日本」、2012.12  
特別講演、南開大学中文系、「魯迅与日本文学」、2012.12  
特別講演、南開大学日語系、「村上春樹と中国」、2012.12  
特別講演、東京・国際善隣協会、「莫言と村上春樹チルドレン——現代中国文芸界をめぐる」、2012.12  
特別講演、韓國臺灣香港海外華文研究會、「魯迅与日本文学：從夏目漱石、芥川龍之介到松本清張、大江健三郎、村上春樹」、2012.12  
特別講演、南京師範大学日語系、「村上春樹と中国」、2013.3  
セミナー、北京日本文化中心多功能厅、「靈魂的來往之路：与施小煒、止庵鼎談」、2013.3

セミナー、上海書城、「當我們談村上文學時我們談些什麼」、2013.3  
セミナー、朝日カルチャーセンター横浜校、「ノーベル文学賞作家 莫言のひとと文学」、2013.4.20  
特別講演、香港教育學院、「魯迅與日本文學——從夏目漱石、芥川龍之介到松本清張以及村上春樹」、2013.4.29  
特別講演、香港教育學院、「也斯在日本／村上春樹在中國香港台灣」2013.5.3  
特別講演、香港教育學院、「村上春樹《挪威的森林》與王家衛《阿飛正傳》」、2013.5.8  
セミナー、かわさき市民アカデミー講座 12 村上春樹を知る、「中国語圏における村上春樹」、2013.6.5、6.12  
特別講演、南京師範大学外国語学院日語系「魯迅日本語訳における domestication(帰化)と foreignization(異化)——  
「故郷」を例として」、2013.9.3  
特別講演、南京師範大学文学学院「村上春樹与中国・香港・台湾」、2013.9.5  
特別講演、南京師範大学外国語学院日語系「魯迅と日本文学、百年の交流——夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介からの  
影響、太宰治、大江健三郎、松本清張、村上春樹への影響」2013.9.9  
特別講演、四川外語大学「村上春樹与中国以及魯迅——從《且听風吟》到《1Q84》」、2013.10.20  
特別講演、厦門大学中文系「魯迅与日本文学——從从夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介到太宰治、松本清張、大江健三郎、  
以及村上春樹」、2013.11.19  
セミナー、慶應義塾大学日吉電影節 2013 『紅いコーリャン』上映・シンポジウム、鼎談、2013.12.18

(2) 学会

国内、日本台湾学会理事、1999～  
国内、日本中国学会理事、2005～  
国内、東方学会、学術委員、2012.4～  
国内、日本ペンクラブ獄中作家・人権委員会委員、1998～  
国際、東亞現代中国文学国際学会連絡員、1999～  
国際、国際魯迅研究会副会長、2011～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、慶應義塾大学文学部、博士論文(長堀祐造) 審査委員会委員、2012～  
教育機関、黒竜江大学日語専業、客座教授、2012.3～  
教育機関、静岡大学人文社会科学部／研究科 外部評価委員、委員、2012.4～2013.3

## 1. 略歴

1976年3月	大阪外国語大学外国語学部中国語学科卒業（文学士）
1978年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（中国語学）
1978年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学（中国語学）
1978年9月	中華人民共和国北京語言学院留学
1979年9月	中華人民共和国北京大学中国語言文学系留学
1982年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士単位取得退学
1982年4月	金沢大学文学部助教授
1986年10月	神戸大学教養部助教授
1992年10月	神戸大学国際文化学部助教授
1996年4月	東京大学大学院総合文化研究科助教授
1999年4月	東京大学文学部大学院人文社会系研究科教授
2012年11月	博士（文学）（東京大学）

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

中国語学、主として現代中国語の意味論と文法論

### b 研究課題

自然言語の普遍性と多様性のパラダイムを背景に、中国語の意味的現象と、その反映としてある文法的現象を考察し、中国語の意味と構造のメカニズムの解明に取り組む。

### c 主要業績

#### (1) 著書

単著、木村英樹、『中国語文法の意味とカタチ』、白帝社、2012.5

#### (2) 学会発表

国内、木村英樹、「中国語の知覚・感覚・感情表現」、日本言語学会、東京外国語大学、2012.6.16

国際、木村英樹、「視点と表現」、中日対比言語学シンポジウム、中国福建省福州市、2013.8.21

国内、木村英樹、「Referentiality と Reality」、日本中国語学会、東京外国語大学、2013.10.26

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

特別講演、立命館アジア太平洋大学、「漢字と漢語の魅力」、2012.11～2012.12

特別講座、常呂高校、「右か左か、東か西か」、2013.10

特別講座、立命館アジア太平洋大学言語教育センター2013年度FDセミナー、「日中対照：『視点』と表現」、2014.2

### (2) 学会

国内、日本言語学会評議員、2012.10～2014.9

## 1. 略歴

- 1985年3月 東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業  
 1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程入学  
 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程修了  
 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程進学  
 1988年9月 中華人民共和国北京大学中国語言文学系留学（至1990年2月）  
 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程退学  
 1990年4月 神奈川大学外国語学部専任講師  
 1993年4月 神奈川大学外国語学部助教授（至1995年3月）  
 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
 1998年3月 文部省在外研究員に採用され、中国広州市中山大学に於いて研修（至1998年12月）  
 2013年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

## 2. 主な研究活動

## a 専門分野

中国語学、中国古文字学

## b 研究課題

## (1) 上古中国語の文法研究

構文と文法範疇の相関の変容の諸相、及びそれに関与する様々なファクターの解明を目指している。

## (2) 戦国秦漢出土文字資料の研究

戦国秦漢時代の出土文字資料の解読の他、言語がどのように文字化されたかという視点に基づき、地域毎の用字法の相違、秦による文字統一の実態や文字政策に関する探究を行っている。

## c 主要業績

## (1) 論文

- 大西克也、「上博楚簡『平王問鄭壽』譯注」、『出土文獻と秦楚文化』、第6号、2012.4  
 大西克也、「説“與”和“予”」、『古文字研究』、29、2012.10  
 大西克也、「説“生”——上古漢語動詞“生”的語義及句法特點」、『中國語言學』、6、137-152頁、2012.12  
 大西克也、「上古中国語における不定行為者表現と裸名詞主語文に関する試論」、『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』、2013.5  
 大西克也、「秦の文字統一について」、『第四回日中學者古代史論壇論文集 中国新出資料学の展開』、2013.8  
 大西克也、「從里耶秦簡和秦封泥探析“秦”字的造字意義」、『簡帛』、8、2013.10

## (2) 学会発表

- 国際、大西克也、「王勇教授「視覚と聴覚——東アジア文脈における「漢字」という語の発生と変遷——」に対するコメント」、PESETO 人文学会議、東京大学、2012.3.24  
 国際、大西克也、「秦の文字統一について」、第4回日中學者古代史論壇、国立教育会館、2012.5.26  
 国内、大西克也、「統一期における秦の文字改革——「與」「予」「鼠」「秦」などを例として」、中国出土資料学会2012年度第1回例会、流通経済大学、2012.7.21  
 国際、大西克也、「里耶秦簡和秦封泥中的“秦”字」、中国簡帛国際論壇2012、武漢大学、2012.11.19  
 国際、大西克也、「試論上古漢語光杆名詞主語句及其指稱特點」、承繼與拓新——漢語語言文字學國際研討會、香港中文大学、2012.12.18  
 国際、大西克也、「不定指“主語”表述法在上古至中古之間所見的變化」、第八屆國際古漢語語法研討會、韓国・ソウル・成均館大学校、2013.8.21  
 国際、ONISHI Katsuya、「Morphological Transformation of Chinese Characters: Mechanism and Causes」、SEN International Conference On Lines and Non-Lines、東京大学文学部、2013.9.19  
 国内、大西克也、「『史記』と『世説新語』を中心に／指稱範疇化への胎動」、日本中国語学会第63回全国大会、東京外国語大学、2013.10.26

国際、大西克也、「上古漢語「有」字存在句及其時間性質」、第八屆海峽兩岸漢語語法史研討會、台湾・清華大学、  
2013.11.18

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

セミナー、立命館アジア太平洋大学、「始皇帝の文字統一と私たちの漢字」、2012.10

セミナー、立命館アジア太平洋大学、「古代中国人の言語風景」、2012.11

セミナー、立命館アジア太平洋大学、「中国語、「いま・むかし」—変わり来るもの、変わらぬもの」、2012.12

招待講演、文字統一と秦漢の史書、第24回書学書道史学会大会招待講演、2013年11月9日、跡見女子学園大学  
特別講演、台湾清華大學中文系、「書同文及秦的用字改革」、2014.1

#### (2) 学会

国内、日本中国語学会、理事、2012.4～

国内、中国出土資料学会、副会長、2012.4～

国内、東方学会、学術委員、2012.4～

国内、日本中国学会、評議員、2013.4～

## 12 東洋史学

教授 水島 司

MIZUSHIMA, Tsukasa

### 1. 略歴

- 1976年 3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
- 1976年 4月 東京大学大学院人文科学系研究科修士課程入学
- 1979年 4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
- 1988年 4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
- 1992年 12月 東京大学文学部より博士号（文学）取得
- 1995年 4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
- 1997年 10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 現在に至る

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

南アジア近現代史

#### b 研究課題

1. 歴史研究への地理情報システムの応用
2. 在地社会論、ミーラース体制からの18世紀南インド経済史分析
3. 歴史統計分析による18・20世紀の長期変動の分析
4. グローバル・ヒストリーと南アジア

#### c 主要業績

##### (1) 著書

- 編著、水島司・和田清美、『21世紀への挑戦 5 地域・生活・国家』、日本経済評論社、2012.6
- 編著、水島司、『変動のゆくえ』、シリーズ・激動のインド第1巻、日本経済評論社、2013.12
- 編著、水島司・川島博之、『環境と開発』、シリーズ・激動のインド第2巻、日本経済評論社、2014.3

##### (2) 論文

- 「コメント」『ヨーロッパ・グローバリゼーションと諸文化圏の変容に関する研究 研究プロジェクト報告集 V』、東北学院大学オープン・リサーチ・センター、131-138頁、2012.3
- Tsukasa Mizushima, "Transformation of South Indian Local Society in the Late Pre-colonial Period", Journal of Asian Network for GIS-based Historical Studies, 査読有, Vol. 1, 2013, pp.12-16, [http://www.lu.tokyo.ac.jp/~angisj/jangis\\_j.html](http://www.lu.tokyo.ac.jp/~angisj/jangis_j.html)
- 水島司、「世界の構造変動と歴史学の課題」、歴史教育シンポジウム『日本歴史学協会年報』、28号、65-68頁、2013.3
- 水島司、「グローバル・エコノミーの形成とアジア間コミュニティ：ナトゥコッタイ・チェッティヤールを事例に」、『ヨーロッパ・グローバリゼーションと諸文化圏の変容に関する研究 研究プロジェクト報告集 V』、329-345頁、2012.3
- 水島司、「グローバル・エコノミーの形成とアジア間コミュニティ：ナトゥコッタイ・チェッティヤールを事例に」、『ヨーロッパ・グローバリゼーションの歴史的位相』、189-201頁、2013.6
- 水島司、「流動する都市と農村」、『激動のインド1 変動のゆくえ』（水島司編）日本経済評論社、27-56頁、2013.12
- 水島司、「長期変動のなかのインド」、『激動のインド1 変動のゆくえ』（水島司編）日本経済評論社、3-26頁、2013.12
- 水島司、「変貌するインド：イメージと現実」、『激動のインド1 変動のゆくえ』（水島司編）日本経済評論社、v-ix頁、2013.12
- 高橋昭子・水島司、「人口と土地開発の長期変動—プレゼンサス期を中心に」、『激動のインド2 環境と開発』、3-56頁、2014.3

##### (3) 書評

- 杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生、『歴史のなかの熱帯生存圏—温帯パラダイムを超えて—』、『社会経済史学』、79巻3号、151-154頁、2013.11

#### (4) 学会発表

Tsukasa Mizushima, "Demographic Change and South Indian Society in the late 19th Century", Session: Population and Development in India: Towards a Regional Typology, AGM of Japanese Association of South Asian Studies, Hiroshima University, 5 October, 2013

水島司、「19世紀南インドの開発と村落構造に関する空間的考察」、日本南アジア学会第26回全国大会 セッション「インド社会経済変動の空間分析」、広島大学、2013年10月5日

Tsukasa Mizushima, "The Historical Transformation of South Indian Rural Society between the Late Eighteenth and Late Nineteenth Centuries", *the 58th International Conference (Symposium IV-A New Challenge: GIS-Based Historical Studies on Asia*, the Toho Gakkai (Tokyo Session), 24 May, 2013.

#### (5) 国際会議

Tsukasa Mizushima, "Transformation of South Indian Local Society in the Late Pre-colonial Period", Asian Network for GIS-based Historical Studies at The University of Tokyo, 2 December, 2012

Tsukasa Mizushima, "Agricultural Development in South and Southeast Asia and the Role of Indian Merchants", *The XVIth World Economic History Congress*, Stellenbosch University, South Africa, 10 July, 2012

Tsukasa Mizushima, "Merchant Communities and Agricultural Development in Nineteenth Century South India", *Indian History Congress*, Ravenshaw University, Odisha, India, 30 December, 2013

Tsukasa Mizushima, "New Interpretation of Demographic Movement in Pre-Census Period", *International Conference on Patterns of Social and Economic Change in Colonial and Independent India*, Jawaharlal Nehru University, Delhi, India, 22 December, 2013

#### (6) 会議主催

*The XVIth World Economic History Congress - Agricultural Production in Monsoon Asia and Global Markets, 1700-1945: International Trade, Merchants and Roots of Development -*, Stellenbosch University, South Africa, 10 July, 2012

*The 1st Asian Network for GIS-based Historical Studies (ANGIS) International Conference*, The University of Tokyo, 1-2 December, 2012

*The 58th International Conference (Symposium IV-A New Challenge: GIS-Based Historical Studies on Asia*, the Toho Gakkai (Tokyo Session), 24 March, 2013

日本南アジア学会第26回全国大会<テーマ別セッションII>「インド社会経済変動の空間分析」、広島大学、2013年10月5日

*The 2nd Asian Network for GIS-based Historical Studies (ANGIS) International Conference*, The University of Tokyo, 9 December, 2013

*The Sixth Indo-Japanese Dialogue at JNU - International Conference on Patterns of Social and Economic Change in Colonial and Independent India -*, Jawaharlal Nehru University, Delhi, India, 22 December, 2013

#### (7) 研究課題・研究成果

科学研究費補助金基盤研究(S)、水島司、代表者、「インド農村の長期変動に関する研究」、2009年度～2013年度  
人間文化研究機構(NIHU)拠点形成プログラム、水島司、代表者、「現代インド地域研究」、2009年度～2014年度  
人間文化研究連携共同推進事業、水島司、代表者、「南アジアGIS統計地図公開サイトの構築」、2012年度  
若手研究者戦略的海外派遣事業費補助金、水島司、分担者(代表者:東大外)、「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」、2012年度

日本学術振興会・課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業・グローバル展開プロジェクト、水島司、代表者、「アジア歴史空間情報システムによるグローバル・ヒストリーの新研究」、2013年度～

人間文化研究連携共同推進事業、水島司、代表者、「アジアGIS基盤整備のための基礎研究」、2013年度  
科学研究費補助金基盤研究(A)、水島司、分担者(代表者:東大外)、「19世紀アジア世界における開発と経済発展ーグローバルヒストリーの観点から」、2013年度～

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

NHK 高校講座世界史で、古代インド、中世インド、現代インド、および東南アジアを対象とした番組を担当

- (2) 学会  
 日本南アジア学会・理事  
 社会経済史学会  
 東方学会  
 史学会・評議員  
 アジア歴史地理情報学会 (ANGIS) 事務局長
- (3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員  
 日本学術会議連携委員

准教授 **吉澤 誠一郎** YOSHIZAWA, Seiichiro

## 1. 略歴

- 1991年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業  
 1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科 (東洋史学) 修士課程修了  
 1995年3月 東京大学大学院人文科学研究科 (東洋史学) 博士課程中退  
 1995年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手  
 1999年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター助手  
 2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
 [2000年5月に、東京大学より博士 (文学) の学位を取得]  
 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野      b 研究課題

主な研究課題は、近代中国の都市政治、経済建設、ナショナリズム。最近では、近代中国における歴史学の形成と日本の「東洋史学」の交流の考察にも関心がある。

### c 主要業績

#### (1) 著書

- 編著、岡本隆司・吉澤誠一郎編、『近代中国研究入門』、東京大学出版会、2012.8  
 編著、吉澤誠一郎編著、『歴史からみる中国』、放送大学教育振興会、2013.3

#### (2) 論文

- 吉澤誠一郎、「五四運動から読み解く現代中国—ラナ・ミッター『五四運動の残響』を手がかりに」、『思想』、1061号、pp. 147-159、2012.9  
 吉澤誠一郎、「近代中国におけるアジア主義の諸相」、松浦正孝編著『アジア主義は何を語るのか—記憶・権力・価値』ミネルヴァ書房、pp. 294-314、2013.2  
 吉澤誠一郎、「ネメシス号の世界史」、『パブリック・ヒストリー』、10号、pp. 1-13、2013.3  
 吉澤誠一郎、「梁啓超—国家主義と世界主義のはざままで」、原田敬一ほか編『講座東アジアの知識人2 近代国家の形成』有志舎、pp. 138-154、2013.11  
 吉澤誠一郎、「「西北」概念の変遷」、本庄比佐子・内山雅生・久保亨編『華北の発見』、東洋文庫、pp. 35-55、2013.12

#### (3) 学会発表

- 国際、Seiichiro Yoshizawa, “Chinese Nationalism and the Concept of Empire in the Twentieth Century,” 7th Anglo-Japanese Conference of Historians, Cambridge University, 2012.9.12  
 国内、「清末中国における男性性の構築と日本」、中国社会文化学会、2013.7.7、東京大学文学部  
 国内、「五四運動からみる中国ナショナリズム」、日本歴史学協会・日本学術会議史学委員会主催、「歴史教育シンポジウム：ナショナリズムと歴史教育—東アジアを中心として」、2013.10.19、駒澤大学  
 国際、「近代中国の亞洲主義：其特征與影響力」、「東亞共同體—傳統與現代的觀點」國際學術研討會、2013.11.27、中央研究院近代史研究所

国内(招待講演)、「近代天津の貿易とその後背地——羊毛輸出を中心に」、「東アジア都市における集団とネットワーク——伝統都市から近現代都市への文化的転回」、2013.12.6、大阪市立大学

(4) 翻訳

ラナ・ミッター (吉澤誠一郎訳)、『五四運動の残響——20世紀中国と近代世界』、岩波書店、2012.7

### 3. 主な社会活動

(1) 学会等の委員

国内、史学会、理事

国内、中国社会文化学会、理事

国内、東方学会、学術委員

国内、東洋史研究会、評議員

国内、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、編集専門委員会、

(2) 非常勤など

放送大学客員准教授、2012.2～

和歌山大学教育学部での講演「高校「世界史」教科書について考える」、2014.1.14

(3) 公開講座

東京大学文学部集英社公開講座、東京大学、2013.10.5

まちだ市民大学、町田生涯学習センター、2013.12.12

准教授

**大稔 哲也**

OTOSHI, Tetsuya

### 1. 略歴

1983年3月 早稲田大学第一文学部東洋史学専攻卒業  
1983年4月 東京大学大学院人文科学研究科(東洋史学専門課程)修士課程入学  
1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科(東洋史学専攻)博士課程進学  
1988年12月 エジプト・アラブ共和国カイロ大学文学部留学～1991年3月  
1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科(東洋史学専攻)博士課程単位修得退学  
1992年4月 日本学術振興会特別研究員  
1994年4月 山形大学教養部専任講師  
1995年6月 東京大学大学院人文社会系研究科より博士(文学)の学位を得る。  
1996年4月 九州大学文学部助教授  
2000年4月 九州大学大学院人文科学研究科助教授  
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

### 2. 主な研究活動

a 専門分野

西アジア史・中東社会史

b 研究課題

中世エジプトにおける聖墓参詣と聖者崇敬  
イスラーム期エジプトにおける諸宗教の並存  
現代カイロの庶民街研究  
エジプト「1月25日革命」研究

c 主要業績

(1) 論文

大稔哲也「エジプトを生きるイスラーム教徒とキリスト教徒—2011年エジプト「1月25日革命」までの歩み—」  
『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第13号、1-38頁、2012.7

大稔哲也「アラブの風—「エジプト1月25日革命」研究の「遠近法」と「複奏化」—」『史学雑誌』第121編・第9号、33-35頁、2012.9

大稔哲也「写本研究の愉しみ(1)—アラブ史研究の現場から」小杉泰・林佳世子編『イスラーム書物の歴史』名古屋大学出版会、316-332頁、2014

(2) 学会発表

国内 大稔哲也「ムスリム王朝支配下のエジプトにおけるキリスト教徒の参詣・巡礼」2013年度東京大学スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座中東イスラーム世界セミナー「中東の思想と社会を読み解く」、東京大学駒場キャンパス、2014.2.1

国内 大稔哲也「イスラーム芸術博物館とアラビア語写本」、エジプト学・文化財研究セミナー、関西大学国際文化財・文化研究センター主催、関西大学、2014.2.24

(3) 会議主催(チェア他)

国際シンポジウム『「穏健イスラーム主義」の倫理と経済発展と民主化』日本国際問題研究所、NIHUプログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点・京都大学拠点、東京大学、2013.2.16. 主催

国際、Fourth International Conference, NIHU Program for Islamic Area Studies "New Horizons in Islamic Area Studies: Encounters, Reflections, and Collaborations", Lahore University of Management Sciences, Lahore, Pakistan, 2013.11.2-4. 実行委員

### 3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

人間文化研究機構、地域研究推進委員会イスラーム地域部会専門委員

NIHUプログラム・イスラーム地域研究、東京大学拠点代表

早稲田大学イスラーム地域研究機構 共同利用・共同研究拠点 運営委員会委員

筑波大学北アフリカ研究センター客員共同研究員

(2) 他機関での講義等

早稲田大学文学学術院非常勤講師

(3) 学会

早稲田大学東洋史懇話会、理事

日本イスラーム協会運営委員、常任理事

日本中東学会評議員、理事

日本歴史学協会委員

准教授 **佐川 英治** SAGAWA, Eiji

### 1. 略歴

1990年3月 岡山大学文学部史学科卒業

1990年4月 大阪市立大学文学研究科修士課程東洋史学専攻入学

1992年3月 同上 修了。文学修士の学位を取得

1992年4月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻入学

1994年9月 武漢大学(中国)にて歴史系高級進修生として在外研究(～1996年7月)

2001年3月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻修了。大阪市立大学文学研究科より博士(文学)の学位を取得

2001年10月 岡山大学文学部助教授

2006年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科助教授

2007年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授

2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

中国古代史

### b 研究課題

皇帝権力の形成と展開、4～5世紀の遊牧民族の南下と社会変容、都城史、石刻史料を用いた社会史

### c 主要業績

#### (1) 論文

佐川英治、「南北朝新出土墓誌の現地調査—南京・洛陽・西安・太原—」、『早期中国史研究』、第四卷第一期、154-193頁、2012.6

佐川英治、「漢六朝の郊祀と城市計画」、余欣主編『中古時代の礼儀、宗教と制度』、上海古籍出版社、194-223頁、2012.6

佐川英治著、王薇訳、「曹魏明帝太極殿の所在」、中国魏晋南北朝史学会・山西大学歴史文化学院編『中国魏晋南北朝史学会第十屆年會暨國際學術研討會論文集』山西出版传媒集团・北岳文芸出版社、453-465頁、2012.8

佐川英治、「論六朝建康在中国古代都城史上的地位」、范金民・胡阿祥主編『江南地域文化的歴史演進文集』、北京、生活・読書・新知三聯書店、433-452頁、2013.5

#### (2) 書評

渡辺信一郎、『中国古代の財政と国家』、『社会経済史学』、78-1、2012.5

#### (3) 学会発表

国際、佐川英治、「南北朝新出土墓誌の現地調査—南京・洛陽・西安・太原—」、国際學術シンポジウム「墓誌を通じた魏晋南北朝史研究の新たな可能性」、日本女子大学目白キャンパス新泉山館大会議室、2012.9.16

国内、佐川英治、「都市としてみた北魏六鎮」、シンポジウム「大青山一帯の北魏城址遺址」、東京大学法文1号館315室、2012.12.8

国際、佐川英治、「宗廟と禁苑——中国古代都城の神聖空間——」、INTERNATIONAL CONFERENCE SACRED SPACE AND SPATIAL SACREDNESS: THE COMPOSITION AND DEVELOPMENT OF THE SPATIAL FACTORS IN MEDIEVAL CHINESE RELIGIONS、復旦大学（中国）、2013.8.16

国際、佐川英治、「北魏六鎮と司馬氏」、2013年“六朝研究”国際學術研討会、南京曉荘学院（中国）、2013.10.19

#### (4) 研究報告書

佐川英治、「中国中古軍功制度初探」、中国古代軍事制度の総合的研究、97-110頁、2013.3

佐川英治、「南北朝新出土墓誌の現地調査—南京、洛陽、西安、太原—」、墓誌を通じた魏晋南北朝史研究の新たな可能性、1-22頁、2013.5

佐川英治編著、『大青山一帯の北魏城址の研究』、216頁、2013.6

佐川英治・陳力・小尾孝夫、『漢魏南北朝都城復元図の研究』、149頁、2014.3

#### (5) 会議主催(チェア他)

国内、シンポジウム「六朝建康と都城研究」、主催、2012.12.18

国内、シンポジウム「歴史のなかの都城の作用」、主催、2013.9.15

#### (6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、代表者、「最新の考古調査および礼制研究の成果を用いた中国古代都城史の新研究」、2010～2013

文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、分担者(代表者は東大外)、「中国古代軍事制度の総合的研究」、基盤研究(B)、2008～2012

文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、分担者(代表者は東大外)、「石刻史料と史料批判による魏晋南北朝史の基本問題の再検討」、2010～

文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、分担者(代表者は東大外)、「魏晋南北朝時期主要都城の「都城圏」社会に関する地域史的研究」、2012～

文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、分担者(代表者は東大外)、「中国古代の軍事と民族—多民族社会の軍事統治—」、2013～

文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、分担者(代表者は東大外)、「東アジア文化圏の形成に果たした漢代郡県都市に関する学際的研究」2013～

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、大阪教育大学、「中国古代の都城の空間」、2012.2～

特別講演、復旦大学中古中国研究前沿講座之十二、「“奢靡”与“狂直”——围绕洛陽城建設的魏明帝与高堂隆」、2012.8

特別講演、華東師範大学歴史系、「中国古代都城空間論」、2012.9

特別講演、武漢大学歴史学院、中古城史系列講座、2013.11

特別講演、华中科技大学歴史学院、「都城与園丘——中国中古城史的新思考」、2013.11

特別講演、武漢大学三至九世紀研究所、「北魏六鎮史研究」、2013.11

准教授 **島田 竜登** SHIMADA, Ryuto

#### 1. 略歴

- |          |                                      |
|----------|--------------------------------------|
| 1996年3月  | 早稲田大学政治経済学部経済学科卒業                    |
| 1998年3月  | 早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻修士課程修了      |
| 2001年11月 | ライデン大学アジア・アフリカ・アメリンディア研究センター上級修士課程修了 |
| 2005年12月 | ライデン大学より博士学位 (Doctor) 取得             |
| 2006年3月  | 早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻博士後期課程退学    |
| 2006年4月  | 西南学院大学経済学部講師                         |
| 2007年4月  | 西南学院大学経済学部准教授                        |
| 2012年4月  | 東京大学大学院人文社会系研究科准教授                   |

#### 2. 主な研究活動

##### a 専門分野

東南アジア史、海域アジア史、アジア経済史

##### b 研究課題

近世・近代のアジア域内貿易、オランダ東インド会社史、GIS を利用したアジア史研究、グローバル・ヒストリーと歴史叙述

##### c 主要業績

###### (1) 論文

島田竜登、「近世海域アジア貿易と日本銀—オランダ東インド会社を中心に—」、『史学研究』、277、59-73 頁、2012.10

島田竜登、「近世植民都市バタヴィアの奴隷に関する覚書」、『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、26、33-42 頁、2013.3

島田竜登、「海域アジアにおける日本銅とオランダ東インド会社」、竹田和夫編『歴史のなかの金・銀・銅—鉱山文化の所産—』アジア遊学 166、勉誠出版、48-58 頁、2013.7

島田竜登、「近世ジャワ砂糖生産の世界史的位相」、秋田茂編『アジアからみたグローバルヒストリー —「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ—』ミネルヴァ書房、148-171 頁、2013.11

Ryuto Shimada, “The Long-term Pattern of Maritime Trade in Java from the Late Eighteenth Century to the Mid-Nineteenth Century”, *Southeast Asian Studies*, 2(3), pp. 475-497, 2013.12

Ryuto Shimada, “Economic Links with Ayutthaya: Changes in Networks between Japan, China, and Siam in the Early Modern Period”, *Itinerario: International Journal on the History of European Expansion and Global Interaction*, 37(3), pp. 92-104, 2013.12

Leo Lucassen, Osamu Saito and Ryuto Shimada, "Cross-Cultural Migrations in Japan in a Comparative Perspective, 1600-2000", in: Jan Lucassen and Leo Lucassen (eds) *Globalising Migration History: The Eurasian Experience (16th-21st Centuries)* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers), pp. 362-412, 2014.3

(2) 書評

Ryuto Shimada, "Book Review: Defining Engagement: Japan and Global Contexts, 1640-1868 (By Robert I. Hellyer)", *Monumenta Nipponica*, 67(2), pp. 341-343, 2012.11

(3) 学会発表

国際、Ryuto Shimada, "Batavia: Multi-ethnic Society in the Dutch Colonial City in the Early Modern Period", Second Congress of the Asian Association of World Historians, Ewha Womans University, Seoul, South Korea, 2012.4.28

国内、島田竜登、「近世ユーラシア海上貿易とオランダ東インド会社」、九州・シルクロード協会 2012 年度第 2 回交流会、福岡市人権啓発センター、2012.6.30

国際、Ryuto Shimada, "Porcelain Token in Thailand: The Chinese Society and the Thai Global and Local Conditions in the Long Nineteenth Century", The XVIth World Economic History Congress, Stellenbosch University, South Africa, 2012.7.10

国際、Ryuto Shimada, "Batavia and its Ommelanden, 1619-1930", The XVIth World Economic History Congress, Stellenbosch University, South Africa, 2012.7.11

国際、Ryuto Shimada, "Ayutthaya as a Centre of Global Interactions: Diplomacy and International Trade of the Kingdom of Ayutthaya around 1700", Workshop: Maritime Perspectives in Eurasian and Indian Ocean World History: Towards a Global History, McGill University, Canada, 2013.2.18

国際、Ryuto Shimada, "Iranian Settlers in Ayutthaya and the Dutch East India Company", The Eighth International Convention of Asia Scholars, The Venetian Macau Resort Hotel, Macau, 2013.6.24

国際、Ryuto Shimada, "The VOC Trade of Copper from Japan", Symposium: Boekhouder-generaal Batavia: ontsluiting van de bronnen van het goederenvervoer van de VOC in de achttiende eeuw, The Huygens Institute for the History of the Netherlands, The Netherlands, 2013.9.6

国際、Ryuto Shimada, "Hirado and Beyond: British Trade with Japan in the Seventeenth Century", International Conference: Japan and Britain, 1613: Parallels and Exchanges, The School of Oriental and African Studies, University of London, The United Kingdom, 2013.9.20

国際、Ryuto Shimada, "Batavia as World Trade Centre?: A Key Trading Port in Indonesian, Asian and Global Perspectives, 1619-1799", International Conference: Maritime East Asia in the 16th-18th Centuries: Sources, Archives, Researches: Present Results and Future Perspectives, "Orientale" University of Naples, Italy, 2013.10.2

国内、島田竜登、「17 世紀末アユッタヤー朝の国際貿易—イラン使節来朝の経済的背景—」、第 264 回北海道大学東洋史談話会、北海道大学、2013.10.18

国際、Ryuto Shimada, "Batavia: A Centre for Indonesian, Asian and Global Trade, 1619-1850", First International Workshop: East-West Connections, Exchanges and Encounters, 16th-19th Centuries, University of Macau, Macau, 2013.11.11

国際、Ryuto Shimada, "Global Trade in Ayutthaya during the Early Modern Period", Symposium: Muslim in Thai History, Tonson Mosque, Bangkok, Thailand, 2013.11.23

国内、島田竜登、書評：金澤周作編著『海のイギリス史：闘争と共生の世界史』（昭和堂、2013 年 7 月刊行）、大阪経済大学日本経済史研究所第 73 回経済史研究会、大阪経済大学、2013.11.30

国際、Ryuto Shimada, "Chinese Junk Trade between Japan and Southeast Asia in the Early Modern Period", Seminar on East Asian Maritime History: Asian International Trade Order and Chinese Merchants, Research School for Southeast Asian Studies, Xiamen University, China, 2013.12.25

(4) 会議主催(チェア他)

国際、Session: Transmission of Scientific Knowledge through Asia: Alternative Concepts and Methods、チェア、Second Congress of the Asian Association of World Historians, Ewha Womans University, Seoul, South Korea, 2012.4.28

- 国際、International Workshop: Sugar and Slavery towards a New World History、主催、Toshi Center Hotel, Tokyo; The University of Tokyo、2012.11.17～2012.11.19
- 国際、The First International Conference of Asian Network for GIS-based Historical Studies (ANGIS)、チェア、The University of Tokyo、2012.12.1～2012.12.2
- 国際、International Workshop: Jakarta's Past: Space, Ethnicity and Urban Development、主催、Kyoto University、2013.4.3
- 国際、Session: The Iranians in Ayutthaya during the Early Modern Period、主催、The Eighth International Convention of Asia Scholars、The Venetian Macau Resort Hotel, Macau、2013.6.24
- 国際、International Conference: Maritime East Asia in the Light of History, 16th-18th Centuries: Sources, archives, Researches: Present Results and Future Perspectives、主催、“L'Orientale” University of Napoli, Italy、2013.9.30～2013.10.3
- 国際、Symposium: Muslim in Thai History、主催、Tonson Mosque, Bangkok, Thailand、2013.11.23
- 国際、The Second International Conference of Asian Network for GIS-based Historical Studies (ANGIS)、チェア、Kyoto University、2013.12.9

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立教大学文学部、2013～

(2) 学会

史学会（大会実行委員、2012～）

社会経済史学会（幹事、2012～）

東南アジア学会（学術渉外委員、2013～）

東洋学・アジア研究連絡協議会（委員、2013～）

比較文明学会（幹事、2011～）

Asian Network for GIS-based Historical Studies (Japan)（理事、編集委員、2012～）

# 13 中国思想文化学

教授 川原 秀城

KAWAHARA, Hideki

## 1. 略歴

- 1968年4月 京都大学理学部入学
- 1972年3月 京都大学理学部数学科卒業・理学士
- 1972年4月 京都大学文学部哲学科（中国哲学史専攻）編入学
- 1974年3月 京都大学文学部哲学科（中国哲学史専攻）卒業・文学士
- 1974年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程（中国哲学史専攻）入学
- 1980年3月 京都大学大学院文学研究科博士課程（中国哲学史専攻）単位取得退学
- 1980年7月 岐阜大学教育学部助教授（社会科・哲学研究室）
- 1992年4月 東京大学文学部助教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 現在に至る

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

東アジアの思想史と科学史

### b 研究課題

- (1) 朝鮮儒学
- (2) 明清西学

### c 主要業績

#### (1) 論文

川原秀城, 「宋時烈の朱子学—朝鮮朝前中期学術の集大成—」, 『韓国朝鮮文化研究』第12号, 1-30頁, 2013年3月  
KAWAHARA Hideki, “On the Alternative Algorithm of the 7th Problem in the Sea Island Mathematical Canon”,  
in Eberhard Knobloch, Hikosaburo Komatsu, Dun Liu (ed.) *Seki, Founder of Modern Mathematics in Japan: A Commemoration on His Tercentenary*, Springer, May 2013, pp.89-92

川原秀城, 「朝鮮思想大観」, 『斯文』第123号, 35-42頁, 2013年9月

川原秀城, 「안정복의 천학관天學觀과 예수회의 이성선교理性宣教」, 『순암 안진복의 학문과 사상』, 성균관대학교 출판부, 41-90頁, 2013年10月

KAWAHARA Hideki, “The Neo-Confucian Studies of Song Siyöl: The Grand Summation of Scholarship of the Early and Middle Chosön Dynasty”, ACTA ASIATICA, No.106, The Toho Gakkai, Feb 2014, pp.69-94

#### (2) 雑文

川原秀城, 「東アジアの数学」, 織田孝幸・三井恵津子共編, 『なぜ!こんなに数学はおもしろいのか』, 技術評論社, 46-91頁, 2012年8月

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

兼任講師 中央大学文学部 (2013~)

### (2) 学会

東方学会評議員 (2012~)

**1. 略歴**

- 1985年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業（文学士）  
1987年3月 同 大学院人文科学研究科修士課程修了（中国哲学）  
1987年4月 東京大学東洋文化研究所助手（東アジア第一部門）  
1992年4月 徳島大学総合科学部講師（総合科学科）  
1994年4月 同 助教授（人間社会学科）  
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（中国思想文化学）  
2007年4月 同 准教授（中国思想文化学）  
2013年4月 同 教授（中国思想文化学）

**2. 主な研究活動****a 専門分野**

中国思想文化史、王権理論の展開および儒教の教化論

**b 研究課題**

- (1) 中国における朱子学・陽明学の思想的形成と社会的展開。  
(2) 中国皇帝制秩序を支える王権儀礼とその理論。  
(3) 日本における儒教思想の流入とその社会的効果。

**c 主要業績****(1) 著書**

単著、小島毅、『朱子学と陽明学』、筑摩書房、2013.9

**(2) 論文**

小島毅、「王安石から朱熹へ——宋代礼学の展開——」、小島康敬編『「礼楽」文化』ペリカン社、2013.7

小島毅、「宋学の近世的性格について」、『知のユーラシア3 激突と調和 儒教の眺望』、2013.10

小島毅、「儒教の聖人像——制作者か人格者か」、『岩波講座 日本の思想8 聖なるものへ』、2014.1

**(3) 書評**

岡元司、『宋代沿海地域社会史研究』、汲古書院、『史学雑誌』、122編6号、96-104頁、2013.6

村井章介、『日本中世の異文化接触』、東京大学出版会、『東方』、395、27-31頁、2014.1

**(4) 監修**

小島毅、『江戸儒学の中庸注釈（汲古書院、東アジア海域叢書5）』、2012.2

小島毅、『碑と地方志のアーカイブズを探る（汲古書院、東アジア海域叢書6）』、2012.3

小島毅、『寧波と宋風石造文化（汲古書院、東アジア海域叢書10）』、2012.5

小島毅、『蒼海に交わされる詩文（汲古書院、東アジア海域叢書13）』、2012.10

小島毅、『海から見た歴史（東京大学出版会、シリーズ東アジア海域に漕ぎだす1）』、東京大学出版会、2013.1

小島毅、『文化都市 寧波（東京大学出版会、シリーズ東アジア海域に漕ぎだす2）』、東京大学出版会、2013.2

小島毅、『くらしがつなぐ寧波と日本（東京大学出版会、シリーズ東アジア海域に漕ぎだす3）』、東京大学出版会、2013.3

小島毅、『寧波と博多（汲古書院、東アジア海域叢書11）』、汲古書院、2013.3

小島毅、『中近世の朝鮮半島と海域交流（汲古書院、東アジア海域叢書14）』、汲古書院、2013.5

小島毅、『平泉文化の国際性と地域性（汲古書院、東アジア海域叢書16）』、汲古書院、2013.6

小島毅、『碑と地方志のアーカイブズを探る（汲古書院、東アジア海域叢書6）』、汲古書院、2013.11

小島毅、『東アジアのなかの五山文化（東京大学出版会、シリーズ東アジア海域に漕ぎだす4）』、東京大学出版会、2014.2

**(5) マスコミ**

「歴史認識の根っこ4 中国の領土認識」、『朝日新聞（夕刊）文化面』、2014.2.17

「大義」を考える2 民主主義とは別次元」、『朝日新聞 大阪版（地方版）』、2014.3.4

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、清泉女子大学、「漢文学講義」、2012.4

#### (2) 学会

国内、日本中国学会、理事、2012.10～

国内、財団法人東方学会、国際東方学会議運営委員、2013.5～

国内、中国社会文化学会、理事、1997.7～

准教授 **横手 裕**

YOKOTE, Yutaka

### 1. 略歴

- 1988年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業
- 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（中国哲学専攻）修了
- 1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科第一種博士課程（中国哲学専攻）中退
- 1991年9月 京都大学人文科学研究所助手
- 1997年4月 千葉大学文学部助教授
- 2003年4月 東京大学大学院人文社会系助教授
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系准教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

中国思想、道教

#### b 研究課題

- (1) 道教思想、道教史の解明
- (2) 道教と中国仏教の交渉史
- (3) 儒・仏・道の三教交渉史を中心とする中国思想史

#### c 主要業績

##### (1) 論文

横手裕、「洞庭包山林屋洞」、『洞天福地研究』、第2号、2012.2

横手裕、「道教と唐宋王朝」、『東アジアの王権と宗教』、(アジア遊学№151)、2012.3

横手裕、「真祭鍊之路——鄭思肖の祭鍊法与救度」、『沈淪、懺悔與救度：中國文化的懺悔書寫論集』、2013.5

##### (2) 学会発表

国際、横手裕、「日本宮内庁書陵部所蔵的道蔵」、中国社会科学院宗教研究所學術講演会、中国・北京市・中国社会科学院、2012.5.22

国際、横手裕、「宋元道教的内丹養生法」、Modern Chinese Religion: Song-Liao-Jin-Yuan、香港・香港中文大学、2012.6.27

国際、横手裕、「日本宮内庁書陵部収蔵明版道蔵の由来和現状」、(個人講演会)、ドイツ・ハイデルベルク大学・カールヤスパーセンター、2012.11.27

国際、横手裕、「明清時代の経籙三山」、第五届日中学者中国古代史論壇、中国・湖南省・長沙市・湖南大学、2013.8.28

国際、横手裕、「仇兆鰲與内丹修鍊」、2013 宗教生命關懷國際學術研討會—丹道養生及人生終極關懷、台湾・高雄市・正修科技大学、2013.12.6

国内、横手裕、「道教と仏教における「本然の性」と「氣質の性」、「心身/身心」と「環境」の哲学—東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み、国際日本文化研究センター、2014.3.9

国際、横手裕、「佐命山三上司山続考」、第1回日本・フランス中国宗教研究者会議、2014.3.12

(3) **研究テーマ**

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (A)、横手裕、研究代表者、「宮内庁書陵部所蔵道蔵を中心とする明版道蔵の調査と研究」、2014～

**3. 主な社会活動**

(1) **学会**

日本道教学会、理事・学術雑誌編集委員、2012.1～2013.12

## 14 インド語インド文学

教授 高橋 孝信 TAKAHASHI, Takanobu

### 1. 略歴

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学。  
1979年10月～1982年2月 インド・マドゥライ大学へ留学、  
1985年4月～1988年9月 オランダ・ユトレヒト大学東洋言語文化研究所へ留学。  
1989年6月 ユトレヒト大学より博士（文学）取得。  
1991年4月 四天王寺国際仏教大学（現、四天王寺大学）文学部助教授  
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
1999年4月 同 教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

タミル語学文学

#### b 研究課題

- 1) タミル古代文学・詞華集『十の長詩』の研究および訳注。
- 2) タミル古代の文法書『トルハーッピヤム』の年代論。
- 3) タミル古代の文学・詩論の総合研究、ことに全作品の比較年代論。

#### c 主要業績

##### (1) 論文（2012, 2013年度のみ）

“Is Clearing or Plowing Equal to Killing?: Tamil culture and the spread of Jainism in Tamilnadu”, *Bilingual Discourse and Cross-Cultural Fertilisation: Sanskrit and Tamil in Mediaeval India*, ed. by Whitney Cox and Vincenzo Verigiani, Institut Francais de Pondichery/ Ecole Francaise d'Extreme-Orient, Pondichery, 2013, pp. 53-67

「象の滝一直訳と翻訳の間で―」, 『奥田聖應先生頌寿記念 インド学仏教学論集』, 佼成出版社, 東京, 2014.3.30, 205-213頁

「詩作の場、発表の場―「声の文化」と「文字の文化」との関係で―」, 『万葉古代学研究所年報』第12号, 万葉古代学研究所, 橿原, 2014.3, 105-110頁

##### (2) 学会発表など

「象か子牛か―異読に関する一考察―」, 日本印度学仏教学会第64回学術大会, 島根県立会館, 松江市, 2013.9.1

「詩作の場、発表の場―「声の文化」と「文字の文化」との関係で―」, 第10回万葉古代学研究所共同研究公開シンポジウム「万葉古代学の飛鳥」, 万葉古代学研究所, 橿原市, 2013.10.6

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

東洋大学文学部（2006～）、東洋大学大学院文学研究科（2013～）

#### (2) 学会・研究会

日本印度学仏教学会（常務委員、評議員）、東方学会（学術委員）、

日本南アジア学会、比較思想学会、日本仏教学会、

ジャイナ教研究会、インド考古研究会、西南アジア研究会

#### (3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

(財)東京大学仏教青年会・理事長（2008～）、奈良県立万葉古代学研究所・共同研究員

## 1. 略歴

1989年3月	大阪大学文学部哲学科インド哲学専攻卒業
1991年3月	大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程修了
1996年3月	大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程単位取得退学
1996年9月	米国ハーヴァード大学大学院サンスクリット・インド学科留学
2002年6月	博士 (Ph.D.) 学位取得 (ハーヴァード大学)
2009年10月	京都大学人文科学研究所助教
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

サンスクリット語学文学

### b 研究課題

古代インドの家庭儀礼と社会文化史

### c 主要業績 (2012, 2013 年度)

#### (1) 論文

梶原三恵子「聖なる〈ことば〉の伝承—古代インドのヴェーダ学生をめぐって」『文化交流研究』(東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要) 26: 47-61 頁. 2013.3

Kajihara, Mieko. "Seizing the Novice's Hand and Pouring Water into His Hands at the Vedic Initiation Ritual." *Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 21: 1-18. 2014.3

Kajihara, Mieko. "The Upanayana and 'Repeated Upanayana(s)'" *Vedic Investigations* (ed. A. Parpola, M. Fujii, S. Insler). Delhi. in press.

#### (2) 学会発表

国内: 梶原三恵子「聖なる「ことば」の伝承—古代インドの学習者たち」東京大学文学部文化交流茶話会 東京大学 2012.10.4

国際: Kajihara, Mieko. "The Initiation Ritual (*upanayana*) in the Vedic Texts and Beyond. International Symposium: Consecration, Initiation, and Coronation Rituals in Ancient and Medieval India, Kyoto University (国際シンポジウム: 古代および中世インドにおける潔斎・入門 / 入信・即位の諸儀礼) 2012.12.23

国内: 梶原三恵子「Vādhūla-Śrautasūtra 10,8,29-10,8,49」京都大学人文科学研究所共同研究「即位と灌頂の文化史」京都大学 2013.7.5

国際: Kajihara, Mieko. "The *brahmacārīn*, *brahmacārya*, and Chastity in the Vedic Literature." 6th International Vedic Workshop. (第6回国際ヴェーダ学ワークショップ) 於カリカット (インド) 2014.1.9

#### (3) 予稿・会議録

国際会議: Kajihara, Mieko. "The *brahmacārīn*, *brahmacārya*, and Chastity in the Vedic Literature." 6th International Vedic Workshop 2014. *6th International Vedic Workshop: Abstracts*, 44-45. 2014.1

#### (4) 会議主催 (チェア他)

国内: インド思想史学会第21回学術大会 実行委員 (東京大学 山上会館) 2013.12.21

国際: 6th International Vedic Workshop テクニカル・プログラム委員 2013~2014

#### (5) 共同研究 (産学連携除く)

国内: 京都大学 人文科学研究所共同研究「即位と灌頂の文化史」

国内: 科学研究費補助金: 梶原三恵子 (研究分担者)、京都大学・東京大学・京都文教大学、「南インド希少ヴェーダ学派の文献集成と翻訳研究」

## 3. 主な社会活動

### (1) 学会

国内: 日本印度学仏教学会 一般会員

国内: インド思想史学会 会員, 編集委員

国際：American Oriental Society 海外会員

国内：日本南アジア学会 一般会員

国内：東方学会 一般会員

国際：6th International Vedic Workshop, テクニカル・プログラム委員、2013.3～2014.1

(2) その他

京都大学人文科学研究所共同研究員

## 15 インド哲学仏教学

教授 齋藤 明 SAITO, Akira

### 1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部第I類倫理学専修課程卒業  
1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門課程修士課程修了  
1981年6月 オーストラリア国立大学アジア研究学部博士課程給費留学(～1984年3月)  
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門課程博士課程単位取得退学  
1984年4月 東京大学文学部助手  
1985年5月 オーストラリア国立大学より Ph.D.学位取得  
1988年4月 三重大学人文学部助教授  
1993年4月 同 教授  
2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

インド仏教学

#### b 研究課題

インド大乘仏教思想史の研究。とくに中観派(Madhyamika)の前史、学派成立の経緯、およびインドからチベットに至る同派の思想展開と影響を洗い直す作業を行っている。

#### c 主要業績

##### (1) 著書

編著、齋藤明、五島清隆他6名、『空と中観』(シリーズ大乘仏教6)、春秋社、2012.11

共著、齋藤明、秋元ひろと他10名、『因果の探究』、三重大学出版会、2013.3

共編著、齋藤明、一色大悟他5名、『瑜伽行派の五位百法』(バウッダコーシャII)、山喜房佛書林、2014.3

##### (2) 論文

齋藤明、「ナーガールジュナと<無記>説」、『印度学仏教学研究』、60-2、pp.966-971、2012.3

Akira Saito, "Proof of the Authenticity of the Mahāyāna in Akṣayamati's Bodhi(sattva)caryāvātāra", 『Transactions of the International Conference of Eastern Studies』、Vol. 57、pp. 48-60、2012.12

齋藤明、「観音(観自在)と『観音経』—鳩摩羅什訳の謎をめぐって—」、『伊藤瑞穂博士古稀記念論文集・法華文化と関係諸文化の研究』山喜房佛書林、pp.179-189、2013.2

Akira Saito, "Buddhapālita's Metaphorical Expression", 『Journal of Indian and Buddhist Studies』、Vol.61-3、pp. 1173-1181、2013.3

Akira Saito, "A Shape in the Mist: On the Text of Two Undetermined Sūtra Citations in the Prasannapadā", 『Studies in Indian Philosophy and Buddhism』、Vol. 20、pp. 17-26、2013.3

齋藤明、「アクシャヤマティ作『入菩薩行論』の大乘仏説論」、『奥田聖應先生頌寿記念・インド学仏教学論集』、pp. 685-694、2014.3

##### (3) 総説・総合報告

Akira Saito, "Symposium V: Rethinking the Debate about Whether or Not the Mahāyāna Was Taught by the Buddha: With Reference to Examples from Indian, China, and Japan", 『Transactions of the International Conference of Eastern Studies』、No. 57、pp. 174-178、2012.12

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

東洋大学非常勤講師(大学院演習)、国際仏教学大学院大学非常勤講師(大学院演習)、ウィーン大学客員教授(大学院演習、学部講義)

(2) 学会

日本印度学仏教学会理事長、東方学会常務理事、仏教思想学会理事、比較思想学会理事、国際仏教学会 (IABS) 理事、国際オリエント・アジア研究連合 (IUOAS) 副会長

(3) 行政

全学入試実施委員 (2011.5~2013.3)、学生懲戒委員 (2013.4~)

(4) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

日本学術会議連携会員 (第 22 期 2010.10~2012.9、第 23 期 2012.10~)

教授 丸井 浩

MARUI, Hiroshi

1. 略歴

- 1972 年 4 月 東京大学教養学部文科 III 類入学  
1974 年 4 月 東京大学文学部印度哲学印度文学科進学  
1976 年 3 月 同 上 卒業  
1976 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻修士課程入学  
1979 年 3 月 同 上 修了  
1979 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻博士課程進学  
1983 年 3 月 同 上 単位取得退学  
1984 年 1 月 インド・プーナ大学サンスクリット高等研究センター在学 (～1986 年 1 月)  
(文部省給費留学生)  
1983 年 4 月 財団法人東方研究会専任研究員 (～1990 年 3 月)  
1990 年 4 月 武蔵野女子大学短期大学部専任講師 (～1992 年 3 月)  
1992 年 4 月 東京大学文学部助教授  
1995 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (大学院部局化に伴う)  
1999 年 1 月 同 上 教授 (～現在)  
<学位>  
2011 年 11 月 博士 (文学) (東京大学)

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門分野はインド哲学。インドの哲学的思索の伝統諸派 (ダルシヤナ) のなかで、特に多元論的世界観と分析的、合理的思考を特徴とする、ニヤーヤ学派 (インド論理学派) ・ヴァイシェシカ学派のサンスクリット文献の解読・解釈、およびその思想 (史) 研究が中核となっている。そうした専門分野の研究成果を核としつつ、最近の研究テーマは、(1) インド思想における哲学と宗教の交錯関係をテキスト実証的に解明しつつ、インドの寛容精神あるいは包括主義と呼ばれる思想を、宗教多元主義や異宗教間対話・共生といった現代的な問題意識から見直すこと、(2) 「(インド) 六派哲学」という概念の展開を追跡して、インド哲学史の見直しを図ること、(3) 9 世紀末にカシミールで活躍したニヤーヤ学者でありかつ詩人・文人でもあるバッタ・ジャヤンタの研究の既発表論文のまとめと増補改訂作業 (博士論文出版として結実する)、さらには(4) 日本の主なインド哲学研究者を研究分担者、連携研究者および研究協力者 (合計 40 名程度) として組織し、文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (A) 「インド哲学諸派における〈存在〉をめぐる議論の解明」(2011~2014 年度) という研究プロジェクトを統括し (研究代表者として)、最終的には一般読者 (特に教養課程レベルの学生) 向けの啓蒙書出版へとつなげる予定である。

c 主要業績

(1) 著書 (単著)

丸井 浩『ジャヤンタ研究—カシミールの文人が語るニヤーヤ哲学』山喜房仏書林、2014 年 3 月

## (2) 論文

丸井 浩 『正しく知られるべき対象』(prameya)としての artha 概念の変貌——ジャヤンタが語るニヤヤー哲学の思想史的位置をさぐる一視点』『インド哲学仏教学研究』19, 2012.3, pp. 19-59.

MARUI Hiroshi, “The meaning of a diversity of established world views or tenets (*siddhānta*) in the science of debate: with special reference to Jayanta’s interpretation of the *abhyupagama-siddhānta* (NS 1.1.31) and its evaluation in the development of Nyāya System.” *World view and theory in Indian philosophy*, ed. by P. Balcerowicz, Delhi: Manohar, 2012, Warsaw Indological Studies Series 5, pp. 407-432.

MARUI Hiroshi, “The structure of the whole discussion on *zabda* in the *Nyāyamañjarī*.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 61-3, 2013.3, pp. (35)-(44).

丸井 浩 「ジャヤンタによるシャクティ概念批判—*Syādvādaratnākara* における “Pallava” の引用断片に関する追記—」『奥田聖應先生頌寿記念 インド学仏教学研究論集』佼成出版社、2014年3月、pp. 189-204.

## (3) 学会口頭発表(論文発表となったものは除く)、シンポジウム/パネル(報告者・司会)

MARUI Hiroshi, “How to identify the fragments from the “*Ācāryāḥ*” and “*vyākhyātārah*” in the *Nyāyamañjarī*.” 21 Aug., 2012, Matsumoto, Japan-Austria International Symposium on Transmission and Tradition: The meaning of “fragments” in Indian philosophy (20-24 Aug., 2012), organized by H. Marui and E. Prets.

丸井 浩 (パネル企画・司会) 「インド哲学諸派における〈存在〉をめぐる議論の諸相」(日本印度学仏教学会第64回学術大会/パネルA、島根県民会館(松江)、2013年9月1日)

丸井 浩 (基調講演) 「第2回金剛大—東京大 学術交流共同セミナー」金剛大学、2013年9月25日

丸井 浩 (報告者前田専學博士に対するインタビュー聞き手) 「先達に聞く：日本の南アジア研究とその時代」(日本南アジア学会第26回全国大会特別企画、広島大学、2013年10月5日)

丸井 浩 「*prāmānya* という概念を考える—『シュローカ・ヴァールッティカ』教令章を中心に—」第20回インド思想史学会、東京大学、2013年12月21日

## (4) 報告記事、書評、その他

[新版編集協力、新項目執筆] 『(新版) 南アジアを知る事典』平凡社、2012年5月

丸井 浩 「寛容宥和の精神と包括主義—インド的思惟の特質と新たな共生のしくみ」『地球システム・倫理学会会報』7, 2012, pp. 91-99.

丸井 浩 [書籍紹介] Shaku Goshin (釈悟震), English tr. and ed.: *The Urugodawatte Great Controversy, New English Translation & the Sinhala Text*, Colombo: Udaya Graphics Press, 2012 (『東方』28 (中村元博士生誕100年記念号)、2013年3月、pp. 402-405.

丸井 浩 [大学広報誌記事] 「インド哲学と時間」『淡青 *tansei*』26、2013年4月、pp. 30-31.

丸井 浩 [国際シンポジウム報告] 「伝統の継承と発展—インド哲学史における“テキスト断片”の意味をさぐる—」『東方学』126、2013年7月、pp. 147-157.

## (5) 講演など

丸井 浩 「インド思想と幸福論—仏教の無我説とバートランド・ラッセル」(平成24年度足利学校アカデミー「日本文化の中のアジア世界」第2回講義、2012年6月17日)

丸井 浩 「無分別のすすめ—インド哲学から手繰り寄せるパラドックスの真理—」(日本能率協会「企業人としての人間研究会」、日本能率協会、2012年11月28日)

丸井 浩 「価値観の多様性と新たな共生のしくみ—インド思想から学ぶ—」(平成25年度足利学校アカデミー第6回講義)

丸井 浩 「人は生まれながらにして三つの負債を負う—古代インドのおかげさまの思想—」(公開講演会、公益財団法人モラロジー研究所、2013年7月20日)

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等・学会役員

学習院大学非常勤(思想史講義)、2010.4~2011.3

NPO 法人中村元記念館東洋思想文化研究所(東方学院松江校) 2013年度集中講義

日本印度学仏教学会、理事、常務委員、2012.4~2014.3

日本宗教学会、評議員、2012.4~2014.3

### (2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

日本学術会議会員第22期 2011.10~2014.9、同第一部幹事 2011.10~2014.3

財団法人東京大学仏教青年会、理事、2012.4～2014.3

公益財団法人中村元東方研究所、理事 2012.4～2013.3、主任研究員 2012.4～2014.3、常務理事・事務局長 2013.4～2014.3

財団法人大法輪石原育英会、理事、2014.3～

教授 **下田 正弘** SHIMODA, Masahiro

## 1. 略歴

- 1981.03 東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業
- 1981.04 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）入学
- 1984.03 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）修了
- 1984.04 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（印度哲学）進学（-1989.3）
- 1985.07 インド・デリー大学大学院留学（文部省国際交流計画）（-1986.05）
- 1988.04 日本学術振興会特別研究員（-1990.03）
- 1994.06 博士（文学）（東京大学）
- 1994.10 東京大学文学部助教授
- 1995.04 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2006.01-03 School of Oriental and African Studies (University of London) 委嘱教授
- 2006.04 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2007.04 東京大学大学院次世代人文学開発センター兼担教授
- 2011.03-04 Stanford University 委嘱教授
- 2013.04 東京大学大学院次世代人文学開発センター教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野      b 研究課題

専門分野はインド仏教の教典形成史、および人文情報学。前者については sutra, vinaya の形成過程解明を通して初期仏教から大乘仏教にいたる思想史、社会背景史の解明を目標とする。この 2 年間は、大乘仏教の起源について伝承の媒体変化による発生という、新たな新たな学説を提起した。これまでの研究課題は(1)大乘仏教の形成過程および大乘仏教の特徴についての従来の研究のみなおし、(2)仏教学を支える近代の仏教研究方法の問いなおし、(3)仏教と現代の諸問題とのかかわりの考究、および(4)大乘仏教の起源研究という 4 点に集約される。西洋近代から生まれ、200 年の歴史を有する仏教学を検証する視野のなかでこれら 4 点を据え、仏教学の進む道を模索している。後者の課題、すなわち人文情報学については、仏教文献の電子化事業を進める過程で 7 年ほど前から本格的に着手。科学研究費基盤 A 「国際連携による仏教学術知識基盤の形成」のプロジェクトを中心に、次世代に向けた仏教学の国際的知識基盤づくりを進め、日本の Digital Humanities のモデルケースを提示した。

### c 主要業績

#### (1) 著書

- 編著、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士、『唯識と瑜伽行：シリーズ大乘仏教 7』、春秋社、2012.8
- 編著、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士、『空と中観：シリーズ大乘仏教 6』、春秋社、2012.11
- 編著、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士、『智慧／世界／ことば（大乘仏典 I）：シリーズ大乘仏教 4』、春秋社、2013.5
- 編著、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士、『仏と浄土 大乘仏典 II（シリーズ大乘仏教 5）』、春秋社、2013.10
- 編著、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士、『如来蔵と仏性（シリーズ大乘仏教 8）』、春秋社、2014.1
- 共著、下田正弘、『同朋会運動の原像』、法蔵館、2014.3

(2) 論文

下田正弘、「大乘仏教起源論再考」、『印度学仏教学研究』、61-2、843-835(L)頁、2013.3

Masahiro Shimoda, Kiyonori Nagasaki, Toru Tomabechi、「Towards a Digital Research Environment for Buddhist Studies」、『Literary and Linguistic Computing』、28 (2)、296-300 頁、2013.3

下田正弘、「大乘経典のあらたな理解に向けて——大乘仏教起源論——」、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士、『智慧／世界／ことば（大乘仏典Ⅰ）：シリーズ大乘仏教 4』、春秋社、3-100 頁、2013.5

下田正弘、「浄土思想の理解に向けて」、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士、『仏と浄土 大乘仏典Ⅱ（シリーズ大乘仏教 5）』、春秋社、3-78 頁、2013.10

下田正弘、「如来蔵、仏性思想のあらたな理解に向けて」、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士、『如来蔵と仏性（シリーズ大乘仏教 8）』、春秋社、3-95 頁、2014.1

下田正弘、「仏教における生死：「生死一如」観の背景」、大村英昭、井上俊編、『別れの文化——生と死の宗教社会学』、書肆クラルテ、185-211 頁、2013.4

(3) 辞典校閲執筆

『岩波世界人名大辞典』（仏教）、岩波書店、2013.12

(4) 学会発表

国際（招待）、Masahiro Shimoda、「Regarding the Origin of Mahayana」、Buddhist Research Conference at University of Virginia、University of Virginia、2012.4.25

国内（招待）、下田正弘、「「インド学としての仏教学」再考——人文学史批判と仏教学——」、近代仏教史研究会、青山学院、2012.5.12

国内、下田正弘、「大乘仏教研究方法の再考」、日本印度学仏教学会、鶴見大学、2012.6.30

国際、Masahiro Shimoda, Kiyonori Nagasaki et al.、「Approaches to the Treatment of Primary Materials in Digital Lexicons: Examples of the New Generation of Digital Lexicons for Buddhist Studies」、Digital Humanities 2012 Hamburg(Germany)、University of Hamburg、2012.7

国際（招待、基調講演）、Masahiro Shimoda、「Embracing a Distant View of the Digital Humanities」、Digital Humanities 2012、University of Hamburg、2012.7.20

国際（招待）、Masahiro Shimoda、「General Comments on the Conference」、Symposium on “Cross-Cultural Transmission of Buddhist Texts: Theories and Practices of Translation” University of Hamburg、2012.7.23

国際、（招待）Masahiro Shimoda、「Korean Buddhism as Seen from Japanese Perspective: Focusing on Wonhyo's Hermeneutical Attitude toward the Tathagatagarbha Theofy」、International Conference on Korean Buddhism in Commemoration the 50th Anniversary of Institute for Buddhist Culture、Dongguk University (Seoul, Korea)、2012.11.30

国内、下田正弘、永崎研宣、苫米地等流「リソース連携を通じたテキスト・データベースの新たな可能性に向けて——SAT2012 を事例として」、じんもんこん、東京大学史料編纂所、2013.1.25

国際（招待、基調講演）、Masahiro Shimoda、「The Transmission of Dharma in the Digital Age Buddhist Studies in the Context of Digital Scholarship」、The Transmission of Dhamma: from the Buddha's Time to theePresent Day Saturday、Thailand Science Park Convention Center、2013.2.23

国際（招待）、Masahiro Shimoda、「A Case Study of Integration of Services and Resources on a Web Service」、CERC (Cultural Evolution for Religion Reserach Consosium) Plenary Meeting、University of British Columbia、2013.5.3

国際（招待、基調講演）、Masahiro Shimoda、「Early Pure Land Buddhism Manifesting as Written Text in Ancient India: A Background for the Emergence of Buddhism of Otherness and Other Power」、Buddhism and Contemporary Society Programme、University of British Columbia、2013.6.1

国際、Masahiro Shimoda, Kiyonori Nagasaki et al.、「A Case Study of Integration of Services and Resources on a Web Service」、digital humatnieis 2013、University of Nevrasca Linkolon (USA)、2013.7.17

国内、下田正弘、「仏教学と人文情報学」、日本印度学仏教学会、島根県民会館、2013.9.1

国内、下田正弘、「大乘仏教の起源について」、日本宗教学会、國學院大學、2013.9.7

国際（招待）、Masahiro Shimoda、「Transcending Borders through DH Networking in the Asia-Pacific」、Japanese Association for Digital Humanities 2013、2013.9.21

国際 (招待)、Masahiro Shimoda、「Several Issues of a Buddhist Encyclopedia as a Base of Knowledge of Buddhist Studies in the Age of Digital Medium」、Colloque international Bouddhisme et encyclopédie、 Collège de France、2013.10.25

国内 (招待、基調講演)、下田正弘、「人文情報学とアジア研究—仏教知識基盤形成の国際連携を事例として」、一般財団法人東方学会平成25年度秋季学術大会、日本教育会館、2013.11.8

国内 (招待)「緊急シンポジウム：近デジ大蔵経公開停止・再開問題を通じて人文系学術研究における情報共有の将来を考える」2014.1.24.

(5) 研究報告書

下田正弘、永崎研宣、清水元広、「情報処理学会研究報告」、2013-CH-97(4)、1-6頁、2013.1

下田正弘、永崎研宣、苫米地等流、「情報処理学会研究報告」、CH-97(1)、1-8頁、2013.3

(6) 予稿・会議録

国際会議、Masahiro Shimoda、「Korean Buddhism as Seen from Japanese Perspective: Focusing on Wonhyo's Hermeneutical Attitude toward the Tathagatagarbha Theory」、International Conference on Korean Buddhism in Commemoration of the 50th Anniversary of Institute for Korean Culture、Dongguk University、2012.11.30、『Buddhist Studies as Korean Studies: Interdisciplinary Approaches』、83-106頁、2012.11

国内会議、下田正弘、「人文情報学とアジア研究—仏教知識基盤形成の国際連携を事例として」、一般財団法人東方学会、日本教育会館、『平成25年度秋季学術大会』、6頁、2013.11

国際会議、Masahiro Shimoda、「The Current State and the Future of Buddhist Studies in Japan: A Methodological Critique on Buddhist Studies」、Dunguk University、25-33頁、2014.5

(7) 会議主催(チェア他)

国際、「Digita Humanities 2012」、チェア、University of Hamburg、2012.7.16~2012.7.20

国際、「Japanese Association for Digital Humanities 2012」、主催、東京大学大学院工学系研究科、2012.9.15~2012.9.17

国際、「Digital Humanities 2013」、チェア、University of Nebraska Linkolon (USA)、2013.7.19~2013.7.19

国際、「Japanese Association for Digital Humanities 2013」、主催、立命館大学、2013.9.19~2013.9.21

国際、「International Symposium, Humanities Studies in the Digital Age and the Role of Buddhist Studies」主催、科研基盤A「国際連携による仏教学術知識基盤の構築」シンポジウム、東京大学、2013.11.16~17

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

武蔵野大学大学院非常勤講師

岩手大学教育学部非常勤講師 2013

(2) 学会

国際、国際デジタルヒューマニティーズ学会連合、理事

国内、日本デジタルヒューマニティーズ学会、会長、理事

国内、日本宗教学会、常務理事、評議員

国内、日本印度学仏教学会、理事、評議員、常務委員

国内、財団法人東方学会、評議員

国内、仏教思想学会、評議員

国内、パーリ学仏教文化学会、理事

国内、比較思想学会、評議員

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

大蔵経テキストデータベース研究会、代表委員

大蔵経研究推進会議、常任議員、議長

一般財団法人人文情報学研究所、評議員

日本学術会議連携会員、2011.10

公益財団法人仏教伝道協会、英訳大蔵経編集委員会委員

公益財団法人石原奨学育英会、選考委員

一般財団法人仏教学術振興会、選考委員

公益財団法人国際宗教研究所、監事

宗教法人曹洞宗将来構想委員会第一部会、委員  
一般財団法人東京大学仏教青年会、理事

教授 **蓑輪 頭量** MINOWA, Kenryo

## 1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業(学士)  
1983年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻修士課程入学  
1986年3月 同大学院 (印度哲学印度文学専攻) 修士課程修了(修士)  
1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程進学  
1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程単位取得退学  
1991年4月 日本学術振興会特別研究員 (平成5年3月迄)  
1998年4月 愛知学院大学文学部日本文化学科 助教授 (平成16年1月迄)  
1998年10月 博士(文学)の学位取得  
2004年1月 愛知学院大学文学部日本文化学科 教授  
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

仏教学、東アジアの仏教及び日本仏教に関する研究。

### b 研究課題

東アジアにおける仏教の研究。特に日本仏教における修行、学問に関する研究を行っている。学問に関わるところでは、古代の論義に関する研究を南都に残された法会資料を用いながら考察を進めており、古代から中世に掛けて行われた仏教教理に関する論争に焦点を当てている。また修行道に関する研究は、東南アジアや東アジア世界に伝わる修行の実際に注意を払いながら、東アジア世界に残された文献資料を用いて、修行道の内容を明らかにすることを目指して研究を進めている。また、昨年度より台湾における人間仏教の研究も視野にいれている。

### c 主要業績

#### (1) 著書

共著、蓑輪頭量、『アジアの仏教と神々』、法蔵館、2012.3

#### (2) 論文

蓑輪頭量、「韓国における仏教と神信仰の関係：神仏の併存と分離について」、『パリー学仏教文化学』、26、169-191頁、2012.5

蓑輪頭量、「<仏教学>再考—教理研究と修行実践」、『日本仏教総合研究』、第10巻(2011年度号)、147-166頁、2012.5

蓑輪頭量、「良遍の『真心要決』と禅」、『印度学仏教学研究』、61-2、1-10頁、2013.3

蓑輪頭量、「仏教における瞑想とその展開」、『身心変容技法』、2、87-96頁、2013.3

蓑輪頭量、「宗性撰『無料義経論義抄』について」、『奥田慈應先生頌寿記念インド学仏教学論集』、961-974頁、2014.3

蓑輪頭量、「中世東大寺僧に見る禅宗の影響—凝然の場合—」、『印度学仏教学研究』、62-2(132)、167-174頁、2014.3

#### (3) 学会発表

国内、蓑輪頭量、「明治期における大乘非仏説論—村上専精を中心に」、東方学会学術大会、神田・東方会館、2012.5

国内、蓑輪頭量、「良遍の『真心要決』と禅」、日本印度学仏教学会第63回学術大会、神奈川県鶴見・鶴見大学、2012.6

国内、蓑輪頭量、「中世東大寺僧に見る禅宗の影響—凝然の場合」、日本印度学仏教学会第64回学術大会、島根県松江市島根県民会館、2013.8.31

国内、蓑輪頭量、「中世禅宗の南都僧に与えた影響—凝然の場合」、日本印度学仏教学会、2013.9.1

国内、衰輪頭量、「中世南都の僧侶に与えた禅宗の影響」、東アジア仏教研究会、駒澤大学 246 号会館、2013.12.7

(4) 監修

衰輪頭量、『事典 日本の仏教』、吉川弘文館、2014.2

**3. 主な社会活動**

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東洋大学文学部、「日本仏教の歩み A・B」、2012.4～

非常勤講師、国際仏教学大学院大学、「仏教と生命倫理」、2012.4～

非常勤講師、武蔵野大学通信教育部、「生活仏教」、2012.4～2013.3

特別講演、千葉市文化振興財団、「仏教伝来とその地域の歴史—インド・中国そして日本」、2012.9

非常勤講師、亀田医療技術専門学校、「哲学（集中講義）」、2012.9

特別講演、東京大学文学部北見市公開講座、「仏教の目指したものの一心を見つめる」、2012.10

特別講演、東京大学文学部公開講座、「仏教のめざしたものの一心を見つめる」、2012.11

特別講演、日蓮宗現代宗教研究所、「中世仏教界における遁世—その成立の背景と集団としての成立」、2013.1

特別講演、築地がんセンター JOC 企画、「医療と精神文化—自己決定権の問題点とその解決へ向けて」、2013.2

特別講演、真宗東本願寺派日曜講演会、「仏教の修行道の目指したものと真宗の教え」、2013.10

特別講演、伊勢国際宗教フォーラム、「中世の仏教と伊勢神宮—伊勢を訪ねた仏教者」、2013.11

特別講演、東大寺総合文化センター、「寺僧と遁世門の活躍—戒律・禅・浄土の視点から」、2013.11

特別講演、JR 東海/奈良県主催 奈良学文化講座、「鑑真の伝えた戒律と心の観察法」、2014.2

(2) 学会

国内、日本仏教総合研究学会、会長、2012.4～

国内、東アジア仏教研究会、会長、2013.4～

# 16 イスラム学

教授 竹下 政孝

TAKESHITA, Masataka

## 1. 略歴

- 1971年6月 東京大学教養学部教養学科(科学史科学哲学分科)卒業(教養学士)
- 1971年6月 シカゴ大学大学院中近東学科修士課程入学
- 1973年6月 シカゴ大学大学院中近東学科修士課程修了
- 1973年9月 テヘラン大学へ留学
- 1974年9月 ベイルート・アメリカン大学へ留学
- 1975年9月 カイロ大学へ留学
- 1976年8月 シカゴ大学大学院中近東学科より修士号取得
- 1976年9月 ウィーン大学留学
- 1979年9月 再び シカゴ大学大学院中近東学科博士課程入学
- 1981年6月 シカゴ大学大学院中近東学科博士課程修了
- 1983年4月 東海大学文学部文明学科アジア課程西アジア専攻専任講師
- 1986年4月 東海大学文学部文明学科アジア課程西アジア専攻助教授
- 1986年8月 シカゴ大学大学院中近東学科より博士号取得
- 1990年4月 東京大学文学部イスラム学助教授
- 1994年4月 東京大学文学部イスラム学教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野      b 研究課題

イスラム思想史の流れの中で、特にイブン・アラビーに代表される後期スーフィズムの思想をテキストの綿密な分析によって解明するとともに、彼の思想の起源をイスラム哲学や、神学、初期スーフィズムとの関係の中で歴史的に跡付け、また、彼の死後、彼の思想がどのように受容されていったかを明らかにすることを大きな目標にしている。現在、13世紀のアナトリアのイスラムを総合的に捉え、その中で、イブン・アラビー学派の位置を検討している最中である。そのために、ルーム・セルジューク朝の歴史文献を読んでいるが、特にメウレヴィー教団の聖者伝を資料として当時の宗教と社会の関係を探っている。

### c 主要業績

#### (1) 著書

単著、『イスラームを知る四つの扉』ふねうま舎、2013.1

## 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

東海大学非常勤講師、2012.4～2012.9

**1. 略歴**

- 1980年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業  
1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（東洋史学）  
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（東洋史学）  
1988年10月 茨城大学教養学部専任講師  
1989年4月 同 助教授  
1993年4月 東北大学大学院国際文化研究科助教授  
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（1997年度は東北大学大学院と併任）  
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授  
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

**2. 主な研究活動****a 専門分野      b 研究課題**

2004年3月に『A History of the early Islamic law of property』、2005年2月に『現代ムスリム家族法』を出版した。  
その後7世紀以来のイスラーム実定法の研究を進めている。

**c 主要業績****(1) 著書**

共著、Hiroyuki Yanagihashi、『Islamic Legal Thought』、Brill、2013.4  
編著、柳橋博之、『イスラーム 知の遺産』、東京大学出版会、2014.2

**(2) 論文**

柳橋博之、「巡礼の履行不能をめぐるハディースと法学説について」、『イスラム世界』、78、1-33頁、2012.4

**3. 主な社会活動****(1) 他機関での講義等**

非常勤講師、神戸大学大学院国際協力研究科、「イスラム法社会論」、2012.9～2013.9

**(2) 学会**

国内、一般社団法人日本イスラム協会、理事長、2010.4～

**1. 略歴**

- 1992年3月 東京大学文学部イスラム学専修課程卒業  
1992年4月 東京大学大学院人文科学研究科イスラム学修士課程入学  
1994年3月 同修了  
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科イスラム学博士課程進学  
1998年3月 博士（文学）の学位取得  
1998年4月 東京大学東洋文化研究所研究機関研究員（2000年3月まで）  
2000年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（2003年3月まで）  
2004年4月 神田外語大学外国語学部専任講師  
2008年4月 神田外語大学外国語学部准教授  
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

シーア派思想史

### b 研究課題

7世紀以降のシーア派思想史における「極端派」思想と十二イマーム派、イスマール派の形成過程との関係について研究している。

### c 主要業績

#### (1) 著書

共著、竹下政孝・山内志朗(編)、『イスラーム哲学とキリスト教中世Ⅲ：神秘哲学』、岩波書店、2012.1

共著、黒木英充(編)、『シリアとレバノンを知るための67章』、明石書店、2013.8

#### (2) 論文

TATSUYA KIKUCHI, 「The Resurrection of Isma'ili Myth in Twelfth-Century Yemen」、『Ishraq』、4、345-359頁、2013.6

菊地達也、「イスラーム教シーア派におけるメシア主義とその神話化」、『文化交流研究』、27、37-47頁、2014.3

#### (3) 学会発表

国内、菊地達也、「イスラーム少数派」、「基盤研究 A グローバル化時代に対応する 21 世紀型イスラーム学の構築」研究会、京都大学、2013.10.11

国内、菊地達也、「シーア派思想史と極端派(グラート)」、スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座、東京大学駒場キャンパス、2013.10.19

国内、菊地達也、「現代ドゥルーズ派のタキーヤと護教論」、「科研 A 変革期のイスラーム」2013 年度第 2 回研究会、東京国際大学、2014.2.21

国内、菊地達也、「イスラーム共同体の境界領域：ドゥルーズ派を中心に」、「基盤 A ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」研究会、立教大学、2014.3.18

#### (4) 監修

菊地達也、『イスラムがわかる!』、成美堂出版、2013.5

#### (5) 翻訳

共訳、Adalberto Aguirre, Jr., Jonathan H. Turner, "American Ethnicity: The Dynamics and Consequences of Discrimination, Fifth Edition"、菊地達也、アダルベルト・アギーレ・ジュニア、ジョナサン H. ターナー『アメリカンのエスニシティ：人種的融和を目指す多民族国家』、明石書店、2013.1

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、神田外語大学外国語学部、「宗教学 IA/IB」、2013.4~2014.3

非常勤講師、神田外語大学外国語学部、「研究演習-54」、2013.4~2014.3

# 17 西洋古典学

教授 葛西 康德

KASAI, Yasunori

## 1. 略歴

- 1978年3月 東京大学法学部第一類（私法コース）卒業
- 1986年8月 連合王国ブリストル大学古典学・考古学科留学（1988年7月まで）
- 1992年2月 Ph.D.学位取得（連合王国ブリストル大学）
- 1978年4月 東京大学法学部助手
- 1982年4月 新潟大学教養部講師
- 1986年4月 新潟大学法学部助教授
- 1992年4月 新潟大学法学部教授
- 1993年11月 オクスフォード大学クライスト・チャーチ客員研究員（1995年1月まで）
- 1995年4月 新潟大学大学院現代社会文化研究科担当（「古典社会文化論」担当）
- 1999年9月 オクスフォード大学ベイリオル・コレッジ客員フェロー（2000年9月まで）
- 2002年4月 新潟大学法学部法政コミュニケーション学科長（2003(平成15)年3月まで）
- 2004年4月 新潟大学大学院実務法学研究科教授
- 2006年4月 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授
- 2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

西洋古典学 ギリシア・ローマ法

### b 研究課題

- 1 古代ギリシア人の「対立状況における行動様式」の特徴を、compliance と defiance という概念枠組を用いて、経済、法、宗教、哲学等の諸側面から総合的に考察する。
- 2 ギリシア法を「ギリシア語で書かれた法および裁判に関する文献」と広義に捉え直し、とりわけ民事訴訟をローマとパラレルにとらえることによって、その体系性と技術性を明らかにする。さらに、従来の見方を逆転してローマ法をギリシア法の普及として捉え、古代から近代にいたるギリシア法の歴史を通観する。
- 3 西洋学問の近世・近代の日本への移入を「文化転移」として、「普及」と「翻訳」という視点から総体的に把握する。

### c 主要業績

#### (1) 論文

Yasunori Kasai, "In search of the origin of the notion of *aequitas* (*epieikeia*) in Greek and Roman Law", 『広大法学』37巻1号、2013.6、p.543-564

葛西康德「古代ギリシアにおける法（Nomos）の概念について—とくに「立法」および「立法者」に焦点をあわせて—」国際哲学研究（東洋大学国際哲学研究センター編）、別冊2「〈法〉概念の時間と空間—〈法〉の多様性とその可能性を探る」、51～60頁、2013.3

葛西康德、「Compliance and Defiance in Ancient Greece」『文化交流研究』：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要（25）、23～27頁、2012

#### (2) 書評

葛西康德、「五十君麻里子「ローマ大衆の法知識—プラウトゥス喜劇における「笑源」としての法」」『法制史研究』、63号（法制史学会年報2013）、307～310頁、2014.3

葛西康德、「古山正人「キュテラとキュテロディクス」」『國學院雑誌』109巻6号（平成20年6月）「スパルタとペリオイコイの法的軍事的関係」『國學院雑誌』111巻6号（平成22年6月）、「法制史研究」61号（法制史学会年報2011）、340～345頁、2012.3

(3) 学会発表

国際、KASAI, Yasunori, 「The authority of law in the Greek forensic oratory—the law as evidence and the lawgiver」、21st British Legal History Conference ‘Law and Authority’、University of Glasgow, United Kingdom、2013.7.11

国際、KASAI, Yasunori, 「Philosophical foundations of the notion of *aequitas* (*epieikeia*) in Greek and Roman Law」、Southern African Society of Legal Historians Conference May 2013 ‘*Ius est ars boni et aequi*」、Kwa Maritane, South Africa、2013.5.13

国際、KASAI, Yasunori, 「The notion of ‘uncanny’ in Ancient Greece」、The 2013 IEEE International Conference on Robotics and Automation (ICRA 2013)、Karlsruhe, Germany、2013.5.11

(4) 研究会報告

葛西康德「法源としての学説と条理—Law Books in Action と Tony Honoré, Ulpian, 2nd ed. の紹介—」グローバル社会における法源論の再検討研究会、宇和島歴史資料館、2014.3.15

葛西康德「東京大学草創期の授業再現（東京大学大学院人文社会系研究科「多分野交流演習」授業について）」グローバル社会における法源論の再検討研究会、宇和島歴史資料館、2014.3.15

葛西康德・野津寛「グローバル社会と哲学・古典—国家公務員試験改革—」日本学術会議公開シンポジウム「グローバル化社会における伝統知と古典教育の意義を探る」、中村元記念館東洋思想文化研究所、2013.11.23

国際、KASAI, Yasunori, “Tony Honoré on *aequitas* (*epieikeia*)” Symposium “Roman Law and Civilian Tradition—Japan and Scotland—”, Ross Priory, U.K. 2013.8.26

葛西康德「法政コミュニケーション学科（1995-2003年度）の経験—成果と問題点—」シンポジウム「ミクスト・リーガル・システム論の展開 法政コミュニケーション学科の研究教育をどう活かすか」、新潟大学、2013.2.23

葛西康德「古代ギリシアにおける法（Nomos）の概念について—とくに「立法」および「立法者」に焦点をあわせて—」、シンポジウム「〈法〉概念の時間と空間—〈法〉の多様性とその可能性を探る」、東洋大学国際哲学研究センター、2012.12.15

葛西康德「ギリシア民事訴訟制度研究史」ギリシア・ローマ民事訴訟研究会、追分、2012.11.3

葛西康德「グローバル教育について」国際シンポジウム「日加比較の新たな視点—ミクスト・リーガル・システム論の展開—」新潟大学、2012.11.11

葛西康德「パネルディスカッション『東大新図書館を考える』」シンポジウム「東大新図書館を考える：文字・書物・読書の現在」東京大学、2012.10.20

国際、KASAI, Yasunori, Comments, “Sources of Law in an Age of Globalization: From the Perspective of Mixed Legal Systems”, 九州大学法政学会シンポジウム、九州大学、2012.6.4

(5) 会議主催（チェア他）

国際、「Symposium “Roman Law and Civilian Tradition—Japan and Scotland—”」、主催、Ross Priory (University of Strathclyde), U.K., 2013.8.26

国際、「Tokyo-Edinburgh colloquium」、主催（Douglas Cairns 教授と共同）、Old Medical School, University of Edinburgh、2013.8.24

国内、「グローバル社会における法源論の再検討研究会」、主催、宇和島歴史資料館、2014.3.14～3.16

国際、「ギリシア法・ローマ=オランダ法講演会」、主催、東京大学、大阪大学、2013.3.20～4.1

国内、「ギリシア・ローマ民事訴訟研究会」、主催、宮城県追分、2012.11.3～11.4

国際、「第2回混合法研究会『コモン・ローとヒンドゥー法—その邂逅からインド契約法成立まで—』」、主催、東京大学、2012.9.13

国際、「第1回混合法研究会『パーマー教授の混合法系理論 ルイジアナ法からの広がり と日本法への示唆』」、主催、東京大学、2012.6.8

(6) 総説・総合報告

葛西康德「はじめに—海を渡ったローマ法—」（特集 法典化の19世紀—（ポスト）コロニアル・パースペクティブ）『19世紀学研究』8号、5頁、2014.3

葛西康德「おわりに—『二等国連合』—ミクスト・リーガル・システムの戦略—」（特集 法典化の19世紀—（ポスト）コロニアル・パースペクティブ）『19世紀学研究』8号、53～54頁、2014.3

葛西康德「学問の普及と継受—西洋古典 学研究室の場合」（前編）『U7』、vol.50、54～57頁、2013.7、（後編）『U7』、vol.51、52～58頁、2013.9

葛西康德、「開かれた日本の大学へ」、『大学出版』、91号、1～9頁、2012

葛西康徳「グローバル化の中のイギリスと日本—Being a Frontier Man (Woman) —ロンドンオリンピック  
2012 に寄せて」両国高等学校 言語能力向上推進事業・講演会、両国高等学校、2012.10.19

(7) **共同研究・受託研究**

科学研究費基盤研究挑戦的萌芽研究 (H24～H26) 「コモン・ローとヒンドゥー法の邂逅—ウィリアム・ジョーンズ  
研究」(代表)

科学研究費基盤研究 (B) (一般) (H23～H26) 「ギリシア・ローマ民事訴訟再検討—裁判手続と法廷弁論—」(代表)

科学研究費基盤研究 (A) (一般) (H25～H28) 「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研  
究」(分担) (研究代表者: 市川裕)

科学研究費基盤研究 (B) (一般) (H22～H25) 「グローバル社会における法源論の再検討—法学概論の書き換え—」  
(分担) (研究代表者: 小川浩三)

科学研究費基盤研究 (C) (一般) (H23～H25) 「ミクスト・リーガル・システム論による日本法の比較法的再定位  
—条理、名誉毀損、信託」(分担) (研究代表者: 松本英実)

**3. 主な社会活動**

(1) **他機関での講義等**

2012 年度

大妻女子大学「法律と現代社会」非常勤講師 (2 単位)

新潟県農業大学校「くらしと法律」非常勤講師 (2 単位)

2013 年度

大妻女子大学「法律と現代社会」非常勤講師 (2 単位)

新潟県農業大学校「くらしと法律」非常勤講師 (2 単位)

津田塾大学「ギリシア語」非常勤講師 (4 単位)

千葉大学法科大学院「法制史」非常勤講師 (2 単位)

(2) **学会**

「日本西洋古典学会」「日本法制史学会」「日本宗教学会」「19 世紀学学会」

「法とコンピュータ学会」(理事)

The Hellenic Society, The Selden Society, World Society of Mixed Jurisdiction Jurists

International Academy of Comparative Law (Associate member)

(3) **行政**

北陸信越地方交通審議会船員部会公益委員

(4) **学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員**

日本学会会議連携会員

新潟大学超域学術院運営委員会委員

## 18 フランス語フランス文学

教授 月村 辰雄

TSUKIMURA, Tatsuo

### 1. 略歴

1974年 3月	東京大学文学部卒業（フランス語フランス文学）
1976年 3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了（仏語仏文学）
1977年 10月	パリ高等学術研究院博士課程（フランス政府給費留学、～80年 9月）
1979年 10月	パリ第3大学東洋語東洋文化研究所講師（日本語科、～80年 9月）
1981年 3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学（仏語仏文学）
1981年 4月	同 文学部助手（フランス語フランス文学）
1986年 4月	獨協大学外国語学部専任講師（フランス語科）
1989年 4月	東京大学文学部助教授（フランス語フランス文学）
1995年 1月	同 教授（フランス語フランス文学）
1995年 4月	同 大学院人文社会系研究科教授（仏語仏文学）
2000年 4月	同 文化資源学研究専攻（文書学専門分野）に配置換
2014年 4月	同 フランス語フランス文学専門分野に配置換

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

フランス文学（中世文学、ルネサンス文学）

文化資源学（書物史、ヨーロッパ図書館史）

#### b 研究課題

##### (1) マルコ・ポーロ研究

マルコ・ポーロ『東方見聞録』の中世フランス語本、イタリア方言本、ラテン語本等の比較研究。

##### (2) 中世西ヨーロッパのアジア観についての研究

『アレクサンドロス大王物語』、とりわけその一枝篇「アレクサンドロス大王の楽園への旅」、プレスター・ジョンの手紙、カルビーニ、ルブルク、オドリコ等の東方旅行記録、ハイトンの地誌、マンドヴィルの架空旅行記など、12～14世紀のヨーロッパの東方記述の総体を対象に、中世西ヨーロッパのアジア観についての研究を進めている。

##### (3) レトリック教育史研究

古典修辞学が古代ギリシア以降、19世紀末のフランスに至るあいだ、どのように学校教育の中で教えられてきたのかという問題を、とりわけディスクールのような型を教える初等教科書『プロギュムナスマタ』を中心に研究している。

##### (4) 明治期の演説研究

レトリックの歴史に関連して、文化資源学においては、明治初頭の日本にヨーロッパのどのようなレトリック教本が移入され、それがどのように理解、ないしは誤解されて、自由民権運動とともに盛んになった演説の中に取り入れられたのかを研究している。

#### c 主要業績

##### (1) 学会発表、ターブル・ロンドなど

ワークショップ「レトリック教育史と文学研究」コーディネーター、日本フランス語フランス文学会 2012年度春季大会、2012年6月3日、東京大学文学部

講演「マルコ・ポーロの『当方見聞録』——世紀を歩く、美術と文化II、第4回」、多摩美術大学生涯学習センター、2012年10月6日

##### (2) 翻訳

マルコ・ポーロ『東方見聞録』（久保田勝一と共訳）、岩波書店、2012年5月

## 1. 略歴

1976年3月	東京大学教養学科（フランスの文化と社会）卒業
1979年3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了（仏語仏文学）
1982年10月	パリ第三大学東洋語東洋文明研究所講師（～'83年9月）
1985年12月	同 第三期課程博士（フランス文学・19世紀部門）
1986年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程（仏語仏文学）単位取得のうえ退学
1986年4月	同 教養学部助手
1988年4月	同 助教授
1992年4月	同 文学部助教授
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授
1996年2月	同 教授、現在にいたる
2004年4月	
～2006年3月	東京大学大学院人文社会系研究科副研究科長・東京大学教育研究評議員
2011年4月	東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長（～2013年3月）

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

フランス近代詩。フランス現代文学の諸相

### b 研究課題

- (1) ランボー『地獄の一季節』の、主題論的、ジャンル論的視点からの再検討
- (2) 日本におけるジョルジュ・バタイユ受容史の研究
- (3) 現代作家ル・クレジオの形成における映画の影響の研究、記憶と想像力の関わり研究
- (4) 科研課題「フランス近代作家の歴史意識」を進めるための基礎作業

### c 主要業績

#### (1) 論文

「映画からの贈り物、映画への贈り物」（『ル・クレジオ 映画を語る』中地義和訳、巻末解説、河出書房新社、2012.6、pp. 233-243

« De l'émerveillement à la recherche : Georges Bataille au Japon », *Critique*, Nos 788-789 Éd. de Minuit (France), janvier-février 2013, pp.126-137

« Une parole qui se veut performatrice : considérations génériques sur *Une saison en enfer* », *La Licorne*, Presse universitaires de Rennes (France), No 105, 2013, pp. 227-236

「記憶、夢想、フィクション」（ル・クレジオ著『隔離の島』、中地義和訳、巻末論文）、筑摩書房、2013、pp. 462-485

#### (2) 小論

「ヨーロッパ文学と海」、『Ship & Ocean Newsletters』、No 277、2012.2、pp. 6-7

「あるヴァイオリニストのこと」、『文学界』、第66巻—第10号、2012.10、pp. 202-203

#### (3) 翻訳

ル・クレジオ著、『ル・クレジオ 映画を語る』（原題：*Ballaciner*）、河出書房新社、2012、243p.

アントワヌ・コンパニオン著、「文学は割に合う」（原題：« La littérature, ça paye »）、『群像』、第67巻—第9号、講談社、2012.9、pp. 149-160

ル・クレジオ著、『隔離の島』（原題 *La Quarantaine*）、筑摩書房、2013、485p.

ル・クレジオ著、「新たな戦争の幕開け」（原題 « L'aube d'une guerre nouvelle »）、『文学界』、第68巻—第2号、文藝春秋社、2014.2、pp.141-143

ル・クレジオ&中地義和 共著、「文学創造における記憶と創造力——ル・クレジオとの対話」（原題 « Mémoire et imagination dans la création littéraire »）、『文学界』、第68巻—第4号、文藝春秋社、2014.4、pp. 222-241

#### (4) 書評

アントワヌ・コンパニオン (松澤和宏訳)、『アンチモダン 反近代の歴史』、名古屋大学出版局、『ふらんす』、第 87 巻-第 10 号、2012.10、p.75

ル・クレジオ (中地義和訳)、『隔離の島』、筑摩書房、『ちくま』、第 514 号、2014.1、pp. 6-7

ユーリー・ボリソフ (宮澤淳一訳)、『リヒテルは語る』、筑摩書房、『ちくま』、第 517 号、2014.4、pp. 10-11

#### (5) 学会発表、等

« Sur la traduction et la littérature japonaise contemporaine », Audi Centrum (モーリシャス共和国) での講演、2013.8.5

« Lacune mémorielle et imagination réparatrice : la plénitude dans le “cycle mauricien” de Le Clézio », Séminaire du Pr. Eric Benoit、ボルドー第 3 大学 (ボルドー市、フランス) での講演、2013.11.22

« Rimbaud autocritique », Colloque international "Rimbaud poéticien"、カ・フォスカリ大学 (ヴェネツィア市、イタリア) における国際ランボー・シンポジウムでの発表と司会、2013.11.28-29

「言語を移り住む詩—研究、翻訳、再創造」、渋谷・クローデル賞 30 周年記念シンポジウム「フランス的知性の今?」、東京日仏会館、2014.4.3

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学会

日本フランス語フランス文学会員

国際フランス研究学会員

国際ランボー研究誌「バラッド・ソヴァージュ」(*Parade sauvage*) 学術委員

「ボードレール年鑑」(*L'Année Baudelaire*) 編集委員

「クリティーク」誌 (*Critique*) 国際審査委員

「ランボーの友」誌 (*Les Amis de Rimbaud*) 日本通信員

#### (2) 行政

人文社会系研究科長・文学部長 (2011 年 4 月～2013 年 3 月)

教授 塚本 昌則

TSUKAMOTO, Masanori

### 1. 略歴

- 1982 年 3 月 東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
- 1984 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学 (仏語仏文学)
- 1987 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学
- 1988 年 10 月 パリ第 12 大学博士課程 (～ 1991 年 9 月) (フランス文学、フランス政府給費留学生)
- 1992 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
- 1992 年 4 月 東京大学文学部助手
- 1994 年 4 月 白百合女子大学文学部専任講師 (フランス文学)
- 1997 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (フランス語フランス文学)
- 2010 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (フランス語フランス文学)

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

フランス近代文学。

#### b 研究課題

- (1) ポール・ヴァレリー研究。「夢」というトポス、断章という形式からの検討。
- (2) クレオール文学研究。エキゾティシズムとは無縁の、活力にあふれたその作品美学の研究を、シャモワゾー、コンフィアン、グリッサンなどの作品読解を通して進めている。

- (3) 20 世紀フランス文学における散文の研究。小説全盛の 19 世紀とは異なり、20 世紀には、詩的強度を備えたさまざまな散文作品が書かれるようになった。とりわけ、時間意識、さらにイメージの活用法という視点から、その特質の一端を捉えようと試みている。

### c 主要業績

#### (1) 著書

編著、『写真と文学—何がイメージの価値を決めるのか』、平凡社、2013.10

#### (2) 論文

「デュッサンの度合い—ヴァレリーにおける夢の詩学」、『絵を書く』マリアンヌ・シモン=及川編、p.203-233、2012.6

「ヴァレリーとフロイト—奇妙なまなざしをめぐって」、『思想』、n.1068、p.243-261、2013.4

「〈さすらい〉の詩学—マルグリット・デュラス監督『トラック』を中心に」、『文学と映画のあいだ』野崎敏編、東京大学出版会、p.61-82、2013.6

「時のゆがみ—ローデンバック、ブルトン、ゼーバルトの〈写真小説〉」、『写真と文学—何がイメージの価値を決めるのか』平凡社、p.34-57、2013.10

「『夢の圧力』—ブルーストとヴァレリーにおける眠りと夢について—」、『思想』、n.1075、p.103-123、2013.11

« La conscience comme événement — une relecture de L'Ange », *Forschungen zu Paul Valéry*, n°. 24 (2011), p.53-70、2013.12

#### (3) 翻訳

サミア・カッサブ=シャルフィ著、『パトリック・シャモワゾー』（原題 *Patrick Chamoiseau*）、共訳（塚本昌則・中村隆之）、アンステイチュ・フランセ、2012、[http://issuu.com/ifpub/docs/patrick\\_chamoiseau\\_if](http://issuu.com/ifpub/docs/patrick_chamoiseau_if)

ポール・ヴァレリー著、『魂と舞踏』（原題 « L'âme et la danse »）、樹についての対話（原題 « Dialogue de l'arbre »）、

『ヴァレリー集成 VI—〈友愛〉と対話』（恒川邦夫・松田浩則編訳）、筑摩書房、2012.7、p.226-257、p.258-277

ポール・ヴァレリー著、『レオナルド・ダ・ヴィンチ論』（原題 « Introduction à la méthode de Léonard de Vinci » 等）、ちくま学芸文庫、2013.9

#### (4) 書評

ダニー・ラフェリエール、『帰還の謎』、『ハイチ震災日記』、藤原書店、『週刊読書人』、2012年1月6日

『2012年回顧・外国文学（フランス）』、『週刊読書人』、2012年12月21日

エドゥージュ・ダンティカ、『地震以前の私たち、地震以後の私たち—それぞれの記憶よ、語れ』、作品社、『週刊読書人』、2013年10月18日

中村隆之、『カリブ世界論—植民地主義に抗う複数の場所と歴史』、人文書院、『週刊読書人』、2013年11月29日

『2013年回顧・外国文学（フランス）』、『週刊読書人』、2013年12月20日

#### (5) 解説

「フランス文学」、「カリブ海のフランス語文化（クレオール文化）」（項目執筆）、『フランス文化事典』田村毅・塩川徹也・西本晃二・鈴木雅生編、丸善出版者、2012.7

「トドロフ」（項目執筆）、『現代社会学事典』見田宗介・編集顧問、大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編、弘文堂、2012.12

#### (6) 学会発表

「フィクション論の現在」、ワークショップ「フィクション論の現在」、日本フランス語フランス文学会 2012 年度春季大会、東京大学文学部、2012.6.3

「〈中心的態度〉—サルトルのイメージ論をめぐって」、『サルトル／バルト』、東京外国語大学総合文化研究所、2012.12.8

「ヴァレリーにおける「フィギュール」概念」、ワークショップ「来るべき修辞学—文学と哲学のあいだで—」、日本フランス語フランス文学会 2013 年度春季大会、国際基督教大学、2013.6.2

「オートフィクションと写真—ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち』を出発点に」、「〈生表象〉の近代—自伝・フィクション・学知—」、一橋大学、2014.2.2

#### (7) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、塚本昌則、研究代表者、「近代フランス文学における散文の研究」、2013〜

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学会

日本フランス語フランス文学会員

## 1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
1981年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
1985年4月	東京大学大学院人文科学研究科専攻博士課程進学
1985年9月	パリ第3大学博士課程（～1989年3月）（フランス文学、フランス政府給費留学生）
1989年4月	東京大学文学部助手
1990年4月	一橋大学法学部専任講師
1993年4月	一橋大学法学部助教授
1997年5月	一橋大学大学院言語社会研究科助教授
2000年4月	東京大学大学院総合科学研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授、現在に至る

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

ジェラルド・ド・ネルヴァルの作品を中心とするフランス・ロマン主義文学。フランス現代小説、映画論。

### b 研究課題

- (1) フランス・ロマン主義文学における「作者」像の成立と変容。
- (2) フランス19世紀文学史の再検討。
- (3) フランス現代小説における「作者」像の解体と再生。
- (4) フランス映画における多文化主義と異文化交渉の表現。

### c 主要業績

#### (1) 著書

共編著、石坂健治、市山尚三、野崎敏、松岡環、門間貴志、『アジア映画の森 新世紀の映画地図』、作品社、2012.6、368p.

編著、『文学と映画のあいだ』、東京大学出版会、2013.6、244p.

単著、『フランス文学と愛』、講談社現代新書、2013.10、268p.

編著、石坂健治、夏目深雪、野崎敏、『アジア映画で〈世界〉を見る』、作品社、2013.10、320p.

単著、『翻訳教育』、河出書房新社、2014.1、219p.

単著、『映画、希望のイマージュ——香港とフランスの挑戦』、弦書房、2014.2、65p.

#### (2) 論文

« De l'idolâtrie au dialogue : les écrivains japonais et la littérature française », *La Nouvelle Revue Française*, n.599-600, 2012.3, pp.130-145

「映画の中の建築——仮想と現実」、『建築と社会』、no.1098、2013、pp.18-19

「欲望の不壊——ロマン主義からフロイトへ」、『思想』、4月号、2013.4、pp.125-142

« Truffaut in the Mirror of Japanese mirror », ed. by Dudley Andrew and Anne Gillain, *A Companion to François Truffaut*, Wiley-Blackwell, 2013.4, pp.388-400

「写真への抵抗——現代フランス小説と写真」、塚本昌則編、『写真と文学 何がイメージの価値を決めるのか』、平凡社、2013.10、pp.96-112

#### (3) 学会発表・講演等

董啓章講演会「未来の考古学——21世紀初に香港で書くこと」コメンテーター、東京大学中国文学研究室主催、2012年12月8日、東京大学本郷キャンパス、法文2号館2大教室、15時～17時30分

講演「作者と訳者の境界で」、日本近代文学会関西支部秋季大会、関西大学、2013年10月27日

講演「香港映画は二度死ぬ——返還以降の挑戦」福岡ユネスコ協会主催、福岡市総合図書館共催、2013年6月1日、福岡市総合図書館、14時～15時15分

講演「21世紀のフランス映画——希望のイマージュ」福岡ユネスコ協会主催、福岡市総合図書館共催、2013年6月2日、福岡市総合図書館、11時～12時15分

石坂健治、野崎敏、夏目深雪鼎談「アジア映画の境界線」アテネ・フランス文化センター主催、2014年2月2日、映画美学校試写室、20時～21時

(4) 翻訳

共訳、イレヌス・ネミロフスキー、野崎敏、平岡敦訳『フランス組曲』(原題: *Suite française*)、白水社、2012.11、565p.

個人訳、ジャン＝フィリップ・トゥーサン、野崎敏訳『マリーについての本当の話』(原題: *La Vérité sur Marie*)、講談社、2013.11、175p.

個人訳、ミシェル・ウエルベック、野崎敏訳、『地図と領土』(原題: *La Carte et le territoire*)、筑摩書房、2013.11、402p.

(5) 書評、解説等

「クロード・シモン『農耕詩』書評」『東京新聞』2012年4月1日

「クツェー『遅い男』書評」『文藝春秋』2012年5月号、pp.409-410

「街と映像の記憶」『FORE』第75号、2012年5月、pp.10-11；同第76号、pp.10-11；同78号、pp.10-11；同80号、pp.10-11

「文学が映画をつづる——『ル・アール』の靴みがき」『キネマ旬報』2012年5月下旬号、n.1611、pp.36-37

「大江健三郎『芽むしり仔撃ち』合評 奥泉光、野崎敏、町田康」『群像』2012年6月号、pp.229-241

「黒川創『いつか、この世界で起こっていたこと』書評」『新潮』2012年7月号、pp.414-415

「前田速夫『古典遊歴』書評」『文藝春秋』2012年7月号、pp.409-410

「ル・クレジオ『ル・クレジオ、映画を語る』書評」『日本経済新聞』2012年7月15日

「現代フランスの出版事情」(項目執筆)、『フランス文化事典』田村毅・塩川徹也・西本晃二・鈴木雅生編、丸善出版者、2012.7

「シェフェール『映画に行く普通の男』書評」『文藝春秋』2012年9月号、pp.409-410

「回帰する者たちの肖像 辻原登『父、断章』「すばる」2012年10月号、p.444

「アンドレ・シフリン『出版と政治の戦後史』書評」『日本経済新聞』2012年9月30日

「ヤン・カルスキ『私はホロコーストを見た』書評」『文藝春秋』2012年10月号、pp.408-409

「世界の文化・フランス」『東京新聞』2012年10月9日

「中川右介『未完成』書評」『文藝春秋』2013年4月号、pp.412-413

「山田詠美『明日死ぬかもしれない自分、そしてあなたたち』書評」『新潮』2013年5月号、pp.346-347

亀山郁夫『偏愛記 ドストエフスキーとの旅』解説、新潮文庫、2013年6月、p.289-294

「離散と流浪——ウォン・カーウアイの人生」『キネマ旬報』2013年5月下旬号、No.1636、pp.35-37

「鈴木道彦『マルセル・ブルーストの誕生』書評」『日本経済新聞』2013年6月2日

「明星で観る香港映画」『日本経済新聞夕刊』2013年6月6日、13日、20日、27日

「シンガー『不浄の血』書評」『文藝春秋』2013年6月号、pp.412-413

「個人的な詩集——動物詩集」『群像』2013年8月号、pp.116-123

「忠実な超訳——映画版『うたかたの日々』の驚異」『ムード・インディゴ うたかたの日々』パンフレット、ファントム・フィルム、2013年7月

「高橋英夫『文人荷風抄』書評」『文藝春秋』2013年8月号、pp.410-411

「四方田犬彦『ルイス・ブニュエル』書評」、『東京新聞』2013年8月18日

「『溝口健二著作集』書評」、『北海道新聞』2013年8月25日

「対談 プルーストを読むことは、自分自身を読むこと」鈴木道彦、野崎敏、「すばる」2013年、10月号、pp.148-167

「世界の現代文学 『異邦人』」『東京大学新聞』2013年10月15日

野崎敏、沼野充義『『美しいフランス語』の行方——フランス文学はどこから来て、どこへ行くのか』、沼野充義編『やっぱり世界は文学でできている 対話で学ぶ(世界文学)連続講義2』、光文社、2013.11、pp.59-118

「ジャンヌ・ダルクが宿す神秘の闇」『キネマ旬報』、No.1649、2013年11月上旬号、pp.24-25

「祈念へ、無垢へ 大江健三郎『晩年様式集』」『群像』2013年12月号、pp.234-235

「対談 文学と愛、哲学と愛」野崎敏、大澤真幸、「群像」2014年1月号、pp.184-199

江國香織『抱擁、あるいはライオンに塩を』解説、集英社文庫、2014年1月、同書下巻、pp.327-333

「『作者の死』の彼方に——ミシェル・ウエルベックの挑戦」『ちくま』2014年1月号、pp.4-5

「半歩遅れの読書術」『日本経済新聞』2014年2月9日、16日、23日

「空想と人生 松波太郎『LIFE』書評」『群像』3月号、pp.306-307

「対談 バルザック／ウエルベック ミッシェル・ウエルベック『地図と領土』（筑摩書房）刊行を機に」野崎敏、小野正嗣、「週刊読書人」2014年2月14日

「厳粛で愉快な精神の自由人 映画監督アラン・レネを悼む」毎日新聞夕刊、3月10日

「秋丸知貴『ポール・セザンヌと蒸気鉄道』書評」『週刊読書人』2014年3月28日

(6) **研究テーマ**

文部科学省科学研究費補助金、野崎敏、研究代表者、「フランス・ロマン主義における「作者」像の成立と変容をめぐる総合的研究」、2013～

**3. 主な社会活動**

(1) **学会**

日本フランス語フランス文学会員

(2) **学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員**

小西国際交流財団、日仏翻訳文学賞選考委員、2010.1～2012.12

小西国際交流財団、日仏翻訳文学賞選考委員長、2013.1～

## 19 南欧語南欧文学

教授 **長神 悟**

NAGAMI, Satoru

### 1. 略歴

1974年3月	東京大学文学部言語学専修課程卒業
1977年3月	同 大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了
1977年4月	同 博士課程～'79年3月
1977年11月	ピサ高等師範学校留学（イタリア政府給費留学生）～'78年10月
1978年11月	フィレンツェ大学文学部留学～'79年3月
1979年4月	東京大学文学部助手
1983年4月	成城大学文芸学部専任講師
1990年4月	同 助教授
1991年4月	東京大学文学部助教授（イタリア語イタリア文学）
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授（南欧語南欧文学）
1996年4月	同 教授（南欧語南欧文学）

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

イタリア語学、ロマンス語学

#### b 研究課題

イタリア語史上の諸問題、とりわけ「言語問題」に関する検討

#### c 主要業績

##### (1) 論文

長神 悟、「イタリア語の辞書」、関場 武編『辞書の世界』、pp.25-32、2012.5

##### (2) 会議主催(チェア他)

国内、「日本ロマンス語学会第50回大会」、主催、上智大学文学部、2012.5.19～2012.5.20

国内、「日本ロマンス語学会第51回大会」、主催、名古屋大学文学部、2013.5.18～2013.5.19

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、成城大学大学院文学研究科、「歴史言語学研究」、2012.4～2014.3

特別講演、日本イタリア京都館、「『国語』の建設へー 国家再統一期のイタリア語」、2012.9

非常勤講師、京都大学文学部・大学院文学研究科、「近代イタリア語の言語問題ーマンゾーニの場合」、2012.9

特別講演、東京大学教養学部博物館、「イタリア語と音楽」、2013.4

#### (2) 学会

国内、日本ロマンス語学会、会長・理事・編集委員、2012.5～

#### (3) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

公益財団法人・日伊協会、理事、2012.6～ 2014.6

## 1. 略歴

- 1982年3月 東京大学教養学部教養学科イギリス科卒業  
1984年3月 同 文学部イタリア語イタリア文学専修課程卒業  
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻) 修士課程修了  
1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻) 博士課程進学  
1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻) 博士課程中途退学  
1988年4月 東京芸術大学音楽学部一般学科専任講師  
1990年4月 同 助教授  
1994年4月 東京大学文学部南欧語南欧文学科助教授  
1995年4月 同 大学院人文社会系研究科助教授  
2010年4月 同 教授、現在に至る。

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

(ダンテを中心とした) イタリア文学、中世オック語文学

### b 研究課題

### c 主要業績

#### (1) 論文

浦一章、「恋愛の苦しみ」(duol d'amore)をめぐるテンツォーネ——「公証人」からボッカッチョにいたる系譜、  
『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、VI (2012)、3-53 頁、  
2012.4

Kazuaki URA、「Dante e l'invenzione della letteratura "nazionale"」、《Lingua e Letteratura Italiana》(Facoltà di  
Lettere, Università di Tokyo)、VI (2012)、pp.129-43、2012.4

Kazuaki URA、「Dante e l'invenzione della letteratura "nazionale"」、『Letteratura e sentimento nazionale nel  
nome di Francesco De Sanctis, a cura di Neria De Giovanni, Alghero-Roma, Edizioni Nemapress, 2012.』、  
pp.155-167、2012.7

Kazuaki URA、「Dante e l'invenzione della letteratura "nazionale"」、『Buon compleanno Italia! Atti della  
settimana della lingua italiana nel Mondo, 6, a cura di Maria Katia Gesuato, Tokyo, Istituto italiano di cultura,  
2012.』、pp.5-20、2012.9

浦一章、「フェルディナンド・デ・メディチ大公子の蒐集活動に関する史料から——ラファエッロ《天蓋の聖母》の  
取得を中心に」(イタリア人協力研究者らによる原文テキストの転写を含む)、『美術史論叢』(東京大学大学院人  
文社会系研究科・文学部美術史研究室紀要)、第29号(2013年)、91-152 頁、2013.4

Kazuaki URA、「La biblioteca e la fantasia di Leonardo da Vinci」、『Biblioteca e Pinacoteca Ambrosiana: Leonardo  
e la sua cerchia, Tokyo Metropolitan Art Museum, 23 aprile - 30 giugno 2013, Catalogo di mostra, Tokyo,  
2013.』、pp.331-33、2013.4

浦一章、「レオナルド・ダ・ヴィンチの蔵書と空想」、『ミラノ アンブロジーアーナ図書館・絵画館所蔵 レオナルド・  
ダ・ヴィンチ展——天才の肖像』(東京都美術館展覧会カタログ)、2013年、140-43 頁、2013.4

#### (2) 解説

浦一章、『イソップの生涯と寓話』、『ミラノ アンブロジーアーナ図書館・絵画館所蔵 レオナルド・ダ・ヴィンチ展  
——天才の肖像』(東京都美術館展覧会カタログ)、2013年、144 頁、2013.4

浦一章、『軍事論集』、『ミラノ アンブロジーアーナ図書館・絵画館所蔵 レオナルド・ダ・ヴィンチ展——天才の肖  
像』(東京都美術館展覧会カタログ)、2013年、146 頁、2013.4

浦一章、『フィオーレ・ディ・ヴィルトゥ』、『ミラノ アンブロジーアーナ図書館・絵画館所蔵 レオナルド・ダ・ヴ  
ィンチ展——天才の肖像』(東京都美術館展覧会カタログ)、2013年、148 頁、2013.4

浦一章、フィチーノ『プラトン神学——魂の不死について』、『ミラノ アンブロジーアーナ図書館・絵画館所蔵 レオナルド・ダ・ヴィンチ展——天才の肖像』(東京都美術館展覧会カタログ)、2013年、152頁、2013.4

浦一章、ピガフエッタ『最初の世界周航』、『ミラノ アンブロジーアーナ図書館・絵画館所蔵 レオナルド・ダ・ヴィンチ展——天才の肖像』(東京都美術館展覧会カタログ)、2013年、158頁、2013.4

浦一章、マルコ・ポーロ『東方見聞録』、『ミラノ アンブロジーアーナ図書館・絵画館所蔵 レオナルド・ダ・ヴィンチ展——天才の肖像』(東京都美術館展覧会カタログ)、2013年、168頁、2013.4

(3) 学会発表

国際、浦一章、Giovanni Quirini, lettore “sintagmatico” di Dante, Rime, LXVII e LXVIII, Lingue testi culture. L'eredità di Folena vent'anni dopo (Bressanone, 12-15 luglio 2012)、Bressanone (Università autonoma di Bressanone, ecc.)、2012.7.13

(4) 翻訳

個人訳、Charles S. Singleton、"An Essay on the Vita Nuova"、浦一章、チャールズ・S・シングルトン『キタ・ノワ試論』[第4章]、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、VI(2012)、145-94頁、2012.4

### 3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

イタリア学会、評議員、2013.10～

## 20 英語英米文学

教授 平石 貴樹 HIRAISHI, Takaki

### 1. 略歴

1971年6月 東京大学文学部英語英米文学科卒業  
1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（英文学）  
1979年4月 工学院大学共通課程専任講師  
1981年4月 武蔵大学人文学部助教授  
1983年4月 東京大学教養学部助教授  
1986年4月 東京大学文学部助教授  
1994年6月 東京大学文学部教授  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授  
2013年3月 同職を退職  
2013年6月 東京大学大学院人文社会系研究科名誉教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野      b 研究課題

概要

- (1) 20世紀前半のアメリカの主要な小説家の文学史的な位置と評価の研究をしてきた。
- (2) いわゆるイデオロギー問題などを念頭においた、アメリカ文学史の再構成にかかわる諸問題の研究をしてきた。

#### c 主要業績

##### (1) 著書

共編著、平石貴樹、後藤和彦、諏訪部浩一編、『アメリカ文学のアリーナ——ロマンス・大衆・文学史』、松柏社、2013.4

教授 高橋 和久 TAKAHASHI, Kazuhisa

### 1. 略歴

1973年3月 京都大学文学部英語英文学科卒業  
1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（英文学）  
1976年4月 岡山大学教養部助手  
1977年4月 岡山大学教養部講師  
1978年4月 愛媛大学法文学部講師  
1981年4月 学習院大学文学部講師  
1983年4月 東京大学教養学部助教授  
1992年4月 東京大学文学部助教授  
1994年12月 東京大学文学部教授  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

英文学

### b 研究課題

いわゆるイギリス小説を主たる研究対象とし、そのなかでも、1) モダニズム文学とそれ以降の文学の特質の解明、2) モダニズム運動と連動した〈新批評〉以降に目覚ましい展開を見せた現代批評によって獲得されたように見える様々の知見を踏まえた小説技法とイデオロギーの分析、3) それと表裏一体の関係にある文学理論の有効性の検討、に関心を払うことによって、そこから必然的に派生する、4) 英文学の正典形成という古くて新しい、つまり厄介な問題に首を突っ込む羽目に陥っている。

### c 主要業績

#### (1) 学会発表

招待講演

「テキストを自由に読むー『1984年』を例に」和洋女子大学大学院人文科学研究科講演会、和洋女子大学(2013年11月)

「英文学から何を学ぶかーディケンズ『荒涼館』を一例に」早稲田大学英文学会・英語英文学会2013年度合同大会特別講演、早稲田大学(2013年12月)

「英文学を学ぶ／教えることーハーディを経由した詩人を経由して」日本ハーディ協会第55回大会特別講演、武庫川女子大学(2012年10月)

## 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

立教大学「英語散文講義」2012年10月～2013年3月および2013年10月～2014年3月

慶應義塾大学「近代英文学演習」2012年4月～2014年3月

大阪大学「英文学史講義」2012年4月～9月

#### (2) 学会

国内、日本学術会議、連携会員、2012.4～2014.3

教授 今西 典子

IMANISHI, Noriko

## 1. 略歴

1974年3月 お茶の水女子大学文教育学部英文科卒業  
1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了  
1977年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程単位取得のうえ中途退学  
1977年4月 富山大学文理学部(改組後 人文学部)専任講師  
1981年4月 富山大学文理学部(改組後 人文学部)助教授  
1982年10月 お茶の水女子大学文教育学部 専任講師  
1985年11月 お茶の水女子大学文教育学部 助教授  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授  
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

英語学／言語学

### b 研究課題

「普遍文法と言語獲得理論研究」

さまざまな言語事象について、大人の文法だけでなく子供の文法に関する通言語的資料を検討・考察し、表現形式とそれが担う意味との対応を律する原理や習得過程を律する原理を実証的に解明し、統語論と意味論・語用論とのインターフェイスや言語機能と他の認知体系とのインターフェイスに課される制約を解明することにより、言語間変異と言語の習得可能性を妥当に説明しうる普遍文法の構築を模索する。

### c 主要業績

#### (1) 論文

今西典子 (2012) 「主要部が音形を欠く名詞句表現をめぐって：普遍性と多様性の考察」『ことばとこころの探求』75-93、開拓社

## 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

非常勤講師 東京言語研究所 理論言語学講座 「生成文法特論」2012、「生成文法入門」2013

#### (2) 学会

国内、日本英語学会、理事、2012.4～

#### (3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

市河賞選考委員、2012～2013

とやま賞選考委員、2012～2013

教授 **大橋 洋一**

OHASHI, Yoichi

## 1. 略歴

1976年3月 東京教育大学文学部文学科英語英文学専攻 卒業（文学士）  
1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程 修了（英文学）  
1979年4月 東京大学文学部英文科 助手  
1981年4月 中央大学法学部 専任講師（英語）  
1983年4月 学習院大学文学部英米文学科 専任講師  
1985年4月 学習院大学文学部英米文学科 助教授  
1994年4月 学習院大学文学部英米文学科 教授  
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授（英語学英米文学）  
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

英国演劇・批評理論

### b 研究課題

(1) シェイクスピアを中心とする英国初期近代演劇の研究。ジェンダー理論（クイア理論を含む）とポストコロニアリズム理論の適用ならびにシェイクスピア・カトリック説をめぐるシェイクスピア研究環境の変化を考える。

- (2) 「芸映画」とりわけ現在も製作されつつあるシェイクスピア映画を題材にして、アダプテーションの問題、文化的歴史的パースペクティブからみた「文学テキスト」の変容、解体、再生などのプロセスを考察する。
- (3) 英語圏の文学理論の研究。教育の場で、理論あるいは分析法をいかに教えるかという問題も視野に入れる。

### c 主要業績

#### (1) 論文

大橋洋一、「エアリアルとキャリバン——ラテン・アメリカにおけるシェイクスピア的人物の文化史への覚書」、『れにくさ』、第4号、58-73頁、2013.3

大橋洋一、「シェイクスピアと黒澤明映画の文化的可能性」、野崎敏（編）『文学と映画のあいだ』、23-40頁、2013.6

大橋洋一、「ふたつの思考——エドワード・W・サイードと佐藤真」、『れにくさ』、第5号（1）、2014.3

#### (2) 翻訳

個人訳、Terry Eagleton, "The Task of the Critic: Terry Eagleton in Dialogue", 大橋洋一、『批評とは何か——イーグルトンすべてを語る』、青土社、2012.2

個人訳、Terry Eagleton, "William Shakespeare", 大橋洋一、『シェイクスピア——言語、貨幣、欲望』、平凡社、2013.1

### 3. 主な社会活動

2012年7月まで クィア学会幹事ならびに代表幹事（代表幹事は2名）

准教授 **渡邊 明**

WATANABE, Akira

### 1. 略歴

- 1987年3月 東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
- 1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
- 1993年9月 マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了  
博士号（Ph.D. in Linguistics）取得  
博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
- 1994年4月 神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
- 1997年4月 同 大学院言語科学研究科助教授
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

英語学／理論言語学

#### b 研究課題

phi素性の役割

#### c 主要業績

##### (1) 著書

共著、Kook-Hee Gil, Steve Harlow, and George Tsoulas, (編), Akira Watanabe 他、*Strategies of Quantification*, Oxford University Press, 2013.1

##### (2) 論文

Akira Watanabe, 'Direct Modification in Japanese', *Linguistic Inquiry* 43(3), 504-513頁、2012.8

Akira Watanabe, 'Measure Words as Nouns: A Perspective from Silent Years', *Studia Linguistica* 66(3), 181-205頁、2012.8

Akira Watanabe, 'Non-Neutral Interpretation of Adjectives under Measure Phrase Modification', *Journal of East Asian Linguistics* 22(3), 261-301 頁、2013.8

Akira Watanabe, 'Person-Number Interaction: Impoverishment and Natural Classes', *Linguistic Inquiry* 44(3), 469-492 頁、2013.8

(3) 学会発表

国際、Akira Watanabe, 'Uninterpretable Features and Agreement', GLOW in Asia IX、三重大学、2012.9.4

国際、Akira Watanabe, '1-Deletion: Measure Nouns vs. Classifiers', 22th Japanese/Korean Linguistics Conference、国立国語研究所、2012.10.12

国内、Akira Watanabe, 'Theoretical Questions and Empirical Phenomena', 日本英語学会第 30 回記念大会、慶応大学、2012.11.10

国際、Akira Watanabe, 'Count Syntax and the Partitivity', 19th International Congress of Linguists, University of Geneva、2013.7.22

国際、Akira Watanabe, 'Mental Representation of Natural Numbers and Acquisition of Numerals', 19th International Congress of Linguists, University of Geneva、2013.7.27

国内、渡辺明、「DP の内と外」、日本英語学会第 31 回大会、2013.11.10

(4) 会議録

国際会議、Akira Watanabe, 'Uninterpretable Features and Agreement', 2012.9.4

*Proceedings of GLOW in Asia IX 2012: The Main Session*, 55-75 頁、2013

国際会議、Akira Watanabe, 'Measure Phrase Modification in the Extended Projections of Adjectives', *Proceedings of Japanese/Korean Linguistics* 20, 483-497 頁、2013

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、関西学院大学、「英語学特殊講義」、2013.9

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

*Journal of East Asian Linguistics* (出版元 Springer)、1996.1~

*Linguistic Inquiry* (出版元 MIT Press)、2012.8~

准教授 **阿部 公彦**

ABE, Masahiko

### 1. 略歴

1985年3月 静岡県静岡聖光学院高等学校卒業  
1985年4月 東京大学教養学部文科三類入学  
1989年3月 同 文学部英語英米文学科専修課程卒業  
1989年4月 東京大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）入学  
1992年3月 同 修士課程修了・修士（文学）  
1993年10月 連合王国ケンブリッジ大学大学院博士課程入学（英米文学専攻）  
1997年5月 同博士課程修了 博士号取得（文学）  
タイトル：'Wallace Stevens and the Aesthetic of Boredom'  
1992年4月 東京大学文学部英語英米文学科助手  
1993年4月 帝京大学文学部助手  
1997年4月 帝京大学文学部専任講師  
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

英米文学

### b 研究課題

英語圏の詩、とくに 20 世紀におけるイギリスやアメリカの詩の研究を中心とする。個々の詩作品の緻密な解釈と、作品を作品たらしめる力学の解明に向けた努力を研究の中心としつつ、同時に、「なぜ詩でなければならないか?」という素朴な疑問との取り組みをも新たな課題とする。詩を自足的なジャンルとみなすのではなく、「詩的であること」を絵画・舞台芸術、スポーツ、インターネット空間などとの関係でとらえることもテーマとする。

### c 主要業績

#### (1) 著書

- 単著、阿部公彦、『文学を〈凝視する〉』、岩波書店、2012.9  
共著、竹内勝徳・高橋勤編、『環大西洋の想像力—越境するアメリカン・ルネッサンス文学』、彩流社、2013  
共著、富士川義之・玉井暉・河内恵子編、『オスカー・ワイルドの世界』、開文社、2013  
共著、庄司宏子編、『絵のなかの物語』、法政大学出版社、2013  
単著、阿部公彦、『詩的思考のめざめ—心と言葉にほんとうは起きていること』、東京大学出版会、2014.2

#### (2) 論文

- 阿部公彦、「ウォレス・ステイヴンズの無愛想」、『Web 英語青年』、2-3 月号、2-14、2-19 頁、2012.2  
阿部公彦、「女を嫌うための作法」(上下)、『Web 英語青年』、3-4 月号、16-25、2-11 頁、2012.3  
阿部公彦、「ジェーン・オースティンの不機嫌」、『Web 英語青年』、5-6 月号、2-11、2-13 頁、2012.5  
阿部公彦、「アリスと「イライラ」—ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』」、『Web 英語青年』、7-8 月号、2-7、2-11 頁、2012.7  
阿部公彦、「D.H.ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』の礼儀作法」、『Web 英語青年』、10-11 月号、18-27、14-27 頁、2012.10  
阿部公彦、「ふたつの冠婚葬祭小説—オコナーとトレヴァー」、『Web 英語青年』、12-1 月号、20-30、16-29 頁、2012.12  
阿部公彦、「ホイットマンの音量調節」、竹内勝徳・高橋勤編『環大西洋の想像力—越境するアメリカン・ルネッサンス文学』(彩流社)、239-60 頁、2013  
阿部公彦、「〈目の失敗〉の物語—ウォレス・ステイヴンズとハワード・ホジキン」、庄司宏子編『絵のなかの物語—文学者が絵を読むとは』(法政大学出版社)、153-185 頁、2013  
阿部公彦、「ナサニエル・ホーソーン『七破風の家』の気遣う語り手」、西谷拓哉・成田雅彦編『アメリカン・ルネッサンス—批評の新生』、324-344 頁、2013  
阿部公彦、「佐藤泰志の主人公たちが痛い目に合うわけ」、福間健二監修『佐藤泰志 生の輝きをもとめつづけた作家』、194-99 頁、2013  
阿部公彦、「大江健三郎と英詩—日本語の未開領域をめぐって」、『早稲田文学』、2013 年 6 月号、322-332 頁、2013.6  
阿部公彦、「百合子さんのお腹の具合」、『ユリイカ』、2013 年 10 月号、169-176 頁、2013.10  
阿部公彦、「英文学と事務能力」、『れにくさ』、5.2 (2014)、300-318 頁、2014.3

#### (3) 書評

- 高市順一郎監訳、『Immortal Monuments—16 Modern Japanese Poets』、思潮社、『現代詩手帖』、4 月号、127 頁、2012.4  
高橋源一郎、『非常時のことば』、朝日新聞出版、『〈小説〉トリッパー』、2012 年秋号、331-333 頁、2012.9  
新田啓子、『アメリカ文学のカルトグラフィ—批評による認知地図の試み』、研究社、『アメリカ学会会報』、no.180(November, 2012)、6 頁、2012.11  
江國香織、『犬とハーモニカ』、新潮社、『群像』、2012 年 12 月号、326-27 頁、2012.12  
四元康祐、『日本語の虜囚』、思潮社、『現代詩手帖』、2012 年 12 月号、69 頁、2012.12  
佐藤健二、『ケータイ化する日本語—モバイル時代の「感じる」、「伝える」、「考える」』、大修館書店、『英語教育』、2013 年 1 月号、95 頁、2013  
四元康祐、『日本語の虜囚』、大修館書店、『季刊ビーグル 詩の海へ』、2013 年 1 月、2013  
ジョイス・キャロル・オーツ、吉岡葉子訳、『新しい天、新しい地—文学における先見的体験』、開文社、『週刊読書人』、2013 年 1 月 25 日号、5 頁、2013.1  
辻原登、『冬の旅』、集英社、『文学界』、2013 年 4 月号、288-89 頁、2013  
島本理生、『よだかの片想い』、集英社、『公明新聞』、2013 年 6 月 3 日、2013

石田千、『バスを待って』、小学館、『文學界』、2013年9月号、266-67頁、2013  
 鈴木和成・野村喜和夫、『金子光晴デュオの旅』、未来社、『週刊読書人』、2014年2月28日号、5頁、2013  
 エリザベス・ボウエン、太田良子訳、『ボウエン幻想短篇集』、国書刊行会、『図書新聞』、2013年2月2日、5頁、  
 2013.2  
 小川国夫、『ヨレハ記』、ぶねうま舎、『文學界』、2013年3月号、266-67頁、2013.3  
 三浦衛、『マハーヴァギナ または巫山の夢』、春風社、『週刊読書人』、2013年3月29日号、7頁、2013.3  
 佐伯一麦、『光の闇』、扶桑社、『産経新聞』、2013年5月26日、2013.5  
 リチャード・パワーズ、木原善彦訳、『幸福の遺伝子』、新潮社、『週刊読書人』、2013年7月12日、5頁、2013.7  
 西村賢太、『棺に跨る』、文藝春秋、『文學界』、2013年9月号、302-303頁、2013.9  
 ローラン・ビネ、高橋啓訳、『HHhH—プラハ、1942年』、東京創元社、『公明新聞』、2013年9月23日、4頁、  
 2013.9  
 本谷有希子、『自分を好きになる方法』、講談社、『新潮』、2013年10月号、322-323頁、2013.10  
 中村文則、『去年の冬、君と別れ』、幻冬舎、『週刊文春』、2013年10月31日号、133頁、2013.10

(4) 解説

阿部公彦、「明朝の人にして沈鬱な魂の持ち主」、深瀬基寛『日本の砂漠のなかまこ』（講談社文芸文庫）、225-238頁、  
 2013  
 阿部公彦、「田原解説」、『田原詩集』、2014

(5) 学会発表

国内、阿部公彦、「ワーズワスと詩の力」、東北学院大学・英語英文学研究所学術講演会、東北学院大学、2012.9.29  
 国内、阿部公彦、『幸福な王子』を読む—受講者への五つの問いかけ、「鼎談 ワイルド作品を教育的に活用する」  
 （日本ワイルド協会第37回大会）、慶應義塾大学・日吉キャンパス・来往舎、2012.12.2  
 国内、阿部公彦、「英詩の甘み—シェイクスピアの『ソネット集』と詩の可能性」、武庫川女子大学英文学会、武庫川  
 女子大学、2013  
 国内、阿部公彦、「『のぞき』の技法」、シンポジウム「アメリカ小説の大衆的ふるまい—誰が小説を解放するのか」  
 （第85回日本英文学会全国大会）、東北大学、2013.5.26  
 国内、阿部公彦、「オルソンとイギリス—J・H・プリンを中心に」、日本アメリカ文学会東京支部例会シンポジウム  
 「チャールズ・オルソンって誰？『マクシマス詩篇』って何？—大文字の HISTORY から小文字の history へ」、  
 慶應義塾大学・三田キャンパス、2013.6.29  
 国内、阿部公彦、「英詩の甘味—シェイクスピアの恋愛詩を読む」、立正大学英文学会、立正大学大崎キャンパス、  
 2013.9.22  
 国内、阿部公彦、「英語の勉強」、英語フォーラム、静岡聖光学院中高等学校、2013.10.5  
 国内、阿部公彦、「凝視とのぞき」、京都造形芸術大学特別講義、京都造形大学、2013.10.23  
 国内、阿部公彦、「嫌がる学生に無理矢理英詩を読ませることについて」、日本英文学会関東支部秋季大会・シンポジ  
 ウム「古典の困難」、日本女子大学、2013.11.2  
 国内、阿部公彦、「シェイクスピアのソネット」、北九州市立大学外国語学部国際関係学科講演会、北九州市立大学、  
 2013.11.26

(6) 啓蒙

阿部公彦、「記憶の捏造をめぐって—ワーズワスを教えたい（2）」、『図書』、1月号、31-35頁、2012.1  
 阿部公彦、「突然の人—ワーズワスを教えたい（3）」、『図書』、2月号（756号）、25-29頁、2012.2  
 阿部公彦、「石田千インタビュー」、『群像』、2012年4月号、280-87頁、2012.4  
 阿部公彦、『『鶏外選集』の中にいたもの—心の原風景となったA君と全集のつながり』、『週刊読書人』、2012年6月  
 29日号、7頁、2012.6  
 阿部公彦、「48人へのアンケート—2012年上半期の収穫から」、『週刊読書人』、2012年7月27日、1頁、2012.7  
 阿部公彦、「フィッツジェラルドの教え方」、『日本フィッツジェラルド協会—ニューズレター』、27号、11-12頁、  
 2012.10  
 阿部公彦、「解説—由良君美とは何者か？」、由良君美『みみずく古本市』、393-400頁、2013  
 阿部公彦、「憧れの著者と対面—池上嘉彦『記号論への招待』、『東大教師—青春の一冊』（信山社）、254-56頁、2013  
 阿部公彦、「少しばかり遅れた出会い」、『マーク・トウェイン—研究と批評』、第12号（2013）、61-2頁、2013.4  
 阿部公彦、「東大教師が新入生にすすめる本」、『UP』、2013年4月、2頁、2013.4  
 阿部公彦、「斜めが気になる」、『en-Taxi』、2013年春号 vol.38、192頁、2013.5

阿部公彦・四元康祐、「対談：詩と呼ぶしかない言語空間」、『現代詩手帖』、2013年5月号、10-22頁、2013.5

阿部公彦、「アンケート 2013年上半期の収穫から」、『週刊読書人』、2013年7月26日号、1頁、2013.7

(7) マスコミ

「創作合評」、『群像』(2013年11月号)、2013.11

「創作合評」、『群像』(2013年12月号)、2013.12

「創作合評」、『群像』(2014年1月号)、2014.1

「新人小説月評」、『文學界』(2014年1月号)、2014.1

「新人小説月評」、『文學界』(2014年2月号)、2014.2

「新人小説月評」、『文學界』(2014年3月号)、2014.3

(8) 受賞

国内、阿部公彦、ABE MASAHIKO、サントリー学芸賞、Suntory Prize for Social Sciences and Humanities、サントリー文化財団、Suntory Foundation、2013.12.10

(9) 教科書

『精選 国語総合』、中渕正堯・岩崎昇一編、編集委員、三省堂、2013

『高等学校 国語総合』、中渕正堯・岩崎昇一編、編集委員、三省堂、2013

(10) 翻訳

個人訳、Bernard Malamud、"The Magic Barrel"、『魔法の樽 他十二篇』、2013

個人訳、Kimiko Hahn、"The Japanese Firefly Squid"、『日本の蛍烏賊を見ると』、『Granta』、01、151頁、早稲田文学会／早川書房、2014.2

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶應義塾大学、「英文学演習」、2012.4～2013.3

その他、福岡KBCシネマ、「〈BUNGO〉と凝視」、2012.11～

特別講演、西南学院大学、「私たちはなぜ詩が読めないのか?」、2012.11

非常勤講師、広島大学、「アメリカの詩を読む」、2013.8～

非常勤講師、九州大学比較文化学府、「テキストの快楽」、2013.9～

非常勤講師、北九州市立大学、「シェクスピアのソネット」、2013.11～

(2) 学会

国内、日本英文学会、理事、2013.4～

国内、日本アメリカ文学会東京支部、評議員、2013.4～

国内、日本英文学会関東支部、理事、2013.4～

准教授 **諏訪部 浩一** SUWABE, Koichi

#### 1. 略歴

1994年3月 上智大学文学部英文学科卒業

1997年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程修了

2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得退学

2004年4月 東京学芸大学教育学部講師

2004年6月 ニューヨーク州立大学バッファロー校大学院英文科博士課程修了

2006年4月 東京学芸大学教育学部助教授

2007年4月 東京学芸大学教育学部准教授

2007年10月 東京大学大学院総合文化研究科准教授

2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

アメリカ文学

### b 研究課題

モダニズム文学を中心とするアメリカ小説研究

### c 主要業績

#### (1) 著書

共著、飯野友幸監修、サウンディングズ英語英米文学会編、『アメリカン・ロマンスの系譜形成——ホーソンからオジックまで』、金星堂、2012.12

共編著、平石貴樹、後藤和彦、諏訪部浩一編、『アメリカ文学のアリーナ——ロマンス・大衆・文学史』、松柏社、2013.4

共著、野崎敏編、『文学と映画のあいだ』、東京大学出版会、2013.6

編著、諏訪部浩一、『アメリカ文学入門』、三修社、2013.11

#### (2) 論文

諏訪部浩一、「サーガという形式——「ポスト・フォークナー」の作家としての阿部和重」、『フォークナー』、第14号、103-19頁、2012.4

Koichi Suwabe、「Faulkner's Black and White Oedipal Drama in "The Fire and the Hearth"」、『The Japanese Journal of American Studies』、Vol. 23、pp. 97-116、2012.6

#### (3) 書評

トマス・ピンチョン、『LAヴァイス』、新潮社、諏訪部浩一、『Web 英語青年』、第158巻第11号、18-22頁、2013.2

#### (4) 学会発表

国内、諏訪部浩一、「「偉大」な小説とは何か——没後50年のフォークナー」、日本英文学会第84回大会、専修大学生田キャンパス、2012.5.27

国内、諏訪部浩一、「観てから読むか、読んでから観るか」、東京大学本郷キャンパス、2013.7.13

国内、諏訪部浩一、「黒い誘惑——フォークナー、ハメット、ノワール」、日本アメリカ文学会東京支部月例会全体会、慶應義塾大学三田キャンパス、2013.9.28

国内、諏訪部浩一、「アメリカ小説の映画化をめぐる」、第23回日本アメリカ文学会北海道支部大会、北海学園大学、2013.12.14

国内、諏訪部浩一、「シンポジウム 物語はジャンルを横断する」、第23回日本アメリカ文学会北海道支部大会、北海学園大学、2013.12.14

#### (5) 啓蒙

諏訪部浩一、「解説」、アーネスト・ヘミングウェイ、土屋政雄訳『日はまた昇る』、ハヤカワ epi 文庫、377-83頁、2012.3

小鷹信光、諏訪部浩一、「「ハードボイルド」とは何か——ダシール・ハメットの名作『マルタの鷹』を読み解く」、『図書新聞』、2012年6月2日号、1-2面、2012.6

諏訪部浩一、「アメリカ文学——現況と翻訳・研究」、『文藝年鑑2012』、92-94頁、2012.6

諏訪部浩一、「人間対コンピュータ」、『群像』、第68巻第8号、176-77頁、2013.8

諏訪部浩一、「文芸映画どう楽しもうか」、『朝日新聞』、夕刊第3面、2013.8.20

諏訪部浩一、「私の好きなポケミスベスト3」、『ハヤカワミステリマガジン』、第58巻第11号、64頁、2013.11

小澤英実、大和田俊之、諏訪部浩一、「アメリカ文学と村上春樹」、『NHKラジオテクニスト 英語で読む村上春樹——世界の中の日本文学』、第1巻第11号、118-46頁、2014.2

諏訪部浩一、「フォークナーの人物造型——『響きと怒り』のジェイソンを例として」、『れにくさ』、第5巻第3号、315-21頁、2014.3

#### (6) 受賞

日本推理作家協会賞、日本推理作家協会、2013.5.31

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、学習院大学、「英語文化コース演習」、2012.4～2014.3

非常勤講師、青山学院大学、「日本文学史」、2012.4～2013.3

非常勤講師、早稲田大学、「英米文学特殊研究」、2012.9～2013.3、2013.9～2014.3

(2) 学会

国内、日本アメリカ文学会東京支部、評議員、2012.4～2014.3

国内、日本アメリカ文学会、大会運営委員、2012.4～2014.3

国内、日本英文学会関東支部、編集委員、2012.4～2014.3

国内、日本フォークナー協会、編集委員、2013.10～2014.3

## 21 ドイツ語ドイツ文学

教授 松浦 純

MATSUURA, Jun

### 1. 略歴

- 1968.3 東京都立新宿高校卒業  
1968.4 東京大学文科三類入学  
1971.10 サンケイスカラシップによりドイツ連邦共和国テュービンゲン大学留学 (1973.4 帰国)  
1974.3 東京大学教養学部教養学科「ドイツの文化と社会」分科卒業 (教養学士)  
1976.3 東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専攻修士課程修了 (文学修士)  
1976.4 東京大学文学部助手 (ドイツ語ドイツ文学)  
1977.9 ドイツ連邦共和国テュービンゲン大学後期中世・宗教改革研究所にて在外研究 (1980.3 帰国)  
1980.4 東京都立大学人文学部講師 (ドイツ語ドイツ文学)  
1983.4 同 助教授  
1985.4 東京大学文学部助教授 (ドイツ語ドイツ文学)  
1985.5 ドイツ語学文学振興会賞受賞  
1985.7-9 ドイツ学術交流会 (DAAD) の招待によりドイツ連邦共和国へ研究出張  
1986.7-9 東京大学学術基金によりドイツ連邦共和国へ研究出張  
1989.10 ドイツ連邦共和国アレクサンダー・フォン・フンボルト研究財団の研究奨学金によりテュービンゲン大学ドイツ文学科および後期中世・宗教改革研究所にて在外研究 (1991.9 帰国)  
1994.12 東京大学文学部教授 (ドイツ語ドイツ文学)  
1995.4 学部改編により東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、現在に至る  
1995.7 ドイツ連邦共和国大統領より Philipp Franz von Siebold-Preis 受賞 (同賞により 1995、1997、1998、1999 の各年度夏期休暇時、ドイツ連邦共和国ほかへ研究出張)  
2001.4 国際交流基金助成により、ドイツ連邦共和国ミュンヘン大学にて、同大ラインハルト・シュヴァールツ名誉教授と共同研究 (2002.3 帰国)  
2002.8 国際ルター学会 (於コペンハーゲン) で研究報告  
2005.7-9 ドイツ連邦共和国アレクサンダー・フォン・フンボルト研究財団の受賞者再招待により、テュービンゲン大学後期中世・宗教改革研究所ほかへ研究出張  
2009.11 ドイツ、ハイデルベルク学士院主催ワイマール版ルター全集完結記念シンポジウムで研究報告  
2009.9 ドイツ、エルフルト旧アウグスティヌス会修道院図書館で講演  
2011.8 学術振興会科学研究費により、ドイツ、ヴォルフエンビュッテル、イエナ、ドレスデン各図書館他へ調査出張  
2012.2 ドイツ、ヨーロッパ史研究所 (マインツ) 主催コロキウムで研究報告  
2012.8 学術振興会科学研究費により欧州研究出張、国際ルター学会 (於ヘルシンキ) で研究発表、ドイツ、ヴォルフエンビュッテル、ドレスデン、ヴィッテンベルク、テュービンゲンなど各図書館で資料調査  
2013.6.17 恩賜賞・日本学士院賞受賞  
2013.7-8 学術振興会科学研究費によりドイツ、ヴォルフエンビュッテル、ドレスデン、テュービンゲンなど各図書館で資料調査

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野      b 研究課題

専門分野としては、ルター研究とドイツ中世文学・中世思想研究を重点としている。

前者については、西欧思想史の中で、伝統的キリスト教思想を革新するとともに近代への発展の関与が問題にされ、また特にドイツ思想史上まれな独自性と影響力を兼ね備えた思想家、ルターの思想を、完成した教義としてでなく、中世思想の伝統やアクチュアルな状況との関係の中で運動としてとらえ、日本人にとってのあらたな理解の地平を開くことを課題としている。

### c 主要業績

#### (1) 論文

Jun Matsuura, 「Psalterdruck und Manuskripte zu Luthers Psalmenvorlesung (1513-1515) – Ihre Wege durch die Geschichte」、Irene Dingel / Hennig P. Jürgens (Hg.) 『Meilensteine der Reformation. Schlüsseldokumente der frühen Wirksamkeit Martin Luthers』 Gütersloh 2014、26-43. 242-250 ページ

Jun Matsuura, 「Martin Luther: Annotationen zu Melanchthons Pauluskommentaren (um 1536). Text und Kommentar」、『Luther Jahrbuch 2014』(印刷中)

Jun Matsuura, 「Duo cherubim adversis vultibus. Zur Herausbildung und texthermeneutischen Bedeutung des Grundsatzes Scriptura sui ipsius interpres.」、『Autotität und Autoritäten beim jungen Luther (仮題)』、Tübingen 2014 (印刷中)

#### (2) 啓蒙

松浦純、「歴史に徹する文献学の試み」、日本独文学会ホームページ、2013.8

松浦純、「受賞書『Martin Luther: Erfurter Annotationen 1509-1510/11』について」、『日本学士院ニュースレター』、2013.10

#### (3) 受賞

国内、松浦純、Jun Matsuura、恩賜賞、The Imperial Prize、「Martin Luther: Erfurter Annotationen 1509-1510/11」、『Martin Luther: Erfurter Annotationen 1509-1510/11』、日本学士院、The Japan Academy、2013.6.17

国内、松浦純、日本学士院賞、Japan Academy Prize、「Martin Luther: Erfurter Annotationen 1509-1510/11」、『Martin Luther: Erfurter Annotationen 1509-1510/11』、日本学士院、2013.6.17

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議、連携会員、2010～

日本学術会議、連携会員、文化の邂逅と言語分科会委員長、2011.10～

ドイツ学術交流会奨学生選考委員、2007～8、2010～11、2013

学術振興会審査委員、2010～11

## 1. 略歴

- 1970年4月 東京大学教養学部文科3類入学  
1974年3月 東京大学文学部第3類（言語学専修課程）卒業（文学士）  
1974年4月 同 大学院人文科学研究科独語独文学専門課程修士課程進学  
(1975年7月～1977年9月 ドイツ学術交流会(DAAD)奨学金によりドイツ連邦共和国ボン大学、シュトゥットガルト大学に留学)  
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専門課程修士課程修了（文学修士）  
1978年4月 同 大学院人文科学研究科独語独文学専門課程博士課程進学  
1979年4月 同 教養学部助手  
1980年4月 一橋大学経済学部講師  
1984年4月 東京大学教養学部助教授  
(1984年4月～85年3月 一橋大学経済学部併任)  
(1991年10月～93年3月 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国テュービンゲン大学に研究滞在)  
1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授  
(1996年4月～97年3月 東京大学大学院人文社会系研究科併任)  
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
2004年10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

ドイツ語学

### b 研究課題

現代ドイツ語の記述、および現代ドイツ語を生み出したドイツ語史の記述を研究の目標と考えている。背景となる言語理論や言語変化についての理論についての考察も必要となる。

研究では、最近は一般言語学の言語理論に関することとドイツ語史に関することに重点を置いている。

### c 主要業績

#### (1) 辞典編修委員

クラウン独和辞典第5版（三省堂）2014.1.1

#### (2) 書評

高田博行・新田春夫編『講座ドイツ言語学 第2巻 ドイツ語の歴史論』（ひつじ書房）2013

日本独文学会「ドイツ文学」148 2014.3.25. pp.340-343

#### (3) 学会発表

「Beschreibung der deutschen Aussprache und das 'deutsche Aussprachewörterbuch' von Eva-Maria Krech et al.」2013.8.29、日本独文学会第41回語学ゼミナール（コープイン京都）

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

明治大学文学部非常勤講師 2012.4～2014.3

## 1. 略歴

- 1984年3月 東京大学教養学部教養学科第2・ドイツの文化と社会卒業  
1986年3月 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程修了  
1991年4月 共立女子大学国際文化学部専任講師  
1992/93年 ドイツ学術交流会(DAAD)奨学金によりドイツ連邦共和国マンハイム大学留学  
1996年4月 共立女子大学国際文化学部助教授  
2001/02年 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国ベルリン自由  
大学研究滞在  
2002年4月 慶應義塾大学文学部助教授  
2005年4月 慶應義塾大学文学部教授  
2007年4月 慶應義塾大学大学院文学研究科委員兼任  
2011年4月 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科教授(現職)

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

ドイツ近現代文学

### b 研究課題

ヴァルター・ベンヤミン研究、ハインリッヒ・フォン・クライスト研究

### c 主要業績

#### (1) 論文

大宮勘一郎、「語らいながら徐々に思考が出来上がる」、『「過去の未来」と“未来の過去”—保坂一夫先生古稀記念論文集』、2013.3

大宮勘一郎、「クライスト 2001/2011」、『研究年報』、30、2013.7

大宮勘一郎、「ブルーストからベンヤミンへ—そしてその先—」、『思想』、1075、140-154頁、2013.11

Kanichiro Omiya、「Von der Anamorphoskopie zur Paramorphoskopie „Übersetzen“ nach Benjamin」、  
『Simultaneität・Übersetzen (Stauffenberg Kolloquium 70)』、2013.11

大宮勘一郎、「人間の言語から物の言語へ—ホーフマンスタール「手紙」再考—」、『藝文研究』、105-2、241-254  
頁、2013.12

大宮勘一郎、「ポール・オースターの系譜学—中期作品について—」、『れにくさ』、Vol. 5、2014.3

#### (2) 学会発表

国際、大宮勘一郎、「創設としての翻訳」、World Literature and Japanese Literature in the Era of  
Globalization、東京大学、2013.3.4

国際、Kanichiro Omiya、「Illness and Memory - The Case of Aby Warburg」、IKKM-Lecture、IKKM、  
Bauhaus-University Weimar, Germany、2013.12.11

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

特別講演、IKKM of Bauhaus University of Weimar, Germany、「Illness and Memory - The Case of Aby Warburg」、  
2013.12

特別講演、IKKM of Bauhaus University of Weimar, Germany、「The So-Called Japanese Romanticism in 1930s」、  
2014.1

## 1. 略歴

- 1987年3月 京都大学文学部卒業（文学士）
- 1989年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）修了（文学修士）
- 1990年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）退学
- 1990年4月 神戸大学教養部助手
- 1991年10月 神戸大学教養部講師
- 1992年10月 神戸大学文学部講師
- 2000年10月 神戸大学文学部助教授
- 2000年4月 文部省在外研究員としてドイツベルリン自由大学に留学（2001年2月まで）
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

近代ドイツ語圏文学

### b 研究課題

18世紀の文学・思想が研究の中心にある。もともと初期ロマン主義研究から出発し、ノヴァーリスを中心に仕事を進めてきた。とくに超越論哲学・自然科学との関係において初期ロマン主義が展開した独自の表現技法と、その背景にある言語・芸術観が興味を中心にあつた。また、その問題意識を継承する20世紀の文学者・思想家の系譜も研究の対象となった。現在は、啓蒙期の文学・思想を、ロマン主義の前史という観点に限定されることなく研究している。また、18世紀以後、ドイツ語圏にあつて、自然科学者であり、あるいは自然科学研究から出発しつつ、文学者であつた人々―ハラー、リヒテンベルク、ノヴァーリス、アルニムから現代にいたるまで―の営みを〈実験者の文学〉という観点から跡付けるという作業を進めている。

### c 主要業績

#### (1) 著書

共著、宮田眞治、『文学と映画のあいだ』、東京大学出版会、2013.6

#### (2) 論文

宮田眞治、「イエナ・ロマン主義における〈能動・受動〉モデルの問題」、『ヘーゲル哲学研究』、Vol.18、19-32頁、2012.12

MIYATA, Shinji: Zur Figur des Fremden in der Chrono-Topographie Lichtenbergs. In Dogilmunhak. Koreanische Zeitschrift für Germanistik. Vol. 54, no. 128. S.77-90, 2013/12

#### (3) 国際会議での発表

MIYATA, Shinji: Zu Figur des Fremden in der Chrono-Topographie Lichtenbergs. in: Das 20. Sorak-Symposium 2013 "Globalisierung und Literatur", Hotel Kolon, Gyeongju, Korea, 2013/09/28

#### (4) 会議主催(チェア他)

国内、「第54回ドイツ文化ゼミナール」、実行委員長、IPC 生産性国際交流センター（神奈川県三浦郡葉山町）、2012.3.10～2012.3.16

国内、「第55回ドイツ文化ゼミナール」、実行委員長、長野県茅野市 リゾートホテル蓼科、2013.3.24～2013.3.30

## 3. 主な社会活動

### (1) 学会

国内、日本独文学会、文化ゼミナール担当理事、2013.5～

国内、日本シェリング協会、理事、2008.10～

## 22 スラヴ語スラヴ文学

教授 **長谷見 一雄** HASEMI, Kazuo

### 1. 略歴

1973年3月	東京大学文学部第3類ロシア語ロシア文学専修課程卒業（文学士）
1976年3月	同 大学院人文科学研究科露語露文学専門課程修士課程修了
1977年5月	ワルシャワ大学ポーランド文学研究所研究生（～1979年5月）
1979年9月	東京大学大学院人文科学研究科露語露文学専門課程博士課程 中途退学
1979年10月	東京大学文学部助手（ロシア語ロシア文学，西洋近代語近代文学）
1981年4月	山形大学教養部専任講師（露語）
1982年8月	山形大学教養部助教授（露語）
1993年4月	東京大学文学部助教授（ロシア語ロシア文学）
1994年11月	同 教授（スラヴ語スラヴ文学）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（スラヴ語スラヴ文学）
2013年3月	定年退職

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野      b 研究課題

- (1) 19世紀末から20世紀初頭にかけてのロシアおよびポーランドの文学を、その時代の文脈に即してとらえ直し、最終的には象徴主義小説（特に幻想文学）の詩学の構築を目指す。その基礎作業として、まず先行する文学研究を調査研究するのはもちろんのこと、同時代人の言語意識を理解するために、当時のロシア語・ポーランド語に関する歴史文法および歴史文体論関係の文献の調査研究も続けている。また当時刊行されていた数多い文芸雑誌を重視し、資料収集に努め、主にそこに掲載された単行本収録以前の初出作品、評論、時評、書評、挿絵、広告、さらには紙面のレイアウトなどのヴィジュアルな側面等をも検討し直す一方で、当時の読者文化、書物文化の諸相に関する文芸社会学的研究にも留意する。
- (2) また、当時の文学に大きな影響を与えた神話学的・民俗学的・宗教学的関心の実態にも目を向け、背景の理解に努める。
- (3) さらに、近代ロシア・ポーランドの文学作品に現れた語彙・語法の歴史的系統性と変化に注目し、19世紀のロシア語・ポーランド語に関する辞書・研究書などの基本文献の調査収集を行う。
- (4) その上で、19世紀ロシア語・ポーランド語の語彙・語法・比喩表現に関する基本的なデータベースを作成する。
- (5) 以上とは別に、紹介の遅れている近現代ポーランド文学の優れた作品の翻訳・解説作業を進める。
- (6) その他、ポーランド語辞典編纂の準備作業として、ポーランドにおいて刊行されている現行辞書の調査収集を行う。

#### c 主要業績

- (1) 著書  
共訳、チェスワフ・ミウオシュ、『ポーランド文学史』、2006.5  
共訳、飯島周・小原雅俊編、『ポケットの中の東欧文学』、2006.11

### 3. 主な社会活動

- (1) 学会  
国内、日本ロシア文学会、編集委員、2012.1～2012.3  
国内、西スラヴ学研究会、企画編集委員、2012.1～2012.5

教授 **金澤 美知子** KANAZAWA, Michiko

## 1. 略歴

1974年 3月 東京大学教養学部教養学科卒業  
1977年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（ロシア語ロシア文学）  
1981年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学  
1981年 4月 東京大学文学部露語露文学研究室助手（～1989年 3月）  
1989年 4月 放送大学教養学部助教授（～1994年 3月）  
1994年 4月 東京大学文学部助教授（スラヴ語スラヴ文学）  
1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（スラヴ語スラヴ文学）  
1996年 1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（スラヴ語スラヴ文学） 現在に至る  
2000年 10月-2001年 8月 ワルシャワ大学東洋研究所客員講師

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

ロシア文学・文化 比較文学

### b 研究課題

18、19世紀のロシア文化 ロマン主義 ドストエフスキー ロシアと西欧

### c 主要業績

#### (1) 論文

「18世紀ロシアの恋愛小説における「社会」の役割—18世紀ロシアにおける「公」と「私」を論じる—」、「日本18世紀ロシア研究会年報」No10、2014

#### (2) 監修

編集、「日本18世紀ロシア研究会年報」No.8、日本18世紀ロシア研究会、2012

編集、「日本18世紀ロシア研究会年報」No.9、日本18世紀ロシア研究会、2013

編集、「日本18世紀ロシア研究会年報」No.10、日本18世紀ロシア研究会、2014

#### (3) 随筆他

「18世紀のロシア文学、ジャン・ジャック・ルソーの在る風景」、「学会ニュース」No.67、日本18世紀学会、2011

「ニコライ・カラムジンにおける翻訳と創作」、「日本18世紀ロシア研究会年報」No.9、2013

#### (4) 国際学会発表

Russian sentimentalism and the motif of 'the prodigal daughter' (招待講演)、Conference: Russian language and Literature 2011, Tamkang University, Taiwan, 2011.12.2

#### (5) 国内学会発表

「18世紀ロシアにおける「公」と「私」を論じる」、日本18世紀ロシア研究会、東京大学、2012.9.25

#### (6) 学会開催

日本18世紀ロシア研究会 第10回大会、2012.9.25

日本18世紀ロシア研究会 第11回大会、2013.9.22

## 3. 主な社会活動

### (1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

学位授与機構委員、2010～

学位授与機構専門委員会部会主査、2014～

日本18世紀ロシア研究会運営委員、2003～

## 1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部露語露文学専攻卒業
1983年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士修了（露語露文学）
1983年4月	東京大学人文科学研究科博士課程進学
1986年10月	ザグレブ大学哲学部留学（～1988年9月）
1989年3月	東京大学文学部人文科学研究科博士課程修了
1990年4月	東京大学文学部助手（ロシア語ロシア文学研究室）
1993年6月	筑波大学文芸言語学系講師
1997年7月	同助教授
1999年4月	京都大学人間・環境学研究科助教授
2005年4月	同教授
2013年4月	東京大学人文社会系大学院教授（スラヴ語スラヴ文学科）

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

スラヴ語学、スラヴ語歴史文法；ロシア語学；ボスニア・クロアチア・セルビア語圏および旧ユーゴ圏の言語文化；スラヴ語圏の少数言語；言語接触と言語維持、言語と社会の関係。

### b 研究課題

以下の事柄を研究課題としている。すなわち、共通スラヴ語から現代のスラヴ諸言語にいたる変化のプロセスを、文献学的に解明にすること。スラヴ語間の類似性と共通性、また個別のスラヴ語における言語特徴とくに形態統語論的特徴について実証的に分析すること。旧ユーゴ圏における言語と文化の諸相、とりわけ言語と社会や歴史の関係に注目し社会言語学的視点を取り入れた言語研究を行うこと。

### c 主要業績

#### (1) 論文

三谷恵子、「「境界」と「媒体」—言語から見た中欧」、『思想』、2012

Keiko Mitani、「Posuđivanje u jezičnom dodiru i struktura jezika: razmatranje na temelju podataka iz govora moravskih Hrvata」、『Japanese Contribution to the XVI. International Slavic Congress Minsk.』、10-46 頁、2014.3

#### (2) 学会発表

国内、三谷恵子、「ボシニャクたちの文学—メシヤ・セリモヴィッチの『修道師と死』を中心に」、中東現代文学研究会、2012.6.30

国際、Keiko MITANI、「Direct Evidentiality and Illocutionary Acts: Slavic Evidentiality Viewed from Japanese -gar(u) and -soo」、Slavic in Language Map of Europe. Questions of Areal Typology、北海道大学スラブ研究センター、2013.8.12

国際、Keiko Mitani、「Posuđivanje u jezičnom dodiru i struktura jezika. Razmatranje na temelju podataka iz govora moravskih Hrvata」、The XV-th International Congress of Slavists.、ミンスク国立外国語大学、2013.8.23

国内、三谷恵子、「ボスニアの境界性とボスニア人の祖国イメージ」、ロシア・東欧学会、JSSEES 合同大会、津田塾大学、2013.10.5

国際、Keiko Mitani、「Russian Language Study: Actual Situation and Challenges」、日露人文社会フォーラム、モスクワ大学図書館、2013.10.11

#### (3) 会議主催(チェア他)

国際、「多民族社会におけるアイデンティティの形成・分断・再統合—ヴォイヴォディナ地域研究確立に向けて—」、その他、北海道大学東京オフィス、2014.2.2

#### (4) 翻訳

個人訳、Meša Selimović、「Derviš i smrt」、三谷恵子、『修道師と死』、松籟社、2013.7

個人訳、Dževad Karahasan、「Pismo iz 1993. godine.」、三谷恵子、『1993年の手紙』、『中東現代文学選 2012』、7-41 頁、現代中東文学研究会、2013.9

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学会

日本スラヴ学研究会企画編集委員 2010.6～

日本ロシア文学会副会長 2013.12～

教授

**沼野 充義**

NUMANO, Mitsuyoshi

23 現代文芸論 参照

## 23 現代文芸論

教授 野谷 文昭

NOYA, Fumiaki

### 1. 略歴

- 1971年 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科学士・文学士  
1975年 東京外国語大学大学院外国語研究科（ロマンス系言語学）修士・文学修士  
1986年4月～1987年3月 東京工科大学、助教授（スペイン語）  
1987年4月～1994年3月 立教大学一般教育学部、助教授（スペイン語）  
1992年4月～1993年3月 カリフォルニア大学アーバイン校（University of California, Irvine）、客員研究員  
1994年4月～1998年3月 立教大学一般教育学部、教授（スペイン語）  
1998年4月～2005年3月 立教大学法学部、教授（全学共通カリキュラム担当）  
1999年12月～2000年3月 メキシコ大学院大学(El Colegio de México)、客員研究員  
2001年4月～2005年3月 立教大学大学院比較文明学専攻、教授  
2005年4月～2008年3月 早稲田大学教育・総合科学学術院、教授（スペイン語・複合文化学）  
2008年4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部、教授  
2013年3月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 定年退職

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

ラテンアメリカ文学、現代文芸論

#### b 研究課題

ラテンアメリカ<ブーム>期およびポスト<ブーム>期の小説、文学と映画、ラテンアメリカ現代詩

#### c 主要業績

##### (1) 論文

ロペ・デ・アギーレの表象をめぐって、「れにくさ」3号、78-91頁、2012.3

##### (2) 評論・エッセー等

語りが生んだ記憶の町『千年の愉楽』『奇蹟』『熱風』、別冊太陽『中上健次』（日本のこころ199）、平凡社2012.8、30-37頁

パンドラの箱、日本イスパニヤ学会「会報」第19号巻頭言、2012.9

世界を包摂する本、「れにくさ」4号（野谷文昭教授記念号巻頭言）、2013.3

##### (3) 書評

マリオ・バルガス＝リョサ『悪い娘の悪戯』（八重樫克彦・八重樫由貴子訳、作品社）、週刊現代、2012.4.14

カルロス・フエンテス『澄みわたる大地』（寺尾隆吉訳、現代企画室）日本経済新聞、2012.4.22

ホルヘ・フランコ『パライソ・トラベル』（田村さとこ訳、河出書房新社）、週刊現代、2012.10.20

##### (4) 学会発表・チェア

深南部の南からーパラダイムとしてのフォークナー、日本英文学会第84回大会（シンポジウム「偉大な小説とはなににかー没後50年のフォークナー」）、専修大学生田キャンパス、2012.5.26

（シンポジウム・チェア）響き合う言葉ー外国文学者・翻訳者が語るラテンアメリカ文学、日本比較文学会第50回大会、日本大学理学部、2012.10.21

##### (5) マスコミ

作家カルロス・フエンテスを悼む、朝日新聞（夕刊）、2012.5.22

新世紀世界文学ナビ・レオナルド・バデウーラ、毎日新聞、2012.5.14

新世紀世界文学ナビ・エレナ・ポニアトウスカ、毎日新聞、2012.7.23

新世紀世界文学ナビ・セネル・パス、毎日新聞、2012.8.6

新世紀世界文学ナビ・エドモンド・デスノエス、毎日新聞、2012.8.13

新世紀世界文学ナビ・ブライス＝エチェニケ、毎日新聞、2012.8.20

新世紀世界文学ナビ・ロベルト・ボラーニョ、毎日新聞、2012.8.27

(6) 翻訳

ロベルト・ボラーニョ『2666』野谷文昭・内田兆史・久野量一共訳、白水社、868頁、2012.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義・講演等

作家・詩人・ボルヘス、神奈川県立国際言語アカデミア（開所一周年記念・アルゼンチンデー）、2012.2.25

ボルヘスを読む～『七つの夜』から「盲目について」、数寄和（西荻窪）、2012.3.11

詩人ボルヘス、日本詩人クラブ例会、東京大学駒場キャンパス、2012.3

Diálogo: Cuando la palabra se hace imagen: cine y literatura en Japón y México. La facultad de Humanidades de Universidad, Autónoma del Estado de Morelos. Con colocación con la Fundación Japón en México, 2013.3.19-20

Cuando la palabra se hace imagen: cine y literatura en Japón y México (Fumiaki Noya y Satomi Miura). Museo Universitario del Chopo, Ciudad de México, 2013.3.21

(2) 学会

日本イスペインヤ学会理事

ボルヘス会会長

教授 柴田 元幸

SHIBATA, Motoyuki

1. 略歴

1979年 東京大学文学部（英語英米文学）学士・文学士  
1984年 東京大学大学院人文社会系研究科（英語英文学）修士・文学修士  
1986年 イェール大学 Yale University（Department of English）修士・文学修士  
1984年4月～1987年11月 東京学芸大学教育学部、講師  
1987年12月～1988年9月 東京学芸大学教育学部、助教授  
1988年10月～1997年3月 東京大学教養学部 助教授  
1997年4月～1999年3月 東京大学大学院総合文化研究科、助教授  
1999年4月～2005年3月 東京大学大学院人文社会系研究科、助教授  
2005年4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科、教授  
2014年3月 東京大学大学院人文社会系研究科 退職

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

（概要）

アメリカ文学。これまで同様、現代アメリカ小説の紹介・翻訳に努めるとともに、翻訳の文化的意義などについても発言してきた。

c 主要業績

(1) 論文

「世界は映画で出来ている」、野崎歓編『文学と映画のあいだ』東京大学出版会、2013/6、149-70頁

(2) 学会発表

北米から見える中東欧文学、シンポジウム「中東欧を＜翻訳＞する」立教大学池袋キャンパス、2012/1/28

基調講演「我々はどこを見ているのかー西洋文学を日本語に訳すことについて」、国際研究集会「グローバル化時代の世界文学と日本文学」東京大学山上会館、2013/3/3

Model or Mirror: Reception of American Literature in Japan. The Politics of Polyglossia, The Center for the Humanities, The Graduate Center, CUNY, 2013/5/6

アメリカ新聞漫画の黄金時代 1905-1944、日本英文学会九州支部 第66回大会、鹿児島国際大学、2013/10/27  
基調講演 英語を日本語に／日本語を英語に 翻訳を通じた文学的交流、2013年度台湾日本語文学研究会、淡江大学淡水キャンパス、2013/12/21

(3) 訳書

ポール・オースター 『ブルックリン・フォリーズ』 新潮社、2012/5  
マーク・トウェイン 『トム・ソーヤーの冒険』 新潮文庫、2012/7  
ライマン・フランク・ボーム 『オズの魔法使い』 角川文庫、2013/2  
ポール・ラファージ 『失踪者たちの画家』 中央公論新社、2013/7  
『アメリカン・マスターピース 古典篇』 スイッチ・パブリッシング、2013/10  
ポール・オースター 『写字室の旅』 新潮社、2014/1  
ブライアン・エヴンソン 『遁走状態』 新潮社、2014/2

(4) 主催(チェア他)

国際、「PEN World Voices Festival」、Asia Society, Park Avenue, New York, NY USA、2012.5.6  
国際、「PEN World Voices Festival」、Asia Society, Park Avenue, New York, NY USA、2013.5.4

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

翻訳の楽しみと苦しみ楽しみ、ニューヨーク補習授業校LI校、2012/5/12  
Found in Translation with Hiromi Ito, Hiromi Kawakami and Ted Goossen、The International Festival of Authors in Toronto, 2012/10/28  
世界文学を愉しもう 2、江戸川区立葛西図書館、2012/12/5  
基調講演 我々はどこを見ているのか 西洋文学を日本語に訳すことについて、国際研究集会、グローバル化時代の世界文学と日本文学、東京大学山上会館、2013/3/3  
翻訳教室、神戸女学院大学、2013/3/20  
声と文学 (管啓次郎と)、マルノウチ リーディングスタイル、2013/7/7  
一世紀前の新聞マンガのすごさ、紀伊國屋ホール、2013/8/19  
声と文学 (きたむらさとと) 金沢市近江町交流プラザ、2013/10/13  
声と文学 (石川美南と)、仙台市センダイコーヒー、2013/11/24  
世界文学を愉しもう 3、江戸川区立葛西図書館、2013/12/5  
濱中利信ギャラリートーク・ゲスト、濱中利信コレクション「エドワード・ゴッラーの世界」展、ヴァニラ画廊、2013/12/14

## 1. 略歴

- 1977年3月 東京大学教養学部教養学科学士  
 1979年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻修士課程）修士  
 1981年9月～1985年7月 ハーヴァード大学 Harvard University（フルブライト全額給費奨学生として留学（スラヴ語スラヴ文学専攻博士課程）  
 1984年6月 ハーヴァード大学修士  
 1985年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻博士課程）単位取得満期退学  
 1984年2月～1985年6月 ハーヴァード大学、ティーチング・アシスタント  
 1985年8月～1989年1月 東京大学教養学部、専任講師（ロシア語教室・教養学科ロシア分科）  
 1987年10月～1988年9月 ワルシャワ大学東洋学研究所、客員講師（日本語日本文学）  
 1989年1月～1994年3月 東京大学教養学部、助教授（ロシア語教室・教養学科表象文化論）  
 1994年4月～2004年3月 東京大学文学部、助教授（スラヴ語スラヴ文学）  
 2000年5月～11月 ロシア国立人文大学（モスクワ）、客員研究員（国際交流基金フェロー）  
 2002年10月～11月 モスクワ大学アジア・アフリカ研究所、客員教授  
 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、現在に至る

## 2. 主な研究活動

## a 専門分野

近現代ロシアおよびポーランド文学、現代日本文学を視野に入れた世界文学論、越境・亡命文学

## b 研究課題

- (1) ロシア・東欧から日本までを視野に入れた形での新たな世界文学論へのアプローチ
- (2) ポスト共産主義時代のロシア東欧文学の総合的研究
- (3) ユーラシア研究という新たな枠組みの中でのロシア東欧文学の位置づけ
- (4) ロシア近代小説研究（特にチェーホフ、ナボコフ）
- (5) 近現代ロシア詩の読解と新しいロシア詩アンソロジーの編纂

## c 主要業績

## (1) 著書

- (塩川伸明、小松久男、宇山智彦と共編著)、『ユーラシア世界① <東>と<西>』、東京大学出版会、2012.5  
 (塩川伸明、小松久男と共編著)、『ユーラシア世界③ 記憶とユートピア』、東京大学出版会、2012.6  
 (塩川伸明、小松久男と共編著)、『ユーラシア世界② ディアスポラ論』、東京大学出版会、2012.7  
 (塩川伸明、小松久男、松井康浩と共編著)、『ユーラシア世界④ 公共圏と親密圏』、東京大学出版会、2012.9  
 (塩川伸明、小松久男と共編著)、『ユーラシア世界⑤ 国家と国際関係』、東京大学出版会、2012.9  
 単著、『100分 de 名著 チェーホフ「かもめ」』、NHK出版、2012.9  
 単著、『世界文学から／世界文学へ—文芸時評の塊 1993-2011』、作品社、2012.10  
 編著、『やっぱり世界は文学できている 対話で学ぶ<世界文学>講義2』、光文社、2013.11、364頁  
 共著、加藤有子編『ブルーノ・シュルツの世界』、成文社、2013.11、226頁（177-207頁を分担執筆）  
 共著、Joachim Küpper, ed., *Approaches to World Literature*, Berlin: Akademie Verlag, 2013, 180 pp. (147-166頁を分担執筆)  
 共著、野崎敏『文学と映画のあいだ』、東京大学出版会、2013.7、214+14頁(107-128頁を分担執筆)  
 共著（国際学会 proceedings）、Международная конференция «Диалог армянской, русской и японской культур: Опыт сравнительного анализа», Yerevan: RAU Publishing House, 141頁、2013.12（99-104頁を分担執筆）

## (2) 論文

- 「さまよえる境界、捏造された幻影—中（東）欧文学の<地詩学>を求めて」、『思想』、1056、2012.4、292-297頁  
 Женщина как метонимическое средство представления мира: жинеские фигуры в «Спекторском» и «Повести» Пастернака」、『Язык, книжность, культура: Новици Петковићу у част: зборник радова』、Special Issue, No.34、2012.4、757-785頁

- Харуки против Карамазовых: Влияние "Великой русской литературы" на современную японскую литературу、『ヴェルボンド/Velbond』、1、2012.6、170-189 頁  
「タスカー考—「ふさぎの虫」から「せつない」へ」、『文学』、13-4、2012.7、81-96 頁  
「亡命詩人、娼婦たち、それともナボコフ間違えたのは誰か? (『賜物』におけるある誤植をめぐる)」、『れにくさ』 Vol. 5-1、2014.3、100-121 頁
- (3) 書評  
「絵画・書物・文学——ブルーノ・シュルツを蘇らせるために」(加藤有子『ブルーノ・シュルツ 目から手へ』、水声社)、『表象』、Vol. 7、282-286 頁、2013.3
- (4) 解説  
「空から人が降ってくる」、円城塔『オブ・ザ・ベースボール』(文春文庫)、195-205 頁、2012.4  
「『西洋文学』から『世界文学』へ—事典というにぎやかな祝祭の場で」、桑原武夫監修『西洋文学事典』(ちくま学芸文庫)、581-590 頁、2012.4  
「神なき現代人に宛てられた可笑しくも美しい手紙」、鹿島田真希『ゼロの王国』(講談社文庫)、下巻、370-381 頁、2012.6  
「精神と物質が直接出会う場へ」、中沢新一『東方的』(講談社学術文庫)、365-376 頁、2012.10  
「魂が飛び、虎が憑き、鬼が云う—多和田葉子と言葉の魔法」、多和田葉子『飛魂』(講談社文芸文庫)、238-249 頁、2012.11  
「動物学の教授には象を呼べ—大学教師としてのナボコフ」、ウラジーミル・ナボコフ『ナボコフの文学講義』(河出文庫)、下巻、409-429 頁、2013.1  
「ダニロ・キシユと山崎佳代子—戦争と、夏草と、世界文学の出会いについて」、ダニロ・キシユ『若き日の哀しみ』山崎佳代子訳(東京創元社、創元ライブラリー)、2013.9、212-221 頁
- (5) 学会発表  
国際、「Film Adaptations of Stanislaw Lem's Solaris」、2nd Symposium on Comparative Literature: Reform, Reuse and Recycle、神奈川大学、2012.6.16  
国際、「Shifting Borders in Contemporary Japanese Literature」、Concept Laboratory "Approaches to World Literature"、ベルリン自由大学、2012.6.26  
国際、「Переводя Чехова и Набокова на японский: какие трудности переводчик должен преодолеть」、II Международный конгресс литературных переводчиков、ロシア国立外国文献図書館、2012.9.7  
国際、「Русская литература в Японии сегодня: перевод, восприятие и влияние」、ロシア国立外国文献図書館、2012.9.8  
国内、The Seagull Goes to the Cosmos, and Haruki Goes to Sakhalin、5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (Key note speech)、大阪経済法科大学、2013.8.9  
国際、Japanese Literature in the Post-3/11 Era、International Conference "Dialogue of Armenian, Russian and Japanese Cultures: The Experience of Comparative Analysis、ロシア=アルメニア大学(エレヴァン)、2013.9.27  
国内、「一」と「多」の間で—外の境界と内なる境界(現代ロシア文学と映画の例に基づいて)、ロシア・東欧学会津田塾大学、2013.10.5  
国際、日本文学の「国際化」と新しい越境文学のありかた、International Conference "Japanese Civilization: Tokens and Manifestations"、日本美術技術博物館 "Manggha" (クラクフ)、2013.11.15  
国際、The Role of Russian Literature in the Development of Modern Japanese Literature from the 1880's to the 1930's: Some Remarks on its Peculiarities、International Workshop "Russia in East Asia: Imagination, Exchange, Travel, Translation"、コロンビア大学、2014.2.28
- (6) 啓蒙  
「いまどうして世界文学なのか—ゲートから池澤夏樹まで」、『文藝』、51-1、30-35 頁、2012.2  
「翻訳は世界文学の別名である—現代日本文学が外国語に訳されて何のいいことがあるんだ、と言う人たちのために」、『新潮』、2012年11月号、268-271 頁、2012.11
- (7) 監修  
(共同監修)『Worth Sharing vol. 1 日本の青春』、国際交流基金、2013.2
- (8) 会議主催(チェア他)  
国際、「グローバル化時代の世界文学と日本文学—新たなカノンを求めて」、実行委員長、東京大学山上会館、2013.3.3 ~2013.3.4

(9) マスコミ

書評委員、毎日新聞、1995年～（毎年6～8本書評を掲載）

文芸時評、新聞三社連合配信（東京・中日・北海道・西日本新聞）、2004.12～（毎月）

NHK ラジオ「英語で読む村上春樹」（NHK ラジオ第2放送番組の講師、およびNHK 出版による月刊テキスト執筆）、NHK、2013.4～2014.3

（インタビュー）翻訳大国衰える実力・多言語交流、『読売新聞』、2013.7.4

(10) 翻訳

個人訳、Антон Павлович Чехов、"Чайка"、沼野充義、『かもめ』、集英社（集英社文庫）、2012.8

個人訳、Лев Николаевич Толстой、"Три старца"、沼野充義、『三人の長老』、『こころ』、Vol. 13、82-93頁、平凡社、2013.6

共訳、アンドレイ・シニャフスキー『ソヴィエト文明の基礎』（平松潤奈、中野幸男、河尾基、奈倉有里と共訳）、みすず書房、416頁、2013.12

(11) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、研究代表者、「グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成」（Cultural Identity and the Formation of a New Canon of World Literature in the Age of Globalization）基盤研究(B)、2008～2012年度

文部科学省科学研究費補助金、研究代表者、「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」、「Border-crossing and Transfiguration: In Search of a Transdisciplinary Paradigm of Slavic and Eurasian Studies in the Era of Globalization」、2013年度～（2017年度までの予定）

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義など

「大江健三郎の最近の長篇小説—古義人三部作と『水死』を中心に—」、中国社会科学院大江文学研究会、中国社会科学院（北京）、2012.3.16

「Харуки против Карамазовых: Влияние «Великой русской литературы»」、中国社会科学院ロシア文学研究部会、中国社会科学院（北京）、2012.3.16

「村上春樹 vs カラマゾフ—現代日本の翻訳文化と世界文学」、シンポジウム「文学と翻訳をめぐって」、岡山大学文学部、2013.3.9

(2) 学会

Japanese Society for Slavic and East European Studies (JSSEES)、理事、1998～

日本ナボコフ協会運営委員、1999～

日本ロシア文学会会長、2009.10～

ロシア東欧学会理事、2000～

ICCEES（国際中東欧研究協議会）2015年度世界大会共同組織委員長、2011.12～

JCREES（日本ロシア東欧研究連絡協議会）、代表幹事、2013.2～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

セゾン文化財団評議員、1999.4～

東京大学出版会、企画委員、2007.4～

坪内逍遙大賞選考委員、早稲田大学、2007.4～

読売文学賞選考委員、読売新聞社、2005.7～

サントリー学芸賞選考委員、サントリー文化財団、2011.7～

## 1. 略歴

- 1989年3月 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科 卒業  
1989年4月 東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程入学（ロマンス系言語専攻）  
1991年3月 同 修了  
1991年4月 Centro de Estudios Literarios, Instituto de Investigaciones Filológicas de la Universidad Nacional Autónoma de México [メキシコ国立自治大学文献学研究所文学研究センター] 訪問研究生（メキシコ政府交換留学生として、～1992年2月）  
1992年4月 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程進学（地域文化専攻）  
1995年3月 同 単位取得退学  
1996年4月 法政大学経済学部助教授  
2002年4月 Centro de Estudios Latinoamericanos Rómulo Gallegos [ロムロ・ガリエーゴス・ラテンアメリカ研究センター、ベネズエラ] 客員研究員（～2003年3月）  
2004年4月 東京外国語大学外国語学部助教授  
2007年4月 同 准教授  
2009年4月 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授（大学院重点化による）  
2012年4月 同 教授  
2013年10月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

スペイン語圏の文学、ラテンアメリカ思想文化論

### b 研究課題

知識人たちの環大西洋的ネットワークの形成。

### c 主要業績

#### (1) 論文

「記憶の都市メキシコ テペヤクの丘」、『れにくさ』、4、224-238頁、2013.3

#### (2) 書評

マシャード・ジ・アシス 武田千香訳、『プラス・クーバスの死後の回想』、光文社、『総合文化研究』、16、88-91頁、2013.3

ロベルト・ボラーニョ 野谷文昭、内田兆史、久野量一訳、『2666』、白水社、『日本イスパニヤ学会会報』、20、6-7頁、2013.9

#### (3) 解説

「恋愛小説を読む」、『NHK テレビテキスト テレビでスペイン語』、4月号、104-107頁、2013.4

「恋愛小説を読む」、『NHK テレビテキスト テレビでスペイン語』、5月号、104-107頁、2013.5

「恋愛小説を読む」、『NHK テレビテキスト テレビでスペイン語』、6月号、100-103頁、2013.6

「概観 海外文学二〇一二 ラテンアメリカ」、『文藝年鑑 2013』、104-106頁、2013.6

「恋愛小説を読む」、『NHK テレビテキスト テレビでスペイン語』、7月号、98-101頁、2013.7

「恋愛小説を読む」、『NHK テレビテキスト テレビでスペイン語』、8月号、98-101頁、2013.8

「恋愛小説を読む」、『NHK テレビテキスト テレビでスペイン語』、9月号、98-101頁、2013.9

「恋愛小説を読む」、『NHK テレビテキスト テレビでスペイン語』、10月号、84-87頁、2013.10

「恋愛小説を読む」、『NHK テレビテキスト テレビでスペイン語』、11月号、84-87頁、2013.11

「恋愛小説を読む」、『NHK テレビテキスト テレビでスペイン語』、12月号、84-87頁、2013.12

「エドゥアルド・メンドサ『グルブ消息不明』』、『いま、世界で読まれている105冊 2013』、テンブックス、167-168頁、2013.12

「レオナルド・パドゥーラ『犬が好きだった男』」、同上、222-223頁、2013.12

「サンティアゴ・ロンカリオーロ『赤い四月』」、同上、248-249頁、2013.12

(4) マスコミ

「El traductor en la encrucijada」、『La Nación』、2013.2.8

「海外文学・文化2013 回顧 ラテンアメリカ」、『図書新聞』、2013.12.21

**3. 主な社会活動**

(1) 他機関での講義等

日本ラテンアメリカ学会第34回大会（於：獨協大学）におけるシンポジウム「ラテンアメリカ研究の射程」のパネルとして報告「ラテンアメリカ主義再考」2013年6月2日（モデレーター：佐藤勘治、他のパネリスト：砂野幸稔、園田節子、中野由美子、コメンテーター：鈴木茂、工藤多香子）

(2) 学会

日本ラテンアメリカ学会理事（研究年報担当）、2012年6月～2014年6月

## 24 西洋史学

教授 石井 規衛 ISHII, Norie

### 1. 略歴

1973年 3月	東京大学文学部（西洋史学専修課程）卒業
1976年 3月	同 大学院人文科学研究科（西洋史学専門課程）修士課程修了
1981年 3月	同 大学院人文科学研究科（西洋史学専門課程）単位取得の上退学
1984年 4月	神戸大学文学部（西洋史学担当）助教授（1993年 3月まで）
1993年 4月	東京大学文学部（西洋史学担当）助教授（1994年 11月まで）
1994年 12月	同 文学部（西洋史学担当）教授
1995年 4月	同 大学院人文社会系研究科教授（2013年 3月まで）
2013年 4月	立教大学文学部特任教授（～現在）

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

西洋史学（近現代ロシア史）

#### b 研究課題

革命後、最初の経済復興策を調査し、これまでのイデオロギー的な解釈から離れてとらえ直す作業を行った。それにより、いわゆる戦時共産主義とは、一時的なものではなく、ソヴィエト期ロシア全体の解明にとっても決定的な意義を持つ政策体系であることが確認した。続いて、そうした政策体系を採用する政治体制の解明に着手した。

成立直後の時期のソヴィエト社会の、複雑な政治的メカニズムの実態を整理することを通して、古参党员集団による寡頭支配として、新しい支配構造をモデル化した。第二に、ソ連世界（文明）の歴史的な性格を解明すること。そのさい、発生史的な接近方法と、解剖学的に接近する方法を組み合わせ、総合することを試みてきた。さらに、ロシア・マルクス主義と、それにもとづく歴史観が、各地の歴史研究に大きな影響をあたえた事実をふまえ、ロシアや日本の史学史を、思想史的に整理することにも従事している。

#### c 主要業績

##### (1) 論文

石井規衛、「第一次世界大戦とソビエト連邦の成立について」、『史学雑誌』、122、1539-1541 頁、2013.9  
石井規衛、「比較史学史の可能性について」、『史苑』、74、124-128 頁、2014.3

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

立教大学大学院（2012.4～2013.3）  
東京芸術大学（2012.4～2014.3）  
学習院大学（2012.4～2014.3）

## 1. 略歴

- 1973年3月 東京大学文学部西洋史学科卒業  
 1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻修士課程入学  
 1978年3月 同 課程修了(文学修士)  
 1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻博士課程入学  
 (1984年3月 同課程単位取得満期退学)  
 1980年10月 フランス・プロヴァンス第1大学第3課程(歴史と文明)登録  
 1984年12月 同課程修了 フランス第3課程博士号(歴史と文明)取得  
 1986年12月 九州大学文学部助教授  
 1994年10月 九州大学文学部教授  
 1995年4月 東京大学人文社会系大学院教授/九州大学文学部教授(併任)  
 1995年10月 東京大学人文社会系大学院教授  
 1997年3-5月 フランス・ボルドー第3大学客員教授  
 2005年3-7月 フランス・ニース大学文学部客員教授  
 2007年6月 フランス・南ブルターニュ大学、客員教授

## 2. 主な研究活動

## a 専門分野 b 研究課題

近世ヨーロッパ、とくにフランスを主要な対象として以下の諸分野を研究。

- 1) 国際商業史、2) 港湾都市史、3) 宗教社会史、4) フリーメイソン史

## c 主要業績

## (1) 論文

深沢克己、「啓蒙期フリーメイソンの儀礼と位階—石工伝統から騎士団伝説へ」、『白山史学』、48、27-61頁、2012.5

深沢克己、「啓蒙期ヨーロッパのインド趣味—更紗流行の社会文化史的意義について」、『国際服飾学会誌』、42、4-15頁、2012.11

Katsumi Fukasawa、「Du Rite français au Rite écossais rectifié. Le choix de la Loge de la Triple Union de Marseille à la fin du XVIIIe siècle」、『Diffusions et circulations des pratiques maçonniques XVIIIe-XXe siècle』、63-81頁、2012.12

Katsumi Fukasawa、「Métropole maçonnique : Marseille au XVIIIe siècle」、『Dictionnaire de la franc-maçonnerie』、Paris : Armand Colin、163-165頁、2014.3

## (2) 学会発表

国内、深沢克己、「啓蒙期ヨーロッパのインド趣味—更紗流行の社会文化史的意義について」、国際服飾学会第31回大会、大妻女子大学、2012.6.9

国内、深沢克己、「相剋と融和の近世ヨーロッパ宗教社会史—共同研究の成果と展望」(同志社大学文化史学会大会公開講演、同志社大学、2012.12.1)

国際、Katsumi Fukasawa、「Claude-François Achard et le début troublé de la Loge de la Triple Union de Marseille」、Claude-François Achard, un grand Marseillais méconnu, Marseille, Bibliothèque de l'Alcazar、2013.10.18

国内、深沢克己「『世俗化』史観の再検討—フランス近世史からの眺望」(日本西洋史学会第63回大会小シンポジウム「ヨーロッパ近代のなかのカタリシズム—宗教を通して見るもうひとつの『近代』」京都大学、2013.5.12)

## (3) 啓蒙

深沢克己、「現代世界と宗教」、『TASC Monthly』、451、3頁、2013

## (4) 会議主催(チェア他)

国際、「The international symposium: "Religious Conflict, Religious Concord in Europe and the Mediterranean World"」、主催、University of Tokyo、2012.10.20~2012.10.21

## (5) 総説・総合報告

深沢克己、「回顧と展望 2011年の歴史学界 総説」、『史学雑誌』、121編5号、1-5頁、2012.5

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

特別講演、国際服飾学会、「啓蒙期ヨーロッパのインド趣味—更紗流行の社会文化史的意義について」、2012.6.9  
セミナー、朝日カルチャーセンター横浜校、「近世レヴェント貿易とマルセイユ—商品流通と「離散の民」の商業ネットワーク」2012.9.1

セミナー、朝日カルチャーセンター新宿校、「相剋と融和のヨーロッパ宗教社会史—序説に代えて」、2012.10.8  
特別講演、同志社大学文化史学会大会、「相剋と融和の近世ヨーロッパ宗教社会史—共同研究の成果と展望」、  
2012.12.1

セミナー、朝日カルチャーセンター新宿校、「ユーラシア諸宗教間の永続的対話—総合の試み」、2013.4.8  
非常勤講師、京都大学文学部、「近世フランスの宗教と社会」、2013.9～

#### (2) 学会

国内、公益財団法人史学会、監事、2012.4～

教授 姫岡 とし子 HIMEOKA, Toshiko

### 1. 略歴

1973年3月 奈良女子大学理学部化学科卒業  
1980年6月 フランクフルト大学歴史学部修士課程修了  
1984年3月 奈良女子大学大学院人間科学研究科比較文化学専攻単位取得退学（文学博士）  
1988年4月 立命館大学国際関係学部講師  
1991年4月 立命館大学国際関係学部助教授  
1995年4月 立命館大学国際関係学部教授  
1998年9月 ドイツ・ボーフム大学社会科学部客員教授（1999年3月まで）  
2005年4月 筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻教授  
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学教授（現在に至る）  
2010年9月 ドイツ・ハレ大学客員教授（2010年10月まで）

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

西洋史

#### b 研究課題

近現代ドイツ社会史、女性・ジェンダー史

#### c 主要業績

##### (1) 学会発表

国内、「歴史研究とジェンダー—近代ドイツのナショナリズムを例にして」メトロポリタン史学会（2012年4月21日、首都大学東京）

国内、「ジェンダー史の成果は浸透したのか？」（日本学術会議シンポジウム、2013年6月29日）

国際、Toshiko Himeoka、「Frauenbewegung und Backlash: Japan und Deutschland im Vergleich」、  
Frauenbewegungen und Komplexe (Geschlechterverhältnisse in Internationaler Perspektive)Festtagung für  
Ilse Lenz, Ruhr-Universität Bochum in Detuschland, 2014.2.23

##### (2) 論文

「ドイツにおけるホロコーストの記憶文化と性」『歴史と地理』No.654、2012年5月、pp.1-15

「歴史認識を変える—歴史教育改革とジェンダー」『歴史評論』No.748、2012年8月

「ドイツにおけるナショナリズムと女性の政治化」『メトロポリタン史学』第9号、2013年12月

(3) 著書

「EUのジェンダー政策」羽場久美子（編）『EU（欧州連合）を知るための64章』（明石書店・2013年9月）

(4) 書評・論評

「2011年の歴史学会・回顧と展望・ヨーロッパ・現代一般」『史学雑誌』121編5号（2012年5月）

### 3. 主な社会活動

(1) 学会

日本ドイツ学会（理事長2010-2013）

公益財団法人史学会、評議員 2011.4～

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議連携会員（2010-2013）

教授 高山 博

TAKAYAMA, Hiroshi

HP: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~tkymh/index.html>

### 1. 略歴

- 1980年3月 東京大学文学部西洋史学科卒業
- 1980年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学修士課程入学
- 1982年3月 東京大学大学院同研究科同修士課程修了（文学修士）
- 1982年4月 東京大学大学院同研究科同博士課程進学
- 1984年9月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程入学  
(Harvard Yenching Institute, Doctoral Scholarship for Junior Faculty, 1984-88による)
- 1986年5月 アメリカ、エール大学大学院 M.A. (Master of Arts) 取得
- 1987年9月 アメリカ、エール大学 teaching assistant (12月まで)
- 1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学博士課程単位取得退学
- 1989年6月 イギリス、ケンブリッジ大学客員研究員(1990年3月まで)
- 1990年5月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程修了、Ph.D.取得  
Robert S. Lopez Memorial Prize (最優秀中世史博士論文賞)
- 1990年4月 一橋大学助教授（経済学部）（1993年4月から1994年3月まで併任助教授）
- 1993年4月 東京大学文学部助教授（文化交流研究施設）
- 12月 サントリー学芸賞
- 1994年6月 地中海学会賞
- 10月 マルコ・ポーロ賞
- 1995年10月 フランス、国立社会科学高等研究院客員研究員（1996年9月まで）  
(国際交流基金フェローシップによる)
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文化交流研究施設・基礎部門）
- 2001年10月 (西洋史学助教授を併任)
- 2002年4月 21世紀COEプログラム委員会分野別審査・評価部会委員（人文科学）(2005年まで)
- 2002年10月 イタリア、American Academy in Rome, R.A.A.R. (Resident of American Academy in Rome),  
(12月まで)
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（西洋史学） 現在に至る
- 2004年4月 日本学術振興会 学術システム研究センター研究員（人文学）(2007年3月まで)
- 2008年4月 文部科学省、科学官（2012年3月まで）
- 2009年10月 アメリカ、UCLA, CMRS Distinguished Visiting Scholar

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

西洋中世史

### b 研究課題

- (1) 古代から現代に至る諸国家の形態、組織、統治システムの比較を行う。
- (2) 西洋中世の主要な君主国の統治システムを比較・検討し、その異同を明らかにする。
- (3) 異なる文化・宗教を背景に持つ様々な人間集団が、地中海を舞台にどのように接触・対応していったかを通時的に見通すとともに、地中海の回りに形成された三大文化圏(ラテン・キリスト教文化圏、ギリシャ・ビザンツ文化圏、アラブ・イスラム文化圏) 研究の接合を目指す。
- (4) 上記三大文化が併存する十二世紀ノルマン・シチリア王国の解明を行う。
- (5) 異文化交流によって生じる様々な現象を分析し、人間集団が持つ特性と多様性を考える。
- (6) グローバル化が社会や国家形態に及ぼす影響を考察する。

### c 主要業績

#### (1) 論文

Hiroshi Takayama, "Migrations in the Mediterranean Area and the Far East: Medieval Sicily and Japan," *Europa im Geflecht der Welt: Mittelalterliche Migrationen in globalen Bezügen*, herausgegeben von M. Borgolte et alii (Berlin, Akademie Verlag), pp. 217-229, 2012. 7

#### (2) 書評

Hiroshi Takayama, "Alex Metcalfe, *The Muslims of Medieval Italy*," *The English Historical Review* (Oxford, Oxford University Press), vol. 128, pp. 645-647, 2013. 6

#### (3) 学会発表

国際、Hiroshi Takayama 「文明の十字路：中世シチリア」第13回日韓歴史家会議、ソウル、東北亜歴史財団 2013.10.26

国内、高山博「歴史研究者としての道～中世シチリア研究と院生時代の体験～」愛知教育大学歴史学会大会、愛知教育大学、2013.12.8

#### (4) 会議主催(チェア他)

公開講演会：L. Little, "Plague in the European Middle Ages" (「西洋中世学会」+東京大学グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」共催)、企画・司会、東京大学、2012.3.4

Seminar：L. Little, "Making Saints in the Middle Ages", 企画・司会、東京大学、2012.3.7

Seminar：Filippo de Vivo, "The Comparative History of Archives in Late Medieval and Early Modern Italy", 企画・司会、東京大学、2012.10.29

第30回伊豆会議「新しい日本～今必要な行動(伊豆会議宣言)～」、企画・司会、日本IBM天城ホームステッド 2012.11.9～10

## 3. 主な社会活動

### (1) 学会

国内、西洋中世学会、常任委員(2009～現在)、事務局長(2010～2012)

国内、史学研究会、評議員(2004～現在)

国内、史学会、評議員(1994～2012)

国内、地中海学会、常任委員(1999～現在)

国際、The Mediterranean Seminar、Advisory & Editorial Board、2009～現在

国際、International Medieval Bibliography (Leeds, U.K.)、Regular Contributor for Japan、1995～現在

国際、Journal of Medieval Iberian Studies、Editorial Board、2007～11; Advisory Board、2012～現在

国際、Medieval Academy of America、2013～現在

### (2) 行政

文部科学省、科学技術政策、科学官、2008～2012

日本学術会議、立案、連携会員(史学)、2006～現在

伊豆会議、世話人、2009～2013

**1. 略歴**

- 1991年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程博士・博士（文学）  
1991年11月 東京大学文学部助手  
1993年4月 大阪外国語大学外国語学部助教授  
2002年3月 ケンブリッジ大学古典学部客員研究員、クレアホール客員フェロー（～2003年2月）  
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授  
2010年11月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

**2. 主な研究活動****a 専門分野**

古代ギリシア史

**b 研究課題****c 主要業績****(1) 著書**

共著、世界史教授資料 研究編 編集部、『世界史教授資料 研究編 編集部』、山川出版社、2013.3

**(2) 啓蒙**

橋場弦、「学者の仕事」、『公研』、594号、pp.16-17、2013.2

橋場弦、「道を尋ねる」、『公研』、600号、pp.16-17、2013.8

橋場弦、「『ブリル新ヤコービ』のこと」、日本西洋古典学会公式HP、<http://clsoc.jp/agora/essay/2013/130110.html>、2013.11

**(3) 会議主催(チェア他)**

国際、「日本学術振興会短期招聘プログラム」、チェア、Quest for Peace in the Ancient World、東京大学、2013.3.22～2013.3.25

**(4) マスコミ**

「アナーキー」、『公研』、公益産業研究調査会、2012.2

「ギリシャはどこへ」、『公研』、公益産業研究調査会、2012.8

**(5) 教科書**

『詳説世界史』、木村靖二ほか、執筆、山川出版社、2012

『詳説世界史』、木村靖二ほか、執筆、山川出版社、2013

**(6) 史料**

橋場弦、歴史学研究会編『世界史史料1 古代のオリエンと地中海世界』、岩波書店、2012.7

**3. 主な社会活動****(1) 学会**

国内、日本西洋古典学会、常任委員、編集委員、書評委員、欧文雑誌編集委員、2012.1～2013.12

国内、史学会、理事、2012.1～2013.12

国内、日本西洋史学会、一般会員、2012.1～2013.12

国内、法制史学会、一般会員、2012.1～2013.12

国際、Hellenic Society、一般会員、2012.1～2013.12

## 1. 略歴

- 1986年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類 入学  
1991年3月 東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業  
1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学  
1994年3月 同 修了  
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程西洋史学専攻 進学  
1995年10月 アイルランド共和国ダブリン大学留学  
～97年9月 (1996年9月まではアイルランド政府給費留学生)  
1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学  
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学研究室 助手  
2002年3月 博士(文学) 学位取得  
2002年4月 岐阜大学教育学部社会科教育講座(史学) 助教授  
2007年4月 同 准教授  
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

アイルランド近代史、近代ブリテン世界史

### b 研究課題

19世紀アイルランド農村史、近代ダブリン都市史、近代ブリテン世界国制史

### c 主要業績

#### (1) 著書

辞書・辞典・事典、岩波書店辞典編集部(編)、『岩波世界人名大辞典』、岩波書店、2013.12

#### (2) 論文

Shunsuke KATSUTA、「The proposal for a militia interchange between Great Britain and Ireland」、『Irish Sword』、vol. xxix, no. 116、139-150頁、2013

#### (3) 書評

岩井淳(編著)、『複合国家イギリスの宗教と社会—ブリテン国家の創出—』、ミネルヴァ書房、『西洋史学』、249、50-52頁、2013.6

#### (4) 解説

勝田俊輔、「高神信一氏の書評に寄せて」、『史学雑誌』、121-1、95-98頁、2012.1

勝田俊輔、「ブリテン諸島史再考」、『歴史と地理 世界史の研究』、233号(No. 659)、55-59頁、2012.11

勝田俊輔、「『イギリス史』・アイルランド史・「3国史」——二つの国家合同の事例から『文化交流研究<東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要>』26号、2013

勝田俊輔、「世界史 Q&A イギリスとオランダの同君連合について教えてください」、『歴史と地理 世界史の研究』、238 (no. 671)、45-47頁、2014.2

#### (5) 総説・総合報告

勝田俊輔、「近代イギリス(回顧と展望)」、『史学雑誌』、122編5号、329-336頁、2013.5

#### (6) 教科書

『新世界史B』、勝田俊輔、執筆、山川出版社、2014

『新世界史B 教授資料』、執筆、山川出版社、2014

## 3. 主な社会活動

### (1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

任意団体、史学会、編集委員、2013.5～

任意団体、都市史学会、都市史研究会委員、2013.11～

## 1. 略歴

- 1994年3月 東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業  
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学  
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程西洋史学専攻 修了  
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 進学  
1998年10月～2000年9月 ロシア連邦ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所留学（文部省アジア諸国等派遣留学生）  
2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学  
2005年10月 博士（文学）学位取得  
2006年9月 新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科 専任講師  
2010年4月 東京理科大学理学部第一部教養学科 准教授  
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

近現代ロシア史

### b 研究課題

ヨーロッパの周縁としてのロシアから、20世紀史を捉え直すこと。

### c 主要業績

#### (1) 著書

- 共著、塩川伸明・小松久男・沼野充義編、『記憶とユートピア（ユーラシア世界3）』、東京大学出版会、2012.6  
共著、ロシア史研究会編、『ロシア史研究案内』、彩流社、2012.9  
共著、中嶋毅編、『新史料で読むロシア史』、山川出版社、2013.4  
その他、池田嘉郎ほか、『世界史教授資料研究篇』、山川出版社、2013.4  
編著、池田嘉郎、『第一次世界大戦と帝国の遺産』、山川出版社、2014.3

#### (2) 論文

- 池田嘉郎、「帝国、国民国家、そして共和制の帝国」、『クェドランテ』、14、81-99頁、2012.3  
池田嘉郎、「第一次大戦期ロシア帝国の衛生独裁——衛生・後送部門最高指揮官府の人員と構造」、『東京理科大学紀要（教養篇）』、44、245-263頁、2012.3  
池田嘉郎、「記憶の中のロシア革命——ロンム『十月のレーニン』とスターリン時代の革命映画」、塩川伸明・小松久男・沼野充義編『記憶とユートピア（ユーラシア世界3）』、東京大学出版会、101-126頁、2012.6  
池田嘉郎、「第一次世界大戦、ロシア革命、ネップ」、ロシア史研究会編『ロシア史研究案内』、彩流社、113-124頁、2012.10  
池田嘉郎、「ソヴィエト帝国論の新しい地平」、『世界史の研究』、234、1-12頁、2013.2  
池田嘉郎、「ロシア史研究の中の戦後歴史学——和田春樹と田中陽児の仕事を中心に」、『史潮』、73、39-59頁、2013.7  
池田嘉郎、「『社会運動史』覚書き」、『史苑』、74-1、59-72頁、2014.1  
池田嘉郎、「幸福なモスクワ」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、27、17-26頁、2014.3

#### (3) 書評

- Michael A. Reynolds、『Shattering Empires: The Clash and Collapse of the Ottoman and Russian Empires, 1908-1918』、Cambridge University Press、『ロシア史研究』、90、146頁、2012.6  
土屋好古、『帝国』の黄昏、未完の「国民」——日露戦争・第一次革命とロシアの社会』、成文社、『図書新聞』、3102、2頁、2013.3  
Eric Lohr、『Russian Citizenship: From Empire to Soviet Union』、Harvard University Press、『ロシア史研究』、93、94頁、2013.11  
高田和夫、『ロシア帝国論——19世紀ロシアの国家・民族・歴史』、平凡社、『19世紀学研究』、8、121-127頁、2014.3

(4) 学会発表

国際、Yoshiro Ikeda, 「‘Toward an empire of republics: transformation of Russia in the age of total war, revolution, and nationalism’」、The 6th International Symposium of Comparative Research on Major Regional Powers in Eurasia、北海道大学スラブ研究センター、2012.1.20

国内、池田嘉郎、「革命期ロシアにおけるリーダーシップ—構想・制度・人物」、ロシア・東欧学会、ロシア史研究会、JSSEES、日本ロシア文学会 2012 年合同大会、同志社大学、2012.10.7

国内、池田嘉郎、「ソヴィエト帝国論の新しい地平—1920 年代～30 年代のソ連民族政策」、基盤研究 (B)「1920 年代から 1930 年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究」研究会、東京理科大学、2012.12.1

国内、池田嘉郎、「戦後歴史学の中のロシア史研究」、歴史学会第 37 回大会、成蹊大学、2012.12.2

国際、Yoshiro Ikeda, “Putting Together an Imperial Jigsaw Puzzle: How the Russian Empire Was Envisaged in the Health Resort Boom during the First World War”, The 5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (ICCEES Asian Congress)、大阪経済法科大学、2013.8.10

国内、池田嘉郎、合評会「帝国主義と社会主義の時代」、帝国主義と社会主義の時代、世界史研究所 (東京都渋谷区)、2013.12.22

国際、Yoshiro Ikeda, 「Autonomous Regions in the Eurasian Borderlands as a Legacy of the First World War」、An International Workshop “Rethinking the First World War and Europe on its Centenary、The University of Tokyo, Komaba Campus、2014.1.10

(5) 研究報告書

宇山智彦、『比較帝国論の世界—新学術領域研究第 4 班中間成果』(平成 20-24 年度科学研究費補助金 研究成果報告書 研究代表者 宇山智彦)、210-213 頁、2012.1

(6) 会議主催(チェア他)

国際、「The 5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (ICCEES Asian Congress)」、チェア、Repression and the Fate of Soviet Intelligentsia、大阪経済法科大学、2013.8.10～2013.8.10

(7) マスコミ

「第 1 次大戦 日本の転機：勃発 100 年 位置付け再考」、『日本経済新聞』44 面、2014.1.18

(8) 教科書

『世界の歴史—世界史 A』、近藤和彦、羽田正、石橋崇雄、大津留厚、高山博、中野隆生、村上衛、森本一夫、池田嘉郎、小豆畑和之、執筆、山川出版社、2013

(9) 翻訳

個人訳、И.В.Лукоянов, "Замечание на доклад гос. Вада и ответ на замечание гос. Каго"、池田嘉郎、『和田氏の報告に対するコメント、加藤氏のコメントに対する回答』、『20 世紀初頭におけるロシアの対外認識—アメリカ観および日露戦争』(早稲田大学ロシア研究所 国際シンポジウム報告集)、169-172 頁、早稲田大学ロシア研究所、2012.3

## 25 社会学

教授 **松本 三和夫** MATSUMOTO, Miwao

### 1. 略歴

- 1981年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学  
1982年4月 城西大学経済学部専任講師 (社会学)  
1985年4月 城西大学経済学部助教授 (社会学)  
1993年6月 博士 (社会学) 取得 (東京大学)  
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (社会学)  
1998年10月 オックスフォード大学セントアントニーズカレッジ上級客員研究員 (～1999年10月)  
2003年4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (社会学)  
この間、エジンバラ大学ゲノム政策研究所 Distinguished Visiting Scholar (2007.6)、カリフォルニア大学バークレー校 Visiting Fellow (2013.3) を務める。

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

科学社会学、理論社会学、環境社会学、災害社会学

#### b 研究課題

以下の4つの領域を中心に研究をすすめている。

- (1) 科学技術の社会学におけるセクターモデルの地球環境問題、エネルギー問題への展開
- (2) 軍産学複合体の形成・展開過程の研究
- (3) 不確実性のもとでの社会的意思決定に関する理論社会学的研究
- (4) 知の失敗の研究の理論化

#### c 主要業績

##### (1) 著書

単著、松本三和夫、『構造災—科学技術社会に潜む危機』、岩波書店、2012.9

単著、松本三和夫 『知の失敗と社会—科学技術はなぜ社会にとって問題か— (岩波人文書セレクション)』、岩波書店、2012.10

編著、松本三和夫、『年報 科学・技術・社会』第21巻、I&K コーポレーション、2012.6

##### (2) 論文

松本三和夫、「テクノサイエンス・リスクと知的公共財」、盛山和夫他編『公共社会学』、東京大学出版会、第1巻、193-211頁、2012

Miwao Matsumoto, "The 'structural disaster' in the science-technology-society interface", 『Proceedings of SNU-UT Joint Forum』、70-79頁、2012

松本三和夫、「知の分断化と大学の役割」、広田照幸他編著『シリーズ 大学』、第1巻、73-110頁、2013

松本三和夫、「構造災の社会学—「事務局問題」と責任帰属—」、『総合人間学』、第7巻、30-44頁、2013

Miwao Matsumoto, "Structural Disaster' Long Before Fukushima: A Hidden Accident", 『Development & Society』、Vol. 42, No. 2, 165-190頁、2013.11

松本三和夫、「構造災と責任帰属—制度化された不作為と事務局問題— (特集 複合過酷災害への応答：加害・被害の観点から)」、『環境社会学研究』、第19巻、20-44頁、2013

##### (3) 学会発表

国内、松本三和夫、「科学社会学者の視点」、計算科学から社会への情報の発信のあり方に関する検討ワーキンググループ、2012.1.11

国内、松本三和夫、「立場明示型政策オプションの構築へ向けて」、科学技術振興機構 CRDS ワークショップ「政策形成における科学と政府の役割及び責任のあり方」、科学技術振興機構研究開発戦略センター、2012.2.24

国内、松本三和夫、「「構造災」の科学社会学—発電用原子炉をめぐる決定不全性—」、総合人間学会年次大会、日本大学文理学部、2012.5.26

国内、松本三和夫、「構造災」としての福島原発事故—これまで扱われてきていない問題—、日本再建シンポジウム、東京大学、2012.6.9

国際、Miwao Matsumoto、「The 'Structural Disaster' behind Success or Failure」、4S/EASST Joint Meeting、Copenhagen、2012.10

国内、松本三和夫、「構造災の社会学—発電用原子炉をめぐる無限責任—」、日本社会学会年次大会研究活動委員会テーマセッション、2012.11.1

国内、松本三和夫、「構造災」の科学社会学—発電用原子炉をめぐる決定不全性—、社会経済システム学会、静岡県立大学、2012.11.18

国際、Miwao Matsumoto、「The 'Structural Disaster' in the Science-Technology-Society Interface」、the UT-SNU Joint Meeting、Tokyo、2012.11.23

国際、松本三和夫、「A Hidden Accident Long Before Fukushima: From the Viewpoint of 'Structural Disaster」、科学社会学会第2回年次大会、2013.9.28

国際、Miwao Matsumoto、「For the Sociology of Disaster beyond Fukushima」、4S Annual Meeting、San Diego、2013.10

#### (4) インタビュー記事等

「構造災としての原発災害」、『サステナ』第23号、58-67頁、2012

「構造災をこえて」、『建築雑誌』第126巻、第1642号、47-48頁、2013

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

招待講演、「科学社会学の観点から問う構造災—制度化された不作為—」、日本学術会議シンポジウム「科学・公益・社会」にて招待講演、2013.6.21、於・日本学術会議大講堂

招待講演、「構造災—科学社会学におけるセクターモデルの視点から—」、北海道大学にて招待講演、2013.7.29、於・北海道大学

招待講演、「The Security of 'Villages', the Disaster of Society: The Path-dependent Origin of 'Structural Disaster」, Invited Opening Plenary Presentation Made at Workshop on Disasters, 2013.10.7, University of California, Berkeley.

招待講演、「制度化された不作為を「構造災」で考える」、関西大学にて招待講演、2013.12.4、於・関西大学

#### (2) 学会

国内、研究・技術計画学会、監事、2012.11～

国内、科学社会学会、会長、2012.11～

国際、East Asian Journal on Science, Technology & Society、国際編集アドバイザー、2013～

#### (3) 行政

日本学術会議、科学技術政策、総合工学委員会・機械工学委員会合同 計算科学シミュレーションと工学設計分科会計算科学シミュレーション「情報発信検討小委員会」委員、2012.3～

日本学術会議、科学者からの自律的な科学情報の発信の在り方検討委員会委員、2013.10～

## 1. 略歴

1984年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学  
社会保障研究所、中央大学を経て、1993年4月から東京大学助教授  
現在 東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

福祉社会学、社会政策、比較福祉レジーム分析

### b 研究課題

- (1) 社会政策および社会計画に関する理論的研究
- (2) 日本の地域社会計画に関する実証的研究
- (3) 諸外国の社会政策に関する研究
- (4) 社会保障をはじめとする社会政策に関する政策論的研究
- (5) 福祉国家と福祉社会に関する理論的実証的研究
- (6) 社会政策と社会意識に関する実証的研究

### c 主要業績

#### (1) 著書

- 編著、武川正吾・白波瀬佐和子、『格差社会の福祉と意識』、2012.4  
単著、武川正吾、『政策志向の社会学』、2012.6  
編著、武川正吾・宮本太郎、『グローバリゼーションと福祉国家』、2012.7  
編著、盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾、『公共社会学1』、2012.7  
編著、盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾、『公共社会学2』、2012.9  
単著、武川正吾、『福祉社会学の想像力』、2012.12  
編著、武川正吾、『公共性の福祉社会学』、2013.2
- #### (2) 共同研究・受託研究
- 受託研究、武川正吾、日本学術振興会、「学術動向等に関する調査研究」、2012～

## 3. 主な社会活動

### (1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

独立行政法人日本学術振興会学術システム研究センター、主任研究員、2012.4～  
国立社会保障・人口問題研究所、評価委員、2012.4～  
大学設置・学校法人審議会（大学設置分科会）専門委員、2010.4.～2014.3

## 1. 略歴

- 1981年3月 東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
- 1983年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程中退
- 1983年4月 東京大学教養学部助手
- 1986年4月 法政大学社会学部専任講師
- 1988年4月 法政大学社会学部助教授
- 1994年10月 東京大学文学部助教授（東京大学大学院社会学研究科担当）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文学部担当）
- 2000年4月 同研究科文化資源学専攻助教授（形態資料学専門分野）併任
- 2005年3月 博士（社会学）学位 東京大学
- 2005年9月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（文学部担当）

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

文化の社会学、社会意識論、社会学方法論、社会調査史

### b 研究課題

概要

- (1) 歴史社会学の思想と方法。一つの基礎資料としての柳田国男を中心とした全集の編纂。
- (2) モノとしての書物をモデルとしたメディア文化の地層分析。読書空間論。
- (3) 社会調査の社会史。日本近代における調査の実践と方法意識の展開について。
- (4) 文字テキスト以外の資料へのテキスト概念の可能性の拡大。かわら版・新聞錦絵データベースの実験、など。

### c 主要業績

#### (1) 著書

単著、佐藤健二、『ケータイ化する日本語：モバイル時代の「感じる」「伝える」「考える」』、大修館書店、2012.7  
その他、山本泰・佐藤健二・佐藤俊樹、『社会学ワンダーランド』、新世社、2013.5

#### (2) 論文

佐藤健二、「柳田国男と「写真」」、緒川直人・後藤真編『写真経験の社会史：写真史料研究の出発』岩田書院、149-181頁、2012.5  
Kenji SATO、「Sociology of Culture in Transition」、『International Journal of Japanese Sociology』、Number22, March、32-40頁、2013.3  
佐藤健二、「都市生活の光と蔭：浅草十二階が与えた視覚と想像力」『思想』14(4)、166-186、2013.7  
佐藤健二、「渋沢敬三におけるもうひとつの民俗学」『歴史と民俗』30、67-97、2014.2

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

静岡県立大学非常勤講師（2012年度～2013年度）、立教大学非常勤講師、奈良女子大学非常勤講師（2013年度）

### (2) 学会

日本社会学会、社会調査協会

### (3) 国際会議

渋沢敬三記念国際シンポジウム「もうひとつの民間学：知識人・文化人としての渋沢敬三」2013年9月7日開催  
（於：東京大学福武ラーニングシアター）

## 1. 略歴

- 1997年 オックスフォード大学 University of Oxford (社会学) ・社会学博士  
1997年4月 国立社会保障・人口問題研究所室長  
2003年4月 筑波大学大学院システム情報工学研究科助教授  
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (社会学)

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

社会階層論、人口社会学、計量分析

### b 研究課題

主な研究課題として次の4つに取り組んでいる。

- (1) 少子高齢社会の不平等構造
- (2) 社会的、私的移転に関する実証研究
- (3) 不平等構造からみるライフコース、世帯構造の変容
- (4) 社会階層と移動に関する実証研究

### c 主要業績

#### (1) 著書

編著、武川正吾・白波瀬佐和子、『格差社会の福祉と意識』、東京大学出版会、2012.4  
単著、Sawako Shirahase、『Social Inequality in Japan』、Routledge、2013

#### (2) 論文

白波瀬佐和子、「世代と世帯からみる経済格差」、『社会学年報』、第41号、2012.7  
白波瀬佐和子、「若者の格差 意識とライフコースからの考察」、盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編『公共社会学 2』、215-234頁、2012.8  
白波瀬佐和子、「変化する社会の不平等 闘争から協調、そして葛藤へ」、副田義也編『闘争性の福祉社会学 ドラマトロジーとして』、237-255頁、2013.3  
Sawako Shirahase、「Demography as Social Risk: Demographic Change and Accumated Inequality」、『Development and Society』、Vol. 42 No.2、213-235頁、2013.12

#### (3) 学会発表

国際、白波瀬佐和子、「Women and Men at the University of Tokyo: Searching for Gender Equity in Higher Education」、IARU Tokyo meeting、東京大学、2012.3.16  
国際、白波瀬佐和子、「How much Does Mom Contribute to Determining Family Background?」、International Sociological Association, RC28、Hong Kong、2012.5.12  
国内、白波瀬佐和子、「中高年期の不平等—資産格差に着目して—」、数理社会学会 大会、関東学院大学、2012.7.13  
国内、白波瀬佐和子、「親子の私的移転からみる階層格差」、家族社会学会 大会、お茶の水女子大学、2012.9.16  
国際、白波瀬佐和子、「Social Inequality and the Debate on the Difference Society in Japan : From a Mass-Middle-Class Society to a Class-divided Society」、German Sociological Association、Bochum、Germany、2012.10.4  
国内、白波瀬佐和子、「中高年層の階層構造を考える」、日本社会学会 大会、札幌学院大学、2012.11.3  
国際、白波瀬佐和子、「Single Mothers and Poverty in Japan: The Role of Intergenerational Coresidence」、Population of American Association、New Orleans, U.S.A.、2013.4.11  
国際、白波瀬佐和子、「Economic Hardship of Single Mothers in Japan」、RC28、International Sociological Association、The University of Queensland, Austria、2013.7.13  
国際、白波瀬佐和子、「Single Mothers and Living Arrangement in Japan」、RC19、International Sociological Association、2013.8.22  
国内、白波瀬佐和子、「富の蓄積と移転—過小評価されてきた社会的不平等—」、日本社会学会、2013.10.13

国際、白波瀬佐和子、「Economic inequality among families with small children in Japan: Who provides welfare to children?」、German Association for Social Science Research on Japan (VSJF)、Japanese-German Center Berlin, Germany、2013.11.23

(4) 啓蒙

白波瀬佐和子、「政権交代の中の不平等対策」、『世界』、2013年7月、845、171-177頁、2013.7

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、明治学院創立150周年・記念特別講演会、「少子高齢化と格差社会—ジェンダーと世代に着目して—」、2013.5

(2) 学会

国内、福祉社会学会、理事、2012.6～

国内、日本社会学会、理事、2012.11～

准教授 **赤川 学**

AKAGAWA, Manabu

### 1. 略歴

1990年3月 東京大学大学院社会学研究科社会学修士課程修了  
1995年 東京大学大学院社会学研究科社会学博士課程単位取得退学  
1995年 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助手  
1995年 専修大学文学部社会学科非常勤講師  
1996年 富山大学人文学部非常勤講師  
1998年 徳島大学総合科学部非常勤講師  
1999年 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座講師  
1999年 信州大学人文学部人間情報学科非常勤講師  
2000年 筑波大学第一学群社会学類非常勤講師  
2001年 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座助教授  
2002年 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助教授  
2005年 名古屋大学大学院国際多元文化専攻ジェンダー論講座非常勤講師  
2006年 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野准教授

### 2. 主な研究活動

a 専門分野

社会問題の社会学

歴史社会学

b 研究課題

セクシュアリティの歴史社会学

少子化社会論

人口減少社会論

社会問題の構築主義アプローチ

c 主要業績

(1) 著書

共著、赤川学、「誰がどんな少子化対策を支持するのか」、武川正吾ほか編『格差社会の福祉と意識』57-76頁、東京大学出版会、2012.4



## (2) 論文

出口剛司 (Takeshi Deguchi)、「Critical Theory and its development in post-war Japanese sociology: pursuing true democracy in rapid capitalist modernization」、『(書名) Routledge Companion to Contemporary Japanese Social Theory: From individualism to globalization in Japan today』、pp. 40-62、2013 ((1)著書を参照)

出口剛司、「文化産業論再考—ミメシスと大衆欺瞞のはざままで—」、『社会学史研究』、第35号、pp.13-29、2013.6

## (3) 書評

藤田哲司、『権威の社会現象学』、『現代社会学理論研究』、第6号、2012.3

## (4) 解説

出口剛司、多賀太氏「教育する父親の時代? : ジェンダーと階層をめぐる家庭教育のポリティクス」、『ジェンダーセンター年次報告書』、2012年度、2013.3

出口剛司、筒井淳也氏「国際比較のなかの結婚と女性労働」、『ジェンダーセンター年次報告書』、2013年度、pp. 15-17、2014

## (5) 学会発表

国内、出口剛司、「文化産業論再考：大衆欺瞞とミメシスのはざままで」、ポピュラーカルチャーと社会学的思惟、千葉経済大学、2012.7.1

国内、出口剛司、「Critical theory and Democracy in Japanese theoretical sociology: Beyond reconstructive approach」、内外から見た日本の現代社会理論 A. エリオット教授を招いて、千葉大学、2012.11.24

国内、出口剛司、「Reappraising Keiichi Sakuta's Sociology of Values: Beyond Galapagosized Sociology to a General Sociocultural Theory of Solidarity」、日本社会学理論学会 日韓共同企画「現代社会学の焦点—日韓における社会学理論の現在と未来」、成城大学、2013.9.7

国内、出口剛司、「批判理論における正当化と理論実践—フレイザー=ホネット論争再考—」、日本社会学会 テーマセッション「社会学理論への時代の要請/時代の要請の社会学理論」、慶応義塾大学、2013.10.12

国際、出口剛司、「The Great East Japan Earthquake and its Underrepresentation: Sociology of Literature after the great disaster」、States of Emergency: the emotional costs of global disasters and regional emergencies、University of South Australia、2014.3.20

## (6) 研究報告書

出口剛司、「社会学の公共性とその実現可能性に関する理論的・学説史的研究」、平成23年度成果報告書(基盤研究(C))、2012.3

出口剛司、「社会学の公共性とその実現可能性に関する理論的・学説史的基礎研究」、平成24年度成果報告(基盤研究(C))、pp.23-39、2013.3

出口剛司、「社会学の公共性とその実現可能性に関する理論的・学説史的基礎研究」、平成25年度成果報告書(基盤研究(C))、p.14-22; pp.42-48; pp.76-83、2014.3

## (7) 会議主催(チェア他)

国内、「日本社会学会大会テーマセッション」、チェア、実践からの社会学理論の生成と変化II、2012.11.3

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、早稲田大学文化構想学部、「不死の様式」、2012.4~2013.9

非常勤講師、法政大学大学院社会学研究科、「社会学研究法1」、2012.7~

非常勤講師、明治大学大学院情報コミュニケーション研究科、「社会的人間論」、2013.4~2014.3

非常勤講師、明治大学情報コミュニケーション学部、「コミュニケーション基礎」、2013.4~2014.3

非常勤講師、立教大学社会学部、「社会学史」、2013.4~2013.9

非常勤講師、中央大学法学部、「現代社会理論」、2013.9~2014.3

### (2) 学会

国内、日本倫理学会、一般会員、2012.4~

国内、日本社会学会、研究活動委員、2012.4~

### (3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター、運営委員(学外委員)、2012.1~2012.3

## 1. 略歴

- 1997年3月 東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程入学
- 1999年3月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程修了
- 2002年3月 同 博士課程単位取得退学
- 2004年4月 札幌学院大学社会情報学部講師（～2006年3月）
- 2005年5月 博士（社会学）学位取得（東京大学）
- 2006年4月 札幌学院大学社会情報学部助教授
- 2007年4月 信州大学人文学部准教授
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

コミュニティの社会学、ハウジングの社会学、社会調査史

### b 研究課題

- (1) 建造環境と社会構造の関係についての理論的・経験的研究
- (2) 米国、英国および日本における社会調査史

### c 主要業績

#### (1) 論文

祐成保志、「ハウジングとホームの社会学」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、26、19-25頁、2013.3

#### (2) 学会発表

国内、祐成保志、「R・K・マーソンのハウジング研究」、第85回日本社会学会大会、2012.11.3

国内、祐成保志、「社会学におけるハウジング研究」（研究活動委員会企画フォーラム：「住宅」の社会学の回顧と展望）、第86回日本社会学会大会、2013.10.12

国内、祐成保志、「社会調査史の多層性」（大会シンポジウム：リサーチ・ヘリテージー20世紀の調査遺産をいかに継承するのか）、第86回日本社会学会大会、2013.10.13

#### (3) その他

祐成保志、「都市に住まう」、中筋直哉・五十嵐泰正編『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房、70-73頁、2013.4

祐成保志、「住宅をめぐる制度の再設計」、小野田泰明他編『建築のサプリメント』彰国社、176-177頁、2014.4

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、信州大学人文学部、「文化情報論特論XV」、2012.8

### (2) 学会

国内、日本社会学会、データベース委員、2013.1～

## 26 社会心理学

教授 山口 勸

YAMAGUCHI, Susumu

### 1. 略歴

1974年3月	東京大学文学部第四類（心理学専修課程）卒業（文学士）
1976年3月	同 大学院人文科学研究科修士課程心理学専門課程 修了（文学修士）
1980年6月	同 博士課程心理学専門課程 修了退学
1980年7月	同 文学部社会心理学研究室助手 ～82年3月
1983年4月	学習院大学文学部心理学科助手 ～84年3月
1984年4月	米国オハイオ州立大学大学院留学 ～84年12月
1985年2月	放送大学客員助教授 ～85年3月
1985年4月	同 教養学部助教授 ～87年9月
1987年10月	東京大学文学部助教授（社会心理学）
1991年9月	博士（社会学）学位取得（東京大学）
1994年6月	東京大学文学部教授（社会心理学）
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科教授（社会心理学）～現在
1995年7月	米国ハワイ大学客員教授 ～95年12月
2000年8月	米国シガン大学客員教授 ～00年12月
	米国ハワイ大学、グローバリゼーション研究センター（affiliate faculty）～現在

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野      b 研究課題

集団主義的傾向の比較文化的研究      集団主義的傾向は、日本でだけ見られるものではない。さらに、集団主義的な文化のもとでも、個人差がみられる。現在は集団主義的傾向と、集団として環境をコントロールしようとする傾向との関連を研究している。

個人の集団内行動      個人の集団内行動は、集団から独立している場合の行動と、多くの場合異なっている。また、他者の行動を観察する場合でも、その行動が集団の影響下で行われた場合と、そうでないときとは、異なった判断がなされることが多い。こうした点について、実験的研究を行っている。

甘えに関する研究      日本人に特有な心理的傾向と考えられている「甘え」については、実証的な研究が少ない。そこで、この問題について日本でのデータ収集と結果の分析を終えたところである。これから、日本人の甘えと同様の現象が、他のアジア文化や西欧の文化でも見られるかどうかを問題とする予定である。

自尊心に関する実験的研究      近年、日本人の自尊心は欧米人のそれと比較して低いことが主張されている。しかしながら、日本人には謙遜をするという傾向があることを忘れてはならない。したがって、実際には高い自尊心を表明しないのか、それとも本当に自己評価が低いのか、見きわめる必要がある。この点について、実験的な検討を比較文化的に行っている。

#### c 主要業績

##### (1) 論文

- Caprara G. V., Alessandri G., Eisenberg, N., Kupfer, A., Steca, P., Caprara, M. G., Yamaguchi, S., Fukuzawa, A., Abela, J. (2012). The Positivity Scale. *Psychological Assessment*, 24, 701-712.
- Caprara, G. V., Alessandri, G., Trommsdorff, G., Heikamp, T., Yamaguchi, S., & Suzuki, F. (2012). Positive orientation across three cultures. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 43, 77-83.
- Leung, K., Lam, B. C. P., Bond, M. H., Conway III, L. G., Gornick, L. J., Amponsah, B., Boehnke, K., Dragolov, G., Burgess, S. M., Golestaneh, M., Busch, H., Hofer, J., del Carmen Dominguez Espinosa, A., Fardis, M., Ismail, R., Kurman, J., Lebedeva, N., Tatarko, A. N., Sam, D. L., Teixeira, M. L. M., Yamaguchi, S., Fukuzawa, A., Zhang, J., & Zhou, F. (2012). Developing and evaluating the social axioms survey in eleven countries: Its relationship with the five-factor model of personality. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 43, 833-857.

Singh, R., Simons, J. J. P., Self, W. T., Tetlock, P. E., Zemba, Y., Yamaguchi, S., Osborn, C. Y., Fisher, J. D., May, J., Kaur, S. (2012). Association, culture, and collective imprisonment: Tests of a two-route causal-moral model. *Basic and Applied Social Psychology, 34*, 269-277.

(2) 学会発表 (主要なもの)

国際 Yamaguchi, S. (2013, July 31st). Universality of Need for High Self-Esteem and its Functions. Paper presented at the 121st Annual Convention of the American Psychological Association, Honolulu, Hawaii.

国際 Yamaguchi, S. (2012, December 22<sup>nd</sup>). Control Orientations among Japanese: Beyond Primary-Secondary Dichotomy. Keynote Speech at the 4<sup>th</sup> conference of the Asian Association of Indigenous and Cultural Psychology, Langkawi, Malaysia.

国際 Yamaguchi, S. (2012, March 24<sup>th</sup>). Cultural differences in control orientation and pursuit of well-being: An indigenous perspective. Paper presented at the International Conference on Stress, Health and Well-Being: Psychological, Social and Cultural Perspectives. Inha University, Incheon, Korea

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

国際 Cultural differences between Japan & New Zealand: Implications for Business. Japan Information and Cultural Centre、在ニュージーランド日本大使館 2013年

国際 Further Evidence for Universality of Need for Self-Esteem and its Functions, University of Southampton, Britain. 2012年

教授 池田 謙一 IKEDA, Ken'ichi

### 1. 略歴

1978年3月 東京大学文学部社会心理学専修課程卒業 文学士  
1980年3月 東京大学大学院社会学研究科社会心理学専門課程修士課程修了 社会学修士  
1982年3月 東京大学大学院社会学研究科社会心理学専門課程博士課程中途退学  
1982年4月 東京大学新聞研究所助手  
1987年4月 明治学院大学法学部専任講師  
1990年4月 明治学院大学法学部助教授 (政治学科 [政治社会学・情報学])  
1992年4月 東京大学文学部助教授 (社会心理学)  
1995年3月 博士 (社会心理学)  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (大学院大学化に伴う)  
2000年8月 東京大学大学院人文社会系研究科教授  
2013年3月 同職を転出  
2013年4月 同志社大学社会学部・大学院社会学研究科教授  
1995年7-9月 ミシガン大学政治研究センター客員研究員 (文部省短期在外研究)  
1996年7-8月, 1998年11月 ニュージーランド・ビクトリア大学心理学科客員研究員  
1997年8月-1998年5月 インディアナ大学高等研究所客員研究員  
2003年8-9月 トロント大学都市・コミュニティ研究センター・客員研究員  
2007年8-9月 トロント大学社会学科客員研究員

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野      b 研究課題

#### 概要

- ・政治社会心理学の再構成：実証研究の主力は、政治社会心理学に認知科学的なアプローチを展開するところにある。世論調査、投票行動調査の分析をこの観点から行うとともに、投票行動・世論過程の理論的再構成をめざしている。
- ・コミュニケーション行動の研究：マスメディアやインターネット等、高度情報システム諸領域におけるコミュニケーション行動の生成・変容を検討している。
- ・社会のリアリティの社会心理学的研究：上記諸研究に基づきつつ「認知社会心理学」の理論化の試みを継続している。特にわれわれの社会のリアリティを構成する諸力の社会心理学的な分析に力点を置いている。
- ・データ・サイエンス：以上の実証研究は調査データの収集と密接に結びついている。これに関わる中で、国際・国内の共同研究に多く関わり、実施した調査データの公開作業を活発に行っている。

### c 主要業績

#### (1) 論文

- Takashi Yoshida, Tomohisa Gotoh, Nobuyuki Tomizawa, and Ken'ichi Ikeda 「Snowball sampling consumer behaviour research to characterize the influence of market mavens on social networks」. 『International Journal of Intelligent Systems Technologies and Applications』、12, 268-282. 2013.3
- Takagi, D., Kondo, K., Kondo, N., Cable, N., Ikeda, K., and Kawachi, I. 「Social disorganization / social fragmentation and risk of depression among older people in Japan: Multilevel investigation of indices of social distance」. 『Social Science and Medicine』、83, 81-89. 2013.01
- Boase, Jeffrey and Ikeda, Ken'ichi 「Core Discussion Networks in Japan and America」, 『Human Communication Research』、38, 95-119. 2012.3
- Ikeda, Ken'ichi 「Differential effect of multiple social networks on public participation in Japan」, (In) Amrita Daniere and Hy Van Luong (Eds.) 『The Dynamics of Social Capital and Civic Engagement in Asia: Vibrant Societies』、London: Routledge, Chapter 4, pp.54-80. 2012.5
- Ikeda, Ken'ichi, Tetsuro Kobayashi, and Sean Richey 「Recreation and Participation: Testing the Political Impact of Social Interaction」. 『Social Science Quarterly』、43 (2), 464-481. 2012.4
- 池田謙一 「アジア的価値を考慮した制度信頼と政治参加の国際比較研究：アジアン・バロメータ第2波調査データをもとに」、『選挙研究』、28, 99-113. 2012.5
- 高浦佑介・木村綱希・池田謙一 「環境懐疑派の意見への接触が人々の環境配慮行動に及ぼす効果の検討」、『環境学会誌』、25, 184-191. 2012.4
- 高木彩・山崎瑞紀・池田謙一・堀井秀之 「Web サイト情報が鉄道事業者への信頼に及ぼす影響」、『日本リスク研究学会誌』、22, 9-16. 2012.6
- Elisabeth Noelle-Neumann (原著), 池田 謙一・安野 智子 (翻訳) 『沈黙の螺旋理論[改訂復刻版]: 世論形成過程の社会心理学』、北大路書房、2013.3

## 3. 主な社会活動

#### (1) 学会

国内、日本社会心理学会常任理事（広報委員会担当）、2011-2014 年度

#### (2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

国内、大阪商業大学 JGSS 研究センター 嘱託研究員、2008 年 8 月-2015 年 3 月

## 1. 略歴

1992年	University of California, Los Angeles Ph.D
1992年	京都大学大学院文学研究科博士後期課程
1992年4月	名古屋明德短期大学講師
1995年4月	日本福祉大学情報社会科学部助教授
1999年6月	名古屋大学情報文化学部助教授
2001年4月	名古屋大学大学院環境学研究科助教授
2006年10月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年8月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

社会心理学

### b 研究課題

- 1) Mind reading and moral judgments
- 2) Beliefs in free will and self-regulation
- 3) Methodology and Science communication

### c 主要業績

#### (1) 著書

- 共著、唐沢かおり・戸田山和久、『心と社会を科学する』、東京大学出版会、2012  
共著（分担執筆）、唐沢かおり、「感情理論の適用事例」『現代心理学事例辞典（中島義明編）』、朝倉書店、2012  
共著（分担執筆）、唐沢かおり、「認知から感情へ」『認知心理学ハンドブック（日本認知心理学会編）』、有斐閣、2013

#### (2) 論文

- 橋本剛明・白岩祐子・唐沢かおり、「経済格差の是正政策に対する人々の賛意：機会の平等性と社会階層の認知が責任帰属に与える影響の検討」、『社会心理学研究』、28、13-23頁、2012  
白岩祐子・荻原ゆかり・唐沢かおり、「裁判シナリオにおける非対称な認知の検討：被害者参加制度への態度や量刑判断との関係から」、『社会心理学研究』、28、41-50頁、2012  
荒川歩・白岩祐子・唐沢かおり、「犯罪被害者に対する理解を深めるための教育ゲーム：開発と実践」、『法と教育』、2、5-15頁、2012  
渡辺匠・唐沢かおり、「自己脅威が内集団との合意性認知に及ぼす効果」、『社会心理学研究』、27、83-92頁、2012  
Watanabe T & Karasawa K, 「Self-ingroup Overlap in the Face of Mortality Salience」、『Japanese Journal of Experimental Social Psychology』、52、25-34頁、2012  
Hashimoto T, & Karasawa, K, 「Victim and observer asymmetries in their reactions to an apology: How responsibility attribution and emotional empathy lead to forgiveness」、『Japanese Journal of Experimental Social Psychology』、51、104-117頁、2012  
白岩祐子・宮本聡介・唐沢かおり、「犯罪被害者に対するネガティブな帰属ラベルの検討：被害者は「責任」を付与されるのか」、『社会心理学研究』、27、109-117頁、2012  
白岩祐子・唐沢かおり、「被害者参加人の発言および被害者参加制度への態度が量刑判断に与える影響」、『実験社会心理学研究』、53、12-21頁、2013  
渡辺匠・唐沢かおり、「共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討」、『心理学研究』、84、20-27頁、2013  
渡辺匠・岡田真波・坂井真帆・池谷光司・唐沢かおり、「自由意思信念に応じた帰属プロセスの変容」、『人間環境学研究』、11、59-65頁、2013  
Todayama K, & Karasawa, K, 「How radiation and its effect were explained?: Science communication after the Fukushima Daiichi nuclear disaster」、『International Journal of Knowledge and Web Intelligence』、4、336-348頁、2013

Karasawa K., & Todayama, K., 「The social aspects of science communication in the books for general audience after Fukushima Daiichi nuclear disaster.」, 『Journal of Human Environmental Studies』, 11, 117-123 頁, 2013

伊藤健彦, 唐沢かおり, 「日本の非就業状態にある人に対する原因帰属と雇用格差は正動機の関係 —— 不平等帰属に注目して ——」, 『人間環境学研究』, 11, 125-131 頁, 2013.

### (3) 学会発表

国際, Takaaki Hashimoto & Kaori Karasawa, 「People's Judgments towards Predicament and Account-giving: Experimental Examination of the Effect of Perceived Influence」, The 13th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology, 2012.1

国際, Takumi Watanabe & Kaori Karasawa, 「The impact of mortality salience and group status on self-ingroup overlap」, The 13th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology, 2012.1

国際, Takehiko Ito & Kaori Karasawa, 「The Influence of the Out-group Threat and In-group Identification on Intergroup Behavior: The Mechanism of Attribution of Failure to Out-Group」, The 13th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology, 2012.1.26

国際, Kaori Karasawa, 「Methodological Individualism and Folk Psychology in Social Psychology」, First Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, 2012.9.7

国内, 白岩祐子・唐沢かおり, 「犯罪被害者の発言による量刑判断への影響が否認される過程」, 日本心理学会第 76 回大会, 2012.9.12

国内, 伊藤健彦・唐沢かおり, 「仮定された結果の原因推論における内集団奉仕的バイアス」, 日本グループ・ダイナミクス学会第 59 回大会, 2012.9.22

国内, 唐沢かおり, 「実験哲学への招待: 哲学と社会心理学の実りあるコラボレーションに向けて」, 日本グループ・ダイナミクス学会第 59 回大会, 2012.9.22

国内, 唐沢かおり, 「フォークサイコロジー問題とピースミール知問題」, 日本グループ・ダイナミクス学会第 59 回大会, 2012.9.22

国内, 渡辺 匠・唐沢 かおり, 「内集団への顕在的・潜在的同一視を通じた存在脅威管理方略」, 日本グループ・ダイナミクス学会第 59 回大会, 2012.9.23

国内, 橋本剛明・唐沢かおり, 「なぜ集団による謝罪は「許し」をもたらさないのか—不祥事企業に対する影響力の要因の検討—」, 日本グループ・ダイナミクス学会第 59 回大会, 2012.9.23

国内, 白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり, 「刑事裁判への関与が犯罪被害者遺族の司法観に与える影響」, 法と心理学会, 2012.10.21

国内, 戸田山和久・出口康夫・唐沢かおり・山口裕幸, 「フォークサイコロジーと社会心理学—その方法論的問題」, 日本科学哲学会第 45 回大会, 2012.11.10

国内, 鄭珪熙・唐沢かおり, 「シャーデンフロイデと共感の認知が対人知覚に及ぼす影響」, 日本社会心理学会第 53 回大会, 2012.11.18

国内, 渡辺匠・唐沢かおり, 「社会的排斥が自己と内集団の類似性に与える影響」, 日本社会心理学会第 53 回大会, 2012.11.18

国内, 伊藤健彦・唐沢かおり, 「集団間の不公平が外集団への拒否意図に与える影響」, 日本社会心理学会第 53 回大会, 2012.11.18

国内, 竹内真純・唐沢かおり・大高瑞郁, 「中年期における, 高齢者に対する態度, 加齢不安の規定要因」, 日本社会心理学会第 53 回大会, 2012.11.18

国内, 白岩祐子・唐沢かおり, 「刑事裁判への関与が犯罪被害者の裁判・司法観に与える影響」, 日本社会心理学会第 53 回大会, 2012.11.18

国内, 武井恵亮・唐沢かおり・橋本剛明, 「道徳判断が副作用の意図性判断に及ぼす影響の検討」, 日本社会心理学会第 53 回大会, 2012.11.18

国内, 橋本剛明・唐沢かおり, 「制裁動機の規定因の検討: 不正感・是正機会・謝罪」, 日本社会心理学会第 53 回大会, 2012.11.18

国際, Keisuke Takei & Kaori Karasawa, 「The Influence of Moral Outrage on Intentionality Judgement」, The 14th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology, Ernest N. Morial Convention Center, New Orleans, Louisiana, 2013.1.18

- 国際、Kyu Hee Jung & Kaori Karasawa, 「Being the Target of Schadenfreude and Empathic Concern: The Impact of Perceived Hostile and Prosocial Emotion on Person Perception」、The 14th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology, Ernest N. Morial Convention Center, New Orleans, Louisiana, 2013.1.18
- 国際、Masumi Takeuchi & Kaori Karasawa, 「Implicit and Explicit Ageism among Middle-aged People in Japan」、The 14th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology, Ernest N. Morial Convention Center, New Orleans, Louisiana, 2013.1.18
- 国際、Takaaki Hashimoto & Kaori Karasawa, 「Role of Morality Perception in Moral Typecasting」、The 14th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology, Ernest N. Morial Convention Center, New Orleans, Louisiana, 2013.1.18
- 国際、Takehiko Ito & Kaori Karasawa, 「The Effect of Causal Inference of Individual Failure on Self-esteem in Intergroup Inequity Situation」、The 14th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology, Ernest N. Morial Convention Center, New Orleans, Louisiana, 2013.1.18
- 国内、唐沢かおり, 「社会の何を測るのか、何のために社会を測るのか」、KSP400 回記念シンポジウム, 2013.3.30
- 国際、Kaori Karasawa, Kazuhisa Todayama, 「Scientific and technical communication and the Fukushima Daiichi nuclear disaster: The social dimension」、6th International Conference on Intelligent Interactive Multimedia Systems and Services, Sesimbra, Portugal, 2013.6.28
- 国際、Kazuhisa Todayama, Kaori Karasawa, 「Scientific and technical communication since the Fukushima Daiichi nuclear disaster: How is scientific knowledge disseminated?」、6th International Conference on Intelligent Interactive Multimedia Systems and Services, Sesimbra, Portugal, 2013.6.28
- 国際、Ohtaka, M., & Karasawa, K, 「How the children perceive their mothers' attitudes toward their fathers?」、13th European Congress of Psychology, Stockholm, Sweden, 2013.7.12
- 国内、橋本剛明・唐沢かおり, 「集団謝罪にともなう寛容の規定因 —不祥事企業に対する影響力要因のさらなる検討—」、日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会, 北星学園大学, 2013.7.14
- 国内、白岩祐子・唐沢かおり, 「共感しているのになぜ支援しないのか? —「加害者を赦さない遺族」に対する赦しの効用的価値観の効果—」、日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会, 北星学園大学, 2013.7.14
- 国内、武井恵亮・唐沢かおり, 「内集団肯定化が内集団人間化に与える影響の検討」、日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会, 北星学園大学, 2013.7.14
- 国内、唐沢かおり, 「グループ・ダイナミクス: その成果とこれからの課題—社会的認知の観点から」、日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会, 北星学園大学, 2013.7.14
- 国内、鄭珪熙・唐沢かおり, 「The influence of recognizing empathic concern and schadenfreude on person perception」、日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会, 北星学園大学, 2013.7.15
- 国内、伊藤健彦・唐沢かおり, 「The influence of intergroup inequity on supportive attitudes towards inequity policies in job-hunting: Focusing on the inequity based on achieved status」、日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会, 北星学園大学, 2013.7.15
- 国内、櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり, 「競合目標の非意識的な活性化とその達成が焦点目標の遂行に与える影響」、日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会, 北星学園大学, 2013.7.15
- 国内、渡辺匠・大山拓・唐沢かおり, 「自由意志の信念がもたらす存在脅威管理機能 —「意志の力」は死の脅威を低減できるのか?—」、日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会, 北星学園大学, 2013.7.15
- 国際、Takaaki Hashimoto & Kaori Karasawa, 「People's Images toward Science and Technology: Review on Empirical Findings」、7th International Workshop on Natural Computing, 東京大学, 2013.7.23
- 国際、Watanabe, T., Sakurai, R., Watamura, E., & Karasawa, K, 「Benefits of believing in free will on maintaining mental health」、The 3rd Asia Pacific Rim Counseling and Psychotherapy Conference, Kuching, Malaysia, 2013.8
- 国際、Ryosuke Sakurai, Takumi Watanabe, & Kaori Karasawa, 「Effects of Unconsciously Activated Competing Goal and Its Attainment on Focal Goal Pursuit」、The 5th Asian Congress of Health Psychology, DCC, Daejeon, Korea, 2013.8.23
- 国際、Ryosuke Sakurai, Takumi Watanabe, & Kaori Karasawa, 「Does Unconsciously Activated Goal Conserve Mental Resources?」、2013 Korean Psychological Association Annual Conference, DCC, Daejeon, Korea, 2013.8.23

- 国内、伊藤健彦・唐沢かおり、「就職活動の大学間不公平が企業への原因推論に与える影響」、産業・組織心理学会第29回大会、京都橋大学、2013.9.8
- 国内、渡辺匠・櫻井良祐・唐沢かおり、「自由意志信念から援助行動・攻撃行動への影響過程：自己制御という観点から」、日本パーソナリティ心理学会第22回大会、江戸川大学、2013.10
- 国際、Kaori Karasawa、「How can social psychology approach to group-level phenomena?」、Taiwan-Japan workshop on computing aesthetics、National Taiwan Normal University、2013.10.7
- 国内、渡辺匠・櫻井良祐・唐沢かおり、「人々の自由意志信念とその社会的機能の再検証：自由意志とは何であり、何をもたらすのか?」、道徳心理学コロキウム：第3回ワークショップ『自由意志の認知』、東京大学、2013.10.26
- 国内、櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり、「競合目標の達成可能性が焦点目標の遂行に与える影響」、日本社会心理学会第54回大会、沖縄国際大学、2013.11.2
- 国内、白岩祐子・唐沢かおり、「医療機関による説明のあり方が患者の医療評価に及ぼす効果日本社会心理学会第54回大会」、日本社会心理学会第54回大会、沖縄国際大学、2013.11.3
- 国内、橋本剛明・二木望・唐沢かおり、「不公正への介入機会が被害者蔑視に及ぼす調整効果」、日本社会心理学会第54回大会、沖縄国際大学、2013.11.3
- 国内、綿村英一郎・渡辺匠・唐沢かおり、「人は不祥事の責任をどう考えるか？—責任の対象と種類による分析—」、日本社会心理学会第54回大会沖縄国際大学、沖縄国際大学、2013.11.3
- 国内、鄭珪熙・唐沢かおり、「主観的幸福感がシャーデンフロイデの減少に及ぼす影響」、日本社会心理学会第54回大会、沖縄国際大学、2013.11.3
- 国内、渡辺匠・岡田真波・酒井真帆・池谷光司・唐沢かおり、「自由意志信念に応じた帰属プロセスの変容」、日本社会心理学会第54回大会、沖縄国際大学、2013.11.3
- 国内、櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり、「目標の非意識的な活性化による実行機能の占有」、第11回日本ワーキングメモリ学会大会、2013.11.30
- 国際、Sakurai, R., Watanabe, T., & Karasawa, K.、「Revisiting the conservation of regulatory resources from motivational intensity theory」、Self-Regulation Pre-Conference at the 15th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology、The Austin Convention Center, Austin, Texas、2014.2.13
- 国際、Sakurai, R., Watanabe, T., & Karasawa, K.、「The effect of competing goal attainability on focal goal pursuit」、The 15th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology、The Austin Convention Center, Austin, Texas、2014.2.15
- 国際、Takaaki Hashimoto and Kaori Karasawa、「The Relationship between Just World Beliefs and Moral Decision Making」、Cross-Cultural Perspectives on Moral Psychology、Korea University, Seoul, South Korea、2014.3.21
- 国際、Kyu Hee Jung and Kaori Karasawa、「Subjective Happiness Decreases Schadenfreude Toward Both High and Average Achievers」、Cross-Cultural Perspectives on Moral Psychology、Korea University, Seoul, South Korea、2014.3.21
- 国際、Sakurai, R., Watanabe, T., & Karasawa, K.、「Unconscious conservation of regulatory resources」、The 4th Asian Conference on Psychology and the Behavioral Sciences、Rihga Royal Hotel & Osaka International Conference Center, Osaka, Japan、2014.3.27
- (4) 受賞
- 国内、唐沢かおり、日本グループ・ダイナミクス学会2013年度優秀論文賞、日本グループ・ダイナミクス学会、2013.7.14
- 国内、唐沢かおり、第15回日本社会心理学会奨励論文賞、日本社会心理学会、2013.11.2
- (5) 教科書
- 『高等学科新倫理最新版』、菅野覚明他、執筆、清水書院、2014
- (6) 共同研究(産学連携除く)
- 国際、参画、Rutgers、The State University of New Jersey、「Intellectual Humanity and Cultural Diversity in Philosophy」、2013～
- (7) 研究テーマ
- 文部科学省科学研究費補助金、唐沢かおり、研究代表者、「犯罪被害者の心の推論と支援的環境の構築」、2012～
- 文部科学省科学研究費補助金、唐沢かおり、研究代表者、「社会心理学とフォークサイコロジーのあるべき生産的な関係に関する理論的・実証的研究」、2012～

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学会

国内、日本グループ・ダイナミックス学会、会長、2013.4～

国内、応用哲学会、学術雑誌編集委員、2013.4～

国内、日本社会心理学会理事、2011.4～

准教授 **村本 由紀子** MURAMOTO, Yukiko

### 1. 略歴

1984年4月 東京大学文科Ⅲ類入学  
1988年3月 東京大学文学部社会心理学専修課程卒業  
1988年4月 株式会社 日本長期信用銀行 入行  
1992年4月 東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻修士課程入学  
1994年3月 同 修了 (修士(社会心理学))  
1994年4月 東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士課程進学  
1997年3月 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻博士課程単位取得退学  
1998年4月 京都大学総合人間学部基礎科学科 助手 (2000年3月迄)  
1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科 博士 (社会心理学)取得  
2000年4月 岡山大学文学部行動科学科 助教授  
2001年4月 岡山大学大学院文化科学研究科産業社会文化学専攻 助教授 (兼任)  
2004年4月 横浜国立大学経営学部 助教授  
2005年4月 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 助教授  
2007年4月 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 准教授  
2011年4月 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 教授  
2011年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

社会心理学

#### b 研究課題

- 1) 関係性の類型と拡張自己評価維持過程 (国際比較研究)
- 2) 伝統慣行の維持・変容過程 (社会生態学的アプローチによる事例研究)
- 3) 組織・集団規範の生成と再生産過程

#### c 主要業績

##### (1) 著書

辞書・辞典・事典、村本由紀子、『実験社会心理』(社会調査協会編『社会調査事典』)、丸善出版、2014.1

共著(分担執筆)、村本由紀子、『文化』(唐沢かおり編著『新社会心理学：心と社会をつなぐ知の統合』 pp.131-148)、2014.3

##### (2) 論文

Yukiko Muramoto, 「Achievement, attribution, and the role of the self and relationship.」、『U. Kim & Y.-S. Park (Eds.), Asia's Educational Miracle: Psychological, Social, and Cultural Perspectives. (Conference Proceedings)』、(in press)、2013

Yukiko Muramoto, 「Achievement attribution in individual and group contexts: The role of relationship as a system of self-esteem maintenance.」、『U. Kim, S.-C. Choi, & G.-H. Cho (Eds.), Post-modern psychology: Indigenous, social, and cultural perspectives. (Conference Proceedings)』、(in press)、2013

村本由紀子、「離島漁村『寝屋慣行』の維持と変容: 社会心理学からのアプローチ」、『文化交流研究』、第 26 巻 1 号、1-10 頁、2013.3

(3) 書評

釘原直樹、『グループ・ダイナミクス: 集団と群集の心理学』、有斐閣、『社会心理学研究』、第 27 巻第 3 号、194-195 頁、2012.3

(4) 学会発表

国内、池田真季・村本由紀子・正木郁太郎・品田瑞穂・二木望・岡田真波、「集団主義は異なる意見を排除するのか: 集団主義が寛容性に与える正の効果」、日本社会心理学会第 53 回大会、つくば国際会議場、2012.11

国内、正木郁太郎・山口勲・村本由紀子、「集団目的と対立する集団規範へのコントロール行動と、集団主義の関係の検討」、日本社会心理学会第 53 回大会、つくば国際会議場、2012.11

国内、村本由紀子、「リターン・ポテンシャルモデル再考」、日本社会心理学会第 53 回大会、つくば国際会議場、2012.11.17

国際、Yukiko Muramoto & Yumi Endo、「A socio ecological approach to a quasi-family relationship in a remote island in Japan」、10th Conference of Asian Association of Social Psychology, Yogyakarta, Indonesia, 2013.8

国際、Maki Ikeda, Yukiko Muramoto, & Yoshihisa Kashima、「Do We See the Same World?: Different Explanation for Valenced Behaviors by East-West Cultures」、10th Conference of Asian Association of Social Psychology, Yogyakarta, Indonesia, 2013.8

国内、正木郁太郎・村本由紀子、「集団規範の再生産プロセスに関する事例研究」、日本社会心理学会第 54 回大会、沖縄国際大学、2013.11

国内、池田真季・多湖淳・村本由紀子、「国連決議・多国籍軍が自衛隊の海外派遣支持に与える効果」、日本社会心理学会第 54 回大会、沖縄国際大学、2013.11

国内、館野洋輔・村本由紀子、「他者との親密度が透明性の錯覚に及ぼす影響」、日本社会心理学会第 54 回大会、沖縄国際大学、2013.11

国内、村本由紀子、「『規範』研究の方法論としてのマイクロ・エスノグラフィーの可能性」、日本社会心理学会第 54 回大会、沖縄国際大学、2013.11.2

(5) 会議主催(チェア他)

国内、「日本社会心理学会第 53 回大会・自主企画ワークショップ」、主催、規範の測定と可視化への再挑戦、つくば国際会議場、2012.11.17

国際、「10th Conference of Asian Association of Social Psychology」、チェア、Adolescents' Relationship, Yogyakarta, Indonesia, 2013.8.21~2013.8.24

国内、「日本社会心理学会第 52 回大会・自主企画ワークショップ」、主催、規範の測定と可視化への再挑戦 (2): 「個人の認知を超える」試み、2013.11.2

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)、村本由紀子、研究代表者、「関係性の類型と拡張自己評価維持過程」、2011~2014

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)、村本由紀子、分担研究者 (研究代表者は東大外)、「職業教育・訓練の日欧比較研究: エンployアビリティとキーコンピテンシー開発の分析」、2012~2014

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、セミナー、NITT データ経営研究所 応用脳科学アカデミー、「企業経営における「心と文化」: 社会心理学からのアプローチ」、2012.2

非常勤講師、九州大学、「社会心理学」、2012.4~2012.9

非常勤講師、放送大学神奈川学習センター、「こころと社会」、2012.10~2013.3

非常勤講師、筑波大学、「「心と文化」研究の成果と展望」、2013.9~

非常勤講師、放送大学神奈川学習センター、「木を見る西洋人 森を見る東洋人」、2013.10~2014.3

(2) 学会

国内、日本社会心理学会、常任理事、大会運営委員長、2013.4～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

独立行政法人、宇宙航空研究開発機構、行動科学研究分科会委員、2012.11～

## 27 文化資源学

### 《文化経営学専門分野》

教授 木下 直之 KINOSHITA, Naoyuki

#### 1. 略歴

1979年3月 東京芸術大学美術学部芸術学科卒業  
1981年3月 東京芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻修士課程中途退学  
1981年4月 兵庫県立近代美術館学芸員  
1995年4月 同美術館学芸課長に昇任  
1997年4月 東京大学総合研究博物館助教授  
2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授  
2001年4月 国立民族学博物館助教授併任（～2003年4月）  
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

#### 2. 主な研究活動

##### a 専門分野

文化資源学

##### b 研究課題

幕末・明治期の造形表現の形成と変容と展開を、従来の美術史学の枠組みを離れて追跡している。既存領域である美術に隣接する写真、芸能、祭礼、見世物、民衆娯楽の領域に目を向けるとともに、それらの表現活動と社会の関係の解明にも取り組んでいる。評価されないものの実態と、それを評価しない仕組みの双方をも明らかにしたい。後者は当時の文化政策の研究へと展開するはずだ。開設時より関わった文化資源学専攻における新たな研究領域の開拓と構築に対し、こうした歴史的視点の導入を積極的に進めてきた。

##### c 主要業績

###### (1) 著書

『股間若衆 男の裸は芸術か』、新潮社、2012  
『戦争という見世物—日清戦争祝捷大会潜入記』、ミネルヴァ書房、2013年  
『銅像時代—もうひとつの日本彫刻史』、岩波書店、2014年

#### 3. 主な社会活動

##### (1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

静岡県立美術館第三者評価委員、2006～  
横浜美術館、アドバイザー、2008～  
独立行政法人国立美術館、運営委員、2009.4～  
東京都写真美術館、第三者評価委員、2010～  
日本動物園水族館協会、広報戦略会議委員、2011～

教授 古井戸 秀夫 FURUIDO, Hideo

30 次世代人文学開発センター《萌芽部門》参照

教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya

11 中国語中国文学 参照

准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari

## 1. 略歴

- 1987年3月 早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業
- 1987年4月 早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻入学
- 1990年3月 早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻修了(政治学)
- 1990年4月 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻入学
- 1993年5月 早稲田大学人間科学部助手(1996年3月まで)
- 2006年3月 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻単位取得満期退学
- 2008年4月 昭和音楽大学音楽学部助手
- 2000年4月 静岡文化芸術大学文化政策学部講師
- 2001年1月 博士(人間科学)
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授(職名変更)

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

文化資源学(文化政策学)

### b 研究課題

文化を支える諸制度、それと反対のベクトルである文化の発展を阻害する制度について関心をもってきた。研究の中心を法制度においてきたが、最近では国や自治体の文化政策のドラスティックな動きに対して、文化にとってよりよい政策の企画、立案、執行のあり方について考えている。とくに行政改革が現実に行われ、市町村合併の推進及び2003年に地方自治法改定で施行された指定管理者制度が導入される状況の中で、公立文化施設(美術館、文化ホール等)の望ましい運営方法とそれを管理する文化政策のあり方を研究の対象としてきた。

他方、芸術を支える制度としての劇場についても関心を持っており、この数年はドイツの劇場のあり方をめぐる動向、それを取り巻く文化政策、環境について関心をもって研究している。とはいえ、そもそも「制度」そのものについて疑問をもっていることから、あるべき「制度」に固執しているわけではない。むしろ「制度」を超えた活動、とくにドイツの社会文化活動とそれを巡る政策に大いなる関心を持っている。

### c 主要業績

#### (1) 著書

編著、小林真理、『行政改革と文化創造のイニシアティブ—新しい共創の模索』、美学出版、2013.12

#### (2) 論文

小林真理、「若者と劇場—劇場法の構造と課題・誰が活かす法律か—」、『文化経済学』、第10巻第1号、2013.3

#### (3) 書評

吉澤弥生、『芸術は社会を変えるか—文化生産の社会学からの接近』、『アートマネジメント研究』、2013.1

#### (4) 研究報告書

小林真理、「行政構造改革が戦後日本の芸術文化政策の成果に与えた影響に関する研究」、2013.3

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

非常勤講師、お茶の水女子大学、「文化マネジメント論」、2012.4～

## 1. 略歴

- 1980.04 東京大学教養学部理科 I 類、入学
- 1982.04 同学部教養学科第一文化人類学学科、進学
- 1984.03 同学科、卒業
- 1984.04 東京大学大学院社会学研究科修士課程文化人類学専攻、入学
- 1986.03 同修士課程、修了
- 1986.04 同研究科文化人類学専攻博士課程、進学
- 1988.04 社会学研究科より総合文化研究科へ移管
- 1990.08 東京大学大学院総合文化研究科博士課程文化人類学専攻、中途退学
- 1995.11 東京大学大学院総合文化研究科、博士号（学術）取得
- 1994.04 - 1997.03 東京大学教養学部専任講師
- 1996.04 大学院総合文化研究科超域文化科学専攻専任講師に配置換
- 1997.04 - 2004.09 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻助教授
- 2004.10 - 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻助教授
- 2005.04 - 2009.03 国立民族学博物館文化動態研究部門客員研究員
- 2009.04 - 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授

## 2. 主な研究活動

多様な状況における文書・読み書き、その人間・社会との関係の研究

### a 専門分野                      b 研究課題

文化資源学（文書文化論）

主に発展途上国を念頭に置きつつ、広く文書・読み書きと人間・社会の関係について研究している。また、調査研究方法の検討、改善にも強い関心を持っている。様々なフィールド調査で得られるデータや知見を、言語能力、数的能力、道具使用等に関する認知科学や、文書をはじめとする認知的人工物（cognitive artifacts）の変化に関する歴史学的研究と有機的に接合することを目指して、隣接諸分野の研究者との共同研究にも積極的に取り組んでいる。

### c 主要業績

#### (1) 学会発表

国内、中村雄祐、「巨大な絵図の共同調査—学際研究に関する一考察」、文化資源学会第 22 回研究会、2012.10.13  
国内、中村雄祐、鈴木親彦、「文化資源学の射程—人文情報学のアプローチによる分析」、文化資源学会第 24 回研究会、2013.10.12

#### (2) 啓蒙

中村雄祐、「文化資源学 meets DH—ファースト・コンタクトの覚え書き」、『DHjp.』、No.2、60-63 頁、2014.2

#### (3) データベース

中村雄祐、「文化資源学修士論文分析用データベース」、2013.10～

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

セミナー、Lighthouse・東大生の学びとキャリア、ミニ講義「論文ってなんだろう—文化資源の読み書き・大学編」、2013.5

### (2) 学会

国内、文化資源学会、「文化資源学を支えるテクノロジー」分科会幹事、2013.4～

《 形態資料学専門分野 》

- 教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo  
30 次世代人文学開発センター 《 萌芽部門 》 参照
- 教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi  
07 美学芸術学 参照
- 教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji  
25 社会学 参照
- 教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya  
11 中国語中国文学 参照
- 教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki  
27 文化資源学 《 文化経営学専門分野 》 参照
- 准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari  
27 文化資源学 《 文化経営学専門分野 》 参照
- 准教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke  
27 文化資源学 《 文化経営学専門分野 》 参照

《 文字資料学文書学専門分野 》

- 教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo  
30 次世代人文学開発センター 《 萌芽部門 》 参照
- 教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo  
18 フランス語フランス文学 参照
- 教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya  
11 中国語中国文学 参照
- 教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki  
27 文化資源学 《 文化経営学専門分野 》 参照

准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari  
27 文化資源学《文化経営学専門分野》参照

准教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke  
27 文化資源学《文化経営学専門分野》参照

《文字資料学文献学専門分野》

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo  
30 次世代人文学開発センター《萌芽部門》参照

教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo  
18 フランス語フランス文学 参照

教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya  
11 中国語中国文学 参照

教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki  
27 文化資源学《文化経営学専門分野》参照

准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari  
27 文化資源学《文化経営学専門分野》参照

准教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke  
27 文化資源学《文化経営学専門分野》参照

## 28 韓国朝鮮文化

教授 川原 秀城 KAWAHARA, Hideki

13 中国思想文化学 参照

教授 早乙女 雅博 SAOTOME, Masahiro

### 1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部考古学専修課程卒業
- 1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(考古学)
- 1981年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学(考古学)
- 1981年4月 東京国立博物館学芸部東洋課東洋考古室研究員
- 1988年7月 東京国立博物館学芸部東洋課主任研究官
- 1990年4月 東京国立博物館学芸部北東アジア室長
- 1996年4月 東京大学文学部助教授(附属文化交流研究施設朝鮮文化部門)
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(附属文化交流研究施設朝鮮文化部門)
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(韓国朝鮮文化研究専攻)
- 2010年8月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(韓国朝鮮文化研究専攻)
- 現在に至る

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

韓国朝鮮を中心とする東アジアの考古学

#### b 研究課題

- (1) 朝鮮半島の古代国家の成立と発展過程を考古学資料から追求している。高句麗、新羅、百濟という三国史の枠を超えて、地域単位での発展過程を明らかにし、地域間の相互関係から国家の成立過程を追及する。
- (2) 高句麗壁画古墳を美術史や建築史とは異なる考古学の方法から分析して、壁画と石室の構成から編年を作り上げるとともに、当時の生活様相や社会を明らかにする。
- (3) 朝鮮考古学史では、戦前に朝鮮総督府を中心として行なわれた考古学発掘調査の成果を学術的な面から探っている。植民地政策としての古蹟調査事業のなかで、いかに学術的成果をあげてきたか、また日本における考古学の発展とどのようにかかわってきたかを明らかにする。

#### c 主要業績

##### (1) 論文

- 早乙女雅博、「考古学からみた新羅の国家形成」、『メトロポリタン史学』、第8号、59-77頁、2012.12
- 早乙女雅博、「小拓紙から見た広開土王碑拓本の分類と年代」、『広開土王碑拓本の新研究』(古瀬奈津子編)、同成社、47-80頁、2013.7
- 早乙女雅博〔橋本繁共著〕、「お茶の水女子大学本の調査と小拓紙貼り合わせからみた年代」、『広開土王碑拓本の新研究』(古瀬奈津子編)、同成社、141-152頁、2013.7
- 早乙女雅博、「高句麗東山洞壁画古墳出土青磁獅子形燭台について」、『中華文明の考古学』(飯島武次編)、同成社、319-331頁、2014.3

##### (2) 監修

早乙女雅博、『高句麗壁画古墳報道写真展』、共同通信社、2012.10

##### (3) コラム

早乙女雅博、「高松塚古墳壁画の特別公開」、『史学雑誌』第122編第11号、28-30頁、2012.11

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義

非常勤講師、青山学院大学、「東洋考古学研究」、2012.4～2014.3

非常勤講師、学習院大学文学部、「考古学概説」、2013.4～2014.3

#### (2) 学界

日本考古学会幹事

高句麗渤海学会諮問委員（国外）

教授 **福井 玲**

FUKUI, Rei

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/>

### 1. 略歴

- 1980年3月 東京大学文学部言語学科卒業（文学士）  
1982年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（文学修士）  
1984年9月～1986年10月 韓国ソウル大学校人文大学国語国文学科に留学  
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学  
1987年4月～1989年3月 東京大学文学部助手（言語学研究室）  
1989年4月～1992年9月 明海大学外国語学部講師（日本語学科）  
1992年10月～1997年3月 東京大学教養学部助教授  
1994年10月 東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授（併任）  
1997年4月 東京大学文学部附属文化交流研究施設に配置換  
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設に配置換  
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科に配置換  
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授  
2013年3月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

#### b 研究課題

専攻分野は韓国語学であり、その中でも中世語の音韻体系に関する研究や古代語、近代語についての研究を行ってきた。また、それらを歴史的につなぐ通時的な研究も行なっている。現代語についても主として音声や方言に関する研究を行ってきた。さらに、中世語から近代語にかけての韓国語学の資料研究も行っている。その他に、音声学・音韻論を中心とする言語学一般、方言研究を中心とする日本語学にも関心をもっている。2013年1月にはこれまでに行ってきた韓国語の音韻史にかかわる研究をまとめて単行本として出版した。

これ以外に、2013年から現在に至るまで継続して行っている研究課題として、韓国語の語彙史の研究があげられる。過去に行なわれた方言調査（小倉進平、崔鶴根、韓国精神文化研究院）の資料に基づいて、項目を選定して言語地図を作製し、そこに見られる語彙の歴史を再構成することを目指している。その過程で、言語地図を作製する既存のプログラム(Seal)に基づいて、朝鮮半島の言語地図を描くことができるシステムを構築し、さらに、ソースコードの提供を受けて、このプログラムを改良することを目指している。

#### c 主要業績

##### (1) 著書

共著、『海外韓国学古文獻資料の探索と検討』ソウル大学校奎章閣韓国学研究院編、三景文化社（ソウル）、2012.8。  
（福井担当部分：95-210頁）

単著、福井玲、『韓国語音韻史の探究』、三省堂、2013.1

##### (2) 論文

福井玲、「Tongguk chongun and the phonological system of Middle Korean」、『Scripta』、4、13-26頁、2012.10

福井玲、「捷解新語初刊本のテキスト分析」、『韓国朝鮮文化研究』、13、1-41頁、2014.3

### (3) 学会発表

- 国際、福井玲、「『捷解新語』の語頭の濁音表記とアクセントの関係」、国立国語研究所プロジェクト研究会、国立国語研究所、2012.6.23
- 国際、福井玲、「中世韓国語音韻論における残された課題」、国立国語研究所プロジェクト研究発表会 日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究 音韻再建班、国立国語研究所、2012.12.8
- 国内、福井玲、「中世韓国語アクセント体系の再考」、第8回音韻論フェスタ、2013.2.17
- 国際、李賢熙、福井玲、「『海槎日記』の中の候文とその翻訳文に関する研究」、第5回訳学書学会、京都大学、2013.8.3
- 国内、福井玲、「koguma と kamja の語彙史」、第239回朝鮮語研究会、東京外国語大学、2014.2.15

## 3. 主な社会活動

### (1) 学会

- 国内、日本音声学会、会計監査委員、2012.4～2014.3
- 国内、朝鮮語研究会 幹事（1999年～現在）

### (2) 共同研究員

- 国内、国立国語研究所共同研究員

准教授

六反田 豊

ROKUTANDA, Yutaka

## 1. 略歴

- 1985年 3月 九州大学文学部史学科朝鮮史学専攻卒業
- 1987年 3月 九州大学大学院文学研究科（史学専攻）修士課程修了
- 1989年 3月 九州大学大学院文学研究科（史学専攻）博士後期課程中途退学
- 1989年 4月 九州大学文学部助手（～1992年 3月）
- 1992年 4月 久留米大学文学部専任講師（～1995年 3月）
- 1995年 4月 久留米大学文学部助教授（～1996年 3月）
- 1996年 4月 九州大学文学部助教授（～2000年 3月）
- 2000年 4月 九州大学大学院人文科学研究院助教授（～2002年 3月）
- 2002年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（～2007年 3月）
- 2007年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（現在に至る）

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

朝鮮中世・近世史

### b 研究課題

朝鮮王朝（李朝、1392-1910）時代の水運史や財政史・経済史などを中心に研究している。現在の主たる研究課題は、(1) 朝鮮前期漕運制研究、(2) 朝鮮中世・近世海事史研究、(3) 朝鮮中世・近世「水環境」研究、(4) 朝鮮後期財政史研究、(5) 朝鮮時代古文書研究などである。(1)の漕運制とは朝鮮時代における官営の税穀船運機構であり、朝鮮前期におけるその整備・変遷過程や運営実態等を明らかにする作業に取り組んでいる。(2)は(1)から派生したもので、朝鮮の前近代史を「海」とのかかわりで再構成するという問題意識から、済州島民の海難関係記録の分析を通じて彼らの海上活動の実態や異国への漂流・漂着をめぐる諸問題、朝鮮時代の海防体制や「水賊」などについて研究している。(3)は(2)をさらに発展させ、広く人と「水」とのかかわりを明らかにしようとするもので、当面は漢江という内陸河川を主たる対象として、水運だけでなく、渡船や漁撈、さらには治水・水利といった点も含めて「水環境」史の構築をめざしている。(4)は、朝鮮後期に施行された新税制である大同法について、その運用実態を地方財政との関連に注目しながら研究している。このほか、高麗から朝鮮への王朝交代期における社会的・経済的諸変動の歴史的意義をいかに理解するかという問題にも関心を抱いている。(5)は日本各地の諸機関に所蔵される朝鮮古文書の調査である。2012年度から2013年度にかけては、これらのうちとくに(1)(3)と(5)の課題を中心に研究を進めた。

### c 主要業績

#### (1) 著書

- (共著) 伊藤幸司編『寺内正毅ゆかりの図書館 桜圃寺内文庫の研究』、勉誠出版、2013.3  
(共著) 六反田豊・森平雅彦・長森美信・石川亮太『漢江流域における「水環境」史関連史跡等踏査資料集(稿)』、  
科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書、2013.3  
(共著) 森平雅彦編『中近世の朝鮮半島と海域交流』、勉誠出版、2013.5  
(単著) 六反田豊、『朝鮮王朝の国家と財政』、山川出版社、2013.7  
(共著) 濱田耕策編『古代東アジアの知識人 崔致遠の人と作品』、九州大学出版会、2013.12  
(共著) 高倉洋彰編『東アジア古文化論攷1』、中国書店、2014.3

#### (2) 論文

- 六反田豊「朝鮮前近代史研究と「海」—韓国学界の動向と「海洋史」を中心として」、『朝鮮史研究会論文集』51、53-78頁、2013.10  
ROKUTANDA YUTAKA 「The Historical Significance of the Uniform Land Tax Law and the Realities of Its Implementation」、『ACTA ASIATICA』106、pp.21-44、2014.2

#### (3) 書評

- 李廷喆『大同法、朝鮮最高の改革：民は食を以て天となす』歴史批評社(ソウル)、『韓国朝鮮の文化と社会』11、149-163頁、2012.10

#### (4) 学会発表

- (国内) 六反田豊「朝鮮前近代史研究と「海」」朝鮮史研究会第49回大会、早稲田大学戸山キャンパス、2012.10.20  
(国内) 六反田豊「桜圃寺内文庫所在朝鮮古文書の概要と特徴」平成24年度九州史学会大会朝鮮学部会シンポジウム「日本伝存の朝鮮文化財をめぐる研究の現在位置」、九州大学箱崎文系キャンパス、2012.12.9  
(国内) 六反田豊「朝鮮時代漢江の国家的水運機構と水運拠点」ミニ・シンポジウム「漢江を考える—朝鮮半島における「水環境」史構築をめざして」、東京大学本郷キャンパス、2013.2.2

#### (5) 監修

- 六反田豊『朝鮮王朝がわかる!』、成美堂出版、2013.5

### 3. 主な社会活動

#### (1) 他機関での講義等

- (非常勤講師) 国際基督教大学教養学部、「前近代朝鮮史」、2013.4~2013.6  
(非常勤講師) 朝日カルチャーセンター・横浜教室、「朝鮮王朝の歴史」、2013.7~2014.1

#### (2) 学会

- (国際) 韓国中世史学会、地域理事、2012.1~  
(国内) 朝鮮学会、常任幹事、編輯委員、2012.4~  
(国内) 韓国・朝鮮文化研究会、副会長、運営委員、2012.10~  
(国内) 朝鮮史研究会、編集委員長、幹事、2012.10~

#### (3) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

- (教育機関) 釜山大学校民族文化研究所、「韓国民族文化」編集委員、2012.3~  
(その他) 財団法人東洋文庫、研究員(客員)、2012.4~2014.3  
(その他) NHK教育テレビ「高校講座世界史」、講師、2012.4~2014.3  
(教育機関) ソウル大学校奎章閣韓国学研究院、訪問研究員、2012.7~2012.9

**1. 略歴**

- 1986年3月 東京大学教養学部教養学科第一文化人類学分科卒業  
 1986年4月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専修課程修士課程入学  
 1988年3月 同上 大学院社会学研究科修士課程修了  
 1988年4月 同上 大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程進学  
 1988年8月 文部省アジア諸国等派遣留学生として韓国ソウル大学校に留学（～1991年5月）  
 1993年3月 東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学  
 1993年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～1994年3月）  
 1994年4月 東京大学教養学部助手（～1996年3月）  
 1996年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（～2000年3月）  
 1999年8月 韓国ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所常勤研究員（～2000年8月）  
 2000年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（～2002年3月）  
 2000年9月 英国オックスフォード大学訪問研究者（～2001年3月）  
 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（現在に至る）

**2. 主な研究活動****a 専門分野**

社会・文化人類学

**b 研究課題**

韓国朝鮮社会を主たる対象として、社会・文化人類学的な観点から調査研究を進めている。博士課程在籍時より20余年間、韓国全羅北道南原地域でフィールドワークを続けており、他の地域でも短期の調査を重ねている。近年の研究課題は、(1)1990年代後半以降の韓国社会における都市居住者の農村地域への移住（「帰農」・「帰村」）と地域社会の変化、(2)産業化過程での韓国農村社会の変化と持続性についての対照民族誌的再分析、(3)朝鮮半島中・南部農村社会を対象とした近現代民族誌資料の再分析、(4)コミュニティ概念の再検討と近現代韓国社会への適用、等である。

**c 主要業績****(1) 著書**

共著、Choi, Hyup (ed.), HONDA, Hiroshi 他4名, *Representing the Cultural 'Other': Japanese Anthropological Works on Korea*, Chonnam University Press, 2013

**(2) 論文**

本田洋、「韓国の帰農：智異山麓山内地域の事例から」、『韓国朝鮮文化研究』、11号、21-55頁、2012.3

本田洋、「共同体はいかにたちあがるのか：韓国の代案的共同体運動と帰農者」、『韓国朝鮮文化研究』、12号、31-60頁、2013.3

本田洋、「彼ら彼女らの資本主義——「富と威信」再考」、『韓国朝鮮の文化と社会』、12、214-224頁、2013.10

혼다 히로시(本田 洋)、「공동체를 꿈꾸며: 한국의 대안공동체 운동과 커뮤니티」、2013년 한국문화인류학회 가을학술대회『복지, 호혜성 그리고 공동체』、3-14頁、2013.11

本田洋、「変化に開かれた持続性——韓国農村住民の産業化経験と家族の再生産」、『韓国朝鮮文化研究』、13、43-78頁、2014.3

**(3) 書評**

伊藤亜人、『珍島：韓国農村社会の民族誌』、弘文堂、本田洋、『図書新聞』、3144、2014.2

**(4) 解説**

本田洋、「怪力マンシンと山口昌男：黄海道系の巫俗儀礼（韓国）」、『FIELDPLUS』、11、26-27頁、2014.1

**(5) 学会発表**

国際、本田洋、「向都離村と帰農（原題は韓国語）」、2012年韓国文化人類学会春季研究大会、江原大学校（韓国春川市）、2012.5.18

国内、本田洋、「帰農者の生き方と代案的共同性：韓国智異山麓山内地域への初期移住者を中心に」、日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学東広島キャンパス、2012.6.23

国際、혼다 히로시(本田洋)、「공동체를 꿈꾸며: 한국의 대안공동체 운동과 커뮤니티」、2013 년 한국문화인류학회 가을학술대회、韓国・徳成女子大学校、2013.11.22

(6) 会議主催(チェア他)

国際、2012年韓国文化人類学会春季定期学術大会、チェア、分科セッション2:「隣接性を解くー日本における韓国民族誌の実践」、2012.5.18

(7) 総説・総合報告

本田洋、「田舎暮らしも楽じゃない」、『韓国朝鮮の文化と社会』、11、174-180頁、2012.10

本田洋、「(宝物 その12) コミュニティを裏読みする: 韓国の民族誌, 2編」、東京大学文学部・人文社会系研究科『ひらけ!!ごま!今月の宝物』、2012.12

(8) 教科書

『社会学概論 2012』、松本・武川・佐藤・白波瀬・中村・本田・赤川・出口・佑成、執筆、東京大学文学部社会学専修課程、2012

『社会学概論 2013』、祐成・出口・赤川・本田・小林・中村・白波瀬・佐藤・武川・松本、執筆、東京大学文学部社会学研究室、2013

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、延世大学校社会科学大学文化人類学科、「山内地域の帰農者と共同体」、2013.9

(2) 学会

国内、日本文化人類学会、広報委員、2012.4～

国内、韓国・朝鮮文化研究会、運営委員・庶務責任者、2012.4～

## 29 次世代人文学開発センター

### 《 先端構想部門 》

教授 **小佐野 重利** OSANO, Shigetoshi

#### 1. 略歴

- 1978年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業（文学士）
- 1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学
- 1980年9月 パドヴァ大学美術史学科専門課程(Scuola di Perfezionamento)  
(イタリア政府給費留学生) ～1982年10月
- 1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（美術史学修士）
- 1983年4月 東京大学大学院博士課程 ～1985年4月15日
- 1985年4月 東京大学文学部助手（美術史学科）～1987年3月
- 1987年4月 多摩美術大学美術学部講師（西洋美術史）～1989年3月
- 1989年4月 東京工業大学工学部助教授（一般教育等芸術）～1993年3月
- 1993年4月 東京大学文学部助教授（美術史学科）～1994年6月
- 1994年6月 東京大学文学部教授（美術史学科）～1995年3月
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授に配置換え（文学部教授兼任）  
(1995年9月～12月 ジョン・ポール・ゲッティ財団ゲッティ美術史人文学研究所招聘研究者)
- 2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部次世代人文学開発センター（先端構想部門）  
教授を兼任
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科副研究科長（兼務）～2009年3月
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部次世代人文学開発センター（先端構想部門）  
教授に配置換え
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科研究科長・文学部長（兼務）～2015年3月

#### 2. 主な研究活動

##### a 専門分野

西洋近世美術史 イタリア中世・ルネサンス美術 アルプス南北の美術交流 比較美術史

##### b 研究課題

- ①イタリア中世末、ルネサンス期の美術を特に絵画史の観点から、古代美術および同時代のアルプス以北の美術との影響関係をも検討しながら幅広くかつ詳細に研究すること。
- ②西洋美術作品における身振り言語の機能に関して、隣接研究分野（文化史、民俗学、文化人類学、考古学、社会学、記号学）の先行研究成果も踏まえ、再検討を加え、新しい様式学および図像学的研究のモデルを模索研究すること。
- ③美術の展開に果たした芸術家の旅行の意義に関する包括的研究。
- ④ヴェローナの画家一門バディエーレ家（14-16世紀）の包括的な作品現地調査・資料収集研究の継続。
- ⑤1880年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討 ——写真家アドルフォ・ファルサーリとブルボン家エンリコ・パルディ伯爵の随臣アレッサンドロ・ツイレーリ伯爵の研究（研究代表者：平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）。
- ⑥国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化史的研究（研究代表者：平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）。
- ⑦西欧17世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響（研究代表者：平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究課題）。

## c 主要業績

### (1) 論文

Shigetoshi Osano, 「Art History in Japan and Its Future Development」, 『Diogenes』, n. 229&230, vol. 58(1-2), pp. 119-135, 2012.7

小佐野重利 Shigetoshi Osano, 「横浜写真研究におけるアドルフォ・ファルサーリ—最近の研究によって明らかになった彼の写真および関連文字資料を踏まえて Adolfo Farsari nella ricerca sulla Yokohama Shashin: in base a sue fotografie e alcuni documenti rinvenuti in recenti studi」, 『アドルフォ・ファルサーリ写真展 開港地横浜のイタリア人写真師 Adolfo Farsari - Il fotografo italiano che ha ritratto il Giappone di fine '800』, Istituto Italiano di Cultura, 2013』, pp. 10-45, 2013.2

小佐野重利, 「画家レオナルド・ダ・ヴィンチ—稀代の素描家にして思索家—」, 展覧会カタログ『Leonardo e la sua cerchia レオナルド・ダ・ヴィンチ展—天才の肖像』, TBSテレビ, pp.10-19; イタリア語翻訳 pp.310-320, 2013.4

小佐野重利, 「トスカナの近代絵画—伝統と革新のはざままで—」, カタログ『トスカナと近代絵画』, pp. 21-26, 2013.9

小佐野重利, 「トスカナ大公国メディチ家のフェルディナンド大公子の絵画収集における複製絵画—補遺—」, 『文化交流研究』, vol. no. 27, pp. 113-122, 2014.3

小佐野重利, 「17, 18 世紀のトスカナ大公国の絵画収集における複製絵画—メディチ家のフェルディナンド大公子の収集趣味を中心に—」, 『西欧 17 世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響: 平成 23-25 (2011-2013) 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 成果報告書 (課題番号 23320029)』, pp. 12-24, 2014.3

### (2) 学会発表

国際, 小佐野重利 Osano Shigetoshi, 「絵画と時間、というよりむしろ絵画の中の時間—15, 16 世における歴史認識をめぐって—La peinture et le temps, ou plutôt le temps dans l'œuvre picturale: conscience historique aux XVme et XVIme siècles」, 時の作用と美学 Actions et esthétique du temps, 国立西洋美術館, 2012.4.14

国際, Shigetoshi Osano, 「Introduction to the CIHA colloquium」, the 2013 CIHA Colloquium "Between East and West: Reproductions in Art", the Otsuka Museum of Art in Naruto, Japan, 2013.1.15

### (3) 研究報告書

小佐野重利 (編), 「西欧 17 世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響」, 平成 23-25 (2011-2013) 年度開学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 成果報告書 (課題番号 23320029) [研究代表者 小佐野重利], pp. 4-6 (研究報告概要), 8-11 (序文), 12-24 (小佐野論文), 2014.3

### (4) 監修

小佐野重利・木下直之, 『アドルフォ・ファルサーリ写真展 開港地横浜のイタリア人写真師 Adolfo Farsari - Il fotografo italiano che ha ritratto il Giappone di fine '800』, イタリア文化会館 Istituto Italiano di Cultura, 2013.2

小佐野重利, 『ミラノ アンブロジーアーナ図書館・絵画館所蔵 レオナルド・ダ・ヴィンチ展—天才の肖像』, TBSテレビ, 2013.4

アンナマリア・ジュスティ/シモネッタ・コンデミ/小佐野重利, 『フィレンツェ ピッティ宮近代美術館コレクション トスカナと近代絵画』, アート プランニング レイ, 2013.9

### (5) 会議主催(チェア他)

国際, International Conference "Sen: On Lines and Non-Lines", 東京大学文学部法文 2 号館一大教室, 2013.9.19 ~2013.9.21

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

特別講演, 国立西洋美術館, 「絵画と時間、というよりむしろ絵画の中の時間—15, 16 世における歴史認識をめぐって—La peinture et le temps, ou plutôt le temps dans la peinture: À propos de la connaissance historique au XVme et XVIme siècles」, 2012.4

特別講演, ブリヂストン美術館土曜講座, 「ミラノのスフォルツァ宮廷のレオナルド・ダ・ヴィンチ—アンブロジーアーナのコレクションから—」, 2012.9

特別講演, イタリア文化会館, 「ファルサーリ写真と 1880 年代の外国人横浜居住者もしくは旅行者」, 2013.2

特別講演, 東京都美術館, 「画家レオナルド・ダ・ヴィンチ—稀代の素描家にして思索家—」, 2013.5

特別講演、イタリア文化会館・損保ジャパン東郷青児美術館、「イタリアの近代絵画はもう一つの「ルネサンス」と見なせるか? E' possibile considerare la pittura moderna in Italia un altro Rinascimento?」、2013.9  
特別講演、(公財)鹿島美術財団 東京美術講演会:「ルネサンス・天才たちの競演—レオナルド、ラファエロ、ミケランジェロー』、「レオナルド—稀代の素描家にして思索家—」、2013.10  
特別講演、群馬県立近代美術館、記念講演会「トスカーナ絵画にみる伝統と革新」、2014.2

(2) 学会

国際、国際美術史学会C I H A、Bureau メンバー (副会長)、2012.1~2014.3

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

花王芸術・科学財団、選考委員、2012.4~2014.3

鹿島美術財団、選考委員、2012.4~2014.3

大塚美術財団、評議員、2012.4~2013.12

大塚美術財団、理事、2013.12~2014.3

Accademia Ambrosiana, Academicus (Academy member) in classe di studi sull'Estremo Oriente、2012.4~2014.3

損保ジャパン美術財団、評議員、2013.4~2014.3

教授 **小島 毅** KOJIMA, Tsuyoshi

13 中国思想文化学 参照

特任教授 **佐藤 慎一** SATO, Shin'ichi

1. 略歴

1969年6月 東京大学法学部第3類卒業 (法学士)  
1969年7月 東京大学法学部助手 (国際政治学講座)  
1972年7月 東北大学法学部助教授 (比較政治学講座)  
1979年7月 カリフォルニア大学バークレー校客員研究員 (~1981年8月)  
1987年4月 東京大学文学部助教授 (中国哲学第1講座)  
1993年4月 東京大学文学部教授 (中国哲学第1講座)  
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (アジア文化研究専攻) (~2009年3月)  
1997年4月 東京大学評議員 (~2000年3月)  
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 (~2003年3月)  
2006年4月 東京大学理事・副学長 (~2007年3月)  
2009年3月 東京大学を定年退職  
2009年4月 東京大学理事・副学長、人文社会系研究科特任教授 (~2014年3月)

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想史 (特に近代思想)

b 研究課題

民国期の歴史意識の研究

c 主要業績

(1) 論文

「1つの帝国から3つの帝国へ—19世紀東アジア国際社会の秩序変動と中国」、吉田忠編『19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究』(国際高等研究所)、2010年6月

### 3. 主な社会活動

#### (1) 行政

文部科学省 研究機関における公的研究費の管理・監査に関する検討会、立案、座長代理、2008.4～2013.3

#### (2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「人間文化研究機構「地域研究推進委員会」、委員、2008.4～2013.3

## 《 萌芽部門 》

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo

### 1. 略歴

1974年 3月 早稲田大学第一文学部演劇専攻学士  
1976年 3月 早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻修士課程修了  
1982年 3月 早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻博士課程退学  
1981年 4月 早稲田大学文学部助手  
1984年 4月 早稲田大学文学部専任講師  
1987年 4月 早稲田大学文学部助教授  
1992年 4月 早稲田大学文学部教授  
2006年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

演劇学・舞踊学

#### b 研究課題

#### c 主要業績

##### (1) 啓蒙

古井戸秀夫、渥美清太郎作『菅原草紙』の補綴（国立劇場第135回舞踊公演）2012.5  
古井戸秀夫、『三社祭』と『志賀山三番叟』、『平成中村座「五月大歌舞伎」筋書』、2012.5  
古井戸秀夫、「六代目菊五郎と松羽目物の舞踊」、『大阪松竹座「団菊祭五月大歌舞伎」筋書』、2012.5  
古井戸秀夫、「松風物の系譜2」、『NBF』会誌42、2012.7  
古井戸秀夫、「甦った『桜姫』と『伊達の十役』」、『新橋演舞場「八月花形歌舞伎」筋書』、2012.8  
古井戸秀夫、「黙水と円朝」、『新橋演舞場「吉例顔見世大歌舞伎」筋書』、2012.11  
古井戸秀夫、「天竺徳兵衛と小幡小平次」、『明治座「十一月花形歌舞伎」筋書』、2012.11  
古井戸秀夫、『舞踊曲三題の面白さ』、『新橋演舞場「寿初春大歌舞伎」筋書』、2013.1  
古井戸秀夫、「松風物の系譜3」、『NBF』43、2013.1  
古井戸秀夫、「黙阿弥の初春狂言」（国立劇場平成25年初春歌舞伎公演解説書）2013.1  
古井戸秀夫、「扇と長刀—日本舞踊の面白さ」（日本舞踊協会主催、日本舞踊特別公演、解説書）2013.3  
古井戸秀夫、「作り阿呆の世界—『一条大蔵譚』」、『新橋演舞場「三月花形歌舞伎」筋書』、2013.3  
古井戸秀夫、「鶴の寿歌—『鶴寿千歳』」（歌舞伎座新開場柿落四月公演筋書）2013.4  
古井戸秀夫、「喜撰法師と祇園梶子」、『歌舞伎座新開場「柿落六月大歌舞伎」筋書』、2013.6  
古井戸秀夫、「松風物の系譜4」、『NBF』44、2013.7  
古井戸秀夫、「『幽霊』の詫ひ状—黙阿弥と二人の南北」、『歌舞伎座新開場「柿落七月花形歌舞伎」筋書』、2013.7  
古井戸秀夫、「日本舞踊の歴史を振り返る」（『NBF』42—45）2012.5、2013.1、2013.5、2014.1  
古井戸秀夫、「河竹登志夫先生と歌舞伎」（『比較文学』56）2014.3

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学会

国内、舞踊学会、常務理事、2012.4-2014.3

#### (2) 行政

文部科学省、独立行政法人日本芸術文化振興財団外部評価委員 2012.4-2014.3

#### (3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本舞踊花柳流、顧問、2012.4-2014.3

公益財団法人日本舞踊協会、理事副会長、2012.4-2014.3

財団法人日本舞踊振興財団、評議員、2012.4-2014.3

公益財団法人新日鉄文化財団、理事、2012.4-2014.3

財団法人ポーラ伝統文化財団、理事、2012.4-2014.3

教授 **松村 一登** MATSUMURA, Kazuto

<http://www.kmatsum.info/introd/index.html>

### 1. 略歴

1995年4月 東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授

1996年11月 東京大学文学部附属文化交流研究施設教授

1997年8月 同 大学院人文社会系研究科附属文化交流施設教授

2004年4月 同 大学院人文社会系研究科言語動態学講座教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野      b 研究課題

言語学、ウラル諸語、ロシアの少数言語のテキストの電子化、コーパスを用いた文法研究

#### c 主要業績

##### (1) 研究報告書

「電子化された言語資料と個別言語研究」、2009.3

##### (2) 学会発表

「エストニア語の動詞 joudma の多義性について」、日本ウラル学会35回研究大会、2008.7.5

「エストニア語の動詞 pruukima 「必要だ；用いる」の多義性 —コーパスと辞書の記述に基づく考察—」、日本言語学会137回大会、2008.11.29

「エストニア語の他動詞文における「接格+動詞 mast 形」構文」、日本ウラル学会36回研究大会、2009.7.11

「コーパスから見える統語的变化—エストニア語の不定詞構文—」、日本言語学会139回大会、2009.11.28

##### (3) 受賞

「Maarjamaa Risti IV klassi teenetemark」、The 4th class Order of the Cross of Terra Mariana、エストニア共和国政府、2009.2.23

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学会

日本言語学会、会計監査委員、2007～

Suomalais-Ugrilainen Seura [フィン・ウゴル学会]、一般会員、2007～

Suomalaisen Kirjallisuuden Seura [フィンランド文学協会]、一般会員、2007～

Societas Linguisticae Europae、一般会員、2007～

CONGRESSUS XI INTERNATIONALIS FENNO-UGRISTARUM]、国際委員、2008.1～

日本ウラル学会、理事、2008.1-2008.12

日本言語学会、評議員、2009.4～

- 教授 **下田 正弘** SHIMODA, Masahiro  
15 インド哲学仏教学 参照
- 教授 **水島 司** MIZUSHIMA, Tsukasa  
12 東洋史学 参照
- 教授 **塚本 昌則** TSUKAMOTO, Masanori  
18 フランス語フランス文学 参照
- 教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki  
9b 日本語日本文学（国文学） 参照
- 教授 **ミュラー アルバート・チャールズ** MULLER, Albert Charles  
29 次世代人文学開発センター《創成部門》 参照
- 准教授 **大稔 哲也** OTOSHI, Tetsuya  
12 東洋史学 参照
- 准教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke  
27 文化資源学《文化経営学専門分野》参照
- 准教授 **本田 洋** HONDA, Hiroshi  
28 韓国朝鮮文化 参照

## 《 創成部門 》

教授 島蘭 進 SHIMAZONO, Susumu

06 宗教学宗教史学 参照

教授 一ノ瀬 正樹 ICHINOSE, Masaki

04 哲学 参照

教授 ミュラー アルバート・チャールズ MULLER, Albert Charles

### 1. 略歴

1981年9月 ニューヨーク州立大学（ストーニブルック校）宗教学部専攻課程入学  
1985年5月 同 上 卒業  
1984年9月 関西外国語大学入学  
1985年5月 同 上 修了  
1986年9月 バージニア大学大学院博士課程入学（アジア宗教学専攻）  
1987年5月 同 上 ニューヨーク州立大学大学院転学のため退学  
1987年9月 ニューヨーク州立大学大学院（ストーニブルック校）比較文学科博士課程入学  
1993年8月 同 上 修了（文学博士）  
1994年4月 東洋学園大学助教授（～1997年3月）  
1997年4月 同 上 教授（～2008年8月）  
2005年4月 東京大学教養学部・英語科・非常勤講師（～2007年3月）  
2008年10月 東京大学人文社会系研究科・特任教授（～2013年9月）  
2013年11月 東京大学人文社会系研究科・教授（～現在）

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

東アジア仏教 韓国朝鮮仏教・儒教 唯識仏教 禅仏教 デジタル・ヒューマニティーズ

#### b 研究課題

- ①韓国新羅時代の仏教、特に影響力を持った学僧：元曉(617-686)、太賢(8c)などの思想と経典注釈。
- ②韓国朝鮮前期の禅仏教、特に禅僧：己和(1376-1433)の思想、活動、著作。
- ③中国唐・宋・明時代と韓国高麗・朝鮮時代における仏教・儒教・道教（いわゆる「三教」）の関係。
- ④東アジアの仏教・儒教・道教における「体用」(essence-function)の哲学的パラダイムの意味と役割。
- ⑤西洋的認識論、行動心理学、および仏教の見解に関する faith (信仰, belief (信念), viewpoint (見方), opinion (意見)概念の多文化的比較。
- ⑥仏教専門語の漢・英インターネット辞典の編集。(www.buddhism-dict.net/ddb)
- ⑦儒教・道教・東アジア史の専門語の漢・英インターネット辞典の編集。(www.buddhism-dict.net/dealt)
- ⑧東アジア思想・歴史・言語に関する研究、電子化テキスト、論文、著書、翻訳、索引などのリソースウェブ・サイトの編集、管理。(www.acmuller.net)

#### c 主要業績

##### (1) 著書

Muller, A. Charles. *The Collected Works of Korean Buddhism: Volume XI: 梵網經古迹記. Exposition of the Sutra of Brahmā's Net*. Seoul: Compilation Committee of Korean Buddhist Thought, Jogye Order of Korean Buddhism, 2012. 449p. (単)

<[http://www.acmuller.net/kor-bud/01\\_wonhyo.pdf](http://www.acmuller.net/kor-bud/01_wonhyo.pdf)>

Muller, A. Charles. *The Collected Works of Korean Buddhism: Volume I: 元曉 Wonhyo: Selected Works*. Seoul: Compilation Committee of Korean Buddhist Thought, Jogye Order of Korean Buddhism, 2012. 321p.

<[http://www.acmuller.net/kor-bud/06\\_doctrinal\\_treatises.pdf](http://www.acmuller.net/kor-bud/06_doctrinal_treatises.pdf)> (単)

Muller, A. Charles. *The Collected Works of Korean Buddhism: Volume VI: 諸教學 Doctrinal Treatises: Selected Works*. Seoul: Compilation Committee of Korean Buddhist Thought, Jogye Order of Korean Buddhism, 2012. 535p.

<[http://www.acmuller.net/kor-bud/11\\_sutra\\_of\\_brahmas\\_net.pdf](http://www.acmuller.net/kor-bud/11_sutra_of_brahmas_net.pdf)> (単)

(2) 論文

Muller, A. Charles. "The XML-Based DDB: The DDB Document Structure and the P5 Dictionary Module: New Developments of DDB Interoperation and Access." *Chung-Hwa Buddhist Journal*. No. 25 (July 2012), pp. 105–128.

Muller, A. Charles. "Zen Views on Views (*dṛṣṭi*): Are We Ever Rid of Them?" *Japan Mission Journal* vol. 67, (1) 28–33. 2013.

Muller, A. Charles. "Bonno to ninshiki wo kakutei suru: yuishiki to nyoraizō no nishōsetsu no kigen 煩悩と認識を画定する — 唯識と如来蔵の二障説の起源." In *Nyoraizō to bussho 如来蔵と仏性*, 331–65. Series Daijō Bukkyō シリーズ大乘仏教. Tokyo: Shunjūsha, 2013.

Muller, A. Charles. "The Contribution of the Yogācārabhūmi to the System of the Two Hindrances." In *The Foundation for Yoga Practitioners: The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*, edited by Ulrich Timme Kragh, 1192–1211. Harvard Oriental Series 75. Cambridge: Harvard University Press, 2013.

(3) 学会発表

Muller, A. Charles. "Right View (*samyak-dṛṣṭi*) and Correct Faith (*śraddhā*): Distinction, and Re-Merging in Mahāyāna Buddhism." Invited lecture, University of Tel Aviv, Department of Asian Studies, June 11, 2013

Muller, A. Charles. "Seon Views on Views (*dṛṣṭi*): Are We Ever Rid of Them?" Paper delivered at the Conference "Buddhist Meditation from Ancient India to Contemporary Asia: International Conference on Buddhist Studies to Commemorate 100 years of Master Seongcheol," November 30, 2012

Muller, A. Charles. "Digital Humanities: Developments in Digital Tools for the Study of East Asian Texts." Invited lecture, University of Tel Aviv, Department of Asian Studies, June 10, 2013

Muller, A. Charles. "Report and Demonstration of the CJKV-English Dictionary." ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG Ideographic Rapporteur Group, IRG Meeting #38, Gyeongju, South Korea, June 18-22, 2012.

教授 **下田 正弘** SHIMODA, Masahiro

15 インド哲学仏教学 参照

教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki

9b 日本語日本文学 (国文学) 参照

教授 **武川 正吾** TAKEGAWA, Shogo

25 社会学 参照

准教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke  
27 文化資源学 《文化経営学専門分野》参照

准教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato  
01 言語学 参照

准教授 **高橋 典幸** TAKAHASHI, Noriyuki  
10 日本史学 参照

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira  
03 美術史学 参照

## 30 死生学・応用倫理センター

教授 池澤 優 IKEZAWA, Masaru (センター長)

06 宗教学宗教史学 参照

教授 榊原 哲也 SAKAKIBARA, Tetsuya

04 哲学 参照

准教授 鈴木 泉 SUZUKI, Izumi

04 哲学 参照

准教授 大稔 哲也 OTOSHI, Tetsuya

12 東洋史学 参照

准教授 堀江 宗正 HORIE, Norichika

### 1. 略歴

- 1992年3月 東京大学文学部心理学専修課程卒業
- 1992年4月 東京大学文学部研究生 (～1993年3月)
- 1993年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
- 1995年3月 同修了 (修士 (文学) 取得)
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程進学
- 2000年3月 同単位取得退学
- 2001年4月 聖心女子大学文学部専任講師
- 2003年4月 聖心女子大学大学院文学研究科専任講師兼任
- 2007年4月 聖心女子大学文学部准教授、聖心女子大学大学院文学研究科准教授兼任
- 2008年9月 博士 (文学) 取得 (東京大学大学院人文社会系研究科)
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

死生学、宗教学、スピリチュアリティ研究

#### b 研究課題

日本人の死生観、宗教心理学の学説・理論の研究、現代日本人の個人主義的スピリチュアリティ、未来に関する倫理

#### c 主要業績

##### (1) 論文

堀江宗正、「脱／反原発運動のスピリチュアリティ——アンケートとインタビューから浮かび上がる生命主義」、『現代宗教2013』、78-112頁、2013.6

- 堀江宗正、「31 世紀のスピリチュアリティ—エーリッヒ・フロムの『聴くということ』を手がかりとして」、  
 <[https://www.academia.edu/4890580/31\\_](https://www.academia.edu/4890580/31_)>、1-10 頁、2013.10
- Norichika Horie、「Narrow New Age and Broad Spirituality: A Comprehensive Schema and a Comparative Analysis」、『Steven J. Sutcliffe & Ingvild Saelid Gilhus (eds.), New Age Spirituality: Rethinking Religion (Durham: Acumen, November 2013)』、99-116 頁、2013.11
- 書評論文、堀江宗正、「磯前順一『宗教概念あるいは宗教学の死』(東京大学出版会、2012 年)」、『宗教研究』第 87 卷 3 輯、114-120 頁、2013.12
- 書評論文、堀江宗正、「Jolyon Baraka Thomas, *Drawing on Tradition: Manga, Anime, and Religion in Contemporary Japan* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2012)」、『Religious Studies in Japan, vol. 2』、  
 <[http://jpars.org/online/wp-content/uploads/2013/12/RSJ\\_2014\\_Horie.pdf](http://jpars.org/online/wp-content/uploads/2013/12/RSJ_2014_Horie.pdf)>、2014.1
- 堀江宗正、「きれいいで明るい死後の世界—ポピュラーな映像作品を通して」、『文化交流研究』、9-16 頁、2014.3
- 堀江宗正・島藺進、「自殺をめぐる研究の現状と今後—宗教学・死生学の立場から」、厚生労働科学特別研究『自殺総合対策大綱の見直しを踏まえた自殺対策発展のための国際的・学際的検討 平成 25 年度総合研究報告書』(研究代表者・椿広計)、87-101 頁、2014.3

(2) 学会発表

- 国内、堀江宗正、「31 世紀のスピリチュアリティ—エーリッヒ・フロムの『聴くということ』を手がかりとして」、  
 京都市立大学臨床心理学部臨床心理学科連続シンポジウム『心理臨床と地球の未来：31 世紀のこころを占う』、  
 京都市立大学、2013.10.23
- 国内、堀江宗正、「自殺をめぐる研究の現状と今後—宗教学・死生学の立場から」、厚生労働科学特別研究「自殺総合対策大綱の見直しを踏まえた自殺対策発展のための国際的・学際的検討」主催 パネル討論会『自殺総合対策に必要な融合的研究』、学術総合センター、2014.3.2

(3) 啓蒙

- 堀江宗正、「地獄をなくした死後の世界」、『春秋』、547、1-4 頁、2013.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 2013 年 4 月から 2014 年 3 月まで聖心女子大学にて非常勤講師  
 2013 年 9 月から 2014 年 3 月まで早稲田大学にて非常勤講師

(2) 学会

- 日本宗教学会、「宗教と社会」学会、日本生命倫理学会、日仏哲学会、日本トランスパーソナル心理学・精神医学会

## 1. 略歴

- 1969年4月 東京大学理学部天文学科卒業  
1972年3月 東京都立大学人文学部人文学科(哲学専攻)卒業  
1974年3月 同大学大学院人文科学研究科修士課程修了  
1977年3月 同大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学  
1977年6月～80年8月 東京都立大学人文学部倫理学講座助手  
1980年8月～82年8月 北海道大学文学部西洋哲学第二講座講師  
1982年8月～93年3月 同 助教授  
1990年2月 文学博士(東京都立大学)  
(1990年10月～91年6月文部省在外研究員(英国ケンブリッジ大学))  
1993年4月～96年3月 東北大学文学部助教授(西洋哲学史第一講座)  
1996年4月～2000年3月 同 教授  
2000年4月～2007年3月 東北大学大学院文学研究科教授(哲学講座)  
(2004年4月～2006年3月 東北大学教育研究評議会評議員、文学研究科副研究科長)  
2007年4月～2012年3月 東京大学大学院人文社会系研究科 次世代人文学開発センター 上廣死生学講座  
特任教授  
2012年4月～現在 同大学院同研究科 死生学・応用倫理センター 上廣死生学・応用倫理講座  
特任教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

哲学、臨床倫理学、臨床死生学、西欧中世思想

### b 研究課題

- ①医療現場に臨む哲学・臨床倫理学から臨床死生学へ
- ②臨床現場から人間における倫理の理論へ
- ③西欧中世の言語哲学・キリスト教思想

### c 主要業績 2012.4～2014.3

#### (1) 著書

- 『人生の終わりをしなやかに』 浅見昇吾、アルフォンス・デーケンと共編著、三省堂、2012.6、全 vi+216 頁、執筆担当：まえがき(1-3 頁)、「終わりの時期の意思決定プロセス」(29-65 頁)  
『臨床倫理ベーシックレッスン』 石垣靖子と共編著、日本看護協会出版会、2012.6、全 vi+161 頁、執筆担当：part 2(35-51 頁)、part3-1(54-66 頁) およびコメント(82-5, 95-6, 110-1, 131-2, 143-4, 156)  
『最期まで自分らしく生きるために』 単著、NHK 出版、2012.7、全 190 頁(NHK ラジオ第二、こころをよむ NHK ラジオテキスト)  
『臨床倫理エッセンシャルズ(2013年春版)』 単著、臨床倫理プロジェクト、2013.1、全 46 頁  
終末期ケアにおける意思決定プロセス、会田薫子と共著、安藤・高橋編著『シリーズ生命倫理学4 終末期医療』20-41 頁、丸善出版、2012.12  
『高齢者ケアと人工栄養を考える 本人・家族のための意思決定プロセスノート』、会田薫子と共著、医学と看護社 2013.6(試行版2011.2, 改訂第1版2011.8, 改訂第2版:2012.3, 改訂第3版:2013.2)、全 78 頁

#### (2) 論文その他

- (項目執筆) 医療における看護の位置付け(2-3 頁)、終末期医療とは(164-5 頁)、延命と QOL(166-7 頁)、セデーション(174-5 頁)、在宅ホスピス(182-3 頁)、単著、盛永、長島編『看護学生のための医療倫理』丸善出版、2012.5  
最期まで希望をもって生きられるか、単著、死の臨床、35-1:9-10, 2012.6  
死生学総論 在宅終末期ケアの臨床倫理、単著、日本在宅医学会雑誌、14-1:79-80, 2012.8  
本人の意向と人生の物語りという観点での最善治療の差し控えと中止をめぐる(特集「もしも・・・」のことをあらかじめ話し合おう—アドバンス・ケア・プランニングの実践)、単著、緩和ケア、22-5:407-10, 2012.9

- 意思決定プロセスの共同性と人生優位の視点—日本老年医学会「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン」の立場 (特集 終末期医療の方向性), 単著, *Geriatric Medicine*, 50-12: 1387-1393, 2012.12
- 清水哲郎による臨床倫理のススメ(第1回~12回), 単著, 看護技術, 59-1: 72-6; 59-2:172-7;59-3: 291-5;59-4:382-87; 59-6:646-50; 59-7:754-59; 59-8:866-72; 59-9:960-65; 59-10:1073-78; 59-11:1182-89; 59-13:1460-67; 59-14:1570-77, 2013.1~12
- 希望・尊厳・スピリチュアル—緩和ケアからのアプローチ, 単著, 窪寺俊之編『スピリチュアルコミュニケーション—生きる希望と尊厳を支える (スピリチュアルケアを学ぶ3)』, 聖学院大学出版会,2013.3
- 最期の日々を自分らしく, 単著, 東京大学 高齢社会総合研究機構編『東大がつくった確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書』189-204 頁, ベネッセコーポレーション, 2013.3
- 日本人の死生観を踏まえた意思決定のあり方(特集 高齢者のエンドオブライケア),単著, 長寿科学振興財団 *Aging & Health*, 22-2(66):19-21, 2013.7
- The Ethics of Unity and Difference: Interpretations of Japanese Behaviour Surrounding 11 March 2011, 単著, Tetsuji Uehiro, ed., *Ethics for the Future of Life: Proceedings of the 2012 Uehiro-Carnegie-Oxford Ethics Conference*, The Oxford Uehiro Center for Practical Ethics, 134-143, 2013
- 医療におけるケアという営み, 単著, 日本看護科学会誌 33-2:101-103, 2013
- 脳卒中後の医療に関わる意思決定プロセスの臨床倫理(特集 到来 二人に一人 脳卒中時代), 単著, 内科, 111-5:917-923, 2013.5
- 高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン: 人工的水分・栄養補給の導入を中心として 2012年版, 単著, メディカル朝日,42-6: 81-83, 2013.6
- (項目執筆)「死んだらどうなるの?」;「友だちって、いなくちゃいけないもの?」, 単著, 野矢茂樹編著『子どもの難問——哲学者の先生、教えてください!』, 中央公論新社,25-27;127-131, 2013.11
- 認知症患者の end-of-life care, 単著, 老年精神医学雑誌 25-2: 127-134, 2014.2
- 高齢者ケア: 日本老年医学会の3つの指針, 単著, 恒藤・森田・宮下編『ホスピス緩和ケア白書 2014』, 青海社, 55-58, 2014.3

### (3) 研究費の獲得状況

- 日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (A)「ケア現場の意思決定プロセスを支援する臨床倫理検討システムの展開と有効性の検証」(2011~), 研究代表者
- 同上 基盤研究 (B)「長寿社会における終末期医療のあり方—東洋型意思決定法の実証と実践および発信」(2011~2013) (研究代表=甲斐一郎), 研究分担者
- 厚生労働省科学研究費・難治性疾患克服研究事業「希少性難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究」(2012,2013), 研究分担者
- 独立行政法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター (RISTEX) 研究開発領域「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発プロジェクト「高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成」, 2012年度下半期~2015年度上半期, 研究代表者
- 厚生労働省科学研究費補助金 厚生労働科学特別研究事業「人生の最終段階における医療にかかる相談員の研修プログラム案を作成する研究」課題番号: H25-特別-指定-036 (研究代表: 鳥羽研二/国立長寿医療研究センター病院長) (2013), 研究分担者

### (4) 学会講演・国際会議発表など

- 国際会議発表「Philosophical Analysis of the Historical Development of Ethical Behavior: Interpretations of Japanese Behavior Surrounding March 11, 2011」, 上廣・カーネギー・オックスフォード会議, 2012 .5.17-8, 東京
- 教育講演「臨床倫理学入門」, 日本透析学会大会, 札幌, 2012.6.22
- シンポジスト提題「意思決定プロセスといのちの評価」, 第17回日本緩和医療学会大会 シンポジウム「緩和ケアにおける倫理的問題」, 神戸, 2012.6.23
- シンポジスト提題「生物学的生命と物語られるいのち」, 第12回東大生命科学シンポジウム, 東京大学, 2012.6.30
- シンポジスト提題「物語られるいのちと共同決定」, 第24回日本生命倫理学会年次大会 シンポジウム「生存学と死生学」, 京都 (立命館大学), 2012.10.27
- シンポジスト提題「認知症の終末期をどう捉えるか—死生学の立場から」, 第31回認知症学会学術集会 シンポジウム9「認知症の終末期医療」, つくば市, 2012.10.28
- 招待講演「臨床における意思決定とは」, 第14回日本救急看護学会学術集会, 東京, 2012.11.2

ワークショップ提題・座長「共同の決定&人生>生命—ガイドラインとプロセスノートのコンセプト」, 第31回日本医学哲学・倫理学会大会 ワorkshop「高齢者への人工的水分・栄養補給法の導入に関するガイドラインの策定をめぐって」, 金沢大学, 2012.11.17

招待講演「臨床におけるケアという営み」, 第32回日本看護科学学会学術集会, 東京, 2012.12.1

特別講演「意思決定プロセスにおけるいのちの評価—臨床倫理の視点から」, 日本脳神経看護研究学会 第1回関東地方部会大会, 目白大学(埼玉県和光市), 2012.12.8

パネリスト提題「《人生>生命》と意思決定の共同性——臨床倫理の視点から」, 第28回日本静脈経腸栄養学会学術集会 パネルディスカッション 2「日本の胃ろうを問う～高齢化、QOL、そして倫理・経済的視点から」金沢, 2013.2.22

シンポジスト提題(招待)「認知症高齢者の最期を支えるケアと社会」, 第14回日本認知症ケア学会大会シンポジウムⅡ: 認知症高齢者の終末期医療とケア, 福岡, 2013.6.1

シンポジスト提題(招待)「《人生を全うする》を目指す看取りケアとしての“end of life care”」, 日本老年社会科学会第55回大会 シンポジウムⅢ「“老年学的な”看取りケアをめぐって」, 大阪, 2013.6.6

招待講演「ご本人とご家族の意思決定プロセスを支援すること」, 看護学教育学会第23回学術集会 教育鼎談「現代医療の方向性と求められる看護学教育」, 仙台, 2013.8.7

招待講演「積極的治療と緩和ケア—臨床倫理の視点から—」, 第29回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会, 甲府, 2013.8.10

シンポジスト提題(招待)「臨床倫理の視点から」, 第18回 PEG・在宅医療研究会学術集会 シンポジウムⅡ「認知症患者に対するPEGの適応」, 東京, 2013.9.7

国際学会招待講演“Origin and Essence of Caring in Healthcare: a philosophical and ethical investigation”, WFNN Congress 2013 (The 11th Quadrennial Congress of The World Federation of Neuroscience Nurses), 岐阜, 2013.9.16

シンポジスト提題「臨床倫理をめぐるケア従事者と研究者の協働」, 第25回日本生命倫理学会年次大会 大会企画シンポジウムⅡ「死生学と臨床倫理」, 東京, 2013.11.30, 東京

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学術団体役員・各種委員等

日本医学哲学・倫理学会会長 (～2012年10月)

日本学術会議連携会員

日本哲学系諸学会連合事務局長

日本哲学会理事

中世哲学会理事 (～2013年12月)

日本倫理学会評議員

日本生命倫理学会理事

日本臨床死生学会常任理事

日本スピリチュアルケア学会理事 (2013年度後半～)

東北大学利益相反アドバイザーボード 委員 委員長 (2013年度～)

日本緩和医療学会 鎮静ガイドライン作成専門委員, 終末期輸液ガイドライン作成専門委員

日本老年医学会 代議員

千葉県 終末期医療等に関する啓発プログラム開発 有識者会議委員

東札幌病院臨床倫理委員会外部委員

#### (2) 他大学への出講

宮城大学大学院看護学研究科非常勤講師 (2コマ×4回) 看護倫理 2012,13年度

東北大学歯学部 非常勤講師 (2コマ×1回), 医の倫理・社会の倫理 2012,13年度

島根大学大学院医学研究科(看護学) 非常勤講師 (集中)、看護倫理 2012,13年度

京都大学大学院人間健康科学研究科 非常勤講師 (2コマ×2回), 人間健康科学特論 2012,13年度

放送大学客員教授「生命と環境の倫理」主任講師 2012,13年度

東京大学ジェントロジー一部局横断型教育プログラム (1コマ) 2012,13年度

### (3) 講演、研修会講師等

- 報告「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン」の紹介,医療と法ネットワーク第2回フォーラム  
「高齢者医療における患者の判断能力と医療決定 一医と法の対話と協働一」,2012.4.22, 京都
- 講演「意思決定プロセスの臨床倫理―患者・家族に寄り添うために―」,八尾総合病院,富山県八尾,2012.5.25  
臨床倫理セミナー講義「医療・介護の臨床倫理」,ナラティブホーム,富山県砺波市,2012.5.26
- NHK第二放送こころをよむシリーズ講演 テーマ「最期まで自分らしく生きるために」,2012.7.1~9.30 計14回  
講演「延命とQOL―人生の物語りを豊かに―」,千葉市立青葉病院「青葉オープンカンファレンス」,2012.7.6  
講義 臨床倫理,千葉大学看護学研究科 認定看護師教育課程(乳がん看護),千葉大学,2012.7.13  
講演「人生の豊かさとQOL―生物学的生命と物語られるいのち―」および事例検討講評,日本医療社会福祉協会  
ーシャルワークスキルアップ研修,東京,2012.7.21  
講義「生物学的生命と物語られるいのち―老年医学会のガイドラインについて」,東札幌病院倫理セミナー,札幌,  
2012.7.25
- 講義と事例検討講評 臨床倫理,大阪看護協会看護管理者ファースト研修,2012.7.27, 9.21, 2013.2.8, 大阪  
臨床倫理セミナー講師 札幌 2012.8.18  
臨床倫理セミナー講師 名寄 2012.8.19
- 講義と事例検討講評 臨床倫理,大阪看護協会がん性疼痛認定看護課程,大阪,2012.8.30-31  
講演「ケア従事者のための臨床倫理学・死生学 一高齢者の意思決定をめぐる―」,在宅ホスピスケア協会第15回  
全国大会,船橋,2012.9.1  
臨床倫理セミナー講師,金沢,2012.9.2
- 講演「臨床倫理エッセンシャルズ」,聖隷佐倉市民病院,千葉県佐倉市,2012.9.6  
基調講演:「生命と環境を包括する新たなQOL理解」,福井大学市民公開シンポジウム「福井の風土と“生活の質”」,  
2012.9.15  
臨床倫理セミナー講師,盛岡,2012.9.23
- パネル提題「よき生と高齢者ケアの観点から」,医療経済研究機構第18回シンポジウム パネルディスカッション  
「高齢者ケアのあり方を考える」,東京,2012.9.28
- 講演「最期まで自分らしく生きるために」,新老人の会東北支部,仙台,2012.10.13  
対談「死生観と人工栄養をめぐる」(島藺進氏と),シンポジウム「長寿時代の死生学」,東京大学,2012.10.21  
講演「緩和ケアにおける倫理的課題」と事例検討講評,日本看護協会神戸研修センター 緩和ケア認定看護師課程,神  
戸,2012.10.25-6
- 講演「臨床倫理エッセンシャルズ」,鹿児島県看護部長会研修「倫理的な職場風土の醸成に向けて～臨床倫理につ  
て学び、自組織における倫理的課題への取り組みについて学ぶ」,2012.11.9-10
- 特別講演「人生の物語りは最後まで豊かに―緩和ケアの倫理と死生の評価―」,鹿児島緩和ケア・ネットワーク第15  
回大会,鹿児島市,2012.11.10
- 講演「生物学的生命と物語られるいのち―医療現場の意思決定プロセスをめぐる―」,山梨大学 附属図書館 医学分  
館講演会,甲府,2012.11.15
- 臨床倫理セミナー講師,東京大学死生学・応用倫理センター「医療・介護従事者のための死生学」秋季セミナ  
ー,2012.11.25
- 報告「本人・家族の意思決定プロセス支援ツールの開発」,厚生労働省科学研究費・難治性疾患克服研究事業「希少  
性難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究」西澤班第4分科会,東京,2012.12.14
- 講師「今から考える 最期の日々の意思決定」&「最期まで自分らしく生きるために」,NHKカルチャーセンター  
柏,2012.11.30:12.14
- 特別講演「意思決定プロセスといのちの理解―高齢者への人工的水分・栄養補給法の導入と中止をめぐる―」,第  
4回緩和ケアにおける栄養・輸液に関する研究会,大阪,2012.12.15
- 講演「終末期ケアの臨床倫理」,東京厚生年金病院,東京,2012.12.19
- 講演「高齢者ケアの臨床倫理―人工的水分・栄養補給法を中心に」,佐賀県栄養士会「指導者のための健康栄養セミ  
ナー」,佐賀市,2012.12.22
- 臨床倫理セミナー講師,東札幌病院,2013.1.19
- 臨床倫理セミナー講師,第5回北海道臨床倫理検討会,札幌,2013.1.20
- 臨床倫理セミナー講師,第1回愛媛地区臨床倫理事例研究会,松山,2013.1.27

発表「最期に至る意思決定プロセス—人生の優位と共同の決定」, 日医大長谷川グループ研究会, 日本医科大学多摩永山病院, 2013.1.29

講演「自分らしい生き方を考える」と座長, 日本医学哲学・倫理学会公開講座「自分らしい治療・ケアの選択のために」, 東京大学, 2013.2.3

臨床倫理セミナー講師, 臨床倫理事例研究会 大阪, 2013.2.9-10

講演「高齢者ケアの意思決定プロセスと臨床倫理」, 埼玉協同病院, 浦和市, 2013.2.13

講演「本人・家族の選択を支援する—臨床倫理の視点から」, 長野県医療社会事業協会研修, 松本, 2013.2.16

講演「終末期ケアの臨床倫理」, 石巻赤十字病院, 2013.2.20

講演「重症児の終末期ケア—臨床倫理の視点から」, 日本重症児福祉協会認定看護師教育課程, 札幌, 2013.2.24

講演「《人生>生命》と意思決定の共同性—臨床倫理の視点から(日本老年医学会 人工的水分・栄養補給をめぐるガイドラインについて)」, 藤沢市民病院, 藤沢市, 2013.2.28

講演「最期まで自分らしく生きるために」, ものがたり在宅塾市民フォーラム, 砺波市, 2013.3.2

講演「人生の優位と意思決定の共同性—臨床倫理の核心にあるもの」, 鹿児島南医療維新の会, 鹿児島市, 2013.3.7

臨床倫理セミナー講師, 第1回中国地区臨床倫理事例研究会, 岡山市, 2013.3.10

特別講義「相手は人だ／ものではない—臨床倫理の核心—」, 宮城高等看護学校, 宮城県名取市, 2013.3.12

講義「宗教的理由による輸血拒否—生命維持を目指す医学的介入の選択 (附) End of life care とターミナルケア」, 東札幌病院 倫理セミナー, 2013.3.15

講演「食べられなくなったらどうしますか—臨床倫理の視点から」, 聖母病院, 東京, 2013.3.19

講演「人工的水分・栄養補給をめぐる本人・家族の選択を支援する—老年医学会のガイドラインと意思決定プロセスノート」, 第5回宮城県南栄養サポートネットワーク講演会, 宮城県大河原, 2013.4.20

講義(セミナー)「《臨床倫理エッセンシャルズ》Part 1 をよりよく理解するために」; 「Part 2 検討シートを使った検討 & Part 3 事例検討—問題の整理・分析・対応」, 「医療・介護従事者のための死生学」春季セミナー(臨床倫理セミナー@本郷キャンパス), 2013.4.21

講義(授業)「End of Life Care の倫理: 人生の優位と意思決定の共同性」, 慶應大学看護医療学部, 2013.5.17

講演「人生のために共同で行う意思決定: 臨床倫理の視点から」, 第三回高齢者にやさしい医療を考える会, 横須賀, 2013.5.22

講演「臨床倫理の観点からみた2事例」, 大阪医科大病院, 2013.6.6

講演「世界の根源的把握と向かう姿勢: 人のスピリチュアルな領域について」, 臨床パストラル教育研究センター全国大会, 東京, 2013.6.9

講演「《最期まで自分らしく生きる》を支える医療とケア」, 京都女子大学 公開講座「終末期医療をめぐる臨床倫理」, 2013.6.15

講義(セミナー)「《臨床倫理エッセンシャルズ》: Part 2 検討シートを使った検討 & Part 3 事例検討—問題の整理・分析・対応」, 臨床倫理セミナー in せんたい, 2013.6.23

講演「終末期の物語を充実させる意思決定支援」, 京都府看護協会職能集会, 2013.6.29

講演「最期の日々をのびやかに」, シンポジウム「これからの在宅ケアについて考えよう～死生観をまじえて」, 東京, 2013.6.30

講演「食べられなくなったら: 人生>生命 & 意思決定の共同性」, シンポジウム「これからの在宅ケアについて考えよう」, 博多, 2013.7.6

講演「最期の日々をのびやかに: 「人生を全うする」の実現のために」, シンポジウム「これからの在宅ケアについて考えよう～死生観をまじえて」, 博多, 2013.7.7

講演「臨床倫理エッセンシャルズ」, 大阪府看護協会 認定看護管理者養成ファースト研修, 2013.7.12; 10.25; 2014.2.7

講演「臨床倫理エッセンシャルズ」, 千葉大学 認定看護師教育課程(乳がん看護), 2013.7.19

講演「《臨床倫理エッセンシャルズ》(続編); 「食べられなくなったら: 人生>生命&意思決定の共同性」, 日本医療社会福祉協会 2013年度ソーシャルワーク・スキルアップ研修, 2013.7.28

講演「死生学コア: 死生学とは&人間の生と死」; 「臨床死生学コア1: ケアに活かす死生学」, 死生学・応用倫理センター上廣講座「医療・介護従事者のための死生学」夏季セミナー, 東京, 2013.8.4

講演「高齢者・家族の意思決定を支援する: 人工的水分・栄養補給をめぐる」; 「最期の日々を自分らしく」, 京都府看護協会研修会, 2013.8.5

講義(セミナー)「臨床倫理エッセンシャルズのエッセンス」, 北海道臨床倫理研究会, 2013.8.18

講演「End of Life Care の臨床倫理」, 臨床倫理講演会・勉強会@藤沢市民病院, 2013.8.25

講演「《終末期ケア》の臨床倫理」, 東所沢病院, 2013.8.26

座長: がん医療フォーラム 2013「がんと共生できる社会づくり」第一部講演, 国立がんセンター・がん研有明病院・東大死生学・応用倫理センター共催, 東京, 2013.9.1

講演「医療従事者のための死生学」, AGING SUMMIT 実行委員会\_プレレクチャー, 2013.9.5

講義(セミナー)「臨床倫理の核心」, 北陸がんプロ 臨床倫理セミナー, 金沢, 2013.9.8

講演「臨床倫理の考え方」, 潤和会記念病院, 宮崎, 2013.9.12

講演「口から食べられなくなったらどうしましょうか?」, 終末期医療等に関する高齢者向け啓発プログラムの開発、実施事業(千葉県), 地域別公開講座「最期まで自分らしく生きる」, 千葉県大網, 2013.9.18

講演「臨床倫理の考え方: 共同で進める意思決定プロセス」, 信州大学医学部附属病院講演会, 松本, 2013.9.26

講義(セミナー)「《臨床倫理エッセンシャルズ》(続編): Part 2 検討シートを使った検討 & Part 3 事例検討一問題の整理・分析・対応」, 臨床倫理セミナー@市立芦屋病院, 芦屋, 2013.9.29

講演「ケア従事者のための死生学: 死生学入門」; 「臨床現場における倫理的な考え方」, 愛媛大学病院看護部研修, 松山, 2013.10.5

講演「急性期病院における臨床倫理の考え方」, 京都第一赤十字病院臨床倫理部会講演会, 京都, 2013.10.11

講義(セミナー)「《臨床倫理エッセンシャルズ》(続編): Part 2 検討シートを使った検討 & Part 3 事例検討一問題の整理・分析・対応」, 佐久総合病院看護部倫理研修会, 佐久, 2013.10.26

講演「今から考えておくこと」, 終末期医療等に関する高齢者向け啓発プログラムの開発、実施事業(千葉県), 地域別公開講座「最期まで自分らしく生きる」, 成田(千葉県), 2013.11.2

講演「臨床倫理の考え方と実際」, 岩手県立磐井病院, 一関(岩手県), 2013.11.5

講演「口から食べられなくなったらどうしますか?: 自分らしい治療・ケアの選択のために」, 相模原市医療ソーシャルワーカーの会, 2013.11.6

講演「本人・家族の意思決定を支援する: 事前指示を脱して」, 東札幌病院 倫理セミナー, 札幌, 2013.11.7

講演「本人の人生を支える医療へ」, AGING SUMMIT シンポジウムV「死生観・終末期医療・国民教育」, 東京, 2013.11.13

講演「臨床倫理の考え方と実際」, 全日本民医連ソーシャルワーカー初任者研修会, 三浦市(神奈川県), 2013.11.14

講演「それぞれの〈自分らしく生きる〉を支え合うために」, 静岡いのちの電話開局 15 周年記念講演会, 2013.11.16

講演「本人・家族の意思決定を支援する: 最期の日々を自分らしく生きるために」, 集団力学研究所公開講座 シンポジウム「終末期における医療およびケア」, 大阪, 2013.11.17

講演「人生の終りに向かって: 元気なうちから考えておくこと」, 平成 25 年度 ものがたり在宅塾, 2013.11.18

講義(授業)「がんをめぐるアジアの死生観と向き合う」, 日本アジア学: アジアでがんを生き延びる(学内授業への協力), 東京大学, 2013.11.27

講演「臨床倫理の考え方と実際」, 綾部市立病院, 綾部(京都府), 2013.12.6

研究報告「本人・家族のケア事前検討プロセス支援ツールの開発」, 厚労省科研費「希少性難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究班」分科会 4: 「難病」医療の包括的検討, 東京, 2013.12.13

講演「ALS 患者の人工呼吸器選択の意志決定に関して」, 平成 25 年度兵庫県神経難病医療ネットワーク研修会, 2013.12.14

講義(セミナー)「臨床倫理の事例検討: 問題の整理・分析・対応」, 第 2 回愛媛地区臨床倫理事例研究会, 松山, 2013.12.15

講義(セミナー)「臨床倫理の事例検討: 問題の整理・分析・対応」, 第 2 回北陸地区臨床倫理事例研究会, 金沢, 2013.12.21

講演「医療・介護現場に臨む哲学: 高齢者ケアにおける人工栄養問題をめぐって」, 中京大学 国際教養学部 学術講演会, 名古屋, 2014.1.9

講演「意思決定プロセスの臨床倫理」, 第 7 回 臨床倫理事例研究会, 大阪, 2014.1.19

講義(授業)「End-of-Life Care における方針選択の臨床倫理」, 早稲田大学村松ゼミ, 東京, 2014.1.23

講義(セミナー)「臨床倫理の事例検討: 問題の整理・分析・対応」, 第 7 回北海道臨床倫理検討会, 札幌, 2014.1.26

講演「よりよい人生のために: 胃ろうは使えよう」, 「難病家族に聞け! 進化する介護 2013!」in 東京シンポジウム, 東京, 2014.1.24

講演「ケア従事者のための死生学 I 死生学入門; II 臨床死生学×臨床倫理学」, 集団力学研究所看護系研修, 大阪, 2014.2.2

講演「意思決定プロセスノート 今後の展開：事前指示から ACP へ」、シンポジウム「人生の最終段階のケア—支える文化の創成に向けて」、2014.2.9  
 進行・講義、臨床倫理事例検討ファシリテーター養成コース第 0 期東京(臨床倫理プロジェクト主催)、東京、2014.2.16&23  
 講義(セミナー)「臨床倫理の考え方と実際」、臨床倫理セミナー(東札幌病院)、札幌、2014.2.22  
 講演「本人の人生を大事にする意思決定プロセス」、東所沢病院、所沢、2014.2.24  
 講義(セミナー)「臨床倫理の事例検討:問題の整理・分析・対応」、第 2 回中国地区臨床倫理事例研究会、広島、2014.3.2  
 進行・講義、臨床倫理事例検討ファシリテーター養成コース第 0 期大阪(臨床倫理プロジェクト主催)、大阪、2014.3.8&22  
 講義(セミナー)「臨床倫理の事例検討：問題の整理・分析・対応」、第 1 回臨床倫理セミナー@大阪、大阪、2014.3.9  
 講義(授業)「本人・家族と一緒に進めて行く医療・看護」、宮城県高等看護学校、名取市、2014.3.10  
 講演「《最期まで自分らしく生きる》を支える」、平成 25 年度群馬県介護研修センター 認知症介護フォローアップ研修、前橋、2014.3.12  
 講演「がん相談における意思決定支援と倫理」、第 3 回がん相談研究会、東京、2014.3.15  
 講演「食べられなくなったらどうしますか?：本人・家族の意思決定を支援する」、とうきょう地域ケア研究会、武蔵境、2014.3.27  
 講演「いのちの捉え方と意思決定プロセス」、第 3 回ヒューマンイズム・コミュニケーション研究会(昭和大学)「出生前診断の今とこれから」、東京、2014.3.29

特任准教授 **会田 薫子** AITA, Kaoruko

## 1. 略歴

1984 年 3 月 成蹊大学文学部英米文学科 卒業  
 1986 年 9 月 Contemporary British Society Course, School of Oriental and African Studies, University of London 入学  
 1987 年 6 月 Contemporary British Society Course, School of Oriental and African Studies, University of London 修了  
 1988 年 4 月 株式会社メディカル・トリビューン 記者  
 1992 年 9 月 株式会社ジャパン・タイムズ社 記者  
 1999 年 9 月 Medical Ethics Fellowship Program, Harvard Medical School, Harvard University 入学  
 2000 年 6 月 Medical Ethics Fellowship Program, Harvard Medical School, Harvard University 修了  
 2003 年 4 月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程入学  
 2005 年 3 月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程修了  
 2005 年 4 月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士課程進学  
 2008 年 3 月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士課程修了  
 博士(保健学)取得 (東京大学大学院医学系研究科)  
 2008 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科グローバル COE「死生学の展開と組織化」特任研究員  
 2011 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター 特任研究員  
 2012 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣死生学・応用倫理講座 特任准教授(現在に至る)

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

医療倫理・臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学

## b 研究課題

### エンド・オブ・ライフ・ケアの改善

医療技術が進展し超高齢化が進んだ現代社会におけるエンド・オブ・ライフ・ケア（人生の最終段階のケア）のあるべき姿を模索し、現状の改善・充実を目指し、そのために必要な社会の意識改革を促す。

### 臨床倫理の普及と啓発

日本人のコミュニケーションのあり方などの文化的な特徴を踏まえ、一人ひとりの患者と家族に関する倫理的問題へよりよく対応することが可能な方法論を探り、臨床現場の医療・介護従事者との協働・対話によって、現実の症例の倫理的問題について幅広く検討を深め、現場における実践の知へつなぐ。

### 臨床死生学の試み

死生学の一側面を「生き終わりを見据えつつより良く生きることを社会のなかで考える学問」と捉え、現実社会の問題として死生学の理解・考察を深め、一般への浸透を図る。

## c 主要業績

### (1) 著書

『高齢者ケアと人工栄養を考える—本人・家族のための意思決定プロセスノート』、〔清水哲郎と共著〕医学と看護社、2013.5

### (2) 論文その他

「脳死の『理』と『情』 ～臓器移植という医療のなかで～」、『シリーズ生命倫理 第3巻 脳死・臓器移植』〔倉持武・丸山英二共編〕、丸善出版、2012.4、177-193頁

「救命限界の追求と終末期医療—臨床倫理と死生学の視点から」 *Medical Asahi* 2012.3、朝日新聞社、32-33頁

「胃ろうの適応と臨床倫理—一人ひとりの最善を探る意思決定のために」、『日本老年医学会雑誌』第49巻2号、日本老年医学会、2012.3、130-139頁

「エンド・オブ・ライフにおける『食べる』を支えるケア 胃ろう栄養法の現状と課題」、『「食べる」ことを支えるケアとIPW』〔諏訪さゆり・中村丁次共編〕建帛社、2012.4、146-155頁

「認知症高齢者のターミナルケアをどう考えるか—AD終末期における人工的水分・栄養補給法」、『老年精神医学雑誌』Vol.23増刊号1、日本老年精神医学会、2012.5、119-125頁

「認知症の人の終末期を考える アルツハイマー型認知症末期の胃ろう栄養法」、『ぼ〜れぼ〜れ』、認知症の人と家族の会、2012.6 (No.383)、4-5頁

「認知症の人の終末期を考える 脳血管疾患と胃ろう栄養法」、『ぼ〜れぼ〜れ』、認知症の人と家族の会、2012.7 (No.384)、4-5頁

「認知症高齢者への人工的水分・栄養補給法」、『実践 成年後見』、民事法研究会、2012.7 (No.42)、80-88頁

「慢性疾患高齢者の終末期医療とケア—Evidence-Based Narrative の構築へ」、『日本医事新報』、2012.8.25 (No.4609)、18-19頁

「高齢者ケアと人工栄養を考える：本人と家族の意思決定プロセスノート—共同の意思決定を支援するためのツールの開発」、『日本在宅医学会雑誌』、2012.8 (vol. 14, No.1)、31-32頁

「終末期ケアにおける意思決定プロセス」〔清水哲郎と共著〕『シリーズ生命倫理 第4巻 終末期医療』〔安藤泰至・高橋都共編〕、丸善出版、2012.12、20-41頁

「高齢者ケアにおける意思決定プロセスを考える—人工的水分・栄養補給法の導入を中心として」、『緩和医療』第20巻第1号、緩和医療研究会、2013.2、5-28頁

「認知症ケア—共同の意思決定による家族支援」、『家族看護』第11巻第1号、2013.2、日本看護協会出版会、29-37頁

「実証研究と医療倫理：胃ろう問題を題材に」、『文化交流研究』第26号、2013.3、東京大学文学部次世代人文学開発センター、63-75頁

「“good death” とリビング・ウィル」、『病院』第72巻第4号、2013.4、医学書院、275-279頁

「人工的水分・栄養補給法ガイドラインの策定と高齢者の終末期医療」、『老年医学 系統講義テキスト』、日本老年医学会編集、西村書店、2013.4、317-318頁

「臨床に役立つQ&A「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン—人工的水分・栄養補給の導入を中心として」は、どのように活かせばよいのでしょうか?」、*Geriatric Medicine* 第51巻第4号、ライフ・サイエンス、2013.4、419-423頁

「高齢者の終末期医療—重度要介護高齢者の心肺停止への対応を考える」、『日本臨床』第71巻第6号、日本臨床社、2013.6、1089-1094頁

“The family-oriented priority organ donation clause in Japan — fair or unfair?”, *Ethics for the future of life — Proceedings of the 2012 Uehiro-Carnegie-Oxford Ethics Conference* (Tetsuji Uehiro Ed), the Oxford Uehiro Center for Practical Ethics, University of Oxford, Oxford, 2013 June, pp1-8

「患者の意思を尊重した医療およびケアとは:意思決定能力を見据えて」、『日本老年医学会雑誌』 第50巻第4号、日本老年医学会、2013.7、487-490頁

「終末期患者に対する PEG の適応」、『臨床消化器内科』第28巻第10号、日本メディカルセンター、2013.10、429頁

「終末期の意思決定を支えるには—医療倫理の立場から」、『内科』第112巻第6号、南江堂、2013.12、1357-1361頁

「高齢者の終末期ケアにおける意思決定を考える—胃瘻問題を中心に」、『老年歯科医学』第28巻第3号、日本老年歯科医学会、2013.12、265-270頁

「終末期医療」、『生命倫理と臨床倫理』[伏木信次、樫則章、霜田求共編]、金芳堂、京都、2014.3、82-95頁

「高齢者終末期医療 臨床倫理学・臨床死生学 第1回 高齢患者における人工的水分・栄養補給法の問題を考える Part1」、『臨床老年看護』、2014.3-4、28-32頁

### (3) 学会・研究会発表

シンポジスト提題 「PEG の適応：臨床倫理の視点から」、ワークショップ「PEG の適応とその問題点」、第83回消化器内視鏡学会総会、東京（グランドプリンスホテル新高輪）、2012.5.12

招待講演 「胃ろうで生きるということ～いのちについてどう考えるか」、市民公開講座「高齢者の看取りを考える—一口から食べられなくなったらどうしますか」、第17回日本緩和医療学会学術大会、神戸（神戸国際会議場）、2012.6.23

シンポジスト提題 「患者の意思を尊重した医療およびケアとは—意思決定能力を見据えて」、シンポジウム5「高齢者の終末期医療をめぐる諸問題：これからの終末期医療はどうあるべきか」、第54回日本老年医学会学術集会、東京（東京国際フォーラム）、2012.6.29

シンポジスト提題 「延命措置の終了と臨床倫理」、シンポジウム5「救急医療における終末期医療と諸問題」、第40回日本救急医学会総会・学術集会、京都（国立京都国際会館）、2012.11.14

シンポジスト提題 「高齢者への人工的水分・栄養補給法の導入に関するガイドライン策定をめぐる」ワークショップ、第31回日本医学哲学・倫理学会大会、金沢（金沢大学）、2012.11.17

招待講演 「終末期医療における胃ろう造設の問題点：適応の判断と臨床倫理」教育講演 LE-18、第113回日本外科学会定期学術集会、福岡（マリンメッセ福岡）、2013.4.13

招待講演 「高齢者ケアにおける意思決定プロセス—人工栄養と臨床倫理」、第14回日本死の臨床研究会中国・四国支部大会、日本死の臨床研究会中国・四国支部主催、岡山（さん太ホール）、2013.5.26

招待講演 「高齢者の終末期ケアにおける意思決定を考える—胃ろう問題を中心に」教育講演、日本老年歯科医学会第24回学術大会、大阪（大阪国際会議場）、2013.6.5

シンポジスト提題 「高齢者の終末期医療とケア—Evidence-Based Narrative の構築へ」、シンポジウム2「老いて死ぬこと～高齢者のいのちを考える」、第37回日本死の臨床研究会大会、島根（くにびきメッセ）、2013.11.2

招待講演 「胃ろう問題と尊厳」、平成25年度日本口腔衛生学会口腔衛生関東地方研究会、東京（日本大学法学部10号館ホール）、2013.12.7

招待講演 「臨床倫理の理論と実践—明日の臨床に生かすために」教育講演6、第64回日本救急医学会関東地方会、横浜（パシフィコ横浜）、2014.2.1

招待講演 「緩和ケアのアプローチ—患者の人生にとっての最善を考える」特別企画講演、第29回日本静脈経腸栄養学会学術集会、横浜（パシフィコ横浜）、2014.2.28

### (4) 研究報告書

『高齢者の摂食嚥下障害に対する人工的な水分・栄養補給法の導入をめぐる意思決定プロセスの整備とガイドライン作成』、日本老年医学会平成23年度厚労省老人保健健康増進等事業、2012.3

「本人の意思を尊重した医療とケアのために」、老人の専門医療を考える会第36回全国シンポジウム「医療と介護の「絆」を考えるV—人生最後の願いをどう受け止めますか」報告書、2012.10.20、21-34頁

「長寿時代の死生学」シンポジウム報告書、国立長寿医療研究センター・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター共催事業、2013.2.25

「人生の最終段階におけるケア—富山県砺波市庄東地区アンケート調査報告書、科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発領域「高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成」プロジェクト、2014.2.19

(5) 研究費の獲得状況

日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (A)「ケア現場の意思決定プロセスを支援する臨床倫理検討システムの展開と有効性の検証」(2012～2013) (研究分担者、研究代表者＝清水哲郎)

同上 基盤研究 (B)「長寿社会における終末期医療のあり方—東洋型意思決定法の実証と実践および発信」(2012～2013) (研究分担者、研究代表＝甲斐一郎)

同上 基盤研究 (B)「高齢者による医療の選択と意思決定を支える体制の構築に関する研究」(2012～2013) (研究分担者、研究代表＝高橋龍太郎)

(6) マスコミ報道

インタビュー「高齢者の救急 見込みなくても心肺蘇生」医療ルネッサンス No.5350、読売新聞、2012.6.19

インタビュー「人工栄養での延命見直し—胃ろうなど中止も選択肢」、神戸新聞等の地方紙 10 紙 (共同通信配信)、2012.6.23

インタビュー「医療・介護 希望は具体的に」、毎日新聞、2012.12.13

講演記事「終末期医療考える 和歌山県立医大、研修会に 300 人」、朝日新聞和歌山地方版、2013.9.1

インタビュー「二つの死 必要な基準」、読売新聞、2013.9.11

(7) 受賞

『延命医療と臨床現場—人工呼吸器と胃ろうの医療倫理学』（東京大学出版会、2011）に対して、下記を受賞。

会田薫子、2012 年度日本医学哲学・倫理学会賞、日本医学哲学・倫理学会、2012.11

会田薫子、2012 年度三井住友海上福祉財団賞、公益財団法人三井住友海上福祉財団、2012.11

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義

早稲田大学大学院政治学研究科非常勤講師、医療社会論、2012.4～2014.3

上智大学総合人間科学部非常勤講師、社会老年学、2012.4～2014.3

(2) 講演・研修会講師等

「食べること、生きること—自分の生き終わり方を考えてみませんか」、高齢社会をよくする会ぐる—ぶきく・三郷市社会福祉協議会・三郷市福祉部ふくし総合相談室共催、埼玉県三郷（三郷市文化会館）、2012.4.21

「高齢者への水分・栄養補給についての背景とプロセスノートについて」、高齢者ケアと人工栄養に関するセミナー、医療法人社団ナラティブホーム主催・東京大学死生学・応用倫理センター臨床倫理プロジェクト共催、富山県砺波（砺波市文化会館）、2012.5.26

「延命医療と臨床現場」、大阪市南区医師会医療懇話会例会、大阪（チサンホテル心齋橋）、2012.5.31

「人工的水分・栄養補給法—胃ろうをめぐる最近の動向を中心に」、社員総会特別講演、日本尊厳死協会、東京（ホテル機山館）、2012.6.3

「延命医療の現状：胃ろうと人工呼吸器をめぐる倫理」、読売新聞社医療情報部主催勉強会、東京（読売新聞社東京本社）、2012.6.8

「天寿と延命—胃ろうで生きるということを考える」、さいたまブレインフォーラム 21 市民公開講座、さいたまブレインフォーラム 21・MSD 共催、さいたま（浦和ロイヤルパインズホテル）、2012.6.16

「認知症終末期に経管栄養法を施行しない選択肢とその根拠」、ぐんま認知症アカデミー第 7 回春の研修会「認知症の地域連携と終末期ケア」、ぐんま認知症アカデミー・群馬県共催、前橋（群馬会館）、2012.6.24

「高齢者ケアと人工栄養—胃ろうの選択をめぐる問題を中心に」、2012 年度ソーシャルワーク・スキルアップ研修、日本医療社会福祉協会主催、東京（国際ファッションセンタービル・ホール）、2012.7.21

「高齢社会と終末期医療—人工的水分・栄養補給法に関する問題を中心に」、第 48 回姫路市医師会夏季大学、姫路市医師会主催、姫路（姫路市医師会館）、2012.7.22

「認知症高齢者の終末期ケアをどう考えるか—胃ろう栄養法の現状と課題」、第 6 回戸畑認知症研究会、戸畑認知症研究会・戸畑区医師会共同主催、北九州市戸畑区（ウェルとばた・ホール）、2012.7.30

「高齢者の終末期医療」、2012 年度老年医学サマーセミナー、日本老年医学会・国立長寿医療研究センター共同主催、長野県軽井沢（軽井沢プリンスホテル）、2012.8.3

- 「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン—人工的水分・栄養補給法に関する問題を中心に」、第4回北海道臨床倫理検討会臨床倫理セミナー、北海道臨床倫理検討会主催、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター共催、札幌（北海道医療大学サテライトキャンパス）、2012.8.18
- 「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、臨床倫理セミナー@上川北、名寄市立大学看護学科・名寄市立総合病院看護部共催、北海道名寄（名寄市立大学）、2012.8.19
- 「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン—人工的水分・栄養補給法に関する問題を中心に」、第18回生命倫理研究会、生命倫理研究会主催、東京（北里研究所病院）、2012.8.25
- 「高齢者ケアと人工栄養を考える」ワークショップ、石川県医師会主催、金沢（社会福祉法人達樹会特別養護老人ホームたつき苑）、2012.9.2
- 「天寿と延命—胃ろうで生きるということを考える」、セミナー「医療福祉で考える、人工水分栄養補給法導入の是非—あなたならどうする?」、石川県医師会主催、石川県地場産業振興センター コンベンションホール（金沢）、2012.9.2
- 「胃瘻の適応と倫理—一人ひとりの最善を目指す PEG の適応」、北海道胃瘻研究会 10周年記念合同セミナー、北海道胃瘻研究会・日本静脈経腸栄養学会北海道支部共同主催、サッポロファクトリーホール（札幌）、2012.9.8
- 「高齢者ケアにおける人工的水分・栄養補給法—医療者の意識と実践から考える」、大阪厚生年金病院公開講演会、大阪厚生年金病院主催、大阪厚生年金病院体育館（大阪）、2012.9.11
- 「天寿と延命—人生の集大成を支える」、医療法人財団天翁会主催第13回市民公開講座「看取りは、誰のため?—生活の場で生涯自分らしく生きるための医療と介護」、医療法人財団天翁会主催、多摩（聖蹟桜ヶ丘アウラホール）、2012.9.22
- 「高齢者ケア—食べられなくなったらどうしますか」、平成24年度岩手看護倫理研究会臨床倫理セミナー、岩手県看護倫理研究会主催、盛岡（いわて県民情報交通センター アイーナ）、2012.9.23
- 「本人の意思を尊重した医療とケアのために」、老人の専門医療を考える会 第36回全国シンポジウム「医療と介護の「絆」を考えるV—人生最後の願いをどう受け止めますか〜」、老人の専門医療を考える会主催、東京（東京研修センター）、2012.10.20
- 「高齢者ケアにおける人工的水分・栄養補給法について考える」、富山市民病院講演会、富山市民病院地域医療部主催、富山（富山市民病院講堂）、2012.11.2
- 「天寿と延命—胃ろうで生きるということを考える」、日南町地域包括ケア会議講演会・シンポジウム、日南町主催、鳥取県日南町（日南町総合文化センター）、2012.11.10
- 「延命医療と臨床現場—胃ろうの医療倫理学」、2012年度三井住友海上福祉財団財団賞授賞記念講演、三井住友海上福祉財団主催、東京（泉ガーデンタワー）、2012.11.13
- 「人生の集大成を支える—医療倫理の視点から」、栃木県病院協会市民公開講座「終末期医療—一緒に考えましょう」、栃木県病院協会主催、宇都宮（とちぎ健康の森講堂）、2012.11.18
- 「臨床倫理エッセンシャルズ入門編」、医療・介護従事者のための死生学秋季セミナー 臨床倫理編、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター主催、東京（東京大学）、2012.11.25
- 「天寿と延命—胃ろうで生きるということを考える」、カシオペア地域医療福祉連携研究会主催、岩手県二戸（二戸パークホテル）、2012.11.30
- 「高齢者ケアと人工栄養を考える」、一般社団法人住友病院主催公開講座、大阪（天満研修センター）、2012.12.9
- 「高齢者への人工的水分・栄養補給法と意思決定」、中野共立病院主催職員研修会、東京（中野共立病院）、2012.12.19
- 「高齢者ケアと人工栄養」、太田総合病院附属太田熱海病院主催職員研修会、福島県郡山（郡山ユラックス熱海）、2012.12.21
- 「高齢者ケアと人工栄養—胃ろうに関する倫理的問題」、独立行政法人労働者健康福祉機構横浜労災病院職員研修会、横浜（横浜労災病院看護学校体育館）、2013.1.7
- 「終末期医療の現状と課題：非緊急時の課題」、第46回医学系大学倫理委員会連絡会議、松山（松山全日空ホテル）、2013.1.11
- 「介護倫理—「最期までその人らしく」を支えるケア」、埼玉県社会福祉協議会認知症介護専門研修A日程、さいたま（埼玉県農業共済会館）、2013.1.16
- 「高齢者ケアと人工栄養を考える」、臨床倫理セミナーin さっぽろ No.10、医療法人東札幌病院臨床倫理委員会・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共催、札幌（東札幌病院研修室）、2013.1.19

- 「臨床倫理エッセンシャルズ入門編」、第5回北海道臨床倫理検討会、北海道臨床倫理検討会主催・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共催、札幌（アスティ 45 内北海道医療大学サテライトキャンパス）、2013.1.20
- 「高齢者ケアと人工栄養—胃瘻に関する倫理的問題」、国立病院機構埼玉病院職員研修会、和光（埼玉病院大会議室）、2013.1.24
- 「臨床倫理エッセンシャルズ入門編」、第1回愛媛地区臨床倫理事例研究会、愛媛地区臨床倫理事例研究会主催・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座臨床倫理プロジェクト共催・公益社団法人愛媛県看護協会講演、松山（愛媛県看護協会愛媛看護研修センター）、2013.1.27
- 「天寿と延命—胃ろうで生きるということを考える」、横浜総合病院主催職員研修会、横浜（横浜総合病院）、2013.1.31
- 「延命医療と臨床倫理—日本老年医学会ガイドラインをめぐって」、医療法人健和会医局研究会、長野県飯田（健和会会議室）、2013.2.1
- 「天寿と延命—胃ろうで生きるということを考える」、医療法人健和会倫理委員会主催職員研修会、長野県飯田（健和会会議室）、2013.2.1
- 「胃ろうにすると、しなるとき、公開講座「食べられなくなったらどうしますか～自分らしい治療・ケアの選択のために」、日本医学哲学・倫理学会主催、東京（伊藤謝恩ホール）、2013.2.3
- 「高齢者ケアにおける人工的水分・栄養補給法—医療者の意識と実践から考える」、済生会兵庫県病院臨床倫理研修会、済生会兵庫県主催、神戸（済生会兵庫県病院）、2013.2.8
- 「臨床院理エッセンシャルズ 早わかり」、第6回臨床倫理事例検討研究会、臨床倫理事例検討研究会主催、大阪（天満研修センター）、2013.2.9
- 「介護倫理—最期までその人らしくを支えるケア」、埼玉県社会福祉協議会主催平成24年度認知症介護専門研修B日程、さいたま（さいたま市民会館おおみや）、2013.2.14
- 「高齢患者における延命医療を考える—人工的水分・栄養補給法を中心に」、第38回広島県病院学会、社団法人広島県病院協会主催、広島（広島医師会館）、2013.2.17
- 「高齢者ケアと人工栄養を考える」、日本赤十字社総合福祉センター主催研修会、東京（日本赤十字社総合福祉センター レクロス広尾）、2013.2.19
- 「延命医療と臨床現場—意思決定をどう支えるか」、東京都立小児総合医療センター主催職員研修会、東京（東京都小児総合医療センターホール）、2013.2.26
- 「高齢者ケアにおける人工栄養—意思決定プロセスガイドラインの考え方」、第6回坂井・あわら高齢者医療研究会、坂井・あわら高齢者医療研究会主催、福井県芦原（国立病院機構あわら病院）、2013.2.27
- 「臨床倫理エッセンシャルズ早わかり」、第1回臨床倫理セミナー@飛騨、飛騨緩和医療ネットワーク主催、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共催、岐阜県高山（久美愛厚生病院）、2013.3.3
- 「特別養護老人ホームにおける看取りとは」、特別養護老人ホーム川口キングスガーデン研修会、財団法人介護労働安定センター企画、川口（川口キングスガーデン）、2013.3.5
- 「高齢者ケアと人工栄養—胃ろうにすると、やめるとき」、地域リハビリテーションフォーラム、砺波地域リハビリテーション支援センター・南砺市民病院・エーザイ株式会社主催、富山県南砺（福野体育館）、2013.3.9
- 「臨床倫理エッセンシャルズ早わかり」、第1回中国地区臨床倫理事例研究会、中国地区臨床倫理事例研究会主催、岡山（岡山県看護協会マスカットホール）、2013.3.10
- 「胃ろうの適応と臨床倫理」、脳研セミナー、株式会社大塚製薬工場主催、札幌（中村記念病院講堂）、2013.3.15
- 「認知症の終末期—胃ろうで生きるということを考える」、第22回福井の認知症を考える会、福井の認知症を考える会・福井県内科医会共催、福井（福井商工会議所コンベンションホール）、2013.4.6
- 「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、医療・介護従事者のための死生学セミナー、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター主催、東京（東京大学）、2013.4.21
- 「終末期における胃ろう栄養法の意味」、平成25年度公益社団法人島根県栄養士会研修会、公益社団法人島根県栄養士会主催、松江（島根県民会館）、2013.5.25
- 「天寿と延命—胃ろうで生きるということを考える」、京都女子大学現代社会学部公開講座「終末期医療をめぐる臨床倫理」、京都（京都女子大学）、2013.6.15
- 「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、がん分野における臨床倫理セミナー、がんプロフェッショナル主催、仙台（東北大学）、2013.6.23

- 「死生学からみた終末期医療」、土曜市民公開講座サタデープログラム、東海中学校・高等学校主催、名古屋（東海中学校・高等学校）、2013.6.29
- 「穏やかな最期のために―長寿時代の生き終わりを考える」、シンポジウム「これからの在宅ケアについて考えよう～死生観をまじえて～東京編」、在宅ケアについて考える会主催、東京（中野サンプラザ研修室）、2013.6.30
- 「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、日本看護協会研修会、日本看護協会主催、神戸（日本看護協会神戸研修センター）、2013.7.4
- 「穏やかな最後のために―長寿時代の生き終わりを考える」、市民講座&フォーラム「安心して暮らし穏やかな最期をむかえるために」、在宅ケアについて考える会主催、福岡（アクロス福岡）、2013.7.6
- 「穏やかな最期のために―食べられなくなったらどうしますか?」、シンポジウム「これからの在宅ケアについて考えよう～死生観をまじえて～福岡編」、在宅ケアについて考える会主催、福岡（アクロス福岡）、2013.7.7
- 「わが国の高齢者医療において遭遇する倫理的問題と対応」、LPC 国際フォーラム 2013 「より質の高い高齢者医療の実現を目指して」、ライフ・プランニング・センター主催、東京（聖路加看護大学アリス・セント・ジョン・メモリアルホール）、2013.7.14
- 「これからの高齢者医療を考える」、鳥取県看護協会研修会、鳥取県看護協会主催、鳥取（鳥取県看護研修センター）、2013.7.25
- 「高齢者の終末期医療」、2013 年度ソーシャルワーク・スキルアップ研修：ソーシャルワークにおける臨床倫理、日本医療社会福祉協会主催、東京（KFC）、2013.7.28
- 「高齢者ケアと人工栄養を考える：臨床倫理の視点から」、東京共済病院研修会、東京共済病院主催、東京（東京共済病院講堂）、2013.7.30
- 「高齢者の終末期医療」、平成 25 年度老年医学セミナー、日本老年医学会主催、軽井沢（軽井沢プリンスホテル）、2013.8.2
- 「認知症の終末期における人工的水分・栄養補給法」、第 10 回北海道高齢者透析研究会、北海道高齢者透析研究会・協和発酵キリン株式会社共催、札幌（札幌全日空ホテル）、2013.8.11
- 「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、第 6 回北海道臨床倫理検討会、北海道臨床倫理研究会・東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座共催、札幌（札幌国際ビル国際ホール）、2013.8.18
- 「認知症の終末期医療とケア―胃ろうで生きるということを考える」、平成 25 年度第 1 回和歌山県認知症疾患医療センター研修会、和歌山県立医科大学附属病院主催、和歌山（和歌山県立医科大学附属病院臨床講堂）、2013.8.31
- 「これからの終末期医療―長寿時代の穏やかな最期を考える」、愛知県厚生連医師会研修会、愛知県厚生農業協同組合連合会医師会主催、名古屋（名鉄グランドホテル）、2013.9.11
- 「認知症の終末期医療―胃ろうで生きるということを考える」、第 27 回苦小牧認知症研究会、苦小牧認知症研究会・エーザイ株式会社共催、苦小牧（グランドホテルニュー王子）、2013.9.12
- 「天寿と延命―胃瘻で生きるということを考える」、第 15 回医療と介護連携の会講演会、草加市医師会主催、草加（草加アコスホール）、2013.9.20
- 「食べられなくなったらどうしますか?人工栄養で生きるということを考える」、平成 25 年度カシオペア市民フォーラム・カシオペア地域医療福祉連携研修会、カシオペア地域医療福祉連携研究会・岩手県二戸保健所共催、二戸（二戸市民文化会館）、2013.9.22
- 「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、第 1 回臨床倫理セミナー@芦屋、市立芦屋病院・東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座共催、芦屋（市立芦屋病院講堂）、2013.9.29
- 「高齢者ケアと人工栄養について」、愛媛大学医学部附属病院看護部研修、愛媛大学医学部附属病院看護部主催、東温（愛媛大学医学部附属病院）、2013.10.5
- 「医療倫理の考え方」、平成 25 年度東京慈恵会医科大学医学部医学科/看護学科合同「医療倫理」演習、東京慈恵会医科大学、調布（東京慈恵会医科大学国領キャンパス講堂）、2013.10.19
- 「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、佐久総合病院看護部倫理研修会、長野県厚生農業協同組合連合会佐久総合病院看護部倫理委員会主催、佐久（長野県佐久創造館）、2013.10.26
- 「穏やかな最期のために―長寿時代の生き終わり方を考える」、市民公開講座「人生の終活を考えよう」、横浜市青葉区医師会・横浜市病院協会・臓器提供&移植を考える神奈川の会・ファイザー製薬共催、横浜（メロンディアあざみ野）、2013.11.19
- 「天寿と延命―人工栄養で生きるということを考える」、シンポジウム「終末期における医療とケア―人生の物語を充実させる」、集団力学研究所看護管理者支援プロジェクト、集団力学研究所主催、大阪（大阪大学中之島センター）、2013.11.17

- 「介護倫理―“最期までその人らしく”を支えるケア」、平成 25 年度認知症介護専門研修 A コース、埼玉県社会福祉協議会主催、さいたま（埼玉県農業共済会館）、2013.11.27
- 「介護倫理―“最期までその人らしく”を支えるケア」、平成 25 年度認知症介護専門研修 B コース、埼玉県社会福祉協議会主催、埼玉県北足立郡伊奈町（埼玉県県民活動総合センター）、2013.12.6
- 「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、第 2 回愛媛地区臨床倫理事例研究会、愛媛地区臨床倫理事例研究会主催、松山（愛媛県看護協会）、2013.12.15
- 「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、第 2 回北陸地区臨床倫理事例研究会、北陸地区臨床倫理事例研究会主催、金沢（金沢大学附属病院）、2013.12.21
- 「高齢社会と終末期医療を考える」、平成 25 年度保健医療福祉制度普及啓発に関する公開講習会、福島県医療ソーシャルワーカー協会主催、郡山（ビッグアイ）、2014.1.5
- 「人生を望むように生きるために―人工栄養で生きるということを考える」、国立療養所多磨全生園エンドオブライフ・ケア学習会主催講演会、東村山（多磨全生園コミュニティセンター）、2014.1.11
- 「Advance Care Planning の考え方―本人の意思を尊重するために」、新春 PDN 医療フォーラム「認知症鑑別診断から胃ろうの適応・看取りまで」、NPO 法人 PEG ドクターズネットワーク主催、東京（東京慈恵会医科大学講堂）、2014.1.12
- 「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、第 7 回臨床倫理事例研究会、臨床倫理事例研究会主催、大阪（天満研修センター）、2014.1.18
- 「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、第 7 回北海道臨床倫理検討会、北海道臨床倫理研究会主催、札幌（札幌国際ビル国際ホール）、2014.1.26
- 「高齢者の終末期ケア―人工栄養について考える」、大分県歯科医師会平成 25 年度「介護保険対応歯科保健研修会」、大分県歯科医師会主催、大分（大分県歯科医師会館）、2014.2.8
- 「高齢者の終末期医療とケア―胃ろうで生きるということを考える」、第 11 回富士介護サービス研究集会、静岡県富士市介護保険事業者連絡協議会主催、富士（ペアステージ ノイ）、2014.2.15
- 「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、第 2 回中国地区臨床倫理事例研究会、中国地区臨床倫理事例研究会主催、広島（広島県看護協会会館）、2014.3.2
- 「認知症の終末期と胃ろう―意思決定プロセスガイドラインの考え方」、第 3 回神戸市認知症サポート医等フォローアップ研修、神戸市主催、神戸（神戸市勤労会館）、2014.3.8
- 「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、第 1 回臨床倫理セミナー@大阪、臨床倫理プロジェクト主催、大阪（新梅田研修センター）、2014.3.9
- 「臨床倫理事例検討：4 分割法の考え方」、臨床倫理リーダーシップ養成講座、臨床倫理プロジェクト主催、大阪（大阪厚生年金病院看護専門学校）、2013.3.22
- 「Advance Care Planning の考え方―本人の意思を尊重するために」、平成 25 年度厚生労働省科学研究費補助金地域医療基盤開発推進研究事業における研修会、北里大学病院研究班主催、相模原（北里大学病院）、2014.3.29
- 「食べられなくなっても人間らしく生き抜く：認知症の終末期医療について考える」、市民公開講座、NPO 法人患者の権利オンブズマン主催、福岡（パピオン 24）、2014.3.30

### (3) 学会

- 日本医学哲学・倫理学会評議員
- 日本救急医学会倫理委員会委員
- 日本老年医学会代議員
- 日本生命倫理学会
- 日本老年社会科学会

### (4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 昭和大学病院臨床試験審査委員会、2012.4～2014.3
- 静岡県立静岡がんセンター治験倫理委員会委員、2012.4～2014.3
- PEG・在宅医療研究会(HEQ:Home Healthcare, Endoscopic therapy and Quality of Life)幹事、2012.4～2014.3
- NPO 法人 PEG ドクターズネットワーク理事、2012.4～2014.3
- NPO 法人 生活介護ネットワーク理事、2012.4～2014.3

## 3 1 北海文化研究常呂実習施設

准教授

熊木 俊朗

KUMAKI, Toshiaki

### 1. 略歴

- 1990年3月 北海道大学文学部文学科言語学専攻課程卒業  
1990年4月 旭化成工業株式会社入社  
1994年3月 明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業  
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科考古学専門分野修士課程修了  
1996年4月 東京大学文学部助手 (附属常呂実習施設勤務)  
2004年4月 北海道常呂町教育委員会社会教育課と ころ遺跡の森主幹  
2005年2月 博士 (文学) 学位取得 東京大学大学院人文社会系研究科  
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

### 2. 主な研究活動

#### a 専門分野

北東アジア考古学

#### b 研究課題

北海道を中心とした北東アジア地域の考古学的研究を専門とするが、特に近年は以下の2点を主要な課題として、北海道やロシア極東地域でフィールドワークを中心とした調査研究を行っている。

- (1) アイヌ文化成立過程の考古学的研究  
(2) 日本列島とアジア大陸の「北回りの交流」に関する研究

#### c 主要業績

##### (1) 著書

共著、熊木俊朗、『講座日本の考古学3 縄文時代(上)』、青木書店、2013.6  
編著、大貫静夫監修、福田正宏・シェフコムード, I. Ya.・森先一貴・熊木俊朗編、『環日本海北回廊の考古学的研究 (I) -ヤムフタ遺跡発掘調査報告書-』、東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設、2014.3

##### (2) 論文

熊木俊朗、「北海道東部の続縄文文化とサハリン・北海道」、『Arctic Circle』、86、4-9頁、2013.3

##### (3) 学会発表

国内、佐藤宏之・I. Shevkomud・大貫静夫・森先一貴・福田正宏・熊木俊朗・國木田大・S. Kosityna・M. Gorshkov、E. Bochkareva・尾田識好・夏木大吾・大澤正吾・内田和典・Yu. A. Mochanov、「アムール下流域コンドン1遺跡の調査 -更新世/完新世移行期の石器群-」、日本考古学協会第78回総会 研究発表、立正大学、2012.5.27  
国内、大澤正吾、I. Shevkomud・福田正宏・大貫静夫・熊木俊朗・國木田大・佐藤宏之・尾田識好・夏木大吾・M. Gorshkov、E. Bochkareva・内田和典・森先一貴、「ウディリ湖遺跡群の考古学的調査 (2012年度)」、第14回北アジア調査研究報告会、石川県立歴史博物館、2013.2.9  
国内、熊木俊朗・國木田大・山田哲、「2012年度北海道北見市大島2遺跡発掘調査報告」、第14回北アジア調査研究報告会、石川県立歴史博物館、2013.2.9  
国内、熊木俊朗、「最寄貝塚の学史的評価と最近の調査成果」、北海道考古学会創立50周年記念講演会「北の遺跡を発掘する -北海道考古学の成果と展望-」、2013.10.5  
国内、熊木俊朗・I. シェフコムード・福田正宏・國木田大・M. ゴルシュコフ・大貫静夫・A. ショパロフ・M. ガブリルチュク、「アムール河口域ダリジャ湖遺跡群の考古学的調査」、第15回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2014.3.1  
国内、夏木大吾・ワシレフスキー, A.・大貫静夫・佐藤宏之・グリシェンコ, V.・福田正宏・熊木俊朗・國木田大・パシェンツェフ, P.・モジャエフ, A.・森先一貴・ペレグドフ, A.・役重みゆき・高鹿哲大・ルシカ, G.、「2013年度スラブナヤ5遺跡発掘調査報告」、第15回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2014.3.1

国内、福田正宏・佐藤宏之・國木田大・役重みゆき・夏木大吾・垣内彰悟・久我谷溪太・西村広経・高鹿哲大・熊木俊朗・辻誠一郎・森先一貴、「北海道湧別市川遺跡の発掘調査」、第15回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2014.3.1

(4) 予稿・会議録

国内会議、熊木俊朗、「最寄貝塚の住居について」、モヨロ貝塚発見100年シンポジウム「もっと知りたい！モヨロのくらし」、網走市エコセンター2000、2013.10.27

国内会議、熊木俊朗・福田正宏・國木田大、「鈴谷貝塚と鈴谷式土器」、国立歴史民俗博物館共同研究『柳田國男収集考古資料の研究』第6回研究会、2014.3.23

(5) 展示

「常呂資料陳列館第2回企画展 新着資料展 トコロチャシ跡遺跡のオホーツク文化」、國木田大、2012.11.11～2012.12.24

「常呂資料陳列館第3回企画展 常呂実習施設の歩み」、國木田大、2013.11.9～2013.12.25

### 3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本赤十字北海道看護大学、「北海道の自然と文化」、2012.6、2013.6

特別講演、斜里町立知床博物館、「環日本海北回廊地域における先史文化交流 -アムール下流域とサハリンの考古学調査-」、2014.2

(2) 学会

日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員 (2012.4～2014.3)

(3) 行政

北見市史編集委員会委員 (2012.4～2014.3)

北見市常呂自治区社会教育推進会議委員 (2013.4～2014.3)

北見市文化財審議委員会委員 (2013.4～2014.3)

北見市史跡整備委員会委員 (2014.2～2014.3)

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

常呂川流域文化遺産活用推進事業実行委員会、委員長 (2013.4～2014.3)



東京大学大学院人文社会系研究科・文学部  
教育・研究年報 12 (2012～2013)

---

2015 年 1 月発行

編集・発行

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

113-0033

東京都文京区本郷7丁目3番1号

印刷

株式会社コームラ

501-2517

岐阜県岐阜市三輪ふりんとびあ3

TEL (058)229-5858

---